

宮城県文化財調査報告書第92集

**東北自動車道遺跡調査報告書
VII**

昭和57年9月

**宮城県教育委員会
日本道路公団**

序

私達の生活している宮城県内には、先人がのこした数多くの遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことは、現代の私達に課せられた重要な責務であると考えます。

近年、地域開発の事業が進展することに伴ない、埋蔵文化財の保護が一層重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

国土開発幹線自動車道建設法に基づき建設中の東北自動車道が、宮城県内で全線開業したのは、昭和 53 年 12 月であります。

宮城県教育委員会では、自動車道建設事業に関連した 52 の遺跡を日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和 45 年度から 53 年度までの 9 カ年間に事前の発掘調査を実施するとともに、終了後は引続いて遺物の整理と報告書の刊行に努めてまいりました。

本報告書は、東北自動車道遺跡調査報告書の第 7 冊目として、松田遺跡・菅生田遺跡の 2 遺跡について、発掘調査の成果をとりまとめたものであります。

本書を刊行するに当たり、調査以来長い期間にわたって御協力をいただきました関係者各位に対し、心から感謝の意を表するとともに、本書が広く社会教育や学術研究の場で役立つことを切に念願するものであります。

昭和 57 年 9 月

宮城県教育委員会

教育長 三浦 徹

例　　言

1. 本書は、東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書第7冊目として、2遺跡の調査成果をまとめたものである。

2. 調査の主体者は、宮城県教育委員会・日本道路公団である。

3. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護室が担当し、関係市町村教育委員会・調査協力員・学生補助員の方々と関係機関に協力をいただいた。

4. 調査および整理に関して次の方々および機関の協力をいただいた。

佐藤信行氏　　柴田町教育委員会　　白石市教育委員会
宮城教育大学歴史研究室　仙台市教育委員会

5. 国土地理院発行の地形図を複製したものには、図中に図名と縮尺を記した。

6. 整理・報告書の作成は、文化財保護課が担当し、各遺跡の整理・執筆は課員の検討を経て次のとおり分担して行なった。なお、松田遺跡については昭和46年度に刊行された概報の内容に特に付け加える事実がないため、再録した。また、菅生田遺跡については、白石バイパス路線敷の調査資料も、関連資料として収録した。

(1) 松田遺跡　丹羽茂

(2) 菅生田遺跡　丹羽茂・阿部博志・小野寺祥一郎

7. 菅生田遺跡の報告書中に付編として、安田喜憲「菅生田遺跡周辺の自然環境」を収録した。

8. 各遺跡の内容は、すでにその一部が現地説明会資料・調査概報等によって公表されているが、本書の内容がそれらに優先する。

9. 上記遺跡の出土遺物および実測図・写真等の諸資料は、東北歴史資料館へ移管し保存・活用をはかることにしている。

目　　次

1. 松田遺跡	1
2. 菅生田遺跡	23



東北自動車道関係遺跡位置図

調査に至る経過

東北自動車道の建設に係る遺跡に関しては、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」等にもとづき、宮城県教育委員会が調査にあたった。

自動車道の計画予定路線は、昭和 42 年 5 月に仙台市以南の発表があり、昭和 44 年 6 月から昭和 45 年 11 月までの間に、4 回にわたりて仙台市から岩手県境までの路線が発表された。

県教育委員会は、昭和 42 年に東北縦貫自動車道遺跡緊急調査対策委員会を発足させ、路線敷の分布調査を急いだ。その結果確認した遺跡は、仙台市以南で 23 遺跡、以北で 28 遺跡の合計 51 遺跡に達した。

発掘調査は、昭和 45 年 2 月から上記の対策委員会を中心 начиная с 1945 年 2 月から上記の対策委員会を中心として開始されたが、4 月に入り県教育委員会が主体となり、最終の昭和 53 年度まで実施した。

この間、昭和 49 年度の古川市愛宕山遺跡（宮沢遺跡）の調査中に、公団から同遺跡周辺丘陵の土取計画が協議されて翌 50 年度に発掘調査したところ、古代城柵官衙遺跡であることが判明した。そのため文化庁・日本道路公団との協議を重ねて遺跡保存を検討し、路線敷は精査のうえ、施工方法や設計の変更等を行なった。この土取計画部分一帯は昭和 51 年 7 月 13 日、「宮沢遺跡」として史跡に指定された。

関連遺跡は調査の過程で 1 遺跡を追加して最終的に 52 遺跡となったが、昭和 53 年 8 月栗原郡志波姫町御駒堂遺跡の発掘調査をもって、全遺跡について完了した。

遺物整理については、昭和 54 年度から 58 年度までの 5 年間で行なう計画で実施しており、本報告書に引き続き第 8 分冊以降を第 10 分冊まで刊行する予定である。

(1) 松田遺跡



第1(44)図 地形図・グリット配置図

松　田　遺　跡

1　遺跡所在地

宮城県白石市福岡深谷字松田

2　調査期日

昭和 46 年 4 月 25 日～6 月 6 日、7 月 7 日～7 月 24 日

3　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁文化財保護室

技術主査 氏家和典

嘱託 小井川和夫、丹羽茂

5　調査の概要

(1) 遺跡の立地 (第 44 図)

白石市の北方には、白石川に沿って、海拔約 40m の低地（沖積低地）が広がり、その西方に、深谷地区を中心として海拔高度 50～60m 程度の一段高い台地（洪積台地）がある。さらにその後方には一連の丘陵が続いている。

松田遺跡はこの深谷台地東縁部付近に位置している。遺跡の海拔高度は約 50m である。なお、この台地上には御所内、青木等の遺跡も存在する。

(2) 調査の経過

松田遺跡は昭和 43 年の試掘調査で土師器片が 1 点出土したのみであったが、トレンチ 1 本（1 × 10m）という狭い範囲の調査であったため、松田遺跡全体を理解する上で十分でなかった。しかも表面採取では広汎な土師器や須恵器片の散布が認められたため、松田遺跡については遺物の散布する範囲を全面調査することにした。

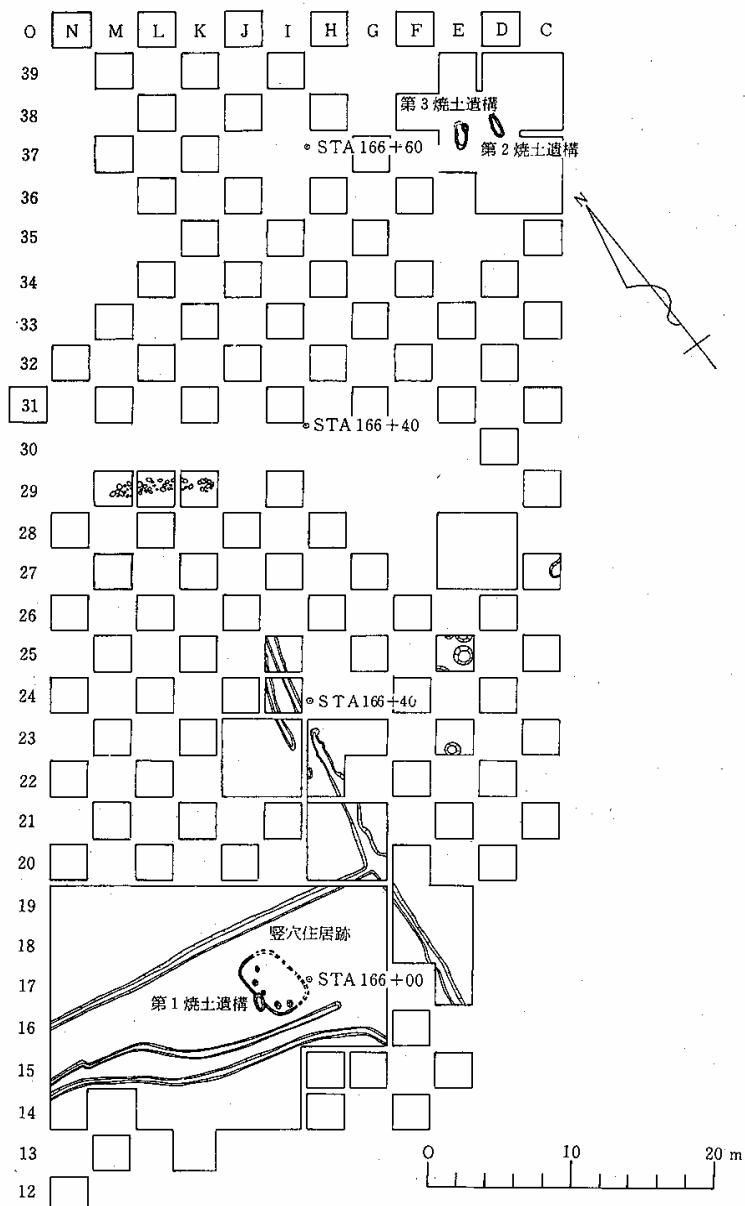
基本的には 3 m グリッドによる調査を実施したが北側の一部はトレンチ調査を行なった。発掘面積は約 2484 m² である。その結果、縄文時代早期の竪穴住居跡 1 軒、平安時代の焼土遺構 3 ケ所を発見した。その他、数本の溝状の遺構も発見されたが、内部の埋土の状況がらごく最近のものと判断された（第 45 図）。

(3) 遺構とその出土遺物

、縄文時代の遺構 竪穴住居跡

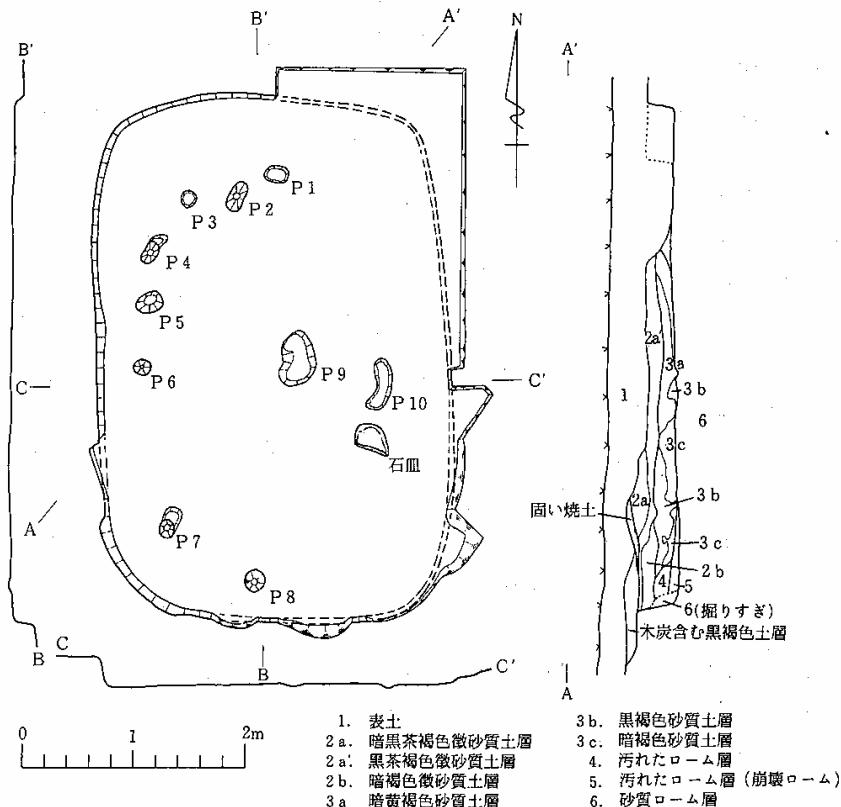
竪穴住居跡

表土（1 層）を 20～30cm 程掘り下げると、部分的に攪乱された汚れたローム層に達する。



第2(45)図 遺構配置図

この汚れたローム層の上面に I - 17 区を中心として橢円形を呈する黒褐色の落ち込みが検出された。この黒褐色土およびその下層の堆積土を徐々に掘り下げていくと、非常に固い砂質の黄褐色土（砂質ローム）層につきあたる。これが竪穴住居跡の床面と考えられた。床面までの堆積土のあり方は第 46 図のようになる。



第 3(46)図 竪穴住居図

第 1 表

Pit NO	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
長　径	22.0	28.0	14.0	30.0 (20.0)	24.0	16.0	28.0 (16.0)	20.0	20.0	46.0
短　径	16.0	14.0	14.0	12.0	18.0	14.0	14.0	18.0	18.0	14.0
床面からの深さ	2.7	18.5	2.8	2.5 (20.0)	13.4	29.0	12.7	16.5	3.4	3.0

2層と3層の基本的な相違は、前者が粒径の小さい微砂質土であるのに対し、後者が相対的に粒径の大きい砂質土である点にある。

遺構が確認されたのは部分的に攪乱された汚れたローム層であるため、竪穴住居跡の壁面および床面を全面にわたって検出することはできなかった。しかし、西側の大部分、さらに東側の一部を確認したので、その概略を知ることができる。

長軸4.75m、短軸3.20mの大きさで、角がゆるやかにカーブする隅丸長方形のプランをもち長軸は南北方向にはほぼ一致する。

床面は北側が黄褐色のロームで、南側になるにしたがって砂粒が多くなり、砂質となる。

壁は保存のよい北西部から南西部で13~40cmの高さがあり、床面からゆるやかに立ちあがり、次第に垂直に近い状態になっている。

床面には幾つかのピットがある（第1表）。ピットには大まかにみて二つの種類がある。一つは深さ2~3cm程度で統一性がないもの（P₁、P₃、P₉、P₁₀）である。もう一つは深さが12.7~29cm（20cm内外が多い）で、長径が10~30cm程度にまとまるもの（P₂、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈）である。後者は壁面にそってほぼ平行な状態でならんでおり、柱穴としての可能性が強い。炉跡などの施設と考えられるものは発見できなかった。その他、住居跡床面から石皿が1点発見された。床面上にあることから、住居が使用されていた時期のものと考えられる。

出土遺物（第47~49図）

この竪穴住居跡からは床面に石皿が1点、さらに竪穴内の堆積土から土器片39点、石鏸1点、搔器4点、剥片および碎片（チップ）88点、合計133点の遺物が発見された。これを第2層出土のもの、第3層出土のもの、床面上出土のものにわけて記述したい。ただし、その前に土器については分類の基準について説明する。

土器分類の基準

出土土器に関して次のような観察を行なった。その結果を簡単に説明しておきたい。ただし、土器片の数が直接個体数に結びつくものではない。

A：胎土、胎土は纖維を含むものとそうでないものの二種に大別される他、ほとんどのものは器面調整粘土が認められる。

- (1) 砂粒を含む粘土質のもの。
- (2) 細砂を含む微砂質で纖維を少量含むもの。
- (3) 細砂を含む微砂質で纖維を多量含むもの。
- (4) 砂粒を含む微砂質で纖維を少量含むもの。
- (5) 砂粒を含む微砂質で纖維を多量含むもの。

B : 器形、全体的な器形が判明する資料はないが、底部片から、尖底土器と考えられる。

C : 色調、器外表面の色調には次のようなものがある。(1) 黒褐色、(2) 黒茶褐色、(3) 黄茶褐色、(4) 黄褐色、(5) 赤褐色、(6) 橙色。この中には色調がくすんだものや赤みのあるもの等がある。

D : 器内面再調整、ヘラ状工具による縦方向と横方向のミガキがある他、指頭状の押圧によるものもある。

E : 施文技法、技法には大別して三種ある。

(1) 縄文原体の回転

a : R {} 原体横回転、a' : R {} 原体縦回転、b : L {} 原体横回転、b' : L {} 原体縦回転、b'' : L {} 原体斜回転

横位沈線

(3) 山形押型横位回転

F : 施文工程、器外面における施文工程にはEで述べた技法の組合せによって次のようなものがある。

(1) 縄文のあるもの

a : 縄文原体回転のみのもの。 b : 縄文原体回転後横位沈線を加えるもの。

(2) 山形押型文のあるもの

a : 山形押型横位回転のみのもの。

b : 山形押型横位回転後横位沈線を加えるもの。

(3) 無文のもの

以上、略記した観察事項に従って分類したい。その場合、もっともよく土器の特徴があらわれるのはF（施文工程）であるからFを第一の基準とし、その他の観察事項はそれを補足するものとする。したがって、ここでは器外面における文様施文工程のちがいに基づいて、それぞれの土器を、第1類（1a類、1b類）、第2類（2a類、2b類）、第3類として分類する。

第2層の遺物

土器片7点、石鏃1点

土器：第1a類2点（第47図①—a技法、他の一点はa'+b'技法）、第1b類3点（第47図②③④—a技法）、第2b類2点（第47図⑤⑥）である。これらの土器片はすべて胴部破片である。第1a類2点のうち1点は他の第1b類、第2類と同様に胎土に纖維を含み、器内面に縦方向のミガキがあること、さちにこれが小破片であることなどから第1b類の一部分である可能性が強い。ところが、第48図1の土器片は胎土が粘土質

で、纖維も含まない。さらに器内面再調整においても横方向のミガキが認められるなど種々の点で異なる。従って、便宜的ではあるがこの土器片を第 1a' 類として区別しておきたい。

石器（第 48 図 9）：石鏃が 1 点ある。一次的に剥離された剥片に、交互に荒い剥離を加えたもので、裏面にはかなり一次的な剥離面が残っているが、形態的には多少歪んだ五角形を呈している。材質は頁岩である。

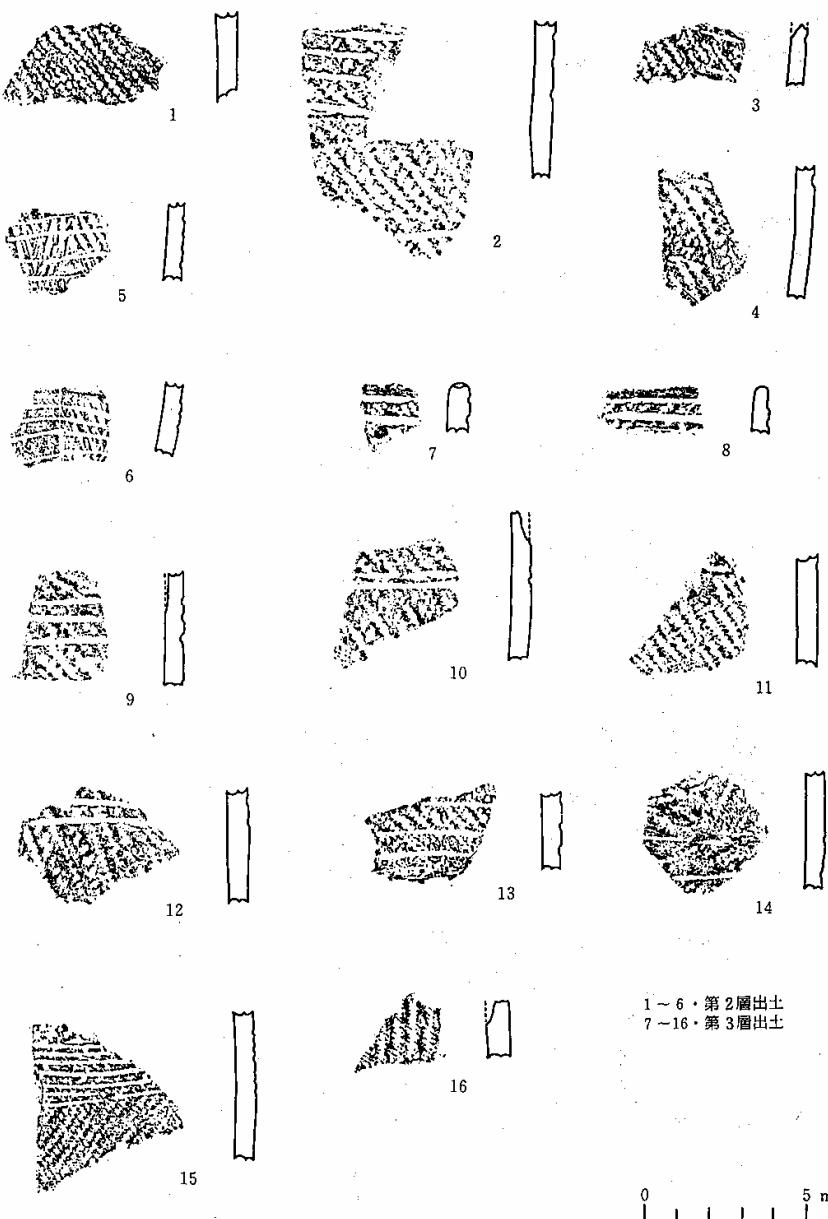
第 3 層の遺物

土器片 32 点、搔器 4 点

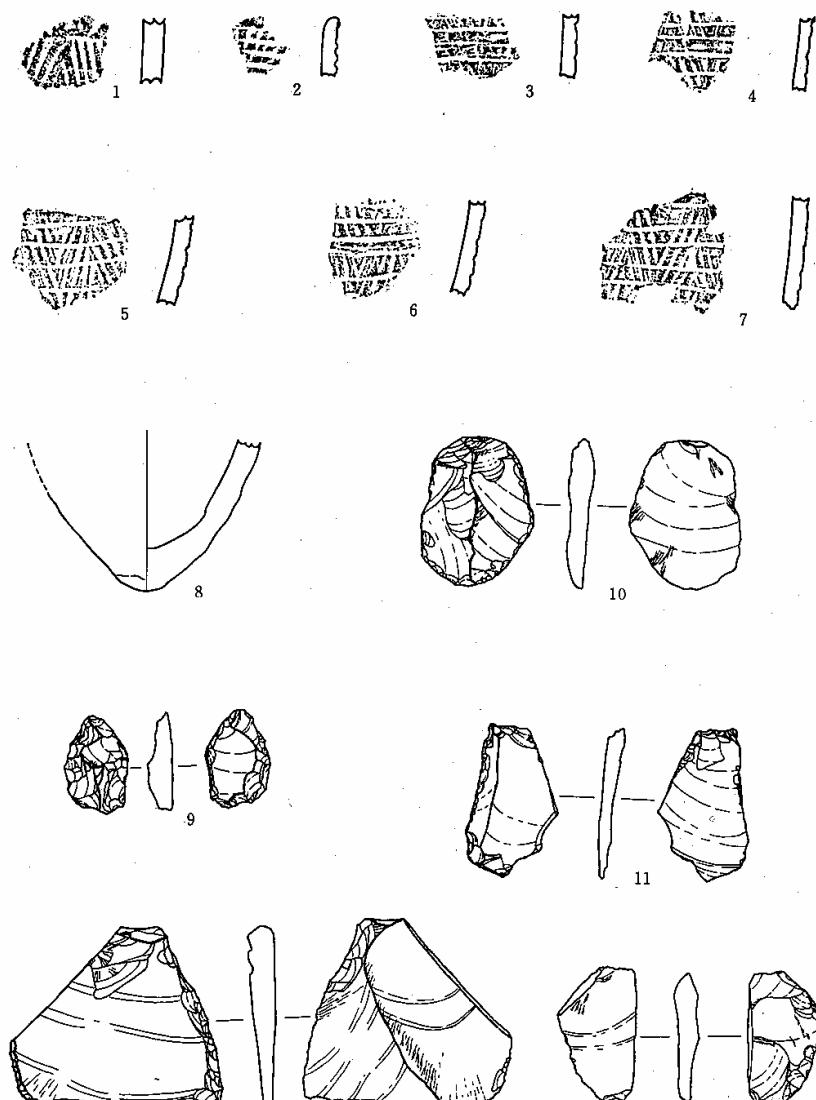
土器片：土器片 32 点のうち口縁部が 4 点、底部が 1 点で、他の 27 点は胴部である。胎土はすべて微砂質土であり、量的な差はあるが纖維を含む。器内外面には原則として調整粘土が認められる。つぎに器外面における施文 1 程を観察すると、第 1a 類 4 点、第 1b 類 9 点、第 2a 類 1 点、第 2b 類 12 点、第 3 類 1 点となる。第 1a 類の 4 点はいずれも細片であり、第 1b 類の一部分である可能性が強い。第 1b 類は施文技法を縄文原体とその回転方向という点から吟味するとつぎのようになる。a 技法：6 点（第 47 図 9～13）、b 技法：2 点（第 47 図 15）、b + b" 技法：1 点（第 47 図 14）、第 1b 類の口縁部は 2 点ある。口唇部に右上方から押圧が加えられ、小波状を呈するもの（第 47 図 7）と平坦なもの（第 47 図 8）である。前者の器内面再調整としては横方向のヘラミガキが認められるが、後者の場合は口唇部のみ横方向で、それ以外は縦方向である。他の第 1b 類土器胴部破片はすべて縦方向のヘラミガキが認められる。第 2a 類は 1 点（第 48 図 1）のみである。第 2b 類は 12 点（第 48 図 2～7）ある。このうち口縁部破片は 2 点である。両者とも調整粘土の折返し口縁であり、さらに口唇部は右上方より押圧が加えられ小波状をなしている。器内面のヘラミガキは口唇部付近のみ横方向であるが、他は縦方向である。胴部破片はすべて縦方向である。第 3 類は底部 1 点のみ（第 48 図 8）である。胎土は纖維を含む微砂質土で、器内外面とも指頭状の押圧がみられる。

石器：おや指状および不定形の搔器が 4 点ある。材質はすべて頁岩である。12 はかなり大形で厚手の剥片の周縁に背面から急角度で連続的な剥離が加えられ、刃部をつくっている。基部は主要剥離面と背面から対称的に剥離が行なわれ調整されている。10 は薄手の剥片の周縁に背面から細かな剥離が連続的に加えられ、刃部がつくられている。おや指状の形態となる。13 は薄手で縦長剥片の一側面に、剥離が行なわれ、刃部がつくられている。11 は薄手の不定形な剥片に対し、背面から細かな剥離が連続的に加えられ、刃部をつくっている。

床面上より発見された遺物（第 49 図）



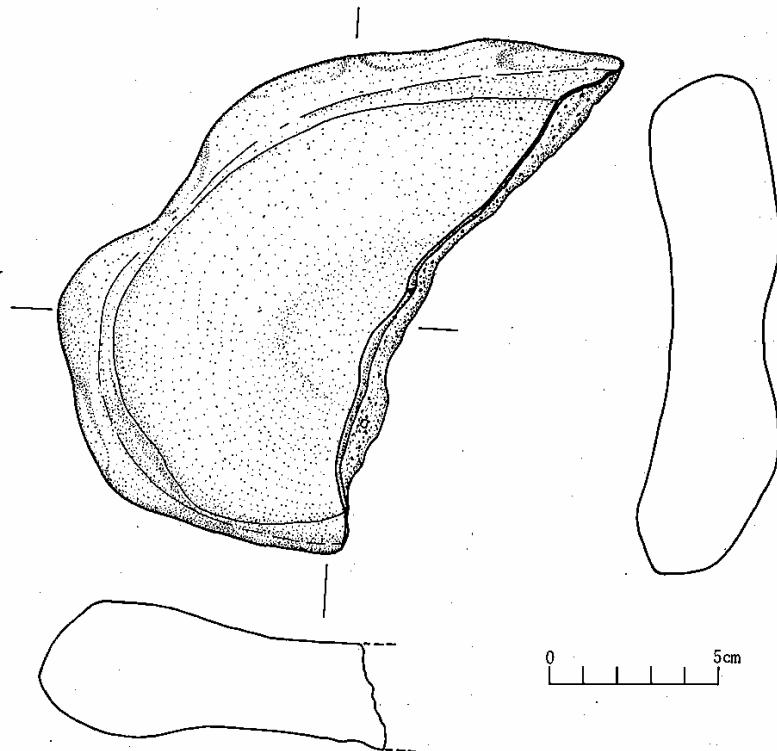
第4(47)図 壇穴住居跡出土遺物



1 ~ 8. 第3層出土土器
9. 第2層出土石器
10~13. 第3層出土石器

0 5 cm

第5(48)図 竪穴住居跡出土遺物



第6(49)図 竪穴住居跡出土石皿

石皿が1点ある。材質は砂岩である。全体の3分の1が欠けている。現存の大きさは32.3×30.8cmで厚さは最厚部で7.9cmである。形態的には橢円形に近い。側面および下面はすべて自然面である。上面は最深部で1.6cm程皿状に凹んでいる。また、凹部に沿った縁辺も摩滅を受け平らな面となっている。

竪穴住居跡その出土遺物の年代

年代決定の方法と資料

住居跡の廃絶される前の土器を原位置のまま発見することはできなかった。今回、住居跡内から発見された土器は住居の廃絶後に廃棄されたものである。ただ、第3層出土土器の中には床面に非常に近い部分から発見されたものも少なくないため、住居年代と土器の廃棄の年代がそれ程へだたるものとは考えられない。

竪穴住居跡から発見された土器は、第1b類と第2b類によって大部分が占められる。この他に第2層から出土した第1a'類、第3層から出土した第2a類、第3類が各々1点ずつある。

この中で第 1a' 類は胎土、器内面再調整、焼成等の点で他の土器群とは著しく異なり、出土層位も第 2 層で 1 点のみであることから、部分的な深耕によって入り込んだ可能性も否定できない。従ってこの土器を年代決定の資料から除外する。他の第 2a 類、第 3 類の土器に関しては問題がない。両者とも胎土は他のものと共通し、前者にあっては器内面の再調整器外面の施文技法（山形押型文）等において共通する。

このように見えてくると第 2 層出土の土器と第 3 層出土の土器とでは何ら差は認められない。

出土土器の編年的位置と竪穴住居跡の年代

以上のような特徴を示す土器群の中で、第 2b 類（第 2a 類も包括される）とした山形押型を回転施文する押型文土器は青森県日計遺跡（笛津：1961）において注意され、各地の資料と比較することによって早期末葉に位置づけられていた。しかし、日計遺跡においては層位的な証明は何らなされていなかった。その後、岩手県蛇王洞遺跡の調査（芹沢・林：1965）によって同様な押型文土器が沈線文土器（関東地方の三戸式土器に先行）の下層から「縄文の施された土器」、「薄手無文土器」を伴って発見された。このような調査結果から、報告書はこの押型文土器の時期を「関東地方の花輪台式から平板式くらいの時期にあたるもの」と考えた。このように東北地方における山形押型文土器の時期を縄文時代早期前葉に位置づけるという見解は、さらにその後の岩手県大新遺跡の調査結果（武田・吉田：1970）、秋田県岩井堂岩陰第 4 洞穴第七次調査結果（山下：1971）からもほぼ支持されるものとなった。

このようなことから、松田遺跡の竪穴住居跡内より発見された第 2a・b 類は早期前葉に位置づけられるものであろう。同時に、松田遺跡において共伴した第 1b 類土器、第 3 類土器も同年代に比定してよいと思われる。

従って上記の土器と伴出した石器も早期前葉のものと考えられる。さらに、竪穴住居跡および床面上の石皿の年代もほぼ同じか、それよりも僅かに古い時期に位置づけられる。

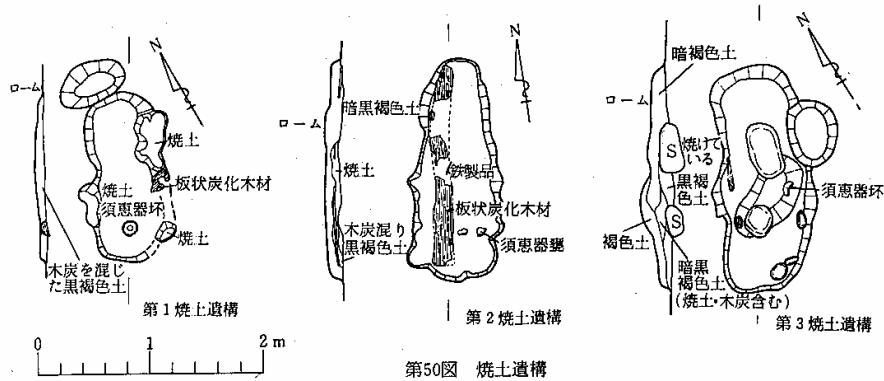
、平安時代の遺構 焼土遺構

第 1 焼土遺構と出土遺物

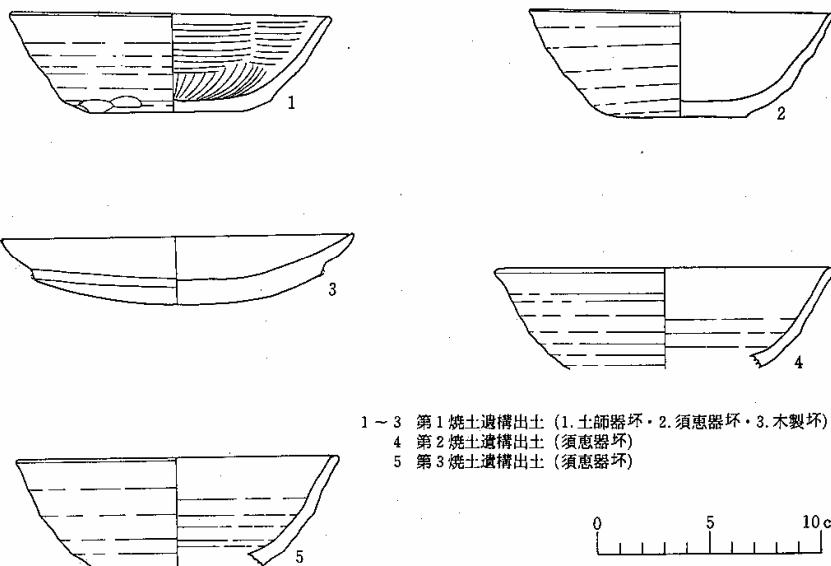
遺構（第 50 図）

第 1 焼土遺構は北北東から南南西に長軸をとって、I～J-16～17 区に位置している。荒掘りの段階で木製壺・土師器壺が発見され、その存在を知ることができた。

長軸 151cm・短軸 70cm の大きさで、平面は長円形を呈する。遺構はローム層上面（部分的擾乱により幾分汚れている）で確認することができた。深さ 10cm 程度の船底状をした掘り込みである。また、側壁は赤褐色に焼けている部分もあるが、底面には火熱を受けた痕跡



第50図 燃土遺構



第7(51)図 燃土遺構出土遺物

は認められない。内部には木炭と焼土を混じた暗黒褐色土が埋っていた。

出土遺物（第51図）

遺構内に埋っている暗黒褐色土からは鉄製品の破片3点が検出された。また底面と同一レベルに近い部分から、木製環、土師器と須恵器環各1点と、板状炭化木材片が発見された。

土師器環（第51図-1）：ロクロ成形で、切り離しは回転糸切りである。体部下端および底部は手持ちのヘラケズリがある。内面は黒色化され、ヘラミガキが行なわれている。

内面のヘラミガキは中心から周縁に放射状に広がる。胴部では口縁と平行する。

須恵器坏（第 51 図－2）：ロクロ成形であるが、器外面にはらせん状の稜線が認められる。底部の切り離しは回転糸切りで、ヘラケズリによる調整はない。

木製の坏（第 51 図－3）：保存状態は悪くないが、炭化のため製作技法の観察は容易でない。しかし、僅かながらその痕跡を残している部分もある。柾目材を利用した、体部に 4～5 mm の段の認められる坏である。段を境として上部はロクロによって成形されている。その下部はケズリの痕跡が部分的に観察される。

第 2 焼土遺構と出土遺物

遺構（第 50 図）

長軸を南北にとりながら、D-37～38 区に位置している。表土下 30cm で円礫を含んだ暗黄褐色のローム層に達する。このローム面上で、長楕円形状に焼土と木炭を含む暗黒褐色土の分布がみられ、遺構の存在が確認された。この第 2 焼土遺構は船底状を呈した掘りこみであり、長軸 195cm、短軸 78cm の大きさをもつ。壁面は平坦な底面からゆるやかに立ち上がる。また、底面および壁面とも火熱を受けた痕跡を残していない。

遺構の中に埋っている暗黒褐色土は中央南側の上層で焼土を多く含む。その下には幅 14～16cm、深さ 180cm、厚さ 2～6 cm の板状炭化材が遺構の主軸にそって横たわっていた。

出土遺物（第 51 図）

炭化材の他に須恵器 2 個体分、鉄製品 1 点が出土している。

須恵器は暗黒褐色土上面より出土。

坏（第 51 図－4）：口縁部から体部に至る破片。

甕：体部破片。器内外面とも刷毛目がある。方向は一定しない。器外面はさらにヘラケズリが行なわれている。

鉄製品：板状炭化木材直上より発見。

第 3 焼土遺構とその出土遺物

遺構（第 50 図）

E-37～38 区、第 2 焼土遺構の西側に僅かに距離をへだてて発見された。長軸は北東から南西方向である。遺構確認に至る経過は第 2 焼土遺構の場合と同じである。

焼土・木炭を含む黒褐色土に半分埋まりながら S₁～S₅ の大小の円礫が認められる。S₁ の場合はその下面が赤く、火熱を受けた痕跡がある。これらの石を排除し、黒褐色土をとり除くと中央部に凹みのある平坦な遺構底面に到達する。遺構の大きさは長軸 20cm、短軸 90cm である。遺構の底面および壁面は火熱を受けた痕跡は認められない。

出土遺物

第1層中より、須恵器坏（第51図－5）が1点発見された。ロクロ成形である。底部を欠く。

焼土遺構の年代

出土した遺物についてみると木製の坏に関してはわからないが、いずれも平安時代の土師器、須恵器の特徴をもっている。従って、これらの遺物もその所属時期を平安時代に求めるのが妥当であろう。

、遺構外の出土遺物

遺構以外からの出土遺物は表土および攪乱層から発見されたものである。分量は平箱1個程度あるが、十分整理が進んでいないためその概略を述べるにとどめたい。

縄文時代の遺物

早期の押型文土器、縄文施文土器・沈線文土器・前期初頭の羽状縄文土器・中期の大木8a式土器・大木9式土器などがそれぞれ数点ずつある。その他、石器として石鏃、搔器などがある。

弥生時代の遺物

後期の天王山式土器と思われるものが数点ある。

古墳時代の遺物

南小泉式土器の高坏脚部が1点ある。

平安時代の遺物

土師器や須恵器の破片が大量に発見された。中には「千」の字を書いた墨書土師器も1点ある。

以上その他に近世のものと思われる瓦の破片もある。

6まとめ

- (1) 縄文時代早期前葉押型文土器を出土する堅穴住居跡が発見された。宮城県はもとより、全国的にもこの時期の住居跡の発見例は少なく今後貴重な資料となろう。
- (2) 住居跡とあわせて、押型文土器およびそれに伴なう縄文施文土器が発見されて、この時期における土器の組合せを知る資料となりえた。
- (3) さらに石器のあり方についても一定の資料を提供することとなった。
- (4) 平安時代の遺構として3例の焼土遺構が発見された。また第1焼土遺構からは残りにくい木製の坏が発見された。

以上のような遺構と遺物の他に、縄文時代早期の沈線文土器や前期・中期の土器・石器も発見されているので調査範囲外に、それぞれの時期の遺構が存在する可能性がある。また、この点に関しては弥生時代、古墳時代についても同様である。（丹羽茂）

参考・引用文献

- 笹津備洋（1961）：「青森県八戸市日計遺跡」史学第33巻1号
芹沢長介、林謙作（1965）：「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号
武田良夫、吉田義明（1970）：「盛岡市大新遺跡」『奥羽史談』第54号
山下孫継（1971）：「岩手県岩井堂岩陰第4洞穴第七次調査報告書」
氏家和典（1968）：「松田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第17集

（補注）

遺構外から出土した遺物は、概報で述べた内容と同じなので、特に掲載しないことにした（昭和57年9月）。

写 真 図 版

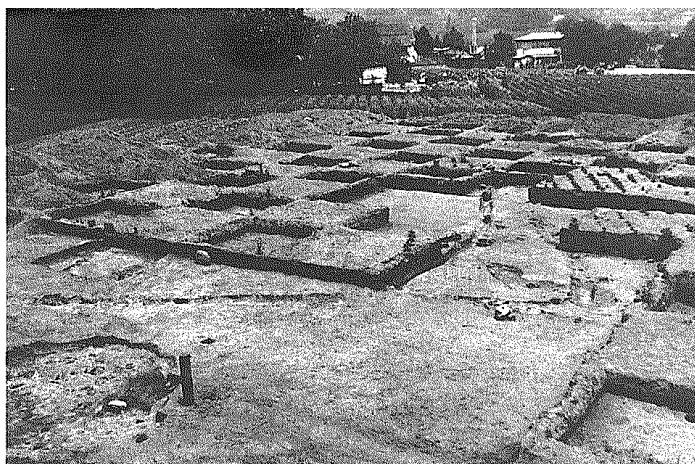


写真37 松田遺跡
発掘地区の状況



写真38 松田遺跡
竪穴住居跡



写真39 松田遺跡
竪穴住居跡柱穴断面図

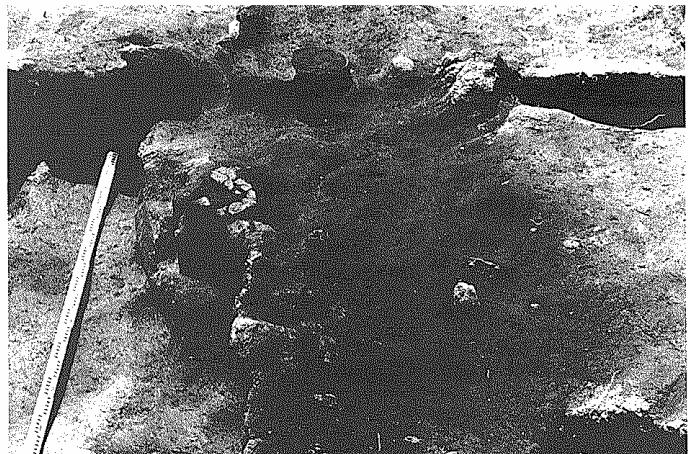


写真40 松田遺跡
第1 焼土遺構

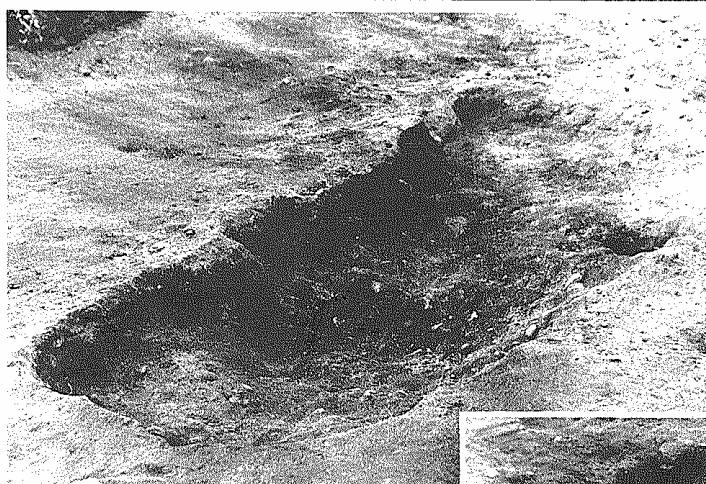


写真41 松田遺跡第2 焼土遺構

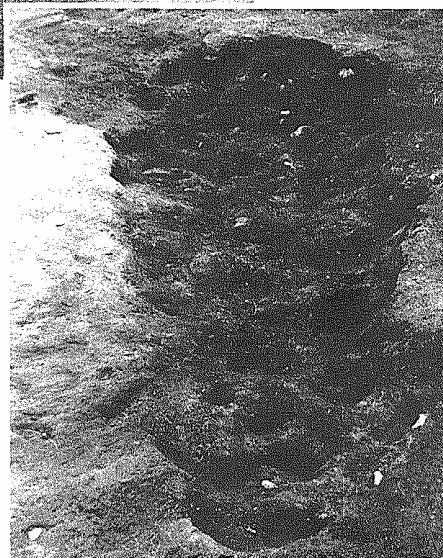


写真42 松田遺跡第3 焼土遺構

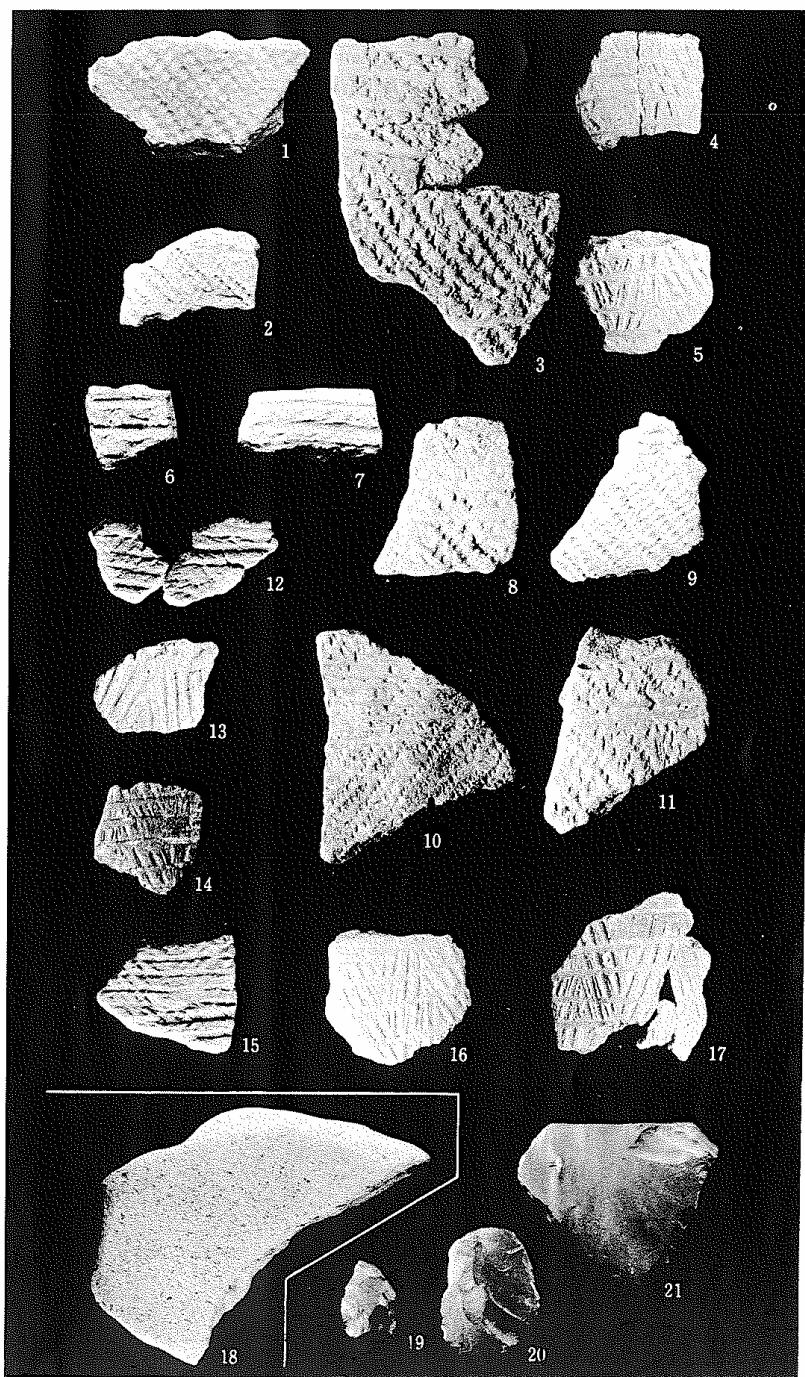


写真43 松田遺跡出土遺物・1～5土器（第2層）・6～17土器（第3層）・18石皿

(2) 菅生田遺跡

目 次

I.	調査の方法	25
	野外調査	25
	室内調査	25
II.	遺構とその出土土器	31
	住居跡	31
	小堅穴遺構	99
	埋設土器遺構	109
	遺物包含層	110
III.	遺物の検討	116
	第Ⅰ群土器	116
	第Ⅱ群土器	130
	その他の土器	153
	土製品	153
	石製品	163
IV.	遺構の検討	205
	遺構の特徴	205
	遺構の年代	211
	住居跡の地域的特性	214

調査要項

遺跡所在地：宮城県白石市福岡蔵本字菅生田

遺跡記号：SD(宮城県遺跡地名表登載番号：02032)

調査期間：発掘面積　調査員

第1次調査：昭和43年2月26日～3月30日 予備調査 発掘面積38m² 調査員 後藤勝彦

第2次調査：昭和46年9月13日～11月4日 東北自動車道路線敷発掘調査 発掘面積1,056m²

　調査員：白鳥良一・岩渕康治・佐々木安彦・佐藤庄一・小井川和夫・加藤道男
　・丹羽茂・七戸貞子

第3次調査：昭和47年7月10日～12月27日 東北自動車道・白石バイパス路線敷発掘調査

　発掘面積2,965m² 調査員：藤沼邦彦・小井川和夫・丹羽茂・三浦圭介

I . 調査の方法

野外調査

調査区の設定：菅生田遺跡の発掘調査は3次にわたっている。第1次調査は昭和43年に後藤勝彦氏によって実施された予備調査である（後藤勝彦：1968・3）。遺構の存在を予想してトレンチを設定し、住居跡と埋設土器遺構を検出している。第2次調査は昭和46年の宮城県教育庁文化財保護室による東北自動車道路線敷に対する本格的な発掘調査である（七戸貞子：1972・3）。第3次調査は、昭和47年の宮城県教育庁文化財保護室による東北自動車道路線敷（第2次調査で未了の部分）と白石バイパス路線敷に対する発掘調査である。

第1次調査はトレンチによるものであるが、第2・3次調査は路線敷全体に3m単位のグリッドを設定した。グリッドは、東北自動車道の中心杭STA131km+00mとSTA131km+20mを結ぶ線を基準線として設定した。そして、STA131km+00mを原点として、これに直交する3m単位のグリッドを組んだ。グリッド名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表わし、原点の東側をA I区、西側をAH区、北側を51区、南側を50区とした。ただし、東側に延長したアルファベットはATでひと区切りとし、さらに東方はBA～BTで表現し、20区で一つの大きい単位となるようにした。

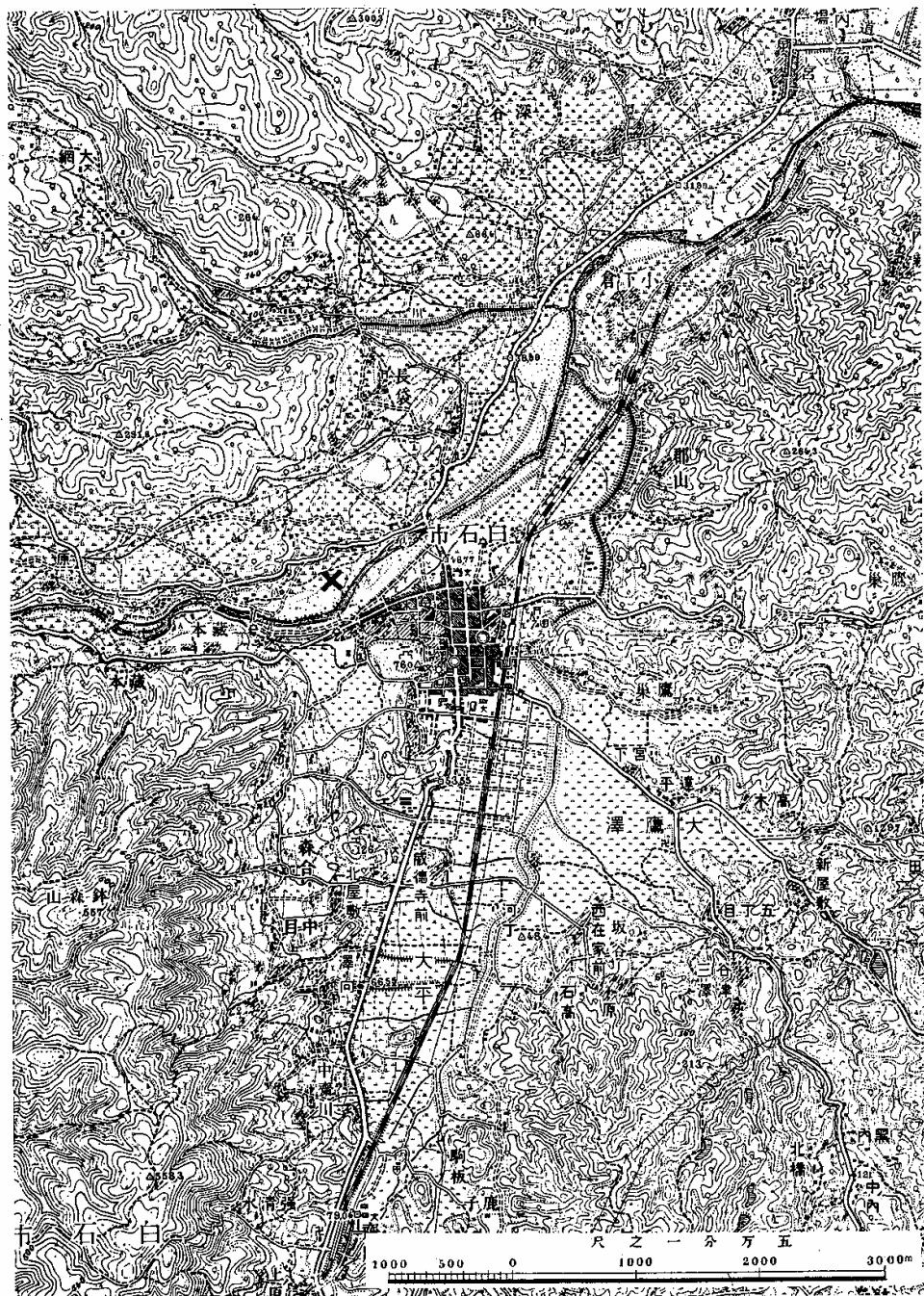
記録の作成：発掘調査時に作成した記録は実測図と注記カード・写真である。実測図は調査区全体を覆う遺り方測量を基本にして、平面図と断面図を作成した。いずれも $1/20$ の縮尺である。注記カードは住居跡を中心とした遺構について、略図と文章による調査所見を記載したものである。写真は4×5インチ版モノクロ・35mm版モノクロ・35mm版カラーリバーサル（スライド用）を使用した。

室内調査

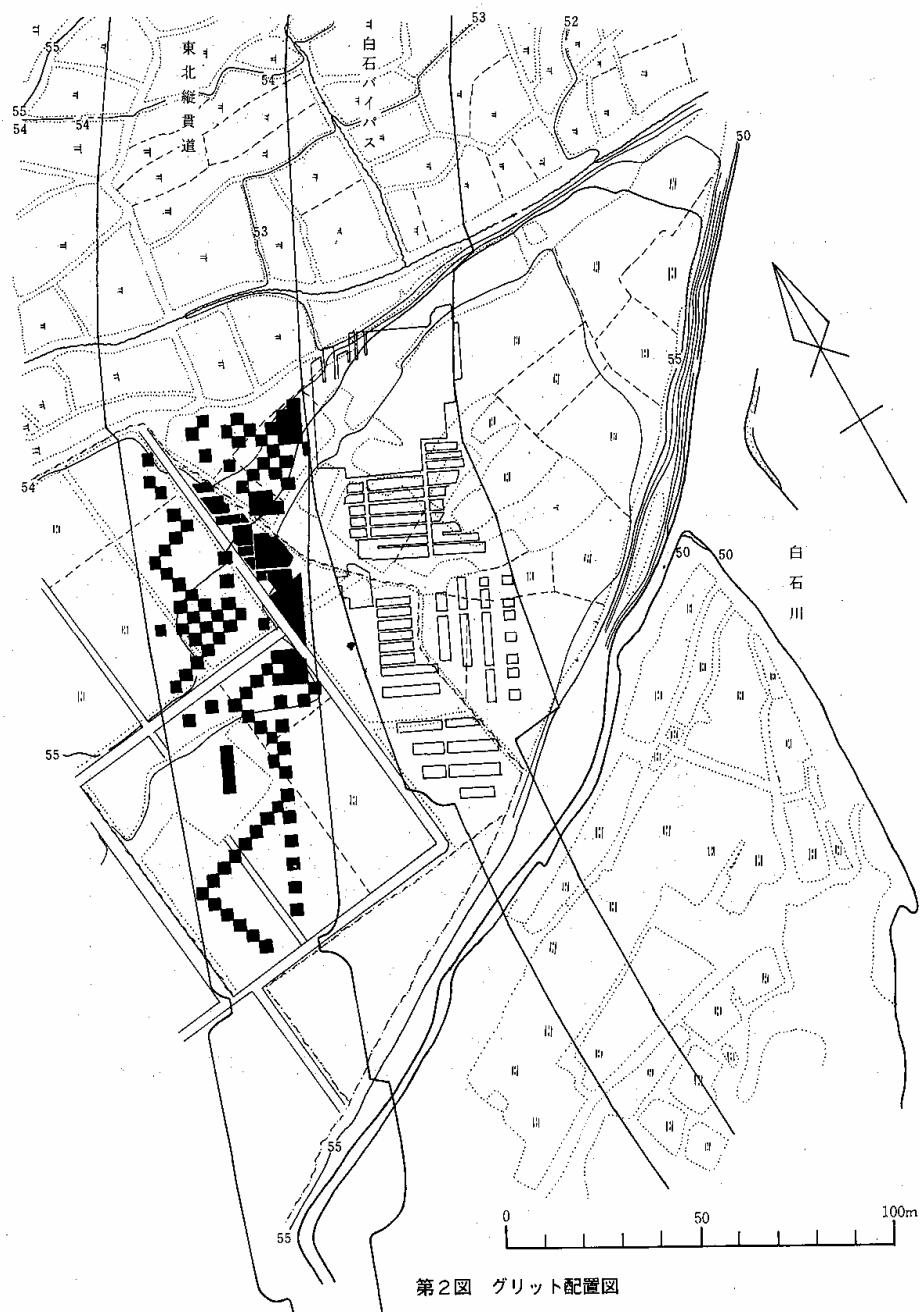
遺構・遺跡実測図：遺構平面図はそれぞれ一連番号を付して整理した。遺り方測量の水系配り図に遺構平面図の用紙割を書き込み、平面図の台帳を兼ねるようにしてある。断面図は地区ごとに整理し、一連番号を付した。

遺物：本遺跡から出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土製品（土偶・滑車状耳飾・土製蓋・袖珍土器・円板状土製品）・剥片石器（石鏃・石匙・石錐・不定形石器）・磨製石器（石斧）・礫石器（凹石・磨石・敲石・石皿）などがある。遺物総量は平箱で約150箱である。

土器は、記名・接合後、脆弱なものについてはバインダー17による強化処置を行なった。その後、遺構・遺物包含層出土土器を中心として、次のものを登録し（Po. No.）、実測図・拓影図を作成した。



第1図 遺跡の位置 ×印：菅生田遺跡
(1/5万「白石」「桑折」図表)



第2図 グリッド配置図

復元資料・口縁部資料の大部分（有文土器か地文土器か識別不可能なものは除外）・特徴の明瞭な胴部資料・底部資料（底部径の判明しないものは除外）。

土製品は、土偶・滑車状耳飾・土製蓋・袖珍土器をすべて登録し（C. M. No.）、実測図を作成したが、円板状土製品は必要なものについて登録し（C. M. No.）、実測図を作成した。

石製品は、剥片石器・使用痕のある剥片・磨製石器・礫石器のすべてを登録（S. M. No.）した。剥片石器と使用痕のある剥片については、遺構出土のものを中心として、磨製石器と礫石器はそのすべてについて実測図を作成した。

報告書の作成：菅生田遺跡は3次にわたる調査が実施され、それぞれ遺構を中心として概要の報告がなされている。今回は発掘調査時の所見を尊重する意味から、遺構については概報に記された内容を再録し、不充分と思われる点については（注）で補うことにした。したがって、遺構実測図の縮尺は、各概報に従ったため必ずしも統一されていない。遺物については、今回の整理結果に基いた成果を全面的に収録した。遺物実測図の縮尺は、土器・円板状土製品・礫石器が¹/₃、土偶・土製蓋・袖珍土器・磨製石斧が¹/₂、剥片石器が²/₃である。

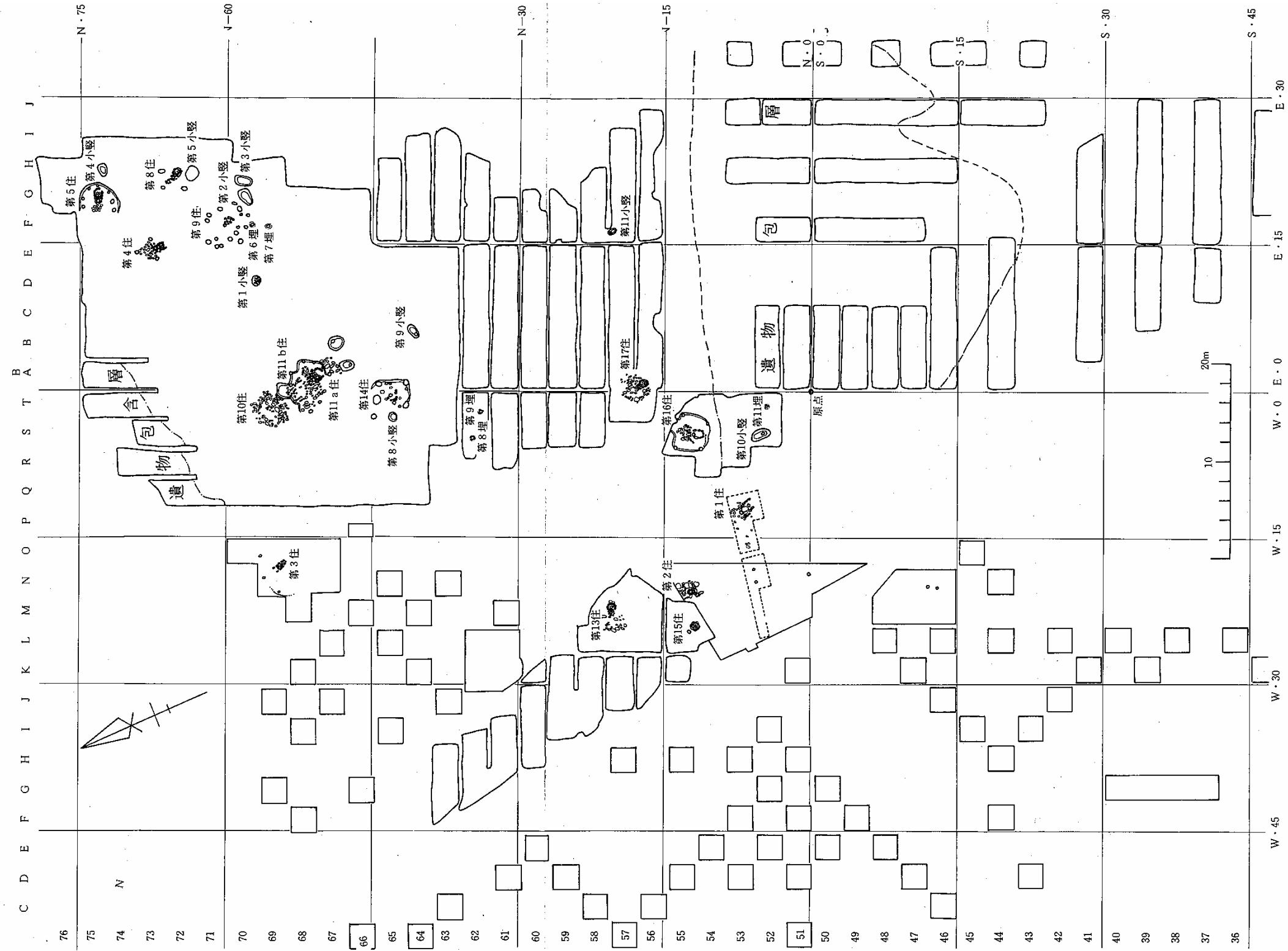
なお、菅生田遺跡周辺の自然環境については、安田喜憲氏の調査結果を付編として収録した。

また、遺跡の歴史的環境については、既に青木遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書IV—に詳述されているので、そちらを参照していただきたい。

第1表 菅生田遺跡出土遺物一覧

土 製 品	縄文土器	前期初頭 胴部資料1点 大木10式 復元資料50点 口縁部資料231点 胴部資料59点 底部資料64点 南境式 復元資料14点 口縁部資料121点 胴部資料49点
	弥生土器	円田式 口縁部資料2点 頸部資料1点 胴部資料1点 底部資料1点
	各種土製品	土偶4点 滑車状耳飾2点 土製蓋12点 袖珍土器6点 円板状土製品338点
石 製 品	剝片石器	石鎌113点・石匙11点・石錐8点・石箇1点・不定形石器60点以上
	磨製石器	磨製石斧13点
	礫石器	磨石6点・凹石26点・敲石1点・石皿9点

※この他、土器は胴・底部資料が平箱100、石器破片・剝片が6箱ある。



第3回 滅機配署圖

II. 遺構とその出土土器

石組遺構（第1号住居跡）

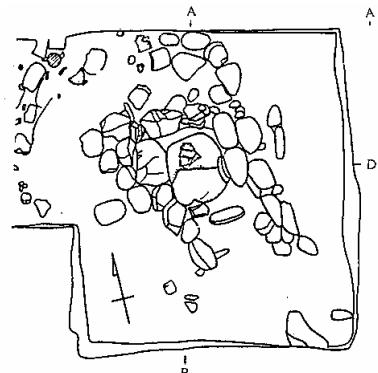
遺構は上部の移動混入の石を取はずして行くと、整然と河原石でコ字状に組まれていた。

全長約1.50m（長辺）、巾1.10m（短辺）であり、凹部の最下部内径は58cmである。コ字状の東側石はほぼ直立の状態であるのに対し、西側石は東に斜傾（56度）しており、北側石はさけたのか亀裂の多い石でもっと南に斜傾（41度）して組まれている。コ字状組石の内部には、大形のほぼ偏平な石が組み入れられ、この石の北側部分は北に緩傾斜（24度）していく凹部を形成する。この緩斜面は平坦面と違って、打痕調整された痕跡のように滑らかでない。そして、また、この大形石によってコ字状内部が区画されコ字状になっている。

このように炉跡状石組の北及び西側に偏平な石が敷きつめられて、敷石状となっており、複室を持つ炉跡状石組をかこんで敷きつめられたものである。^{注1)}しかし、敷石住居跡であるかどうかは、現段階では結論は出せないが、西側の埋葬施設等^{注2)}と考えて、何らかの生活場であったことは確実である。

注1) この遺構は昭和43年の予備調査の際に発見されたもの（後藤勝彦：1968・3）で、昭和46年の本調査の段階に第1号住居跡と命名された（七戸貞子：1972・3）。しかし、この第1号住居跡は東北自動車道の路線敷外にあたることが判明したので、その後本格的な調査は行なっていない。現在の時点でこの遺構を見ると、住居跡の炉で、その前面に小規模な床面敷石が配されたものと考えられる。また、当時の記録では、炉が敷石石組部と石組部（開放）からなっているかのようであるが、写真と実測図（本書再録）をその後に調査された第2～17号住跡と比較すると、土器埋設石囲部が付設されていた可能性が強い。したがって、第1号住居跡の炉は土器埋設石囲部・敷石石組部・石組部（開放）からなる複式炉であったと推定される。

注2) この遺構は第1・2埋設土器遺構と命名され、昭和46年度に本調査が行なわれている（七戸貞子：1972・3）。

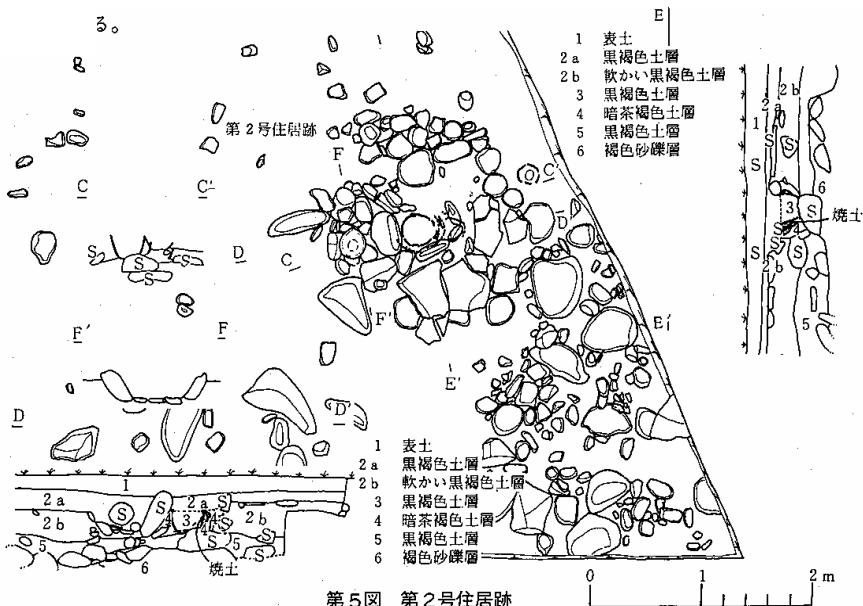


第4図 第1号住居跡

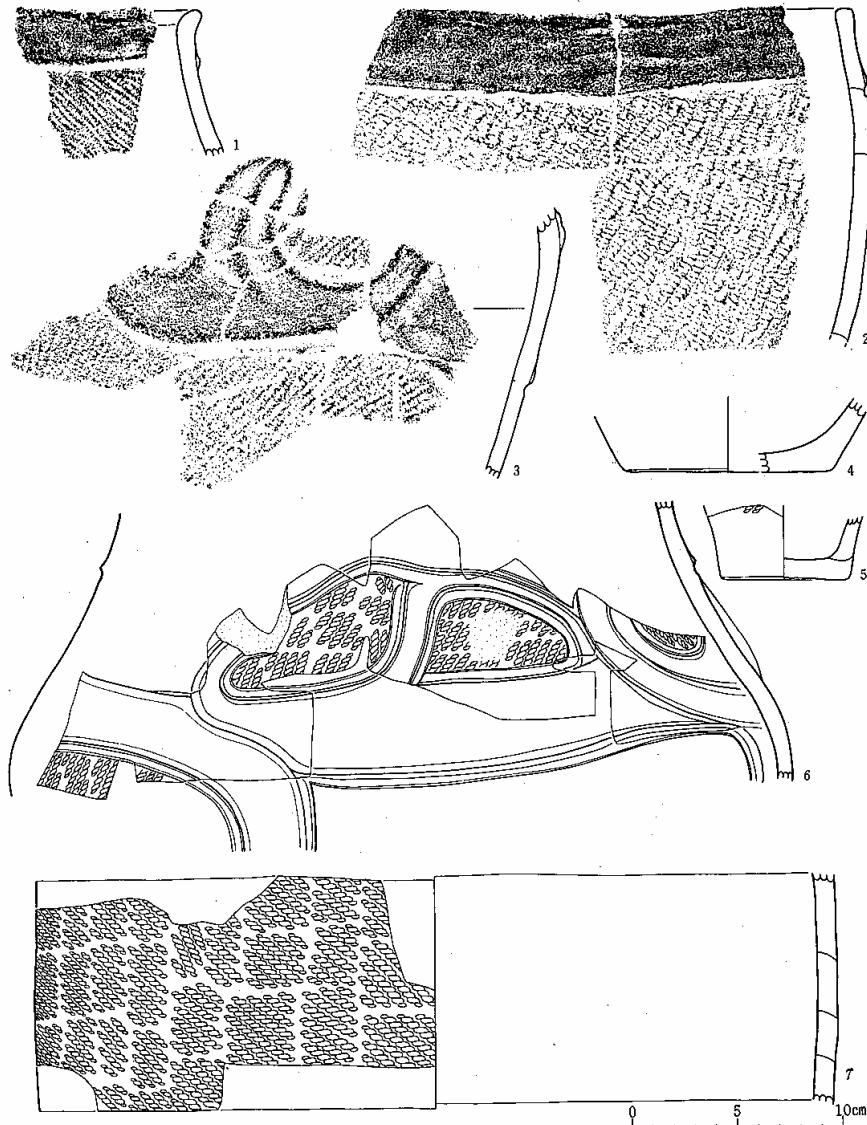
第2号住居跡

調査区の東端中央部（N・O-55 区付近）に検出された遺構である。石組複式炉を中心に扁平な割石と河原石が敷きつめてある。覆土が浅いため住居跡の壁および周溝は検出できず、柱穴も掘り下げをくり返したが検出できなかった。しかしこの炉は住居に付属する施設であると思われる。

炉は南北 1.3m、東西 1.0m のほぼ橿円形を呈する石組複式炉である。周囲を扁平な河原石によって囲まれ、中は北側に土器埋設部分〔A部〕、中央部に掘り込みを持ち底に石を敷きつめた部分〔B部〕、南側に石を敷かず掘りくぼめただけの部分〔C部〕、とに分けられる。C部の南側は囲み石がなく、開口した形になる。A部とB部の間は、大きな扁平な石をたてて仕切られている。A部についてみると、直径 30cm の下半部の欠損した深鉢が埋設されており、それを他の土器で二重に囲んでいる。掘り方は確認された。埋設土器の間には部分的に焼土がみられた。A部の石組をとり除いたところ、北側の石の下から、もう 1 個の埋設土器が検出された。直径 25cm の下半部欠損の深鉢である。焼土はなかったが掘り方が部分的に認められた。底面のレベルは先の埋設土器と同じである。B部についてみると、レベルは埋設土器の底とほぼ同じで、暗褐色土を掘りくぼめ、約 40cm の方形に小礫を敷いている。B部と C 部の境は横にした石によって仕切られている。C部は大きな石で囲まれ、南側に開口しているのみで、ほかに施設はない。この住居跡の石を敷きつめた部分のすぐ東側に河原石群がみられるが、住居跡との関係は不明である。

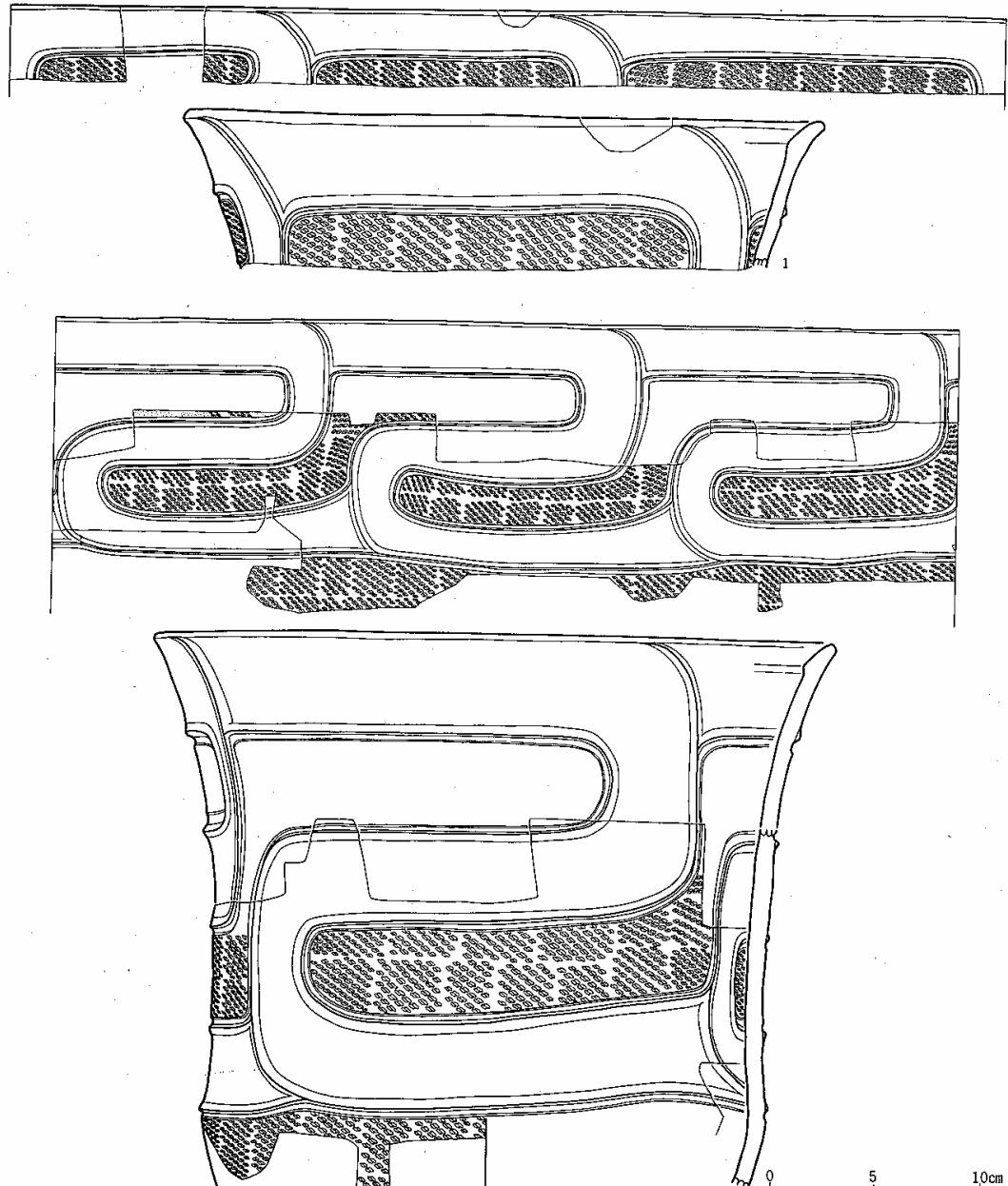


第5図 第2号住居跡



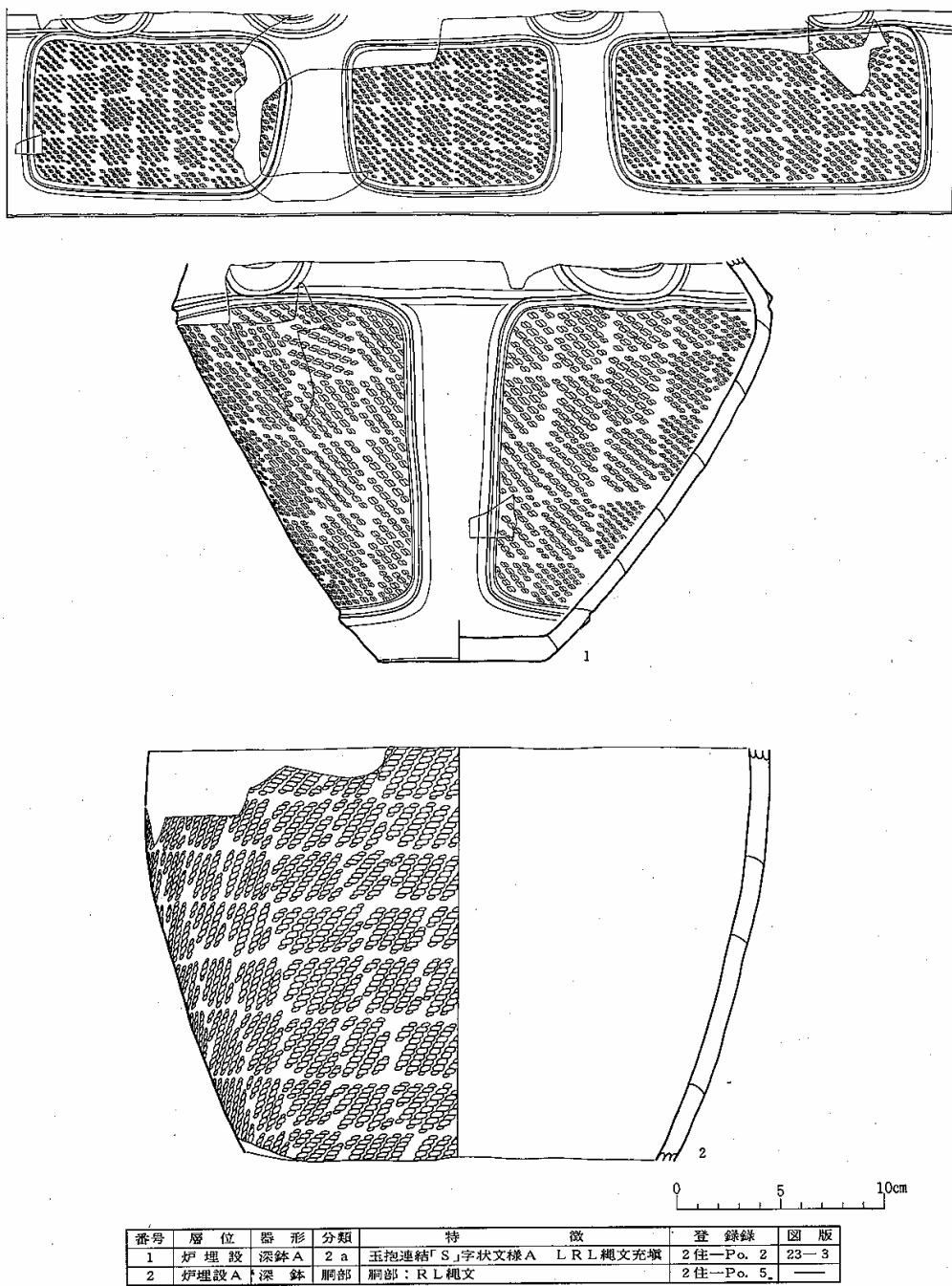
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉 3 層	深鉢 B ?	1 b	頸部：陰線 脚部：L R 細文	2住-Po. 12	23-7
2	炉埋甕 A 内	深鉢 B	1 a	頸部：陰沈線 脚部：R L 細文	2住-Po. 9	23-6
3	炉埋 甕 B	深鉢 A	2	玉抱連結「S」字状文様 R L 細文充填	2住-Po. 8	23-5
4	炉 B	不明	底部	脚下端～底部：無文	2住-Po. 13	—
5	炉埋 甕外	不明	底部	脚下部：R L 細文 脚下端～底部：無文	2住-Po. 11	—
6	炉石組 内	深鉢 A	2 a	玉抱連結「S」字状文様 A. R L 細文充填	2住-Po. 6	23-4
7	炉埋 設 A	深 鉢	脚部	脚部：L R 細文	2住-Po. 3	—

第6図 第2号住居跡出土土器(1)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉埋設	深鉢 A	1	連続「S」字状文様 L R L 繩文充填	2住-Po. 1	23-1
2	炉埋設	深鉢 A	1	連続「S」字状文様 L R L 繩文充填	2住-Po. 4	23-2

第7図 第2号住居跡出土土器(2)



第8図 第2号住居跡出土土器(3)

注1) この石組複式炉は土器埋設石囲部（A部）・敷石石組部（B部）・石組部（開放：C部）からなっている。炉の大きさは長軸164cm、短軸100cmである。

注2) 床面には、炉の土器埋設石囲部（A部）を中心としてその前面に、半円状の敷石がなされている。

補注) 床面敷石北端の外側に埋設土器が1基ある。この埋設土器は炉長軸の延長線上に位置している。

第3号住居跡

この住居跡は、遺跡北側M・N—68・69区の傾斜のすそで検出された。住居跡の輪郭は不明であるが、検出された石組の複式炉は住居の付属施設であると考えられる。柱穴とみられるピット3個を確認したが、壁や床面が不明のため全体としての様相はわからない。炉は、第3層の黒褐色砂礫層を掘りくぼめて構築されていた。南北1.8m、東西1.0mの周囲に河原石をめぐらしたほぼ長方形のプランを持つ第2号住居跡の炉と同じく、A、B、Cの3つの部分に分けられる。^{注1)} A部は直立に埋設された埋め甕の上部周辺に、10数cm前後の扁平な円礫を敷き並べ、更にその間に10×5cm位の小礫をつめた形になっている。埋め甕内部は砂岩を含む数個の礫や焼けた礫の剥片とみられるものなどが入っており、また下部の方へ行くに従い、木炭が濃厚に検出された。埋め甕は2個体分の土器が組み合わされており、口縁部の欠損したカリバー型の深鉢を下にし、その上に一個体分の口辺部と胴部の一部を円形に並べてのせてある。土器は隆線区画の磨り消し文を持つ中期末大木10式のものである。B、CはAとの境が35×50cmの扁平な立石で仕切れ、ほぼ整った形の長方形に河原石をめぐらしている。中はBとCの境を2つの細長い石で仕切っている。Bの部分は周囲の立石の内側に焼けた痕跡があり、埋土は暗褐色の砂質土であるが木炭がかなり含まれていた。炉跡内からは木炭の他には焼土灰は検出されず、炉の東側の少し離れた床面らしきところに検出された。炉はA、B、Cなどの部分も掘り方が明確に認められた。この住居跡の部分は、遺構確認以前の上層から多量の礫、土器片、石器の出土がみられた。

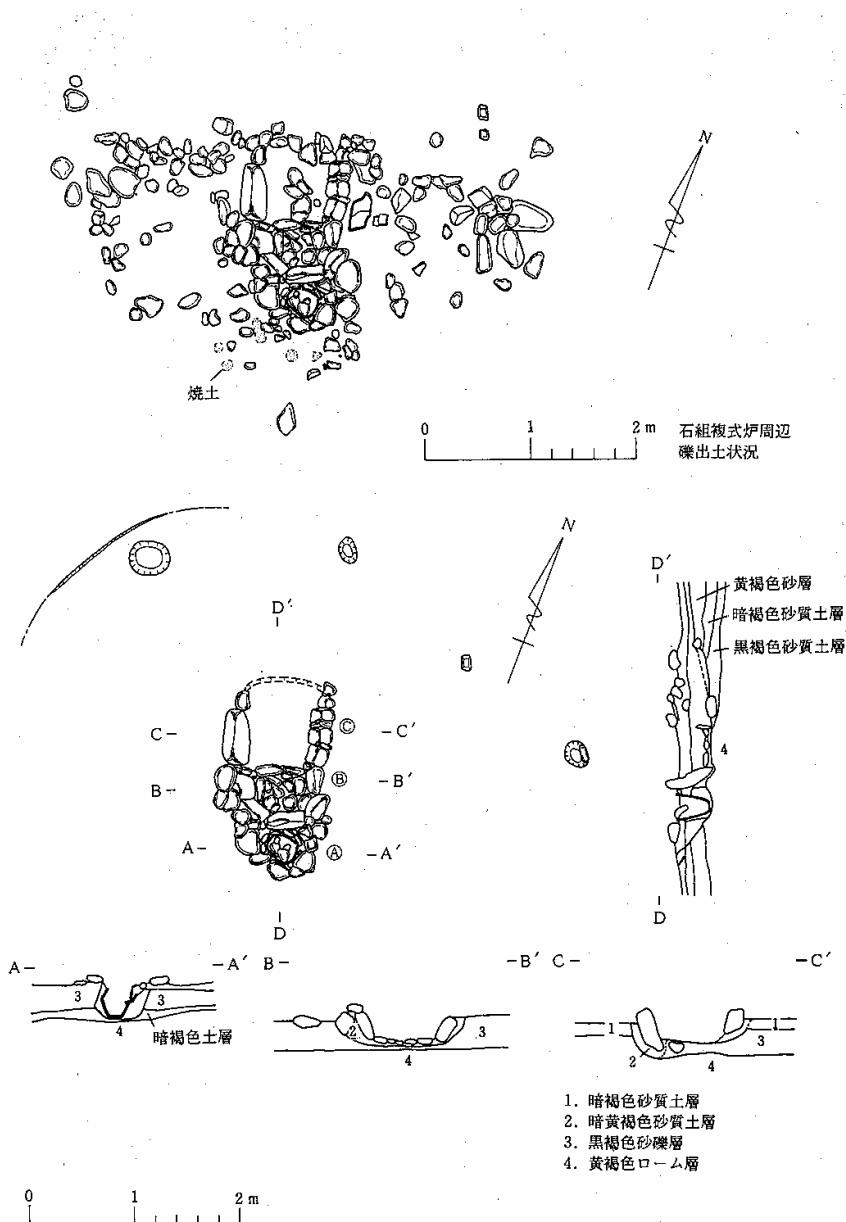
注1) A・B・C部とは土器埋設石囲部・敷石石組部・石組部である。炉の大きさは長軸192cm・短軸106cmである。

第4号住居跡

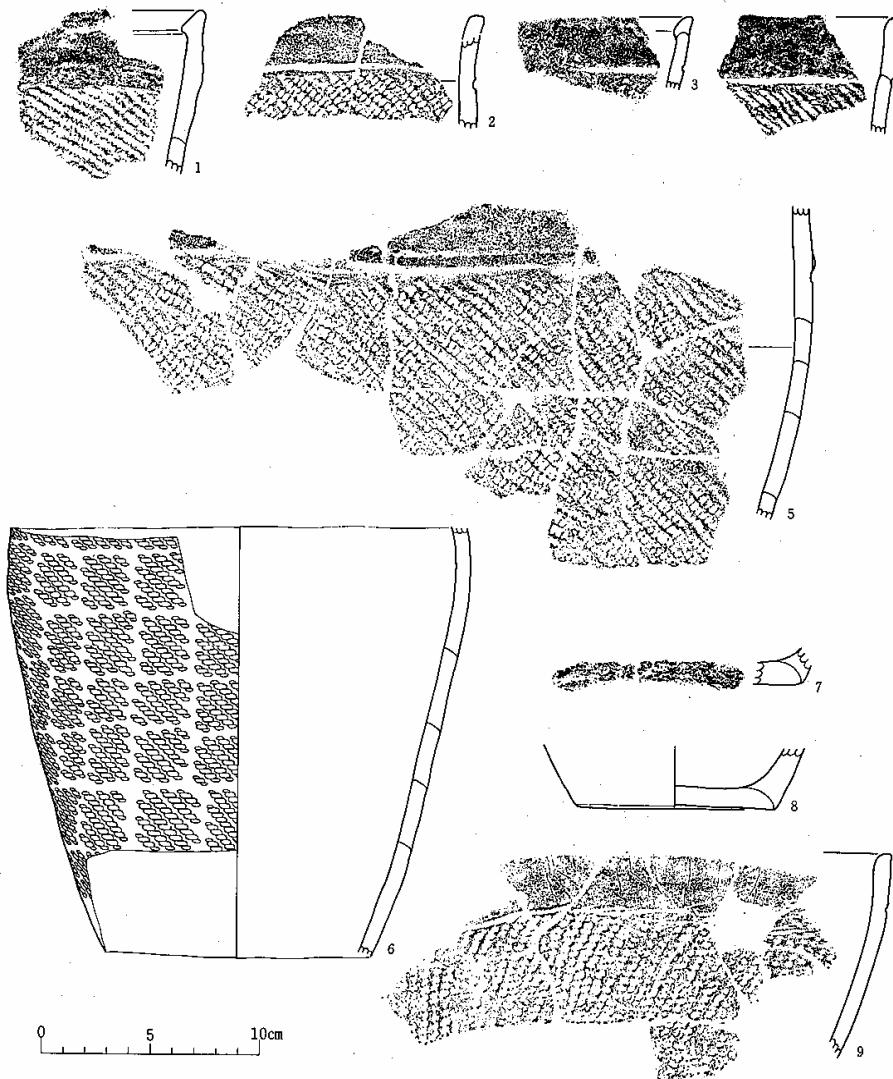
(遺構の確認) BE—73区周辺で表土を30~40cm掘り下げると褐色粗砂質シルト層に達する。この面で遺物を含む黒褐色土の分布を確認し、住居跡の存在を推定する。第4住居跡とする。

(重複・増改築)認められない。

(平面形・方向)床面の分布・竪穴の壁等検出できなかつたので平面形はわからない。



第9図 第3号住居跡



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉埋設周辺	深鉢 B	1 b	頸部：隆線 脊部：L R 繩文	3住-Po. 4	23-12
2	炉埋設周辺	深鉢 B	1 c	頸部：沈線 脊部：L R 繩文	3住-Po. 6	23-11
3	炉埋設付近	深鉢 B	1 c	頸部：沈線 脊部：RLR 繩文？	3住-Po. 7	—
4	炉埋設中側	深鉢 B	1 c	頸部：沈線 脊部：L R 繩文	3住-Po. 8	23-10
5	炉埋設	深鉢 B?	不明	頸部：L R 繩文	3住-Po. 10	23-8
6	炉埋設中側	深鉢 B	脣部	脣部：L R 繩文	3住-Po. 3	—
7	炉埋設	深鉢	底部	脣下端～底部：無文	3住-Po. 12	—
8	炉埋設	深鉢	底部	脣下端～底部：無文	3住-Po. 11	—
9	炉埋設内	深鉢 B	1 c	頸部：沈線 脊部：R L R 繩文	3住-Po. 5	23-9

第10図 第3号住居跡出土土器(1)

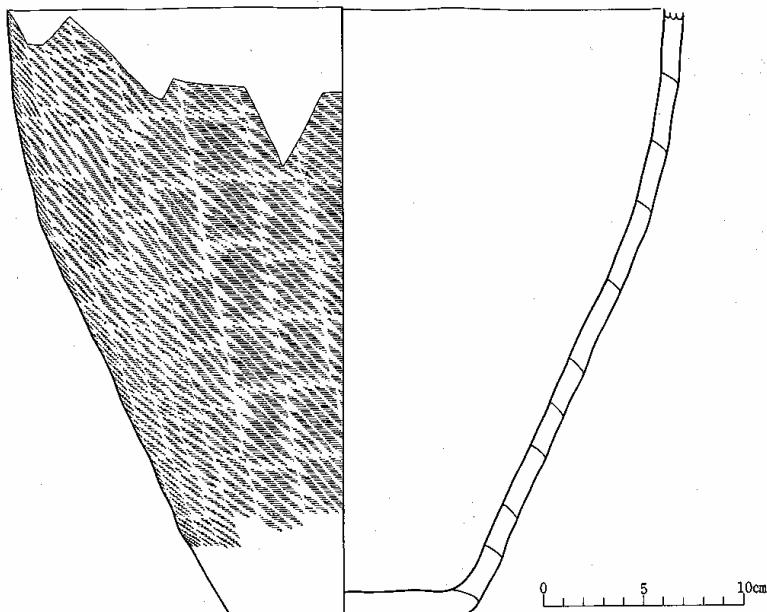
(堆積土) 堆積土は遺構確認時に検出された細砂質シルト層(第2層)だけで、部分的な攪乱を受けながらも5~15cmの厚さで残っていた。しかし、住居の壁と思われる部分では攪乱が激しく、残っていない。第2層の下は敷石面(床面)となる。

(壁の状況) 不明。攪乱のため検出できなかった。

(床面) 炉の北側に平坦な石がかなり広く敷かれている。石と石の間にはその間隙をうめるように小さな石が詰められている。敷石の大部分は縁のとれた河川成のものであるが、一部に縁の角張ったものもある。敷石のない部分、特に炉の両側床面は、たたきしめられたようになり固い。このような敷石および固い床面をはがすと住居の掘り方が検出された。^{注1)}

(柱穴) 合計6個のピットが確認されている。この中でP₃~P₅は大きさ・深さ等まとまりがある他、これらを線で結ぶと一辺110cmの正三角形に近い形となるので主柱穴(掘り方)^{注2)}の可能性が強い。P₁~P₂・P₆のピットは大きさ・深さが一定せず、柱穴とは考えられない。

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
床面からの深さ	17cm	10cm	59cm	60cm	50cm	13cm
堆積土	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 シルト	極暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	?



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉埋設	深鉢B	羽・底部	胴部: Lr 繩文 脇下端~底部: 無文	3住-Po. 2	—

第11図 第3号住居跡出土土器(2)

(周溝)不明。検出できなかった。

(炉)住居敷石の南側に位置し、長軸方向は北一南である。この炉は土器埋設石囲部・敷石石組部・石組部(石組は開口)の三部分から構成されている土器埋設石組複式炉である。大きさは長軸 160cm、短軸 90cm。埋設土器は三重になっている。土器内部から木炭・焼土は検出されなかつたが、周囲はかなり焼けて熱変化をおこしている。敷石石組部・石組部の堆積土はいずれも木炭、焼土を含まない。しかし、敷石石組部の奥壁と側壁の上部は赤変し、かなり火熱を受けたものと思われる。この炉を立ち割ると掘り方が検出された。

(その他の施設)住居敷石の北端に近い部分で、敷石下に三個体分の土器(2点は底部で1点は胴部片)^{注3)}が重なって発見された。土器内部の土は極暗褐色の細砂質シルトで木炭・焼土等の混入はない。

(遺構の年代決定)炉埋設土器および住居掘り方出土土器が住居構築時の年代を示す。

注1) 床面の敷石は、炉の土器埋設石囲部を中心としてその前面にみられ、その形状は不整橢円状である。

注2) 柱穴は炉長軸の延長線を対称軸として3個配されている。

注3) この埋設土器は炉長軸の延長線上に位置している。

第5号住居跡

(遺構の確認)遺跡北端の平坦面、調査区の BG-74 区付近で明褐色シルト質砂層の地山に黒褐色を呈するシルト層の分布を確認した。

(重複・増改築)なし。

(平面形・方向)西側壁が攪乱を受けているが、残りの壁から円または橢円と推定される。

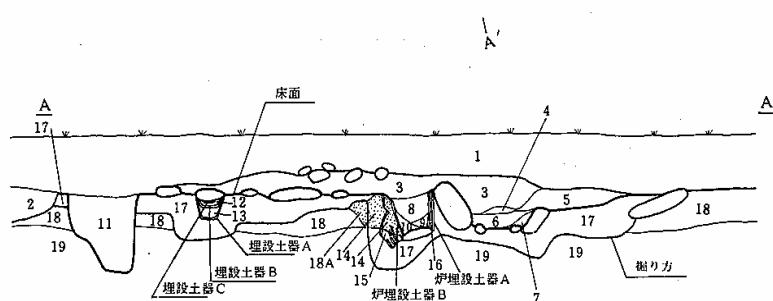
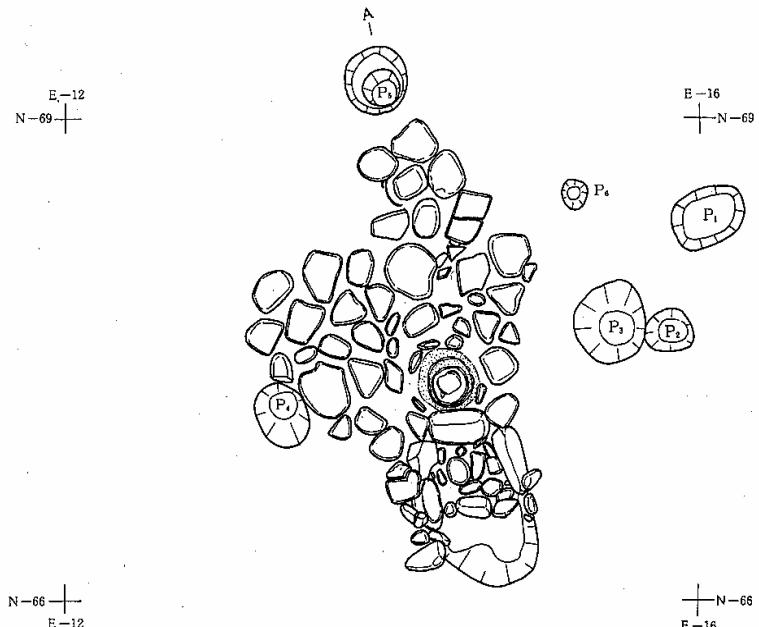
(堆積土)基本的には黒褐色シルト層と暗褐色シルト層の2層である。

(壁の状況)東半分の壁(明褐色シルト層)は検出することができたが炉の南東では攪乱を受け、炉の北西側では地山がやや北方向に傾斜しているため不明である。残存している壁は炉の東側が最も高くて約 11cm ある。西方向に行くにしたがって低くなる。

(床面)住居掘り方に埋めた褐色を呈するシルト質砂層を固め、平坦な川原石を炉の周囲に部分的に敷き床面^{注1)}としている。炉土器埋設石囲部の周囲は特に固い。壁の方向に近づくに従つて柔らかくなり面としてとらえにくくなる。

(柱穴)住居内のピットは合計 8 個検出された。 $P_5 \cdot P_6 \cdot P_3 \cdot P_4$ はそれぞれ炉を挟みほぼ

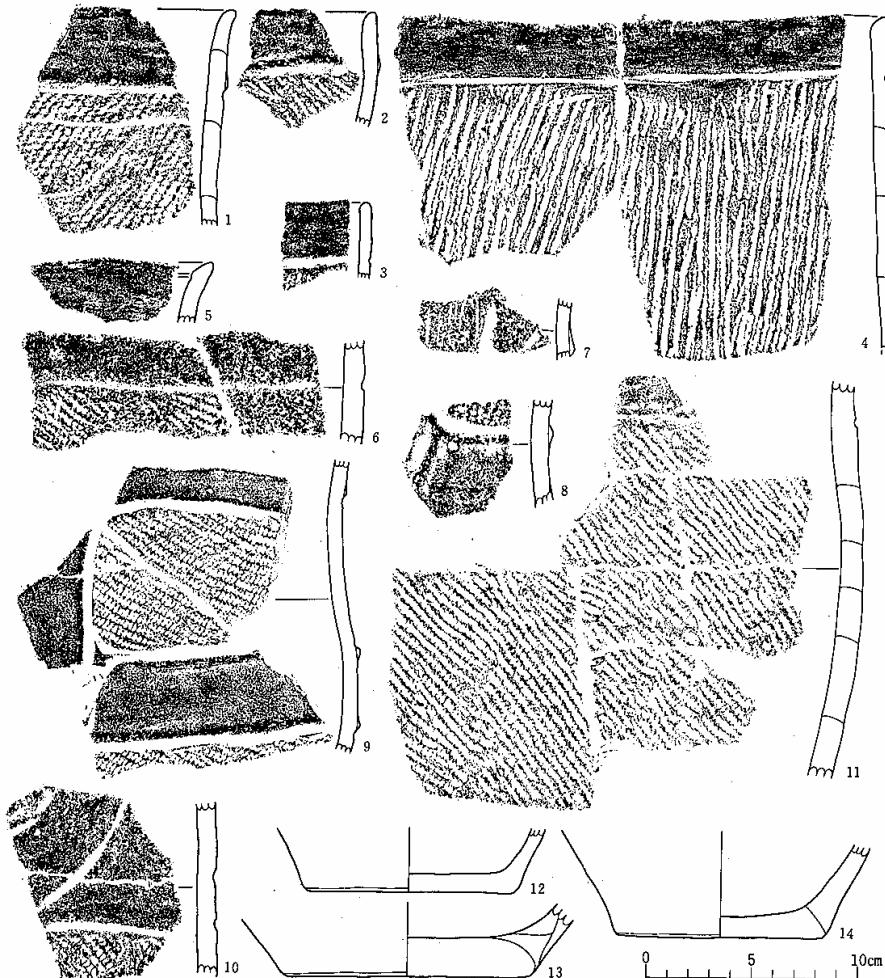
Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7
床面からの深さ	60.5cm	27.0cm	58.5cm	68.0cm	36.0cm	15.0cm	35.0cm
堆 積 土	黒褐色土	暗褐色土	暗褐色土	暗褐色土	暗褐色土	褐 色 土	暗褐色土



- | | | |
|--------------------------|------------------------------|-------------------|
| 1:暗褐色 シルト ボサボサしている | 12:極暗褐色 細砂質シルト 特に混入物なし | ※1~2:表土および擾乱層 |
| 2:黒褐色 細砂質シルト 大巨礫を含み間隔大きい | 13:赤みがかった極暗褐色 細砂質シルト 特に混入物なし | 3~11:住居跡の堆積土 |
| 3:黒褐色 シルト | 14:橙色がかった暗褐色 砂質シルト 焼けている | 12~13:埋立(約)土器内部の土 |
| 4:暗褐色 シルト 5:明るい暗褐色 シルト | 15:黑褐色 シルト | 14~17:住居掘り方埋土 |
| 6:黒褐色 シルト | 16:赤みがかった黒褐色 細砂質シルト 僅かに焼けている | 18~19:地山 |
| 7:赤みがかった黒褐色 シルト | 17:暗褐色 砂質シルト | |
| 8:明るい黒褐色 シルト | 18:褐色 粗砂質シルト 細礫を含む | |
| 9:暗褐色 シルト | 18A:暗褐色 粗砂質シルト 18の焼けたもの | |
| 10:暗い黒褐色 シルト | 19:暗黄褐色 砂礫(粗砂礫)を中心として中大礫を含む | |
| 11:褐黑色、黒褐色 | | |

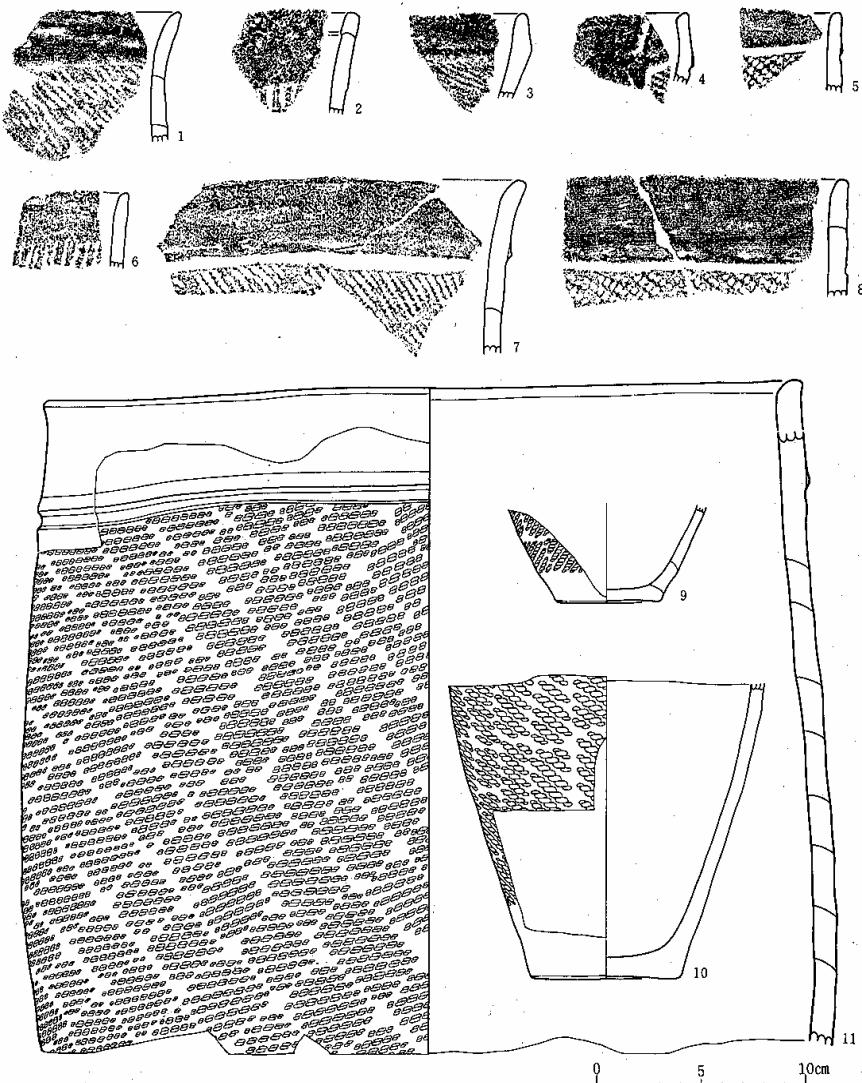
A horizontal number line starting at 0 and ending at 2π . There are 8 tick marks labeled $\frac{\pi}{4}$ apart, corresponding to values $0, \frac{\pi}{4}, \frac{\pi}{2}, \frac{3\pi}{4}, \pi, \frac{5\pi}{4}, \frac{7\pi}{4},$ and 2π .

第12図 第4号住居跡



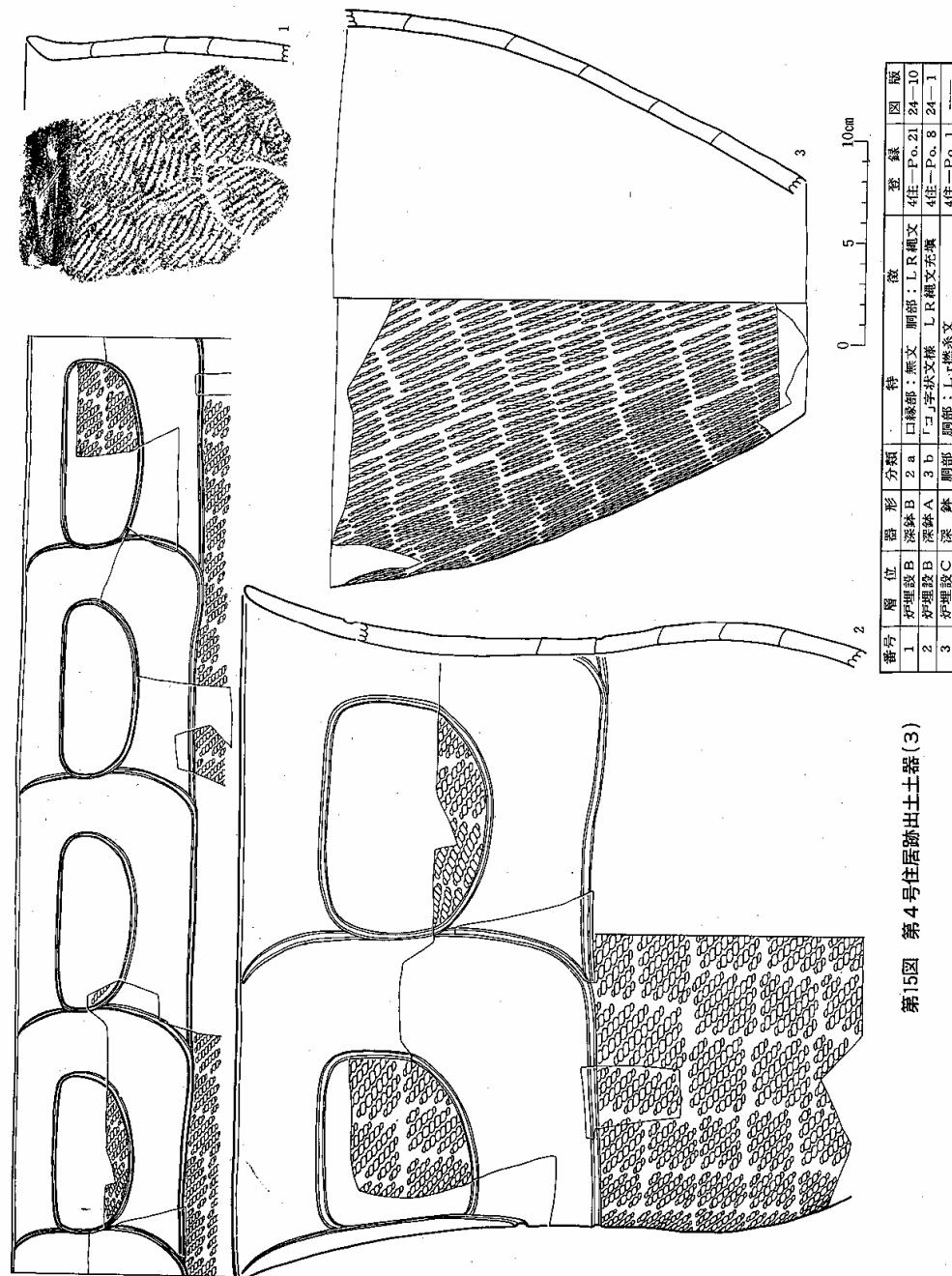
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土	深鉢B	1 a	頸部：隆沈線 脊部：R L R 繩文	4住-Po. 13	24-9
2	埋土 2層	深鉢B	1 b	頸部：隆綫 脊部：L R 繩文	4住-Po. 14	—
3	埋 土	深鉢B	1 c	頸部：沈綫 脊部：R L 繩文？	4住-Po. 16	—
4	埋 土	深鉢B	1 c	頸部：沈綫 脊部：R&擦系文	4住-Po. 19	24-13
5	埋 土	深 鉢	—	口綫部：無文	4住-Po. 24	—
6	埋土 2層	深鉢A	頸部	「S」字状文様 L R 繩文	4住-Po. 32	—
7	埋土 2層	深鉢A	頸部	「S」字状文様 柳目状条線文充填	4住-Po. 30	—
8	埋土 2層	深鉢A	頸部	「S」字状文様 R L R 繩文充填	4住-Po. 31	24-4
9	埋土 2層	深鉢A	3	変形「S」字状文様 L R 繩文充填	4住-Po. 27	24-5
10	埋土 2層	深鉢A	3	変形「S」字状文様 L R 繩文	4住-Po. 28	24-6
11	埋土 2層	深鉢B	1 c	頸部：沈綫 脊部：L R 繩文	4住-Po. 33	—
12	埋土 2層	不 明	底部	脣部下端～底部：無文	4住-Po. 5	—
13	埋土 2層	不 明	底部	脣部下端～底部：無文	4住-Po. 6	—
14	埋土 2層	不 明	底部	脣部下端～底部：無文	4住-Po. 4	—

第13図 第4号住居跡出土土器(1)

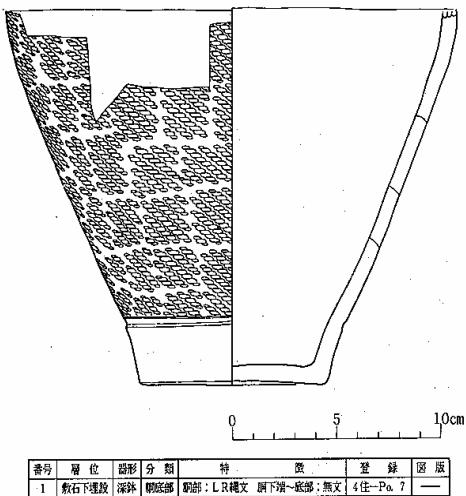


番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	床面	深鉢B	2 a	口縁部：無文 脊部：L R 細文	4住-Po. 22	—
2	床面	深鉢B	2 a	口縁部：無文 脊部：条線文？	4住-Po. 18	24-15
3	炉石組	深鉢B	2 a	口縁部：無文 脊部：L R 細文	4住-Po. 11	24-14
4	炉石組	深鉢A	3 a?	玉抱文様？ L R 細文充填	4住-Po. 10	24-3
5	炉石組	深鉢B	1 c	頸部：沈線 脊部：L R 細文	4住-Po. 17	24-12
6	炉石組	深鉢B	2 a	口縁部：無文 脊部：L R 摺糸文	4住-Po. 23	24-11
7	炉石組	深鉢B	1 a	頸部：隆沈線 脊部：L R 細文	4住-Po. 12	24-8
8	炉	深鉢B	1 c	頸部：沈線 脊部：L R 細文	4住-Po. 15	24-7
9	炉石組	深鉢	底部	喇叭下部：R L 細文 脊部下端～底部：無文	4住-Po. 3	—
10	炉	深鉢	脣底部	脣部：L R 細文 脊部下端～底部：無文	4住-Po. 2	—
11	炉埋設A	深鉢B	1 a	頸部：隆沈線 脊部：L R L 細文	4住-Po. 9	24-2

第14図 第4号住居跡出土土器(2)



第15図 第4号住居跡出土土器(3)



第16図 第4号住居跡出土土器(4)

200cm、短径約100cmの楕円形のピットを掘り込み底部欠損の土器を埋め、敷石石組部・石組部の順に作成している。埋設土器内からは底面近くから木炭粒と共に骨片が出土している。また敷石石組部の底部に凹石1個と少量の木炭が存在した。敷石石組部に使用されている石はほとんどが火熱を浴びもろくなっているが埋設土器近くでその度合いが激しい。埋設土器の周囲の土も熱のため赤変している。^{注2)} 炉の南側埋設土器より約10cm程離れて深鉢形土器が底部を南にして横位の状態で出土した。^{注3)} 土器内には褐色を呈するシルトの焼けたものが多量に存在し、その周囲は固い焼土でおおわれている。この土器の機能は不明である。

(遺構の年代決定) 炉の埋設土器、敷石下の横位土器、及び炉掘り方出土土器が最重要資料である。

注1) 床面敷石は、炉の土器埋設石囲部前面と敷石石組部の両側にみられる。前者は床面に埋置して敷かれていることが明確であるが、後者はやや不安定な状態で炉側壁の石の上にのっている。したがって、第5号住居跡における確実な床面敷石は炉土器埋設石囲部前面のものに限られ、その形状は不整楕円形で小規模なものである。

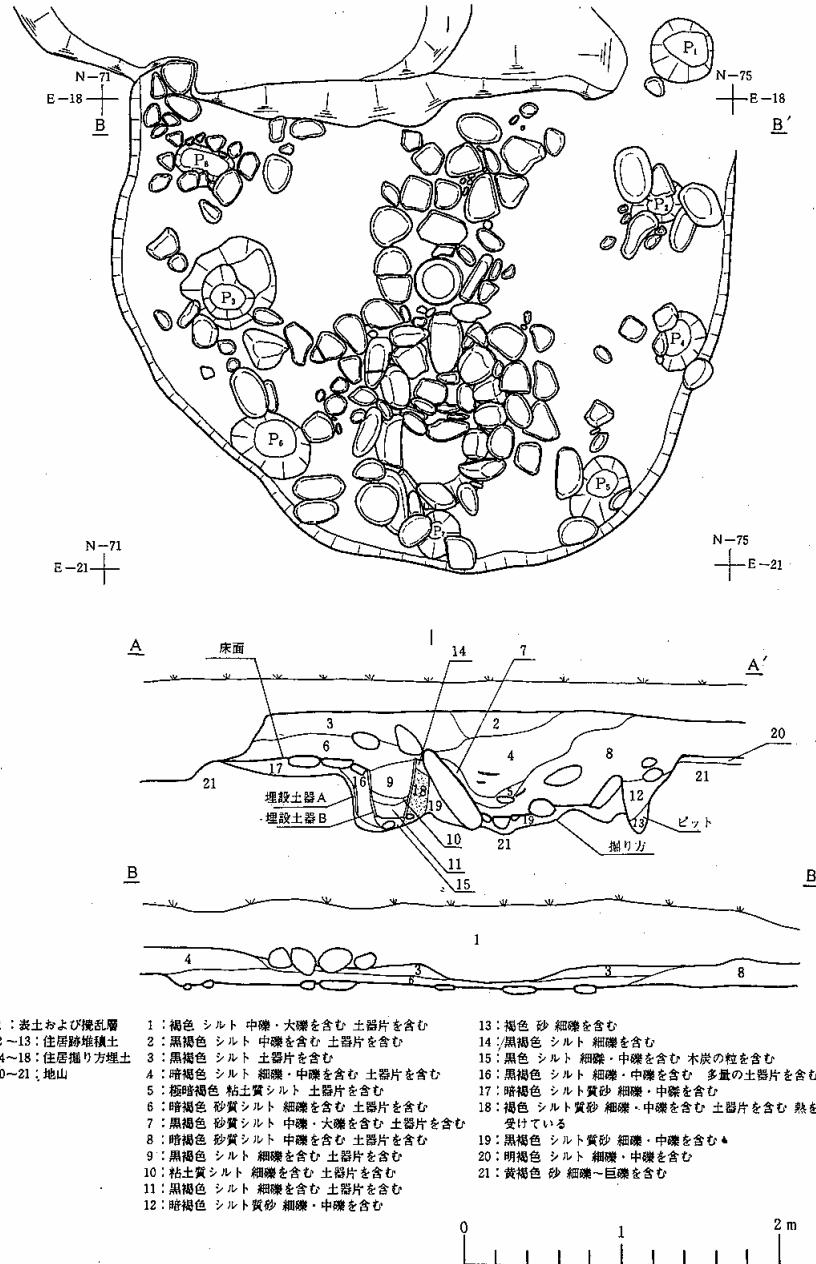
注2) 炉土器埋設石囲部の南側である。

注3) 横位埋設土器は焼けている。しかし、その上にのっている平石(炉石組と床面敷石の共用)には、この横位埋設土器と関連する火熱痕は観察されなかった。

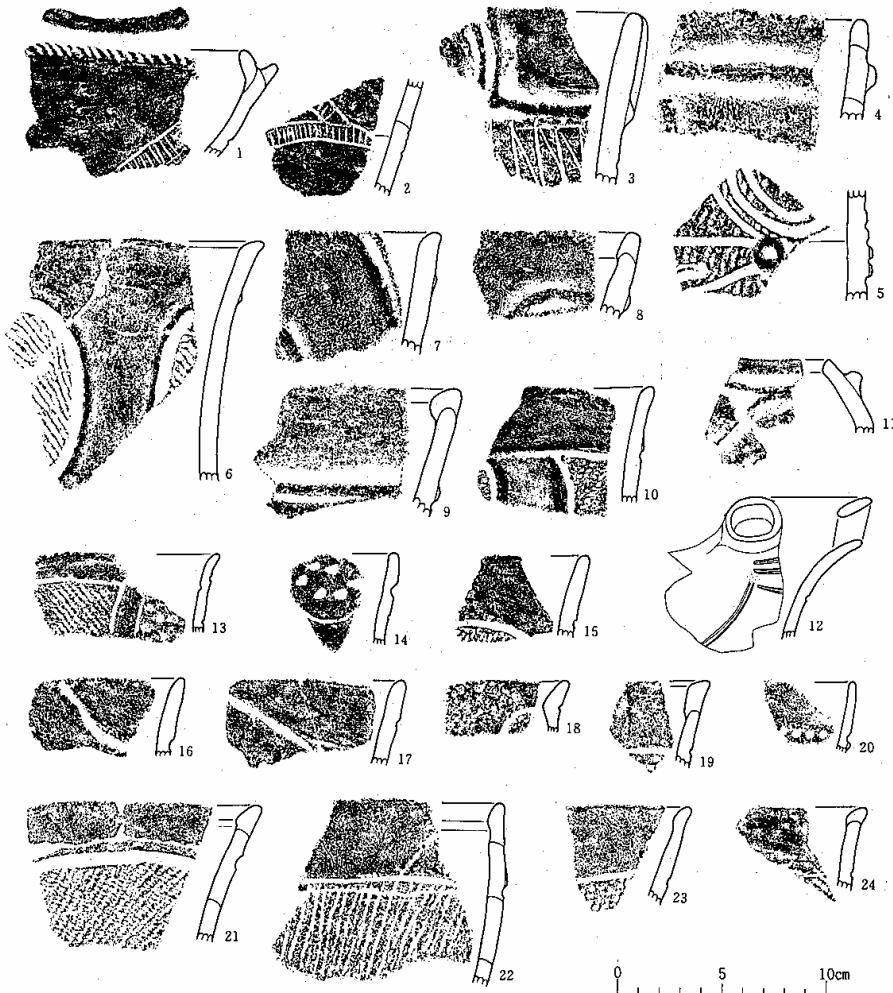
対称をなす。P₁～P₇は深さ・埋土等において近似し、約1m間隔で壁の内側にならんでいるので柱穴と推定される。P₈は地山の石の抜きとり痕と思われる。

(周溝) 検出されなかった。

(炉) 炉の長軸は東一西を指す。土器埋設石囲部が住居跡のほぼ中心に位置し、敷石石組部、および石組部は住居の壁近くまで伸びる。形態は底部を欠く土器を埋設した土器埋設石囲部・敷石石組部・および石組部(閉鎖)の三部分より構成される土器埋設石組複式炉である。大きさは長軸が約170cm、短軸が約110cmある。構築方法は長径約

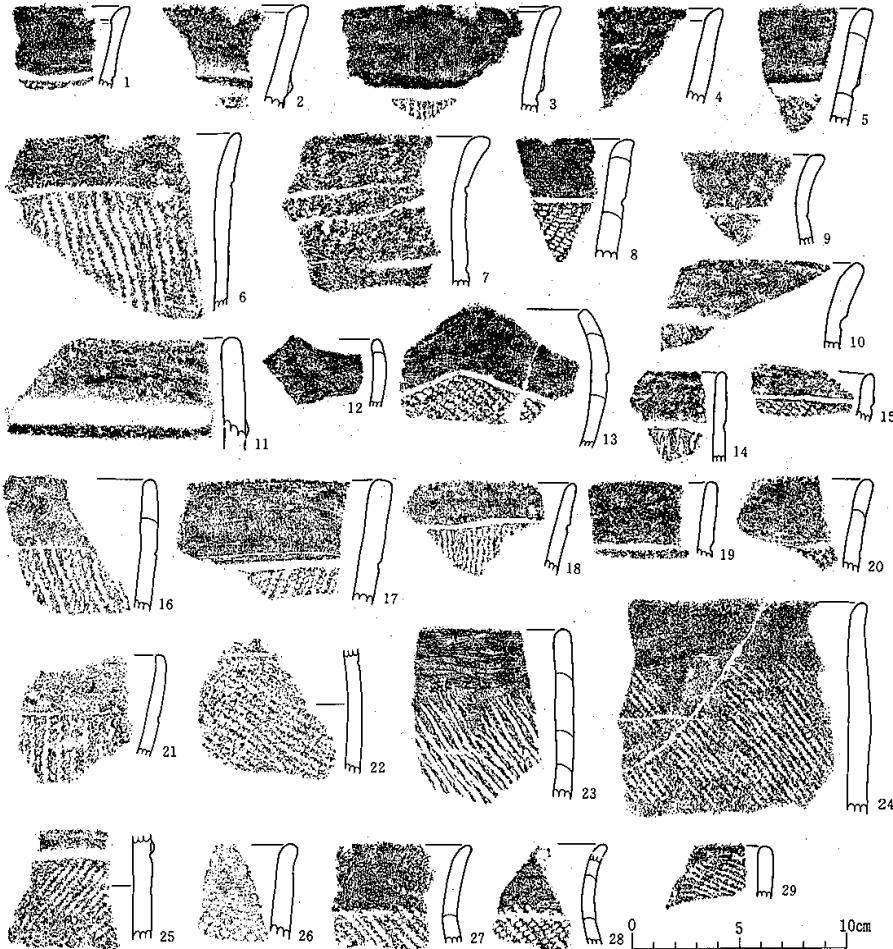


第17図 第5号住居跡



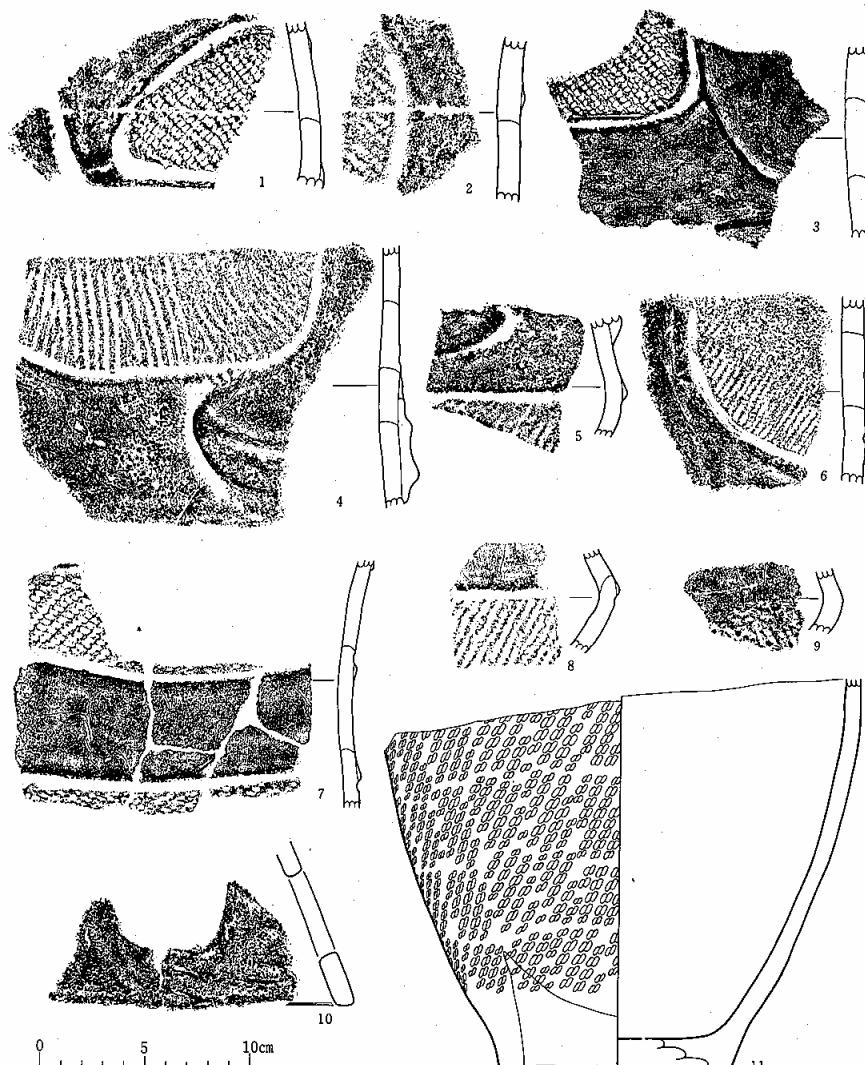
番号	層位	器形分類	特徴	登録図版	番号	層位	器形分類	特徴	登録図版			
1	埋土 3 層	浅 脚	II?	細部：刻目 細部：帶状文様	5住-Po. 47	25-1	13	埋 土	矮 脚 A 3.a	玉文化様 刻文文・LR横文充填	5住-Po. 37	25-12
2	埋土 3 層	浅 脚	II?	1.と同一個体	5住-Po. 61	25-2	14	埋土 3 層	深 脚 A 不明	沈線文内に斜交文充填	5住-Po. 24	25-13
3	埋土 3 層	深 脚 A	I	弧状溝文 刻格子状縦文	5住-Po. 68	25-3	15	埋土 3 層	深 脚 A 不明	「S」字状文様 L字系文？充填	5住-Po. 48	25-14
4	埋土 5 層	深 脚 A	I	彎曲溝文 不明斜系文	5住-Po. 43	25-4	16	埋土 3 層	深 脚 A 不明	「S」字状文様	5住-Po. 15	25-15
5	埋土 2 層	深 脚 B	II	第1次輪文 小輪 RL横文	5住-Po. 74	25-5	17	埋 土	深 脚 A 不明	「S」字状文様	5住-Po. 75	25-16
6	埋土 2.3 層	深 脚 A	不明	「S」字状文様 LR横文充填	5住-Po. 11	25-7	18	埋土 3 層	深 脚 A 不明	「S」字状文様	5住-Po. 57	—
7	埋土 2 层	深 脚 A	不明	「S」字状文様	5住-Po. 27	25-6	19	ビット 1	深脚 A?	不明 「S」字状文?	5住-Po. 42	—
8	埋土 2 层	深 脚 A	不明	「S」字状文様	5住-Po. 28	25-8	20	埋 土	深 脚 A 不明	陰線に沿って円形突起	5住-Po. 79	—
9	埋土 2 层	深 脚 B	1a?	細部：陽沈線 脊部：不明斜文	5住-Po. 29	25-9	21	埋土 2 层	深 脚 A 不明	「S」字状文様 RL横文充填	5住-Po. 63	25-17
10	埋土 3 层	深 脚 A	3.a	玉文化様 RL横文充填?	5住-Po. 12	25-10	22	埋土 2 层	深 脚 A 不明	「S」字状文様 L字系文充填	5住-Po. 62	25-18
11	埋土 2 层	浅 脚	—	「S」字状文様(縫文文)	5住-Po. 36	25-11	23	埋土 3 层	深 脚 A 不明	「S」字状文様 RLR横文充填	5住-Po. 49	25-19
12	埋土 3 层	注 口	—	沈線による凹凸文様	5住-Po. 25	—	24	埋土 3 层	深 脚 B 1.c	細部：沈線 槌目：LR横文	5住-Po. 20	—

第18図 第5号住居跡出土土器(1)



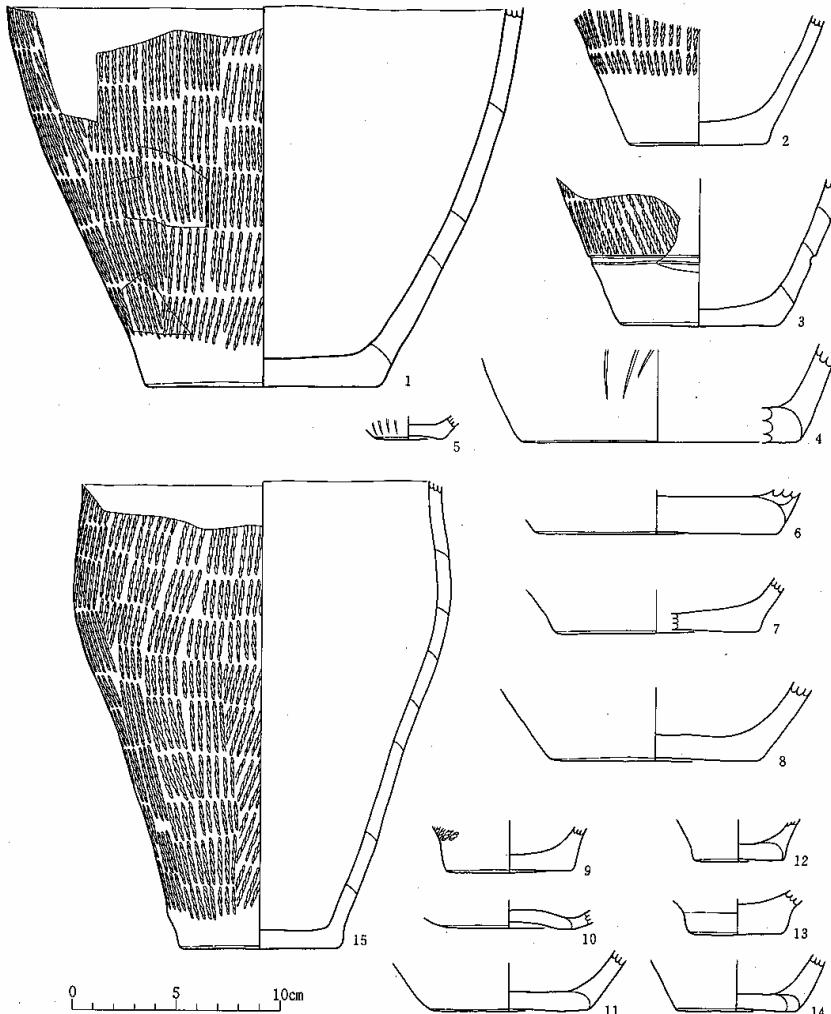
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土3層	深鉢A?	不明	S字状文様? RLR繩文?	5住-Pa.16	25-20	16	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: Lr、燃系文	5住-Pa.13	25-39
2	埋土2層	深鉢B	1.b	縁部: 亂線、肩部: 不明繩文	5住-Pa.31	25-21	17	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: RL繩文	5住-Pa.53	25-34
3	埋土2層	深鉢B	1.a	縁部: 亂線、肩部: Lr燃系文	5住-Pa.30	25-22	18	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: Lr燃系文	5住-Pa.49	25-38
4	埋土3層	深鉢	不明	口縁部: 無文	5住-Pa.18	—	19	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: 不明繩文	5住-Pa.50	—
5	埋土3層	深鉢B	1.a	縁部: 亂線、肩部: Lr繩文	5住-Pa.58	25-27	20	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: 不明繩文	5住-Pa.52	—
6	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: Lr燃系文	5住-Pa.51	25-24	21	埋土	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: Lr燃系文	5住-Pa.76	25-35
7	埋土3層	深鉢B	1.c	口縁・肩部: 飼面模様	5住-Pa.45	25-25	22	埋土3層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: Lr繩文	5住-Pa.14	25-36
8	埋土	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: RLR繩文?	5住-Pa.77	25-23	23	埋土?	深鉢B	2.a	口縁部: 無文、肩部: Lr燃系文	5住-Pa.32	25-40
9	埋土	深鉢B	1.c?	7と同一個体	5住-Pa.54	25-32	24	埋土3層	深鉢B	2.a	口縁部: 無文、肩部: LRL繩文	5住-Pa.55	25-41
10	ピット1	深鉢B	1.c?	縁部: 沈線、肩部: 不明	5住-Pa.41	25-25	25	床面	深鉢B	1.a	縁部: 亂沈線、肩部: RL繩文	5住-Pa.40	—
11	床面	深鉢B	1	口縁部: 無文	5住-Pa.9	25-28	26	埋土	深鉢B	2.a	口縁部: 無文、肩部: LRL繩文	5住-Pa.33	—
12	埋土2層	深鉢B	不明	口縁部: 無文	5住-Pa.35	25-29	27	埋土3層	深鉢B	2.a	口縁部: 無文、肩部: LRL繩文	5住-Pa.17	25-37
13	埋土2層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: LRL繩文	5住-Pa.64	25-30	28	埋土3層	深鉢B	2.a	27と同一個体	5住-Pa.19	—
14	埋土2層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: Lr燃系文	5住-Pa.67	—	29	埋土3層	深鉢B	2.b	口縁部: 無文、肩部: LRL繩文	5住-Pa.22	—
15	埋土2層	深鉢B	1.c	縁部: 沈線、肩部: RL繩文	5住-Pa.65	—	0						

第19図 第5号住居跡出土土器(2)



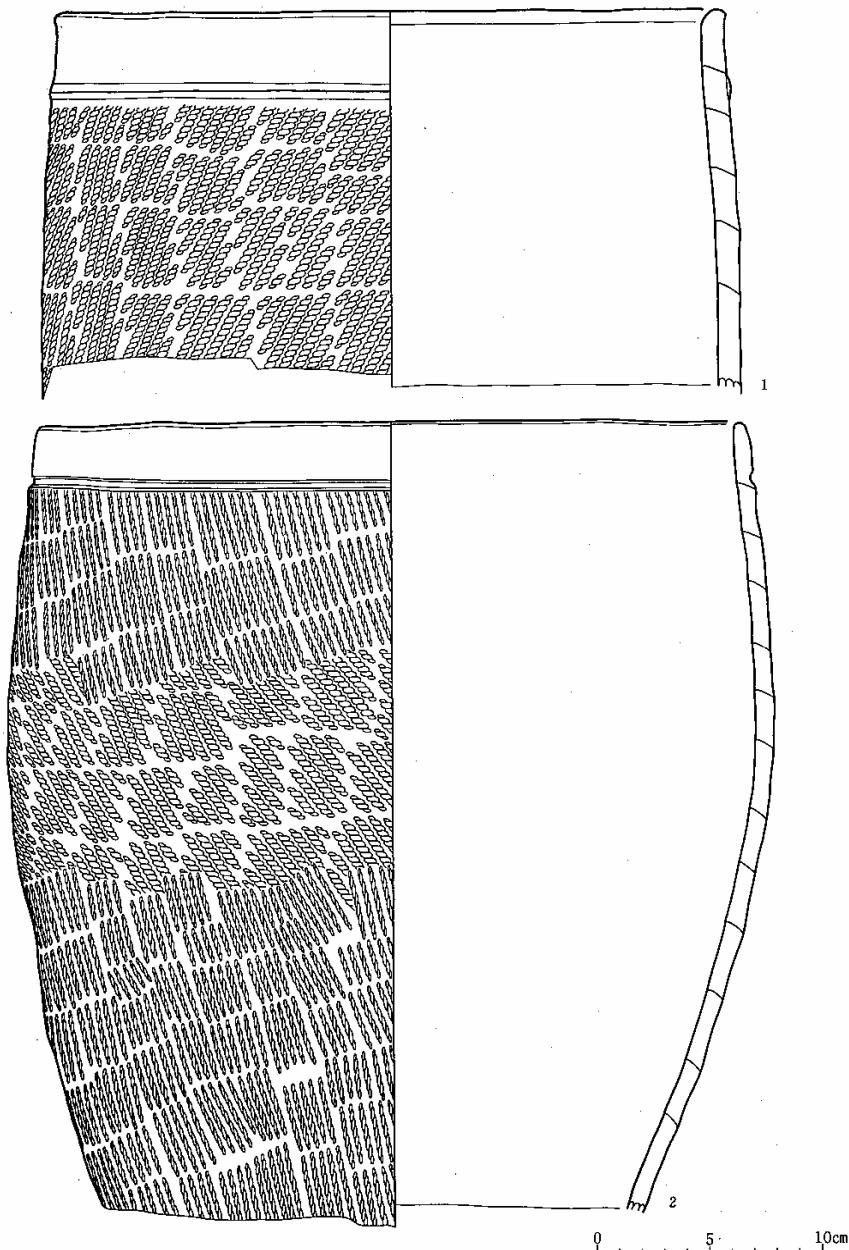
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土2層	深鉢A	2	玉抱連結「S」字状文様 L R 繩文充填	5住-Po. 71	25-42
2	埋土2層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 L R 文文充填	5住-Po. 75	25-43
3	埋土1層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 L R 繩文充填	5住-Po. 78	25-44
4	埋土2層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 L r 繩文充填	5住-Po. 70	25-45
5	埋土2層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様	5住-Po. 72	—
6	埋土3層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 R L 繩文充填	5住-Po. 58	25-46
7	埋土3層	深鉢A	3	変形「S」字状文様 R L 繩文充填	5住-Po. 44	25-47
8	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様	5住-Po. 59	—
9	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様	5住-Po. 60	—
10	埋土2層	器台	脚部	円窓有り・粗雑な研磨	5住-Po. 69	25-48
11	炉埋設南側	深鉢	胴底部	胸部：R L R 繩文 脊部下端～底部：無文	5住-Po. 2	—

第20図 第5号住居跡出土土器(3)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉埋設南側	深鉢	胴底部	胴部: R.6燃系文 脇部下端~底部: 無文	5住-Po. 1	—
2	埋土 2 層	深鉢	底 部	胴部: L.1燃系文 脇部下端~底部: 無文	5住-Po. 91	—
3	埋土 3 層	深鉢	底 部	胴部: L.1燃系文 脇部下端~底部: 無文	5住-Po. 7	—
4	床面	深鉢	底 部	胴部下端: 条線文 底部: 無文	5住-Po. 81	—
5	埋土 4 層	深鉢	底 部	胴部下端: 条線文 底部: 無文	5住-Po. 83	—
6	埋土 3 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 86	—
7	埋土 3 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 87	—
8	埋土 2 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 92	—
9	埋土 3 層	深鉢	底 部	胴部: R. L.纏文 脇部下端~底部: 無文	5住-Po. 84	—
10	埋土 3 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 90	—
11	埋土	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 94	—
12	埋土 3 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 85	—
13	埋土 5 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 82	—
14	埋土 2 層	深鉢	底 部	胴部下端~底部: 無文	5住-Po. 93	—
15	敷石下	深鉢B	不 明	胴部: R.6燃系文 脇部下端~底部: 無文	5住-Po. 3	—

第21図 第5号住居跡出土土器(4)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉埋設	深鉢 B	I b	頸部：亂線 創部：R L 級文	5住-Po. 4	26-2
2	炉埋設	深鉢 B	I c	頸部：沈線 創部：L R 級文→Lr 摺糸文	5住-Po. 6	26-1

第22図 第5号住居跡出土土器(5)

第8号住居跡

(遺構の確認) 遺構の北側、第5住居跡のやや南東に隣接した調査区B G-73 区付近に位置する。表土直下の暗褐色を呈するシルト層で炉跡が確認された。

(重複・増改築) 認められない。

(平面形・方向) 表土の攪乱が床面直上まで達し、また部分的にではあるが床面自体も攪乱されており平面形はわからない。

(堆積土) 耕作によりすべて攪乱されている。

(壁の状況) 不明。

(床面) 炉のまわりが部分的に残っている程度である。^{注1)} 住居掘り方に埋めた暗褐色の砂質シルトを固めている。

(柱穴) 炉を中心に7個のピットが存在する。この中でP₃・P₆は深さ・大きさ・位置の点でも同様な様相を呈する。特にP₆は地山の黄褐色砂礫層に喰い込んでいる5個の大礫の真中を掘り込んでいる。P₇は深さ・形態・堆積土の点でも他のピットと異なりをみせている。P₁・P₄・P₅は形態・規模の点ではほぼ同様の様相を呈する。

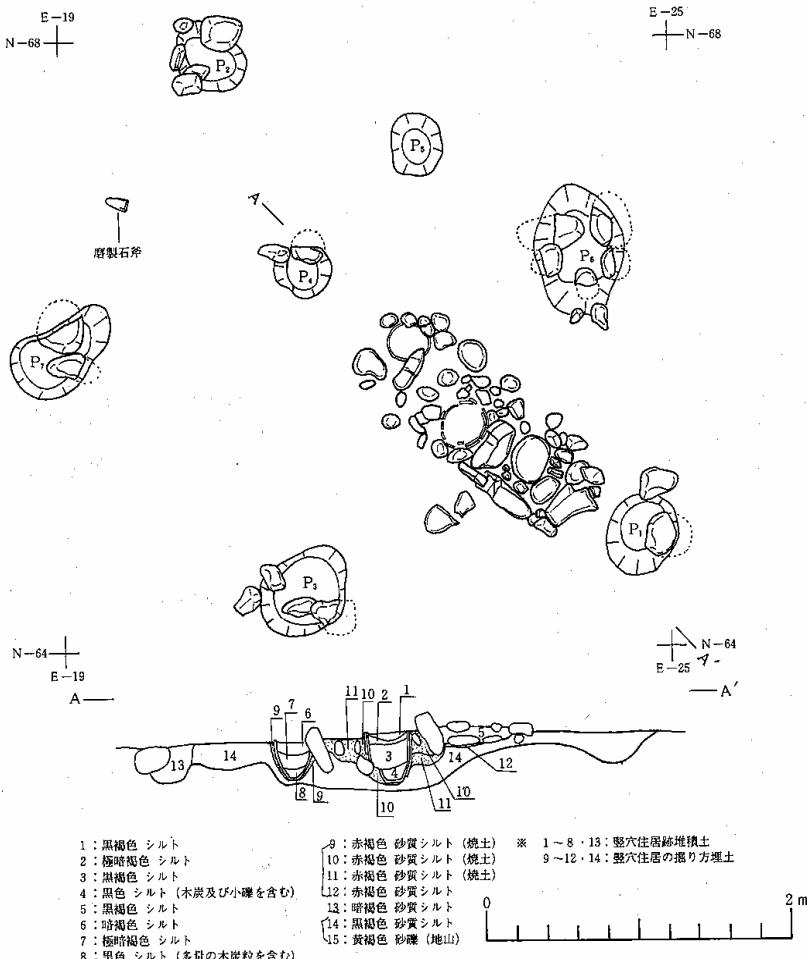
Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
床面からの深さ	36.0cm	31.0cm	41.0cm	34.0cm	25.0cm	39.0cm	12.0cm
堆積土	黒褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト

(周溝) 表土の攪乱のため不明。

(炉) この炉は土器埋設石囲部2組と、敷石石組部の三部分で構成される土器埋設石組複式炉である。炉の長軸は北西—南東を示す。敷石石組部に隣接した埋設土器は二重になっている。大きさは長軸約190cm・短軸約80cm、北西側の埋設土器内は三層の堆積土がありその底部近くに多量の木炭粒がシルトと混って存在した。埋設土器の周囲は火熱で赤褐色を呈している。また二重の埋設土器内は四層の堆積土がありその最下層に木炭が少量混る黒色のシルトが存在する。その周囲も火熱をうけ赤褐色を呈する。敷石石組部に使用されている石は火熱をうけ非常にもろくなっている。なお、この敷石石組部内には木炭・灰等は検出されなかった。炉を構築する段階で黄褐色砂礫層を約40cm程掘り下げ各々の土器を埋設している。

(その他の施設) 不明。

(遺構の年代決定) 炉の埋設土器および住居掘り方出土の土器が最重要資料である。この住居跡の炉は他の炉と異なり土器埋設石囲部が2組ある。これが構築時の形態なのか、それとも2つの炉が切りあったためのもののかはつきりわからなかった。切りあったものだとすれば西側の土器埋設石囲部は旧炉の残存物だということになる。

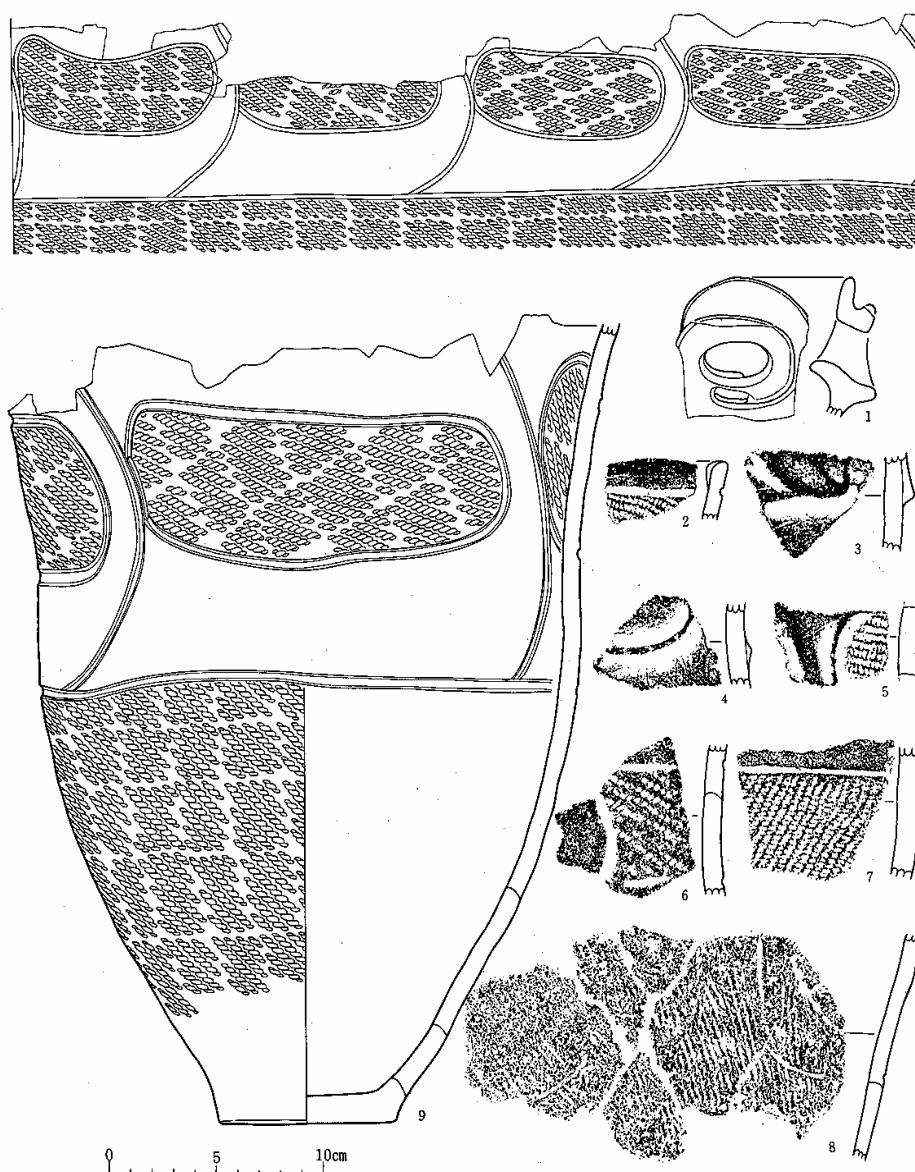


第23図 第8号住居跡

注 1) このため、床面敷石の有無については不明である。

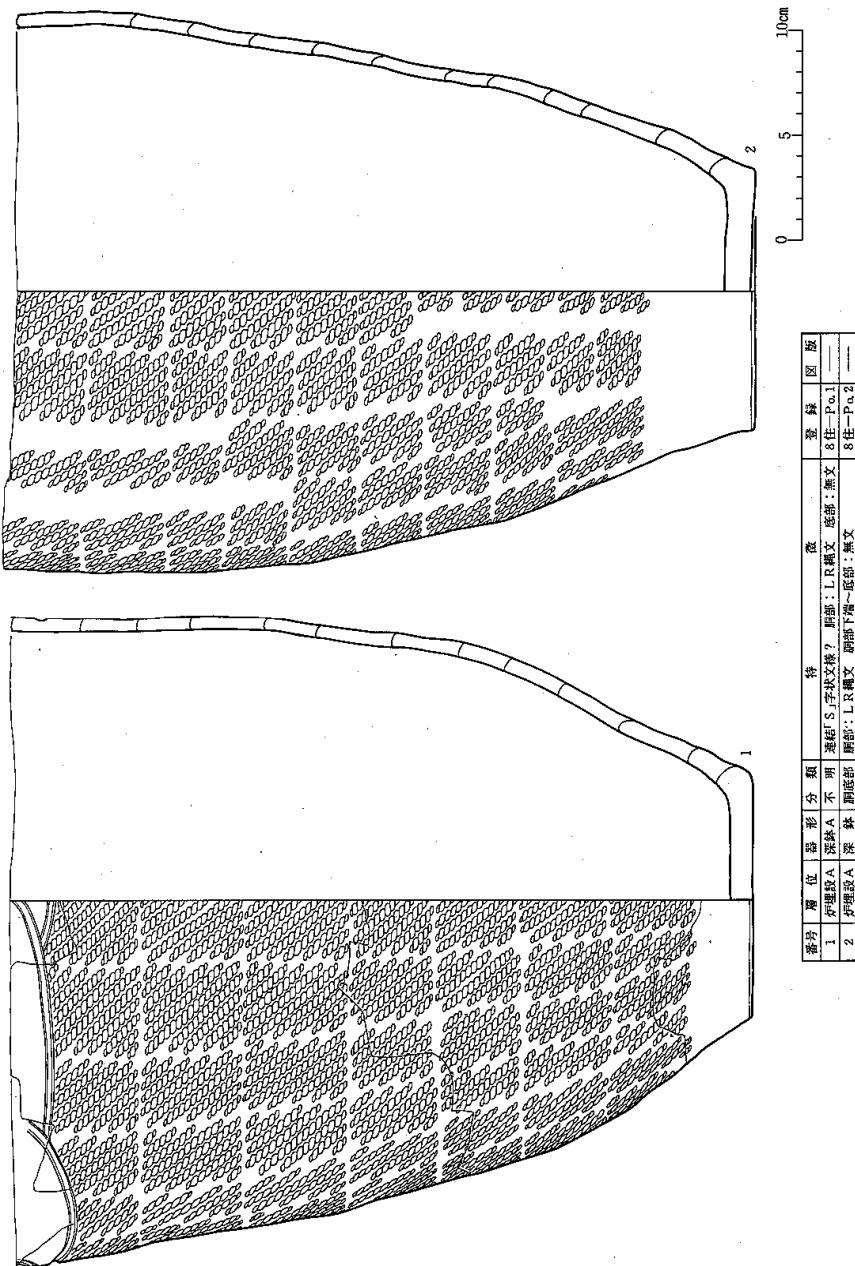
注 2) 柱穴はどのように組みあうか明確でないが、いずれも炉長軸の延長線を対称軸とする配置関係が認められる。

注 3) 二組の土器埋設石囲部は方向に僅かながらずれがあり、西側の土器埋設石囲部にも敷石石組部奥壁状の石があることから切り合いの可能性が強い。新・旧炉の切り合いは第16号住居跡で明確に確認され、この第8号住居跡の例もそれによく似ている。したがって、第8号住居跡の炉（新炉）は土器埋設石囲部・敷石石組部からなる土器埋設石組複式炉で、その大きさは長軸 130cm、短軸 60cm と考えられる。



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土 2層	不明	突起	滑車状の突起 円窓有り	8住-Po. 5	26-4
2	埋土 2層	深鉢 B	1 c	頸部：沈線 脊部：L R 繩文	8住-Po. 6	26-5
3	埋土 2層	深鉢 A	2	玉抱連結「S」字状文様	8住-Po. 7	26-6
4	ビット 5	深鉢 A	不明	「S」字状文様	8住-Po. 9	26-7
5	炉埋設日	深鉢 A	不明	「S」字状文様 L R 繩文充填	8住-Po. 8	26-8
6	埋土 2層	深鉢 A	3 b	「コ」字状文様 L R 繩文充填	8住-Po. 10	26-9
7	埋土 2層	深鉢 B	1 c	頸部：沈線 脊部：R L 繩文	8住-Po. 11	—
8	炉埋設	深鉢	不明	脇部：不明繩文	8住-Po. 48	—
9	炉埋設 B	深鉢 A	不明	連續「S」字状文様 L R 繩文充填	8住-Po. 3	26-3

第24図 第8号住居跡出土土器(1)



第25圖 第8号住居跡出土土器(2)

第9号住居跡

(遺構の確認) B F - 70区周辺で表土を約40cm排除すると黄褐色の砂礫層(地山)に達する。この段階で炉跡およびピット群が検出された。

(重複・増改築)柱穴状ピットが多いこと、さらにそれらが二重の円を描くことから一度増築された可能性がある。

(平面形・方向)不明。

(堆積土)ピットや炉跡内部の土を除いていずれも攪乱を受けている。

(壁の状況)不明。攪乱のため検出できなかった。

(床面)遺構底面は凹凸のはげしい暗黄褐色の砂礫層(地山)である。この凹凸は後世の攪乱によるもので、構築および生活時の床面は失われたものと思われる。

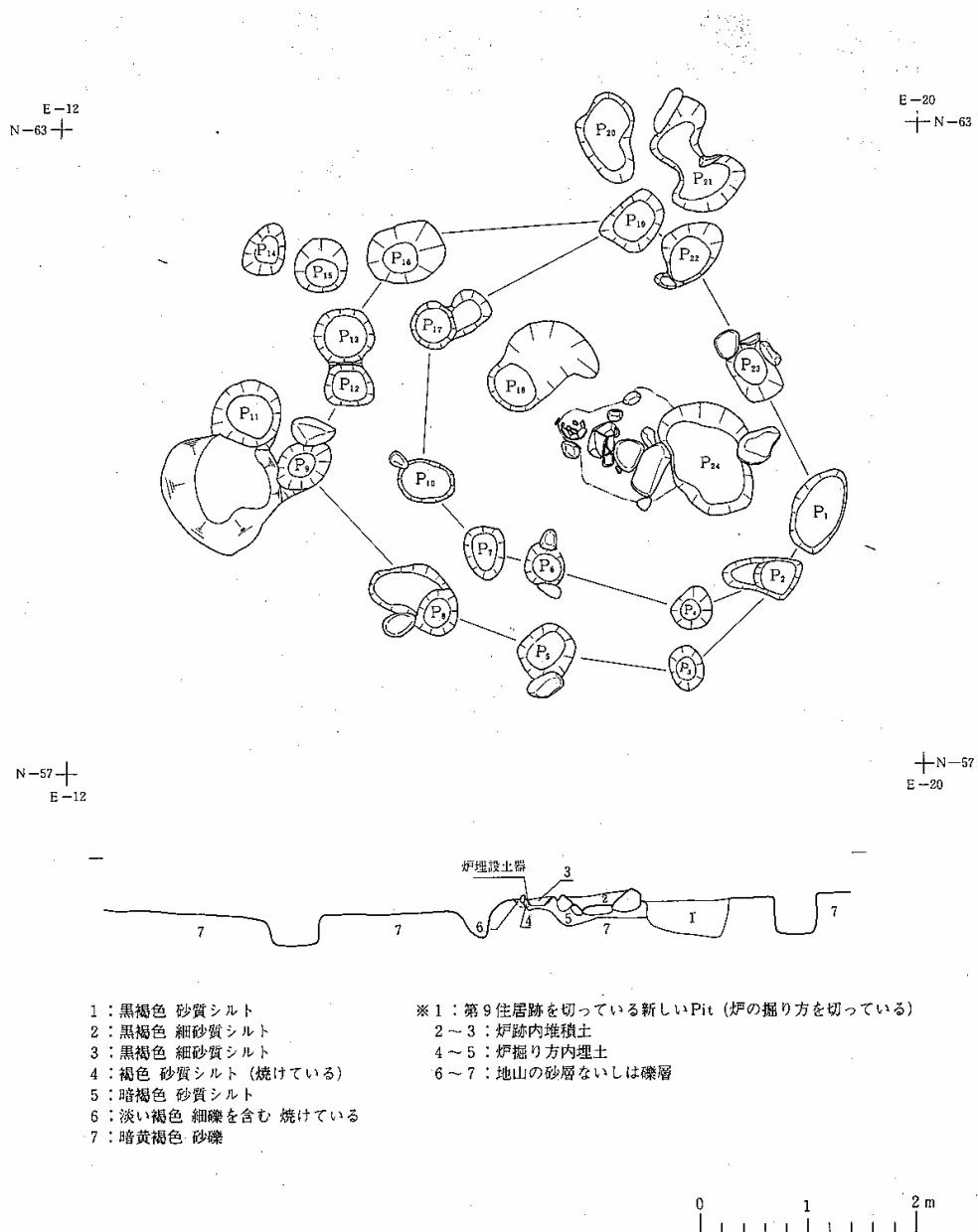
(柱穴)炉を中心として、周囲に計24個のピットがある。そのうちP₂₄は炉の掘り方を切っているため、住居より新しいと考えられる。他のピットは柱穴か否か判断するのは難しい。しかし、組合せという点で考慮すると次のように二重の円を描く。P₁・P₂・P₄・P₆・P₇・P₁₀・P₁₇・P₁₉・P₂₂・P₂₃(内円)。P₁・P₂・P₃・P₅・P₈・P₉・P₁₂・P₁₃・P₁₆・P₁₉・P₂₂・P₂₃(外円)。これらのピットは組合せという点からすれば柱穴(掘り方)^{注1)}の可能性が強い。

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
床面からの深さ	24cm	29cm	31cm	17cm	26cm	29cm	32cm
堆 積 土	極暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	極褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 ?
P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
33cm	37cm	26cm	?	33cm	28cm	27cm	45cm
暗褐色 ?	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 細砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 細砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト
P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃
34cm	22cm	21cm	38cm	39cm	32cm	37cm	36cm
極暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	極暗褐色 細砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	極暗褐色 細砂質シルト	暗褐色 細砂質シルト

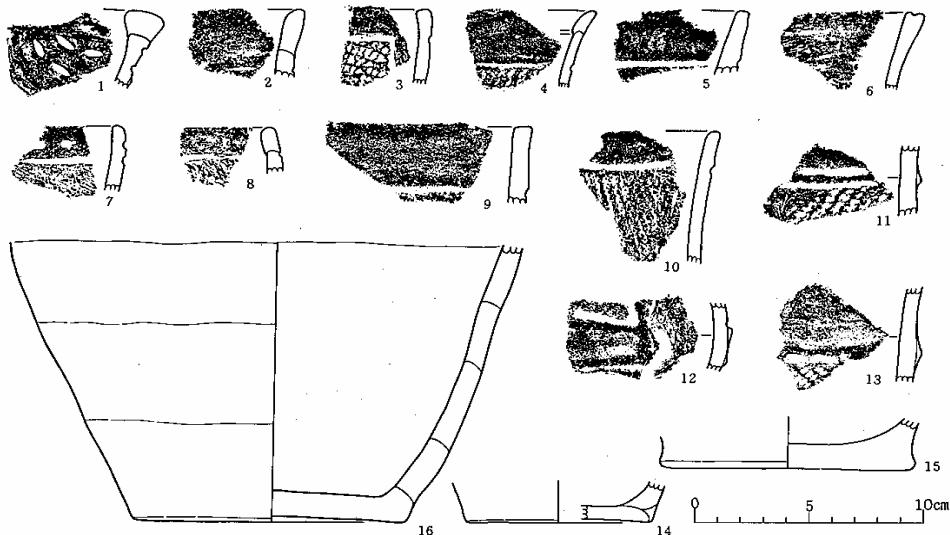
(周溝)不明。検出できなかった。

(炉)住居中央(柱穴状ピットによる)から東側にかけて位置している。長軸方向は北西—南東。この炉は土器埋設部・長方形敷石石組部の二つの部分から構成される長方形石組外土器埋設炉^{注2)}で、大きさは長軸110cm、短軸60cmである。埋設土器および石組内部から木炭、焼土等は検出されなかった。しかし、土器および石は焼けてボロボロに崩れている部分もある。

(遺構の年代決定)炉埋設土器が住居構築時の年代を推定する最重要資料である。



第26図 第9号住居跡



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1 埋 土	深鉢 不明			刺突文	9住-Po.14	26-10	9 埋土 2層	深鉢B	1 c	頸部:沈縫	9住-Po. 8	—	
2 埋 土	深鉢B 1 c ?			頸部:沈縫	9住-Po.10	26-11	10 埋 土 深鉢B	1 c	頸部:沈縫	9住-Po.12	26-21		
3 ピット18	深鉢A 不 明	T字状文焼?	L.R燒文充填	9住-Po. 4	26-15	11 埋 土 深鉢B 1 b	頸部:沈縫 頸部:R.L.R燒文	9住-Po.13	26-18				
4 ピット22	深鉢B 1 c	頸部:沈縫	L.R燒文	9住-Po. 5	26-13	12 ピット22 深鉢A 2 or 3	王冠S字状文焼 R.L燒文充填	9住-Po. 7	26-20				
5 ピット5	深鉢B 1 c	頸部:沈縫	9住-Po. 2	26-12	13 埋土2層 深鉢B 1 b	頸部:沈縫 頸部:R.L.R燒文	9住-Po. 9	26-19					
6 ピット22	深 鉢 不 明	口唇部:無文 口唇部:L.R燒文	9住-Po. 5	26-14	14 ピット13 深 鉢	底 部 頸部下端~底部:無文	9住-Po.16	—					
7 埋 土	深鉢B 1 c	口唇部:無文 構部:L.R燒文	9住-Po.11	26-16	15 ピット13 深 鉢	底 部 頸部下端~底部:無文	9住-Po.15	—					
8 ピット5	深 B 1 c	頸部:沈縫 頸部:L.R燒文	9住-Po. 3	26-17	16 炉埋設 深 鉢	底 部 頸部下半~底部:無文	9住-Po. 1	—					

第27図 第9号住居跡出土土器

注1) この他にP₆・P₁₃・P₁₉の組み合わせも考えられる。しかし、いずれにしても炉長軸の延長線を対称軸とする配置関係が認められる。

注2) この住居跡は攪乱が著しく、炉跡の保存も良くない。敷石石組部の石も一部失なわれている。

このため、埋設土器の周囲が石で組まれていたか否かについては不明確である。したがって、長方形石組外土器埋設炉（土器埋設部・長方形敷石石組部）か、土器埋設石組複式炉（土器埋設石組部・敷石石組部）かについては不明である。また、床面敷石の有無についても不明である。

第10号住居跡

(遺構の確認)表土を約20cm掘り下げると地山の暗褐色シルト質砂層に達する。この時AT-69区西側に黒褐色土の落ち込みが検出された。住居跡の存在を推定し、第10住居跡とする。

(重複・増改築)東端(炉の部分)が第11b住居跡によって切られている。

(平面形・方向)不明。住居壁および床面の分布を検出できなかった。

(堆積土) 2枚の層位が認められる。上層は黒褐色砂質シルト層で中央部にのみ分布する。下層は暗褐色砂質シルト層で周縁部に分布し、地山との区別がむずかしい。その下は床面(敷石面)となる。

(壁の状況) 不明。くずれて住居跡内に流れこんだものと思われる。

(床面) 炉の北側には住居中央部を除き一面に平坦な石が敷きつめられている。石は縁のとれた河川成のものと角張った板状のものとがある。量的には前者が多い。また、大きな石と石の間には隙間を埋めるように小さな礫が詰められている。敷石のない部分、炉の東西と住居中央部の床面はやわらかい。^{注1)}

敷石をはがすと地山の暗黄褐色砂礫層まで掘り込まれた住居の掘り方が検出される。

(柱穴) 検出できなかった。P₁～P₅のピットはまとまりがない。

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
床面からの深さ	22cm	11cm	9 cm	5 cm	7 cm

(周溝) 不明。検出できなかった。

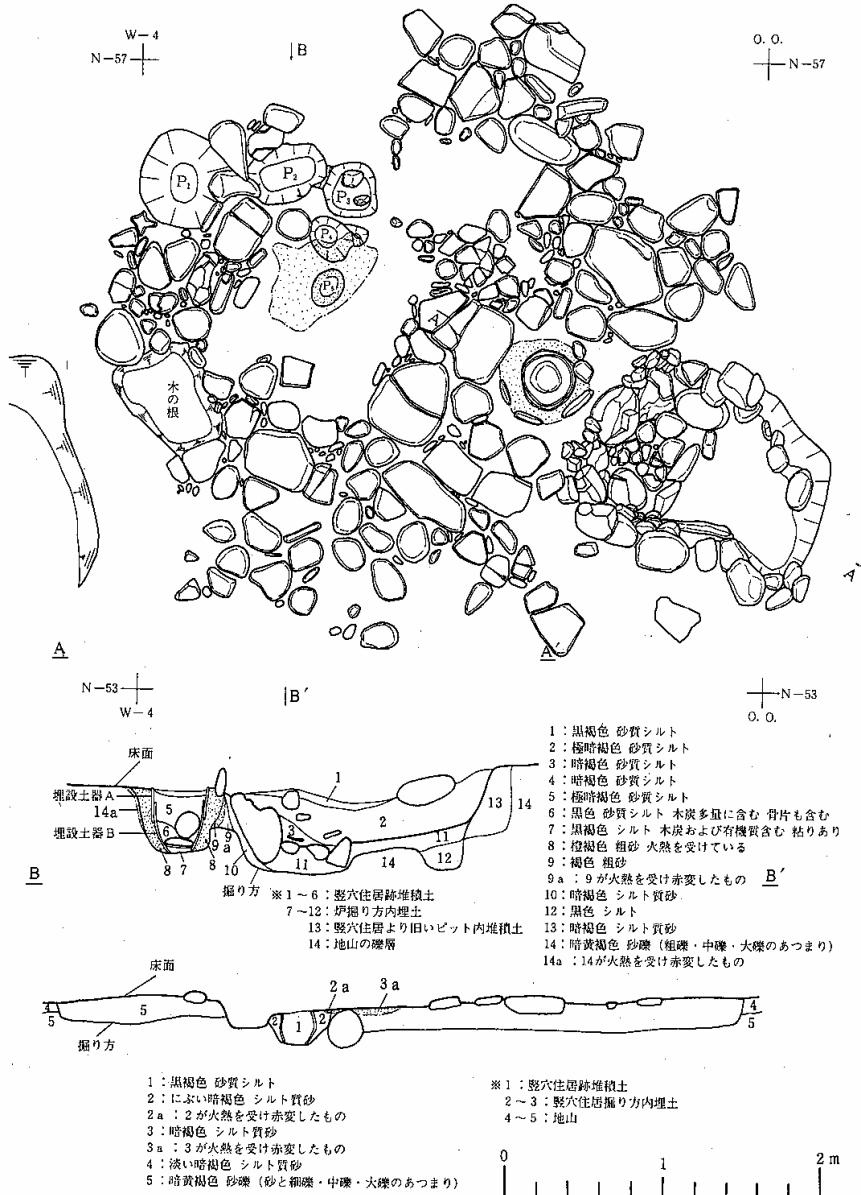
(炉) 住居敷石の南端にあり、長軸方向は北北西—南南東である。この炉は土器埋設石囲部・敷石石組部・石組部(開口)の三部分からなる土器埋設石組複式炉で、長軸245cm・短軸142cmの大きさを示す。土器埋設石囲部は二個体分の土器を使用し、底に平石を敷いている。埋設土器およびその周囲の土は赤褐色を呈し、強い火熱を受けたものと思われる。敷石石組部、石組部の堆積土はいずれも焼土、木炭を含まない。しかし、敷石石組部の側壁にあたる部分、特に土器埋設石囲部に接する奥壁の部分は石が焼けてボロボロになっている。石組部は火熱を受けた痕跡が認められない。炉を立ち割ると掘り方が検出された。

(その他の施設) 敷石のない住居中央北端に底部および口縁部を欠いた土器が埋設されている。^{注2)} 内部には黒褐色砂質シルトが入っていたが混入物は特がない。この埋設土器の掘り方は住居の掘り方を切っている。また、付近の床面が焼けており、それが埋設土器掘方にまでおよぶ。したがって、住居構築後土器を埋設し、その後床面で火がたかれたものと推定される。

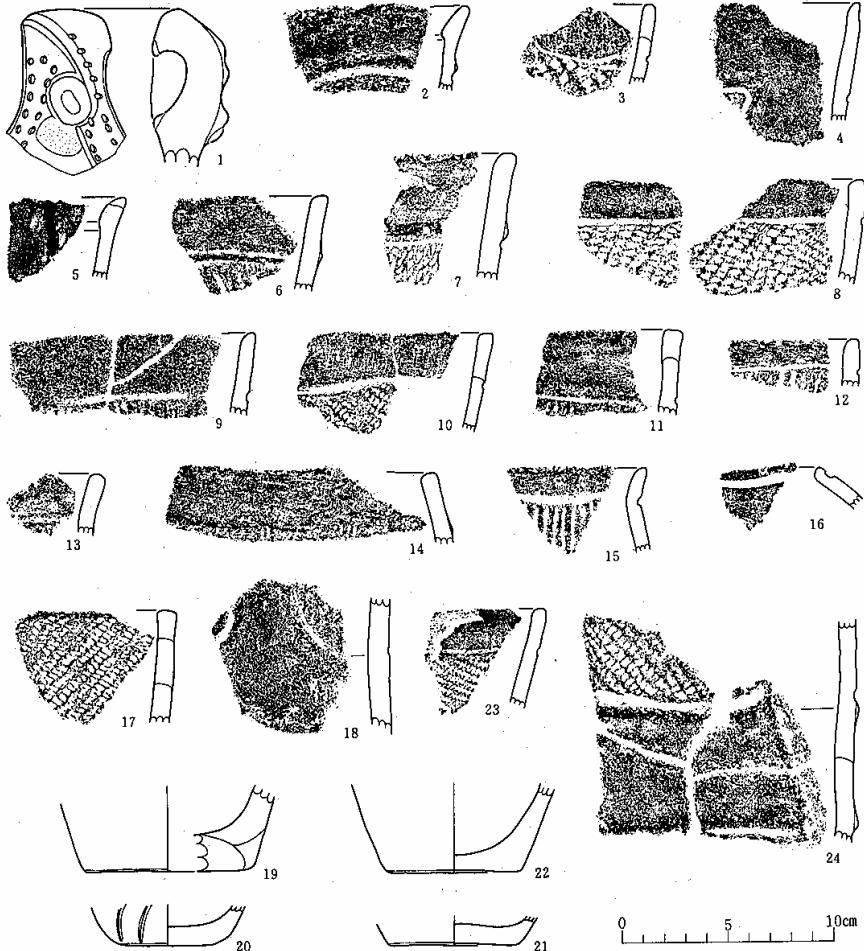
(遺構の年代決定) 炉埋設土器、住居掘り方出土土器が住居構築年代推定の資料となる。床面埋設土器は住居使用時の年代を示す。

注1) 床面敷石は広い範囲にみられ、炉敷石石組部の両側までおよんでいる。その形は隅丸方形状で対称軸は炉長軸およびその延長線と一致している。

注2) この埋設土器は炉長軸の延長線上に位置している。

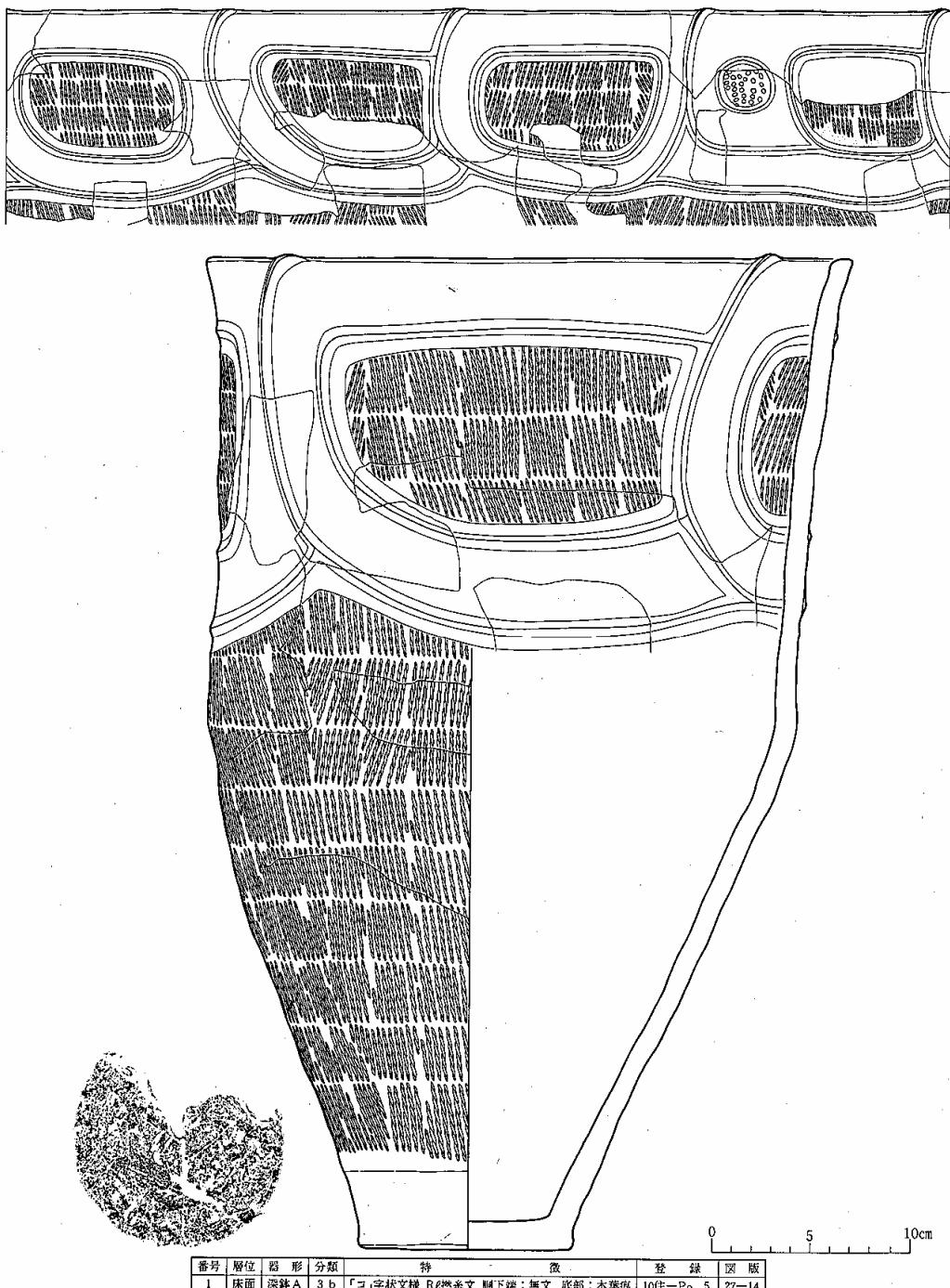


第28図 第10号住居跡

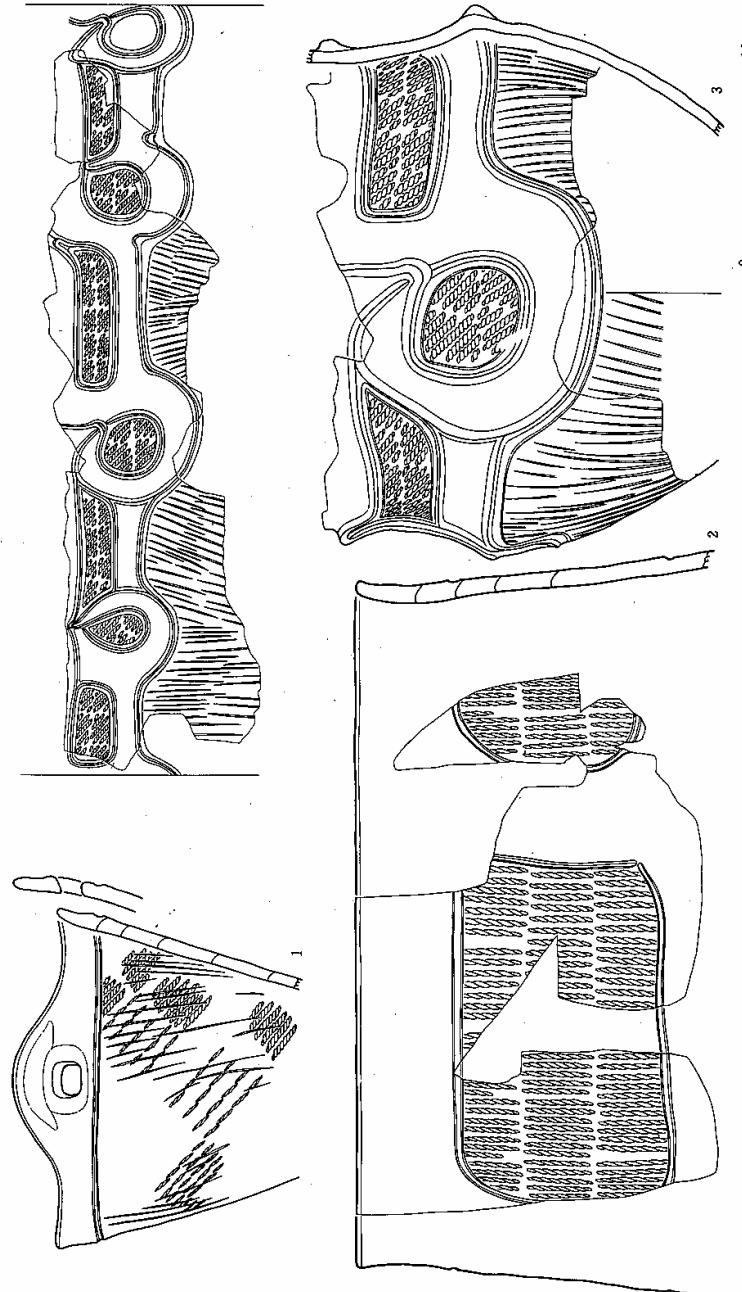


番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋 土 不 明	把手付	基盤に沿って斜め文	10住-Po.29 —	13	埋 土 深鉢 不 明
2	埋 土 深鉢 A 不 明	「S」字状文様	不明模文充填	10住-Po.14 27-1	14	埋 土 深鉢 不 明 燃系文?
3	埋 土 深 鉢 不 明	沈縫文	L.R縫文	10住-Po.27 27-2	15	埋土2層 深鉢 B 1 c
4	埋 土 深 鉢 不 明	沈縫文	不明模文充填	10住-Po.22 27-3	16	埋 土 深 鉢 —
5	埋 土 深鉢 A 不 明	「S」字状文様 (謬刻)?	無文	10住-Po.21 —	17	埋土2層 深鉢 B 2 b
6	埋 土 深鉢 B 1 a	底部: 深縫	周部: 不明燃系文?	10住-Po.15 27-4	18	埋 土 深鉢 A 3 a
7	埋 土 深鉢 B 1 a	底部: 深縫	周部: L.R燃系文	10住-Po.16 27-5	19	埋 土 深 鉢 底 部
8	埋 土 深鉢 B 1 c	底部: 沈縫	周部: R.L.R縫文→L.R縫文	10住-Po.17 27-6	20	埋 土 深 鉢 底 部
9	埋土2層 深鉢 B 1 c	底部: 沈縫	周部: R.R燃系文	10住-Po.9 —	21	埋 土 深 鉢 底 部
10	埋 土 深鉢 B 1 c	底部: 沈縫	周部: L.R縫文	10住-Po.19 27-10	22	床 面 深鉢 底 部
11	埋 土 深鉢 B 1 c	底部: 沈縫	周部: 不明模文	10住-Po.20 —	23	床 面 深鉢 B 1 c
12	埋土2層 深鉢 B 1 c	底部: 沈縫	周部: L.R燃系文	10住-Po.11 —	24	床 面 深鉢 A 3 彩形「S」字状文様 L.R縫文充填
						10住-Po.8 27-12

第29図 第10号住居跡出土土器(1)

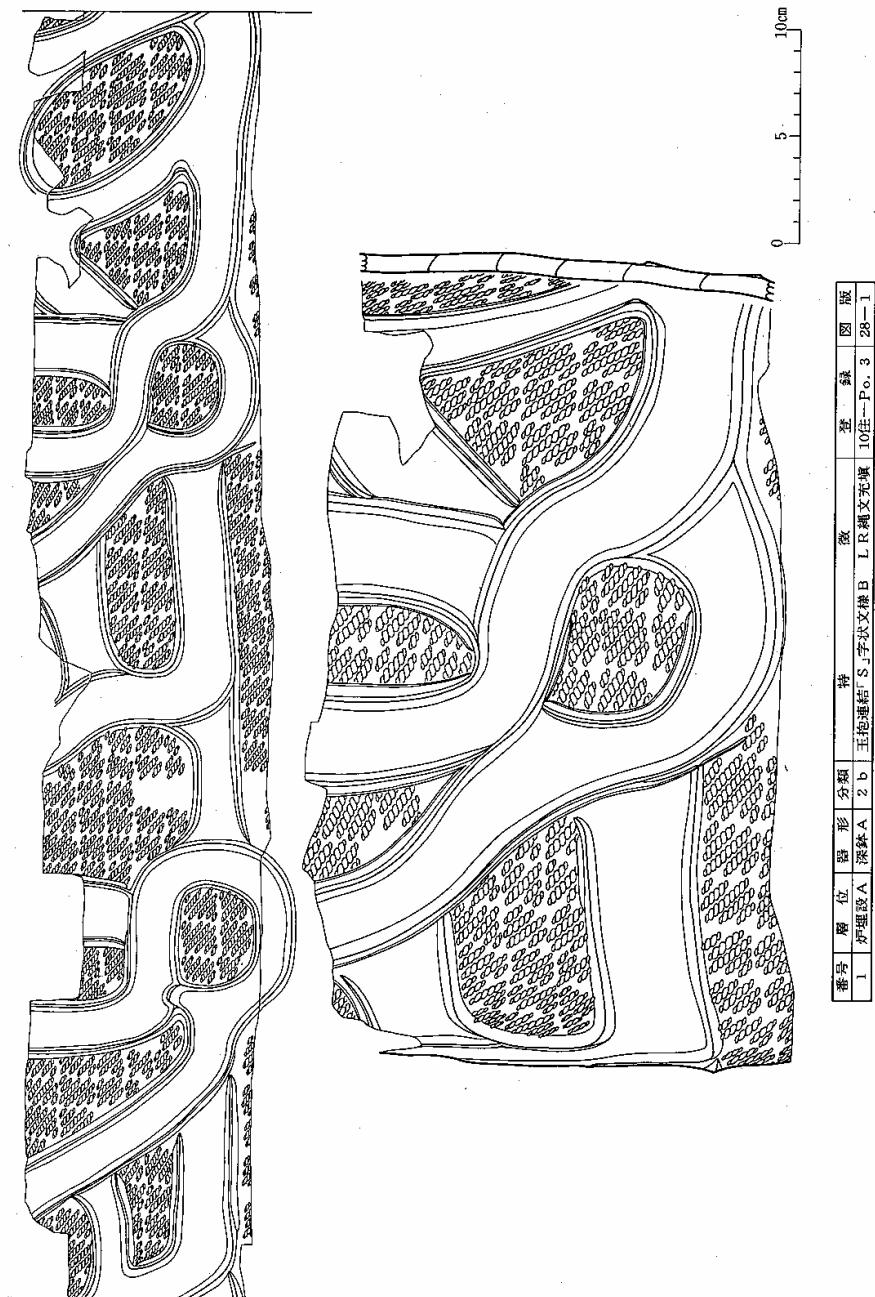


第30図 第10号住居跡出土土器(2)

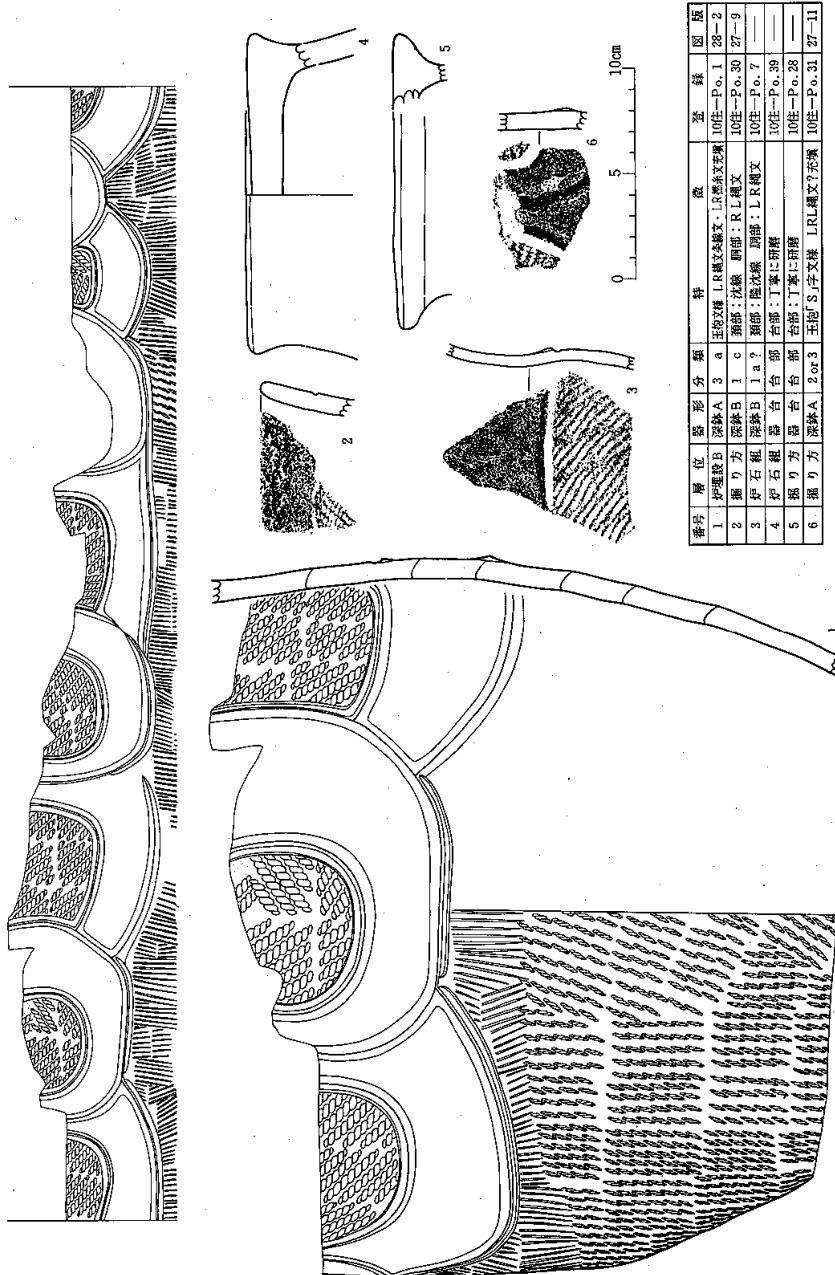


番号	層位	器形	分類	特徵	直径	圖版
1	床面	深鉢B	1 c	頭部：弦紋 脖部：L-R綱文・L-R燃文一条條文	10住-Po. 2	27-13
2	埋土	深鉢A	3 b	「匚」字狀文綱 L-R燃文充填	10住-Po. 6	27-7
3	埋土	深鉢A	2 b	玉柄連繩 S-J字文綱 B L-R綱文充填	10住-Po. 4	27-15

第31図 第10号住居跡出土土器(3)



第32圖 第10号住居跡出土土器(4)



第33図 第10号生居跡出土土器(5)

第11a号住居跡

(遺構の確認) 第10住居跡南側暗黃褐色礫層面でかなり広範囲な黒褐色土の分布が見られた。そして、その南端B A-67区に炉跡を確認、第11a住居跡とする。

(重複・増改築) 北側にある第11b住居跡との間に重複関係が認められる。

(平面形・方向) 不明。床面の分布。堅穴の壁等検出できなかった。

(堆積土) 炉跡確認によって住居跡の存在を知ったため、堆積土に関しては十分吟味できなかつた。ただし、表土下に数cmの粘性ある黒褐色シルト層がみられ、その下に床面があることから、これが住居跡内堆積土と考えられる。

(壁の状況) 不明。

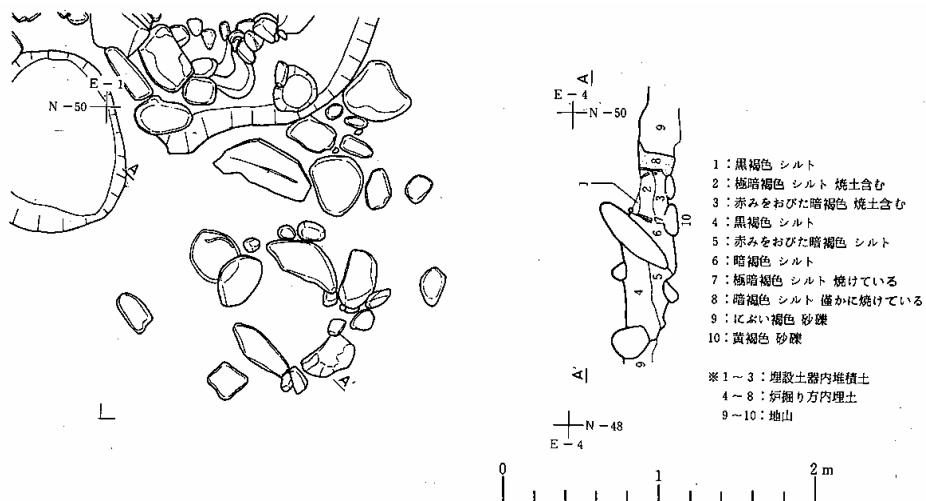
(床面) 炉の東側を中心として平坦な石が敷かれている。床面の分布は確認できなかつた。

(柱穴・周溝) 不明。検出できなかつた。

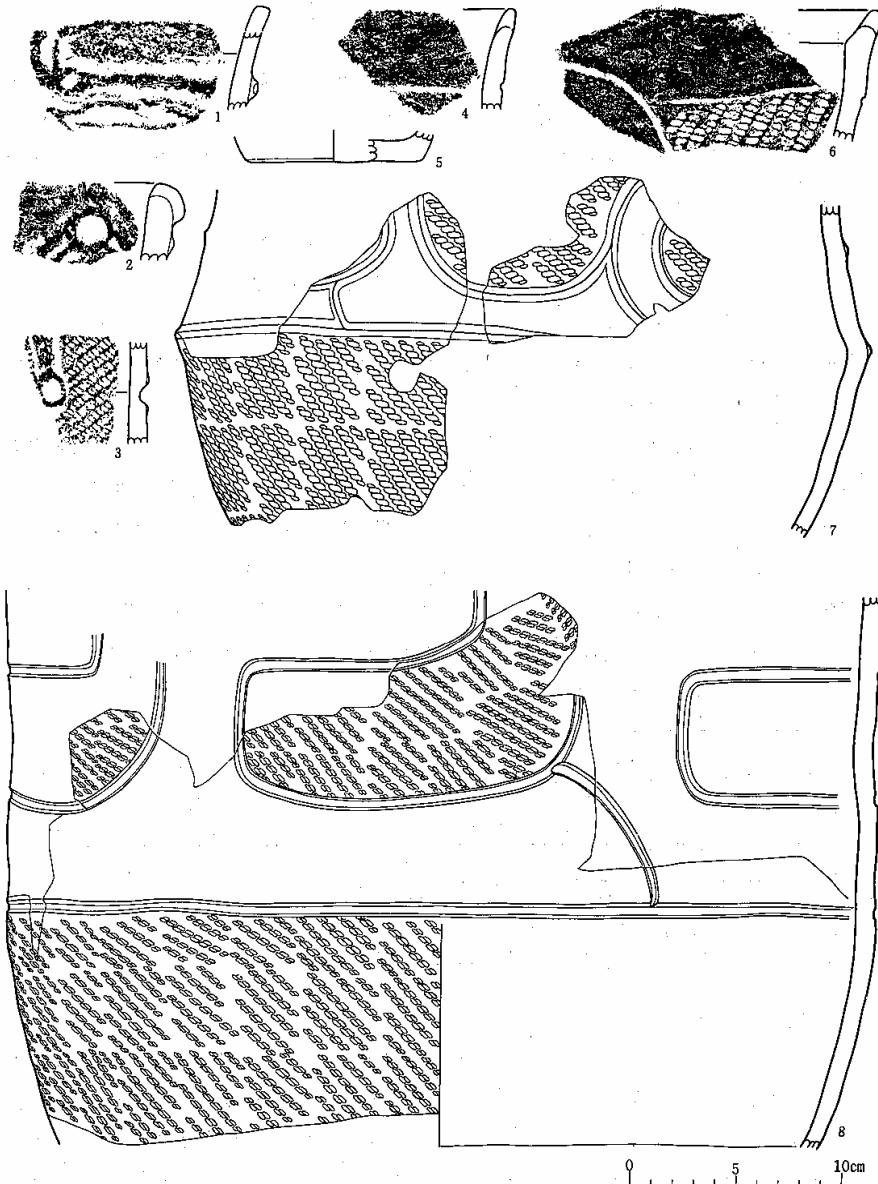
(炉) 埋設土器部・長方形石組部からなる土器埋設石組複式炉である。長軸130cm、短軸84cmの大きさで、長軸は北北西—南南東方向を指す。埋設土器および石組は焼けて赤くなっている。炉を立ち割ると掘り方が検出された。

(第11b住居跡との関係) 住居跡内堆積土によって両者の新旧関係をとらえることはできなかつた。しかし、第11b住居跡の床面が第11a住居跡の床面より低位にあること、さらに第11a住居跡床面の敷石が第11b住居跡の壁にあたる部分で途切れていること、この二つの理由によって、第11a住居跡が第11b住居跡によって切られている可能性が高い。

(遺構の年代決定) 炉掘り方出土土器および埋設土器が遺構の年代決定資料となる。



第34図 第11a号住居跡



番号	層位	出形分類	特徴	登録番号	図版	番号	層位	出形分類	特徴	登録番号	図版	
1	埋土2層	深鉢A	弧状模沈紋文 小輪	II A住-Po. 7	29-2	5	埋土2層	不明	底部	内部下端~底部:無文	II A住-Po. 8	—
2	埋土2層	深鉢A	三角形状文 小輪	II A住-Po. 6	29-3	6	炉埋鉢	深鉢A	3	菱形S字状文様 RL繩文充溝	II A住-Po. 3	29-6
3	埋土2層	深鉢A	陸沈模文 小輪 RL繩文	II A住-Po. 4	29-4	7	炉埋鉢	深鉢A	3 a	菱形L R繩文充溝	II A住-Po. 2	—
4	埋土3層	深鉢B	1 c 頂部:浅模 国部:不明模文	II A住-Po. 5	29-5	8	炉埋鉢	深鉢A	3 b?	「」字状文様 L RL繩文充溝	II A住-Po. 1	29-1

第35図 第11a号住居跡出土土器

第11b号住居跡

(遺構の確認) 遺構北西斜面に近い平坦面上(B A-68区周辺)、第10住居跡と第11a住居跡との間にある。東側遺構確認面は暗褐色シルト質砂層(地山)である。

(重複・増改築) 第10住居跡を切って構築されている。第11a住居跡とも重複しているが両者の関係は「第11a住居跡」の項で説明してある。

(平面形・方向) 限丸台形をした主体部北側に「凸」状の張出し部が付く。方向(張出し部を軸とする)は北北東—南南西。大きさは長軸(東西)5.2m、短軸(南北)4.9m。

(堆積土) いずれも暗褐色ないしは黒褐色のシルトで僅かに粘りがある。

(壁の状況) 最も保存のよい東側で10~20cmの高さで残っているが、北から西に行くに従い低くなる。南西部ではほとんど残っていない。

(床面) 床面には壁の周縁を除いて一面に平坦な石が敷きつめられている。^{注1)} ただ、住居中央部北側についてはまばらである。石は縁のとれた河川成のものと、縁の角張った板状のものとが用いられている。また、大きな敷石の間にはその間隙を埋めるように小さな礫が詰められている。敷石および床面をはがすと、黄褐色砂礫層まで掘り込まれた住居の掘り方が検出された。

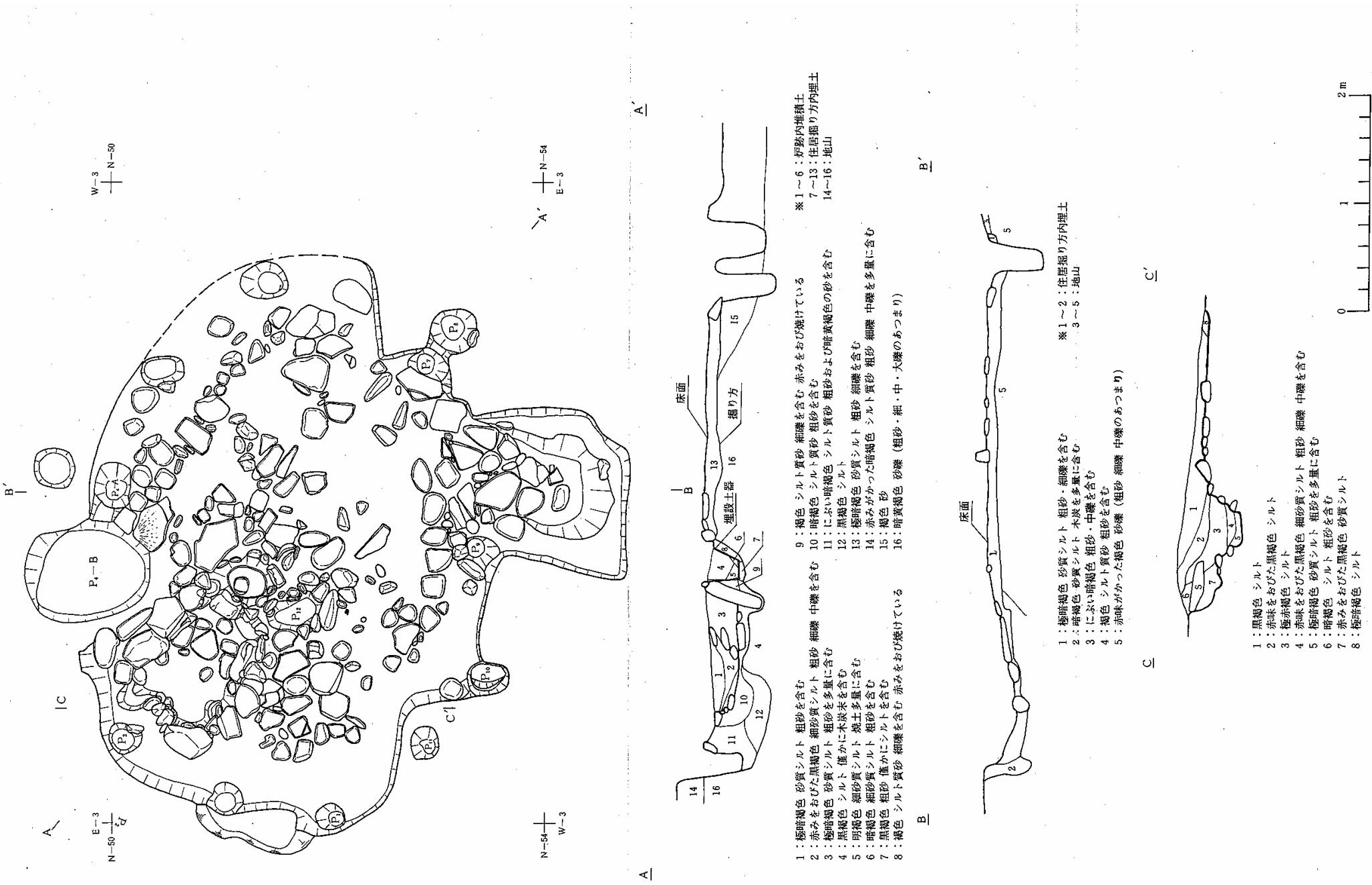
(柱穴) 計13のピットが発見されているがこのうち大きさ、堆積土の同質性、壁にならぶ規則性という点から、P₁~P_{4a}、P₅~P₇、P₉~P₁₀^{注2)}の9個が柱穴と考えられる。P_{4b}は住居によって切られている古いピットである。

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
床面からの深さ	44cm	38cm	33cm	52cm	32cm	61cm	56cm
堆積土	黒褐色 細砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 細砂質シルト	黒褐色 砂質シルト
P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂			
52cm	30cm	48cm	19cm	42cm			
黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	黒褐色 砂質シルト	暗褐色 細砂質シルト	黒褐色 砂質シルト			

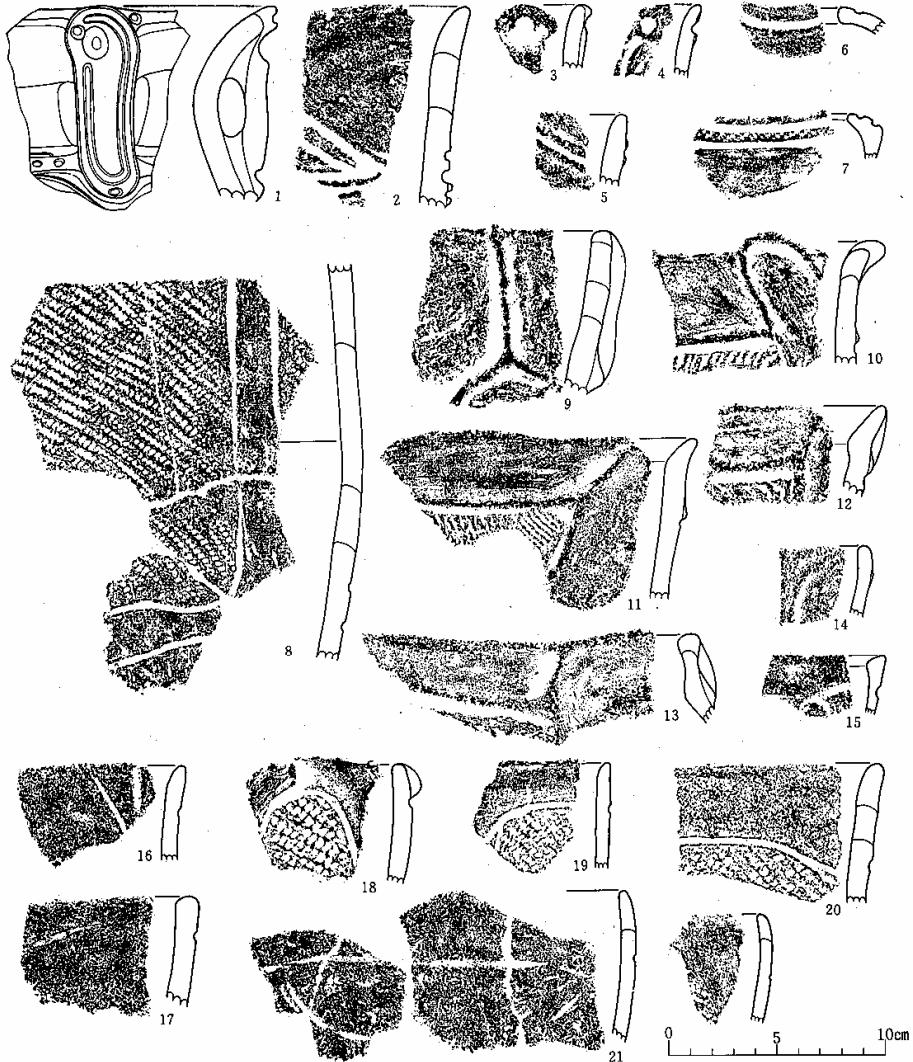
(周溝) 検出されない。

(炉) 住居中央から壁までおよぶ長大な炉で、長軸方向は北北西—南南東を指す。この炉は土器埋設石囲部・敷石石組部・石組部(閉鎖)からなる土器埋設石組複式炉である。大きさは長軸196cm、短軸138cm。埋設土器内部から焼土が認められたが、敷石石組部、石組部からは検出されなかった。また、埋設土器は二個体を組合せて二重にし、底には胴部片を敷いている。埋設土器とその周囲の土は赤く焼けている。敷石石組部の側壁と奥壁にあたる部分も赤味をおびたりボロボロになったり(特に奥壁上部)しており、火熱を受けたものと思われる。

(その他の施設) 住居北側に張り出し部がある。出入口と考えられる。

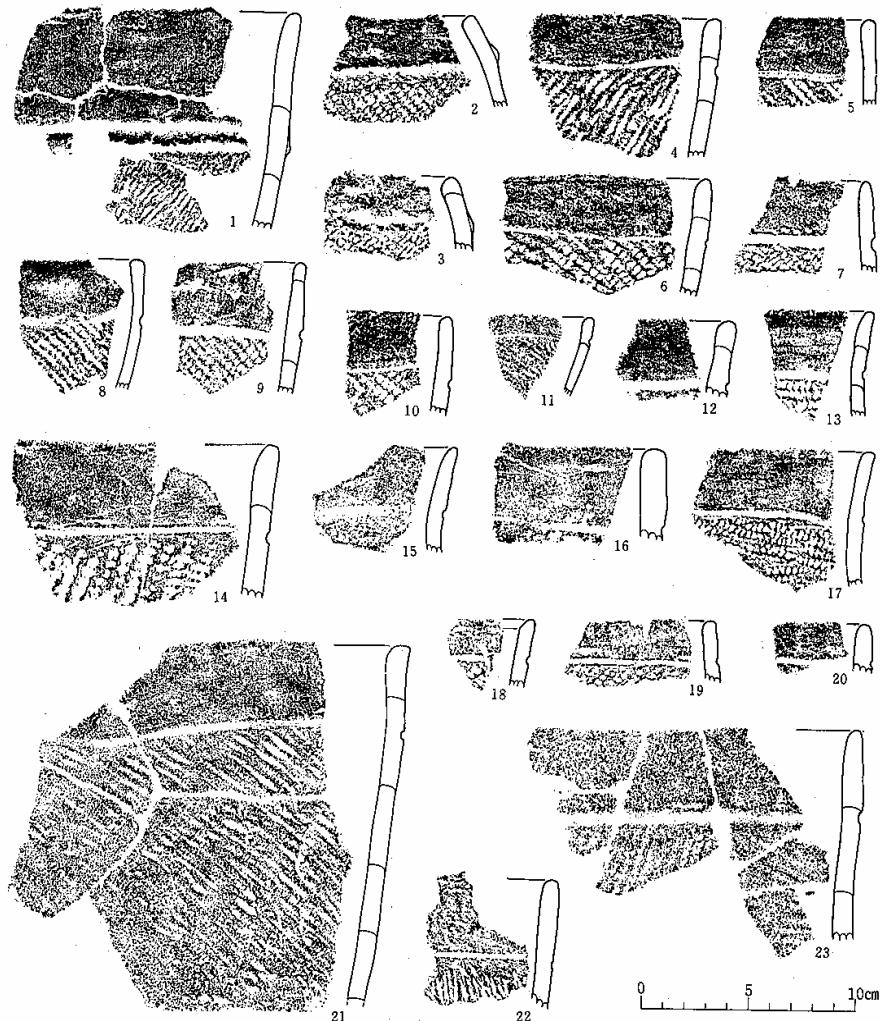


第36図 第11b号住居跡



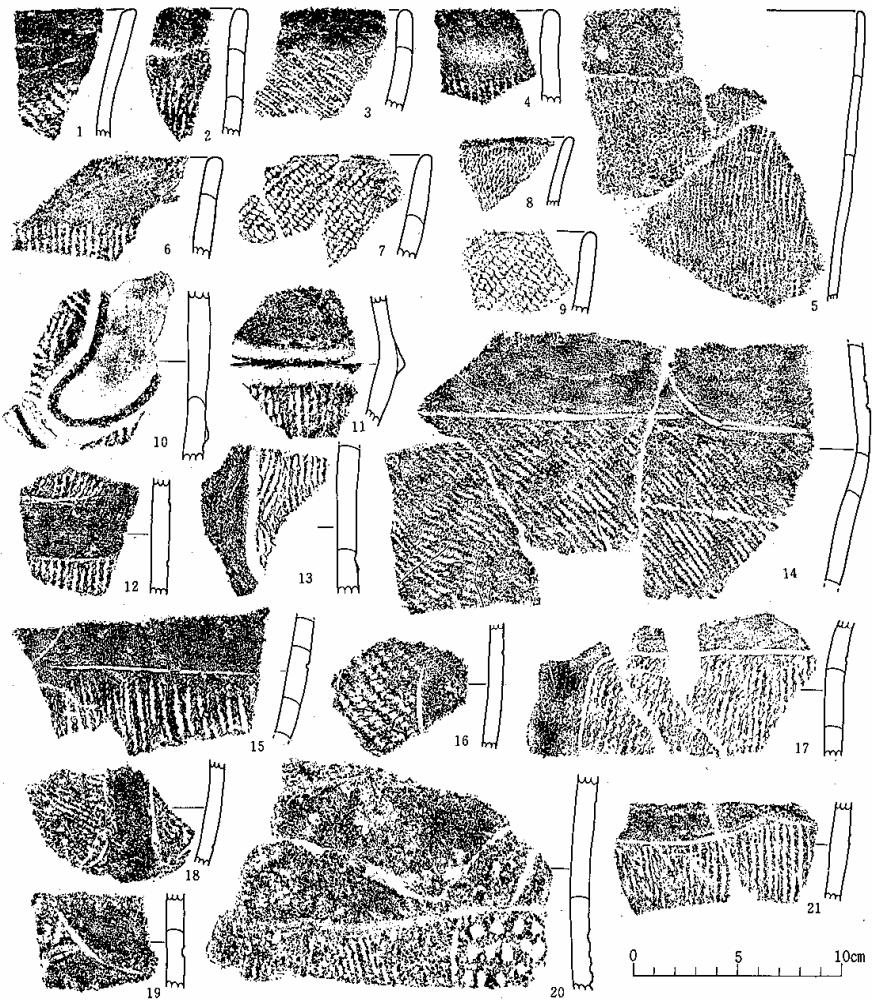
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土3層	深鉢	II	楕状把手・円形刺突文	11B住-Po.37	29-7	12	埋土3層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 L.R縦文充填	11B住-Po.35	29-14
2	埋土3層	深鉢A	I	頭部捺凸文	11B住-Po.38	29-8	13	ビット?	深鉢?	不明	縫隙による凹面文様	11B住-Po.23	29-15
3	層位不明	深鉢A	II	小輪?	11B住-Po.81	—	14	埋土	深鉢A	不明	「S」字状文様	11B住-Po.40	29-16
4	埋土3層	深鉢A	I	弧状捺凸文・小輪	11B住-Po.65	—	15	層位不明	深鉢A	不明	「S」字状文様	11B住-Po.90	—
5	埋土3層	深鉢A	II	三角形捺凸文	11B住-Po.64	—	16	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様	11B住-Po.50	—
6	埋土3層	鉢	II?	捺凸?捻文	11B住-Po.63	29-9	17	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様	11B住-Po.62	29-17
7	埋土3層	鉢	II?	口縁部：RL縦文・沈線文	11B住-Po.67	29-10	18	ビット?	深鉢A	不明	玉丸文様？ L.R縦文充填	11B住-Po.25	29-18
8	埋土3層	深鉢	I or II	方形区隔捺凸文・L.R縦文充填	11B住-Po.71	29-11	19	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様 L.R縦文充填	11B住-Po.49	29-19
9	埋土3層	深鉢A	II	「上」字下垂縫線文	11B住-Po.34	—	20	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様 L.R縦文充填	11B住-Po.53	29-20
10	ビット?	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 RL縦文充填	11B住-Po.22	29-12	21	ビット?	深鉢A	不明	「S」字状文様？	11B住-Po.12	—
11	埋土3層	深鉢A	不明	連結「S」字状文様 L.R縦文充填	11B住-Po.33	29-13	22	層位不明	深鉢A	不明	「S」字状文様？ L.R縦文充填	11B住-Po.88	—

第37図 第11b号住居出土土器(1)



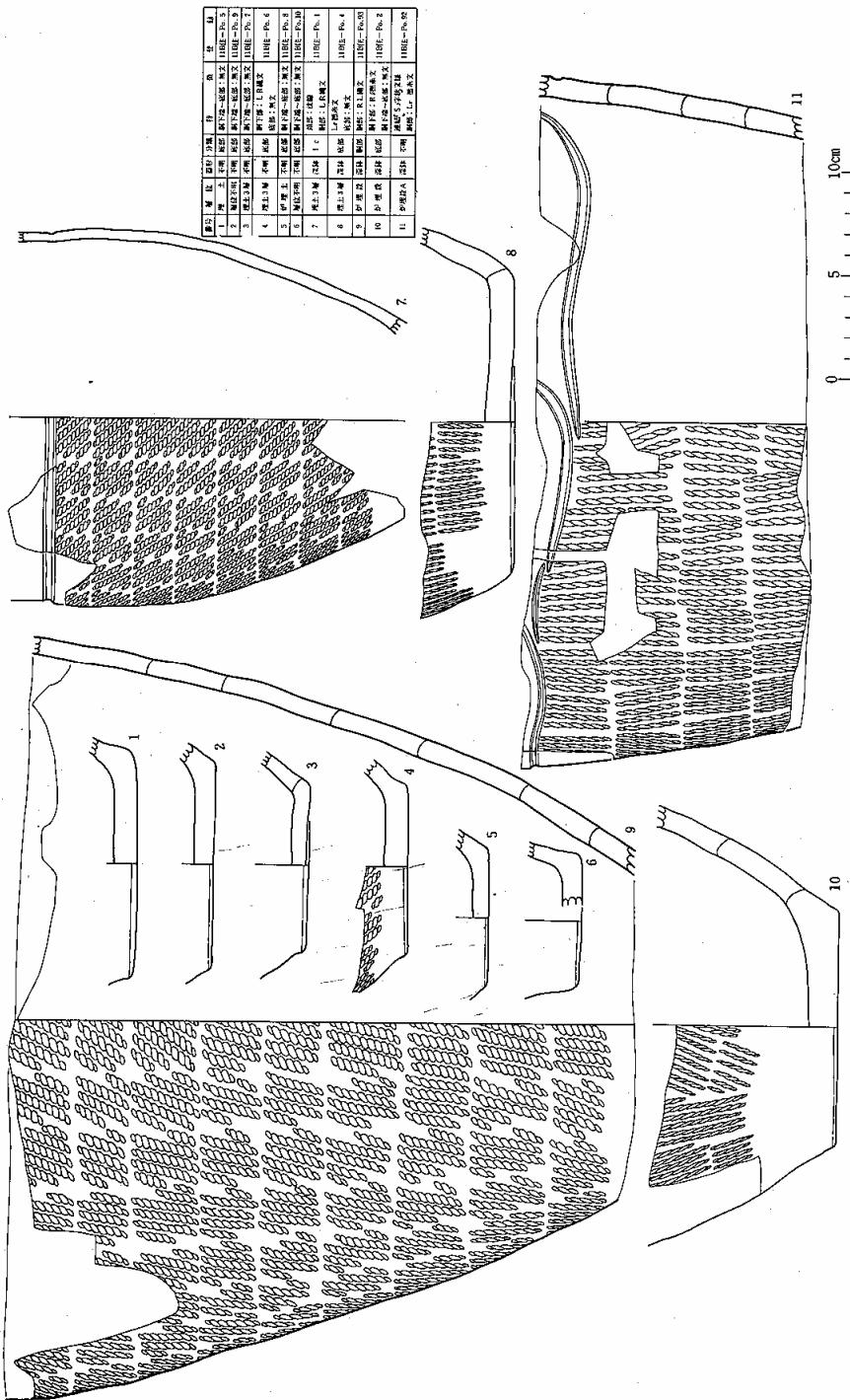
番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄 図 版	番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄 図 版
1	埋 土	深 脳 B	1 b	縫剖：隆線 創部：L; 燐条文?	11B住-Po.39 29-21	13	床 面	深 脳 B?	1 c?	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.16 —
2	埋土3層	深 脳 B	1 b	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.46 29-22	14	床 面	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RLR縐文	11B住-Po.15 29-35
3	層位不明	深 脳 B	1 b	縫剖：隆線 創部：LR縐文	11B住-Po.83 29-23	15	ビット?	深 脳 B?	1 c?	縫剖：沈線	11B住-Po.24 29-28
4	ビット?	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RL縐文	11B住-Po.78 29-24	16	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RLR縐文?	11B住-Po.45 29-30
5	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.92 —	17	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.52 29-34
6	埋 土	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.79 —	18	埋 土	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RL縐文	11B住-Po.82 —
7	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.48 29-25	19	層位不明	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RL縐文	11B住-Po.81 29-32
8	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.44 29-27	20	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線	11B住-Po.55 —
9	埋 土	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.80 29-29	21	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.32 29-26
10	ビット?	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RL縐文	11B住-Po.28 —	22	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：R&R縐系文	11B住-Po.47 —
11	握り方	深 脳 B?	1 c	縫剖：沈線 創部：LR縐文	11B住-Po.20 29-31	23	埋土3層	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線 創部：RL縐文	11B住-Po.31 —
12	ビット?	深 脳 B	1 c	縫剖：沈線	11B住-Po.30 —						

第38図 第11b号住居出土土器(2)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	ピット10 深鉢B	2 a	口輪部：無文 壁部：LR構文	11B住-Po.29	30-2		12	埋土3層 深鉢A	不明 「S」字状文様 Lr 槌文充填	11B住-Po.75	30-15		
2	床 面 深鉢B	2 a	口輪部：無文 壁部：不明構文	11B住-Po.17	—		13	ピット7 深鉢A	不明 「S」字状文様 R2 槌文充填	11B住-Po.27	30-16		
3	埋土3層 深鉢B	2 a	口輪部：無文 壁部：LR構文	11B住-Po.43	30-4		14	埋土3層 深鉢A	不明 連結「S」字状文様 縫部：LR構文	11B住-Po.70	30-13		
4	床 面 深鉢B	2 a	口輪部：無文 壁部：RL 槌糸文	11B住-Po.18	—		15	炉 石 褶 深鉢A	不明 連結「S」字状文様 縫下部：Lr 槌糸文	11B住-Po.14	30-10		
5	埋土3層 深鉢B	2 a	口輪部：無文 壁部：Lr 槌糸文	11B住-Po.41	30-1		16	埋土3層 深鉢A	不明 「S」字状文様 LT 槌文充填	11B住-Po.72	30-9		
6	埋 土 深鉢B	2 a	口輪部：無文 壁部：Lr 槌糸文	11B住-Po.84	30-3		17	埋土3層 深鉢A	不明 「S」字状文様 LR 槌糸文充填	11B住-Po.69	30-12		
7	埋土3層 深鉢B	2 b	口輪一部輪部：RL 槌文	11B住-Po.42	30-6		18	埋土3層 深鉢A	不明 「S」字状文様 LR 槌文充填	11B住-Po.73	30-17		
8	ピット4 深鉢B	2 b	口輪一部輪部：Lr 槌糸文	11B住-Po.21	30-5		19	埋土3層 深鉢A	不明 連結「S」字状文様 RL 槌文充填	11B住-Po.76	30-18		
9	埋 土 深鉢B	2 b	口輪一部輪部：RL 槌文	11B住-Po.89	30-7		20	埋土3層 深鉢A	不明 連結「S」字状文様 刻文文・不明捺糸文充填	11B住-Po.68	30-14		
10	埋土3層 深鉢A	不明	「S」字状文様 LR 槌文充填	11B住-Po.36	30-8		21	ピット2 深鉢A	不明 「S」字状文様 Lr 槌糸文充填	11B住-Po.77	30-11		
11	床 面 深鉢A	不明	「S」字状文様 縫下部：RL 槌文充填	11B住-Po.19	—								

第39図 第11b号住居出土土器(3)



第40圖 第11b号住居出土土器(4)

(遺構の年代決定)住居掘り方出土土器、炉埋設土器が住居構築年代推定資料となる。

注1)床面敷石は、壁際を除き広い範囲にみられ、炉敷石石組部・石組部の両側までおよんでいる。

その形は方形状で、対称軸は炉長軸およびその延長線とほぼ一致している。敷石が比較的密集しているのは炉の周囲と、方形状敷石の各辺および隅の部分である。それらの中で北隅の部分は、大きい平石が特に多くて住居貼り出し部となっている。

また、炉土器埋設石囲部の東側にピット(P.12)があり、ピット側壁にあたる石は壁を覆うように立って組まれている。

注2)これらの柱穴は住居壁沿に規則的に並んでいる(四対)。

第13号住居跡

(遺構の確認)遺跡西側緩斜面、AM-58区周辺の表土を20~30cm掘り下げると暗黄褐色細砂層に達する。この面で黒褐色土の分布と一部露出した敷石を確認する。住居跡の存在を推定し、第13住居跡とする。

(重複・増改築)不明。西側敷石に多少レベル差が認められる。しかし、十分吟味できないない。

(平面形・方向)床面の分布、壁等検出できなかったので平面形、方向はわからない。

(堆積土)表土下に薄く(5~10cm)黒色シルト層が堆積している。その下は床面(敷石)となる。この黒色シルト層は攪乱のためかなり途切れている部分もある。

(壁の状況)攪乱のため検出できなかった。

(床面)炉の西側にはかなり広範囲に平坦な石が敷かれている。敷石は一様ではなくかなりまばらな部分もある。^{注1)}使用されている石は縁のとれた河川成のものと、縁の角張った板状のものがある。両者は同等に用いられているようである。敷石のない部分の床面はやわらかい。床面の敷石をはがすと、その下に住居の掘り方が検出された。

(柱穴)検出できたピットは1個(P₁)だけで、他に柱穴らしいものは確認できなかった。このピットは床面からの深さ14cmで、中には暗褐色砂質シルトが入っていた。

(炉)住居敷石の東端に位置している。長軸方向は西北西—東南東を指す。この炉は土器埋設石囲部・敷石石組部・敷石部からなる^{注2)}土器埋設石組複式炉である。後方にある敷石部は敷石石組部の側壁とほぼ同じ高さになっている。全体の大きさは長軸180cm、短軸90cmを示す。土器埋設石囲部は底部を欠く二個体分の土器を重ね合わせて埋設し、その周囲に土器片を詰めている。埋設土器内部から焼土や木炭の検出はないが、土器およびその周囲の土は赤みがかかった褐色を呈し焼けているものと思われる。敷石石組部からも焼土、木炭の検出はないが側壁および奥壁の石はかなり風化が著しく、ボロボロになっている。また、色も赤味が加っていることか

ら、かなり強い火熱を受けたものと考えられる。敷石部は火熱を受けた痕跡が認められない。土器埋設石囲部西側の敷石を剥がすと、その下に完形に近い深鉢形土器が横位に置かれていた。土器(内部の土は火熱を受けた痕跡がない)とその周囲の土は赤褐色に焼けていたが、その上にのっていた石(敷石)に火熱を受けた痕跡はなかった。また、炉の掘り方との間にも切り合い関係は認められない。

(遺構の年代決定)住居構築時の年代は炉埋設土器によって推定することができる。炉西側の横位土器はその年代とほぼ同じと思われるが、その性格については吟味の必要がある。

注1)この住居跡は攪乱が著しく、床面敷石もかなり抜きとられている。

注2)敷石部としたものは床面敷石と同じ面にあることから炉の一部ではなく、床面敷石の一部である可能性が強い。その場合、炉の大きさは長軸132cm、短軸90cmとなる。

第14号住居跡

(遺構の確認)遺跡の西側、第11a、b住居跡の南方の調査区B A-66区付近の約20cmの表土直下の黄褐色砂礫層で炉跡が検出された。

(重複・増改築)土器A・B・C・Dはそれぞれ黄褐色砂礫層を約10~20cm程掘り下げ埋設している。また、それぞれの土器の周囲の土は火熱で赤変し、土器B・Cを囲む石も火熱のためもろくなっている。土器Aの上には敷石の一部とみられる扁平な石が覆いかぶさっている。土器Dの南上に石が部分的にかぶさる形で検出された。埋設土器A、B、Cはそれを囲む石と埋めた土の状況から同じ炉のものと思われる。土器Dはそれに伴うものかあるいは別の炉の一部であるかは確認できなかった。また、この土器の東側に縦に並んでいる数個の石は炉の石組部の一部と推定される。これが埋設土器Dと組合う可能性もある。

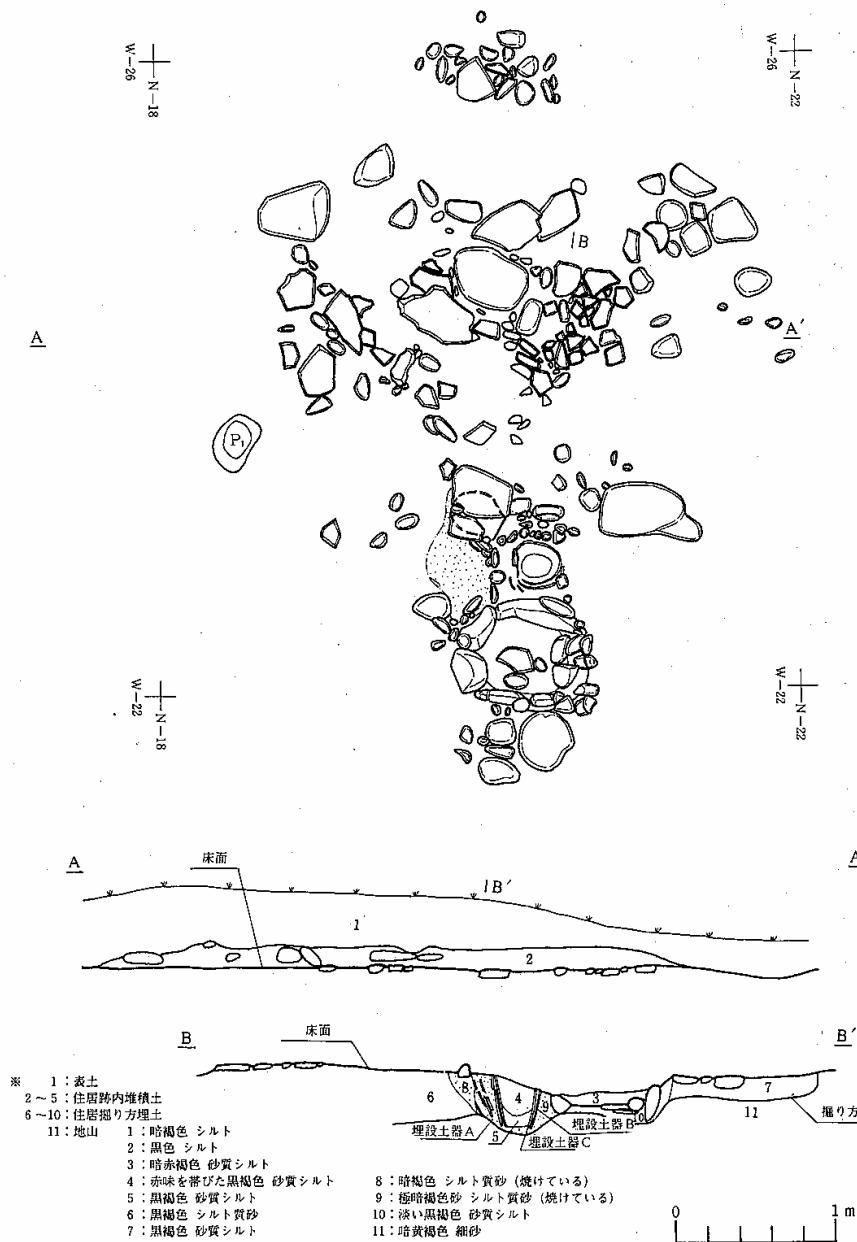
以上の点より住居の重複が考えられるが断定はできない。^{注1)}

(平面形・方向)住居の掘り方が黄褐色砂礫層まで掘り込まれ、東側3分の1が検出された。方形かまたは長方形を呈すると推定される。しかし、埋土からは検証することができなかつたが、住居の重複または、増改築の可能性もあり、それにより前述の形態を呈したのであろう。

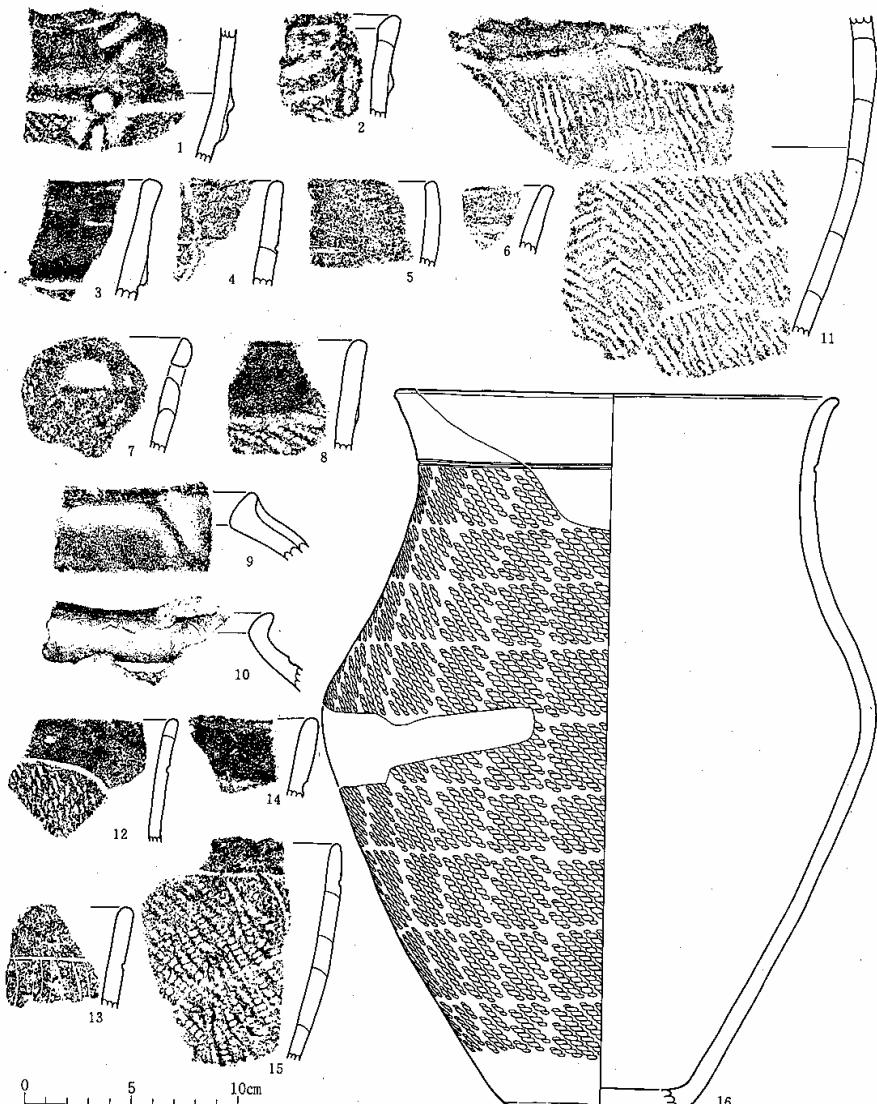
(堆積土)耕作のため、すべて攪乱を受けている。

(床面)炉の周囲に数個の扁平な川原石の割石が存在するがまとまりがない。炉の状態から推

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
床面からの深さ	27.5cm	24.5cm	39.5cm	36.5cm	45.5cm	21cm	22.5cm
堆積土	黒褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	極暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト
P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃		
34.5cm	44.5cm	28.5cm	49.5cm	69.5cm	83.5cm		
暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	極暗褐色 砂質シルト	暗褐色 砂質シルト	極暗褐色 砂質シルト		

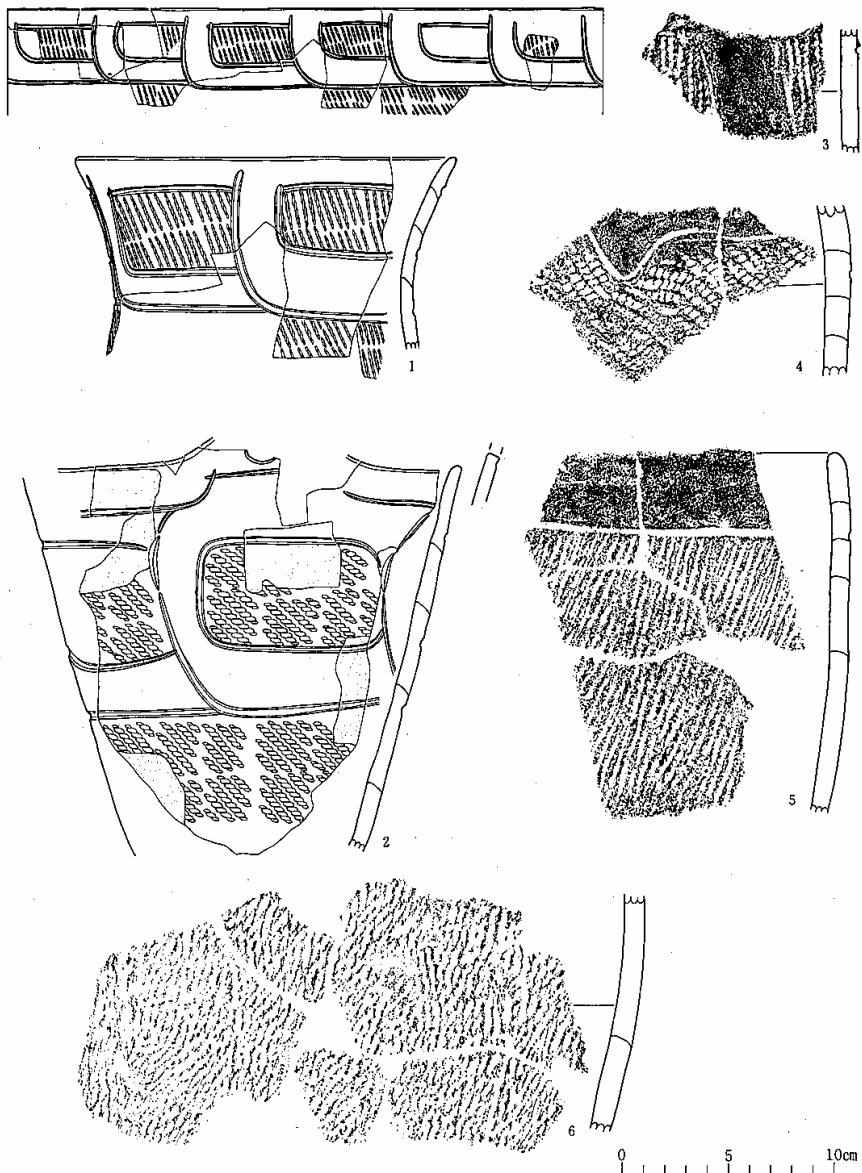


第41図 第13号住居跡



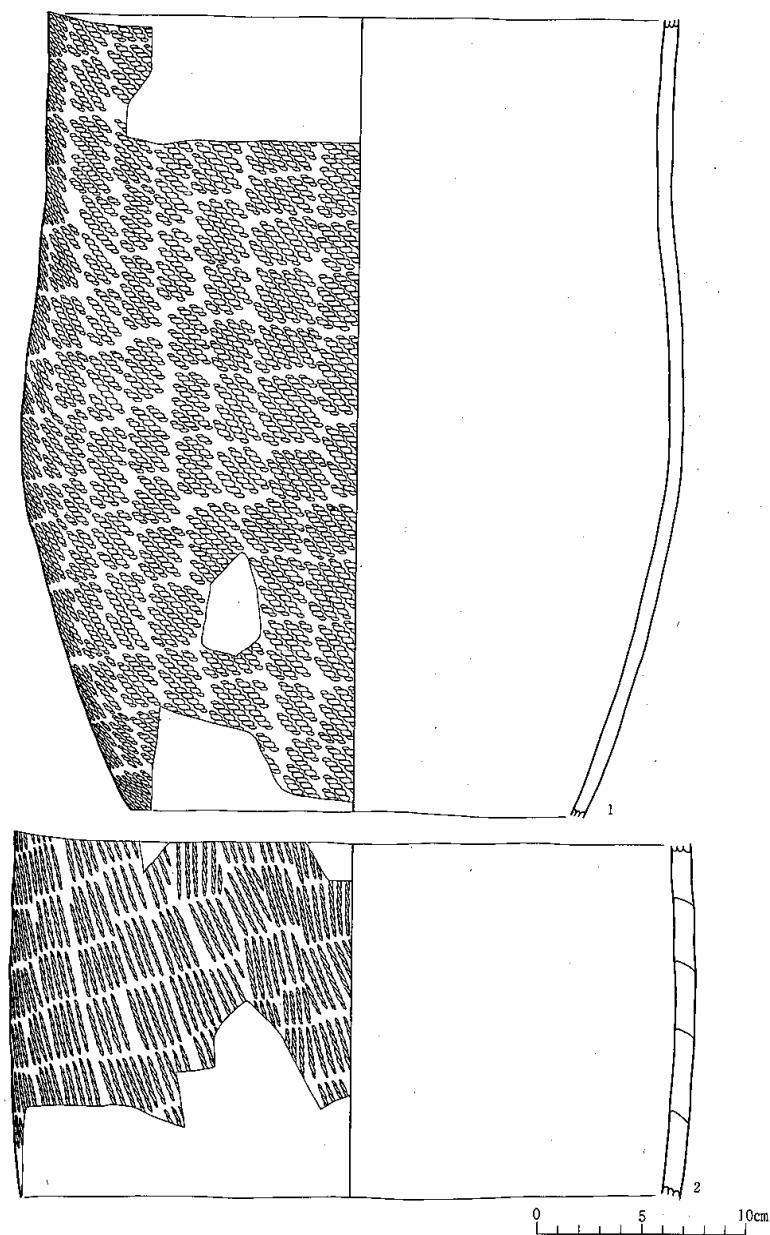
番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	図 版	番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	図 版
1	ピット2	深鉢A	II	小輪・隆沈線文・LR範文	13E-Po.16	—	9	埋土2層	蓋?	口縁部:隆線による区面文様	13E-Po.14	30-27	
2	ピット2	深鉢A	II	方格状模様文?	13E-Po.15	30-19	10	埋 土 蓋?	?	縁部:沈線 縫移:LR範文	13E-Po.20	—	
3	ピット2	深鉢A	I or II	縫部:隆沈線文	13E-Po.19	30-20	11	床 面	深鉢A 不 明	達村S字状文縁 縫部:LR範文	13E-Po.10	30-25	
4	ピット2	深鉢B	I c	縫部:隆沈 縫部:RLR範文	13E-Po.17	—	12	床 面	深鉢A 不 明	S字状文縁 LR範文光暈	13E-Po.11	30-21	
5	第3ピット	深 鉢	不 明	口縁部:無文	13E-Po.23	—	13	床 面	深鉢A? 不 明	S字状文縁 光暈	13E-Po.12	30-22	
6	ピット2	深 鉢	不 明	口縁部:無文	13E-Po.21	—	14	炉 壁2層	深 鉢 不 明	口縁部:無文	13E-Po.18	—	
7	第3ピット	深 鉢	不 明	縫部に窓有	13E-Po.24	—	15	炉 埋 土	深鉢A 不 明	S字状文縁 LR範文光暈	13E-Po.13	—	
8	第3ピット	深鉢B	2 a	口縁部:無文 縫部:LR範文	13E-Po.22	—	16	炉南側縫部	深鉢B 1 c	縫移:沈線 縫部:LR範文	13E-Po.25	30-28	

第42図 第13号住居跡出土土器(1)



番号	層位	器形	分類	特 徴	登 録	図 版	番号	層位	器形	分類	特 徴	登 録	図 版
1	炉 埋 設	深鉢A	3 b	「コ」字状文様 Lr 摺糸文表模	13E-Po. 2	30-26	'4	炉 埋 設	深鉢A	不明	「S」字状文様 LR 摺糸文表模	13E-Po. 6	30-23
2	炉 埋 設	深鉢A	3 b	「コ」字状文様 LR 摺糸文表模	13E-Po. 4	30-24	5	炉 埋 設B	深鉢B	1 c	底部：沈線 脚部：Lr 摺糸文	13E-Po. 5	—
3	炉 埋 設B	深鉢A	3 ?	変形連続「S」字状文様? Lr 摺糸文表模	13E-Po. 7	—	6	炉 埋 設	深 鉢	不明	脚部：LR 摺糸文	13E-Po. 8A	—

第43図 第13号住居跡出土土器(2)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋設 A・B	深鉢 B	不明	胸部: L R 縄文	13住-Po. 1	—
2	埋設 B	深鉢	不明	胸部: R 縄文	13住-Po. 3	—

第44図 第13号住居跡出土土器(3)

定すると住居廃棄後に抜き取られたか、攪乱を受けて部分的に残ったものと思われる。

(柱穴) 炉を中心に合計13個のピットが検出された。P₂・P₃、P₄・P₅、P₆・P₇、P₉・P₁₀、P₁₂・P₁₃はそれぞれ重複しているが埋土が近似しており、新旧関係を検証することはできなかった。P₆・P₁₅は巨礫の抜き取痕のような凹である。

(周溝) 不明である。

(炉) 大略は(重複、増改築)の項で述べた如くである。埋設土器A-B、Cの長軸はほぼ西一東を指す。形態は埋設土器の東方にやや斜めにたてかけた石が石組部の一部と推定されるので、土器埋設部・土器埋設石囲部および石組部で構成されると思われる。石組部は敷石石組と石組とが存在するのかも知れないが確定できない。

(その他の施設) 不明。検出されなかった。

(遺構の年代決定) 埋設土器A、B、C、Dが最重要資料である。

注1) 住居跡は全体に攪乱が著しい。また、地山の礫が露出している部分も多いため、住居の形態・炉の構造など不明確である。

第15号住居跡

(遺構の確認) 遺跡の西側、第13住居跡の南側に隣接した調査区、AL-54区付近約20cmの表土下に埋設土器・敷石石組の複式炉跡が検出された。この位置は昭和46年度の調査で発見された第2住居跡の炉の北西約3mの距離にある。この位置は東から西にややゆるい傾斜を成し、東上の平坦面との比高は約50~60cm程ある。

(重複・増改築) 一次調査で検出された第2住居跡とは距離の点で重複の可能性もあるが、床面直上まで表土となっているため検出できなかった。炉の増改築は認められない。

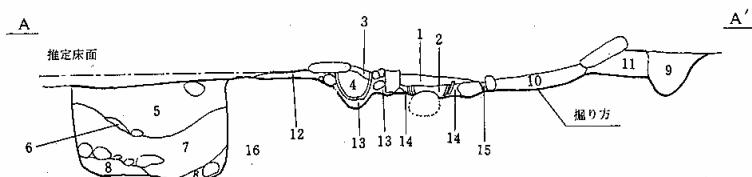
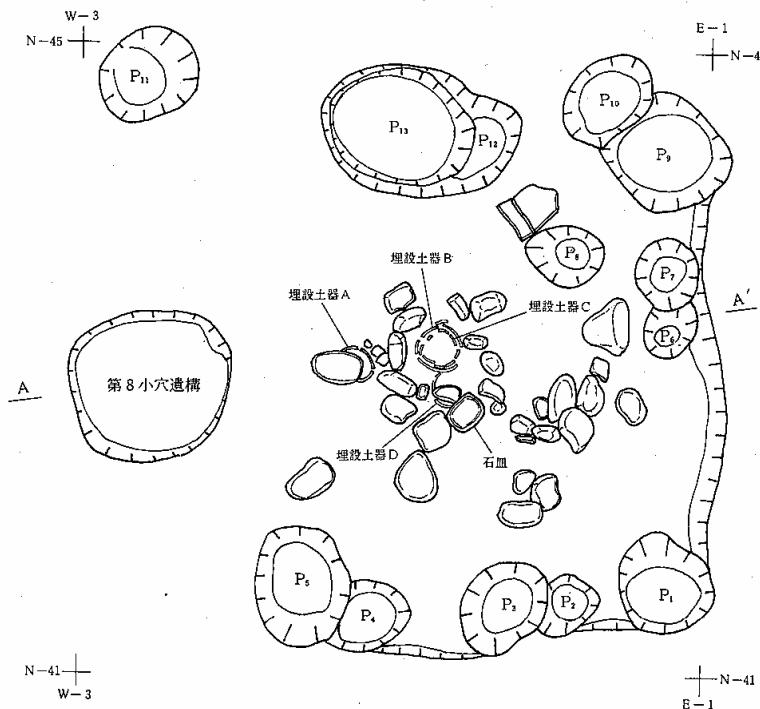
(平面形・方向) 表土の攪乱がほぼ住居床面の深さまで達しており、平面形はわからない。

(堆積土) すべて攪乱されている。住居掘り方に埋めた土は暗褐色を呈する砂質シルトを中心に砂礫が多数混入する。

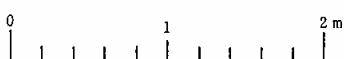
(壁の状況) 不明。

(床面) 住居掘り方に埋めた砂質シルトをほぼ同レベルにならし固めて床面としている。炉埋設土器を中心にその北西約40~50cm程の半円形に固くしまっている部分が分布する。他は耕作や樹木の根により攪乱を受け、その分布範囲を確認することが不可能であった。しかし、炉の北西約160cm程離れた位置、地表に出ている部分で高さ約30cm、径80cm程の巨礫が地山に喰い込んでいる。住居の掘り方もこの南端まで確認されたので、床面の北端はここまでと推定される。

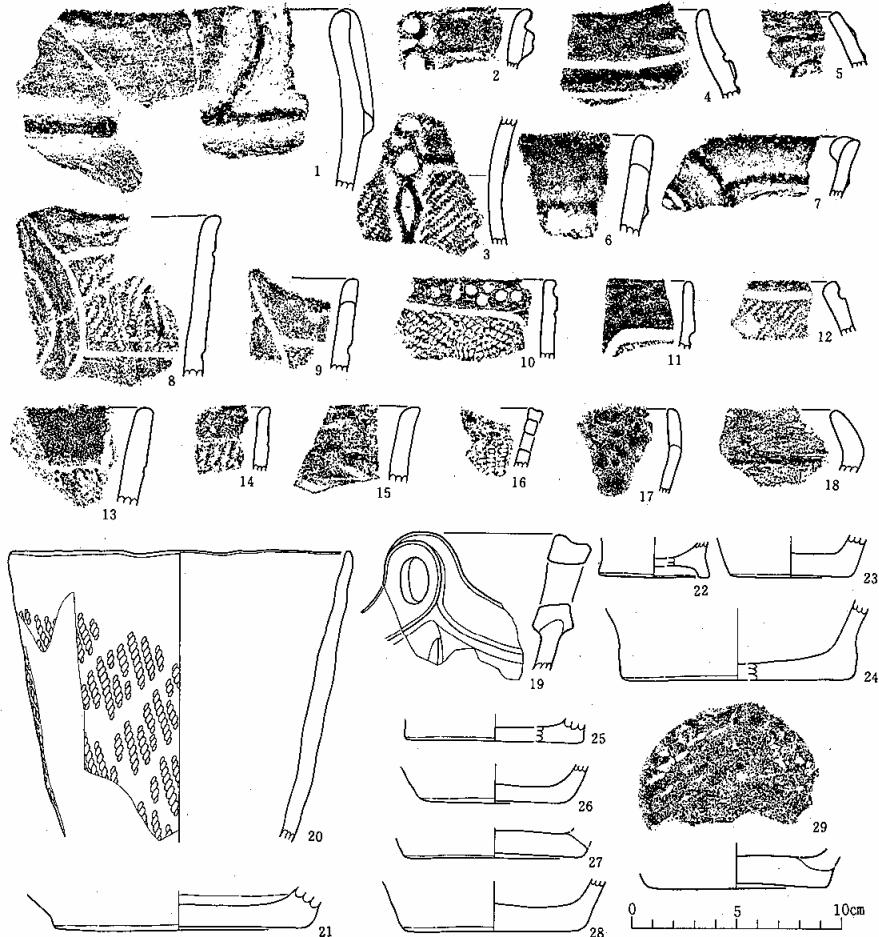
(柱穴) 床に使用されている土が暗褐色を呈しており、慎重に掘り下げを行なったのであるがピットは確認できなかった。



- | | | |
|-----------------------------|---------------------------|------------------------|
| 1 : 黒褐色 砂質シルト (少量の炭化物混入) | 9 : 暗褐色 砂質シルト | ※ 1 ~ 4・9 : 住居(炉)路内堆積土 |
| 2 : 黒褐色 シルト | 10 : 暗褐色 シルト質細砂 (粗砂 中礫混入) | 10~15 : 住居掘り方堆土 |
| 3 : 黑褐色 砂質シルト | 11 : 暗褐色 砂質シルト | 5~8 : 第8小窓遺構埋土 |
| 4 : 黑褐色 シルト (フレーク1点出土) | 12 : 暗褐色 シルト質細砂 | 16 : 地山 |
| 5 : 暗褐色 砂質シルト | 13 : 暗褐色 砂質シルト | |
| 6 : 暗色 粗砂 | 14 : 暗赤褐色 砂質シルト (燒土) | |
| 7 : 暗褐色 砂質シルト (木炭・骨片・土器片混入) | 15 : 暗褐色 砂質シルト | |
| 8 : 暗褐色 粗砂質シルト | 16 : 暗黃褐色 砂礫 | |

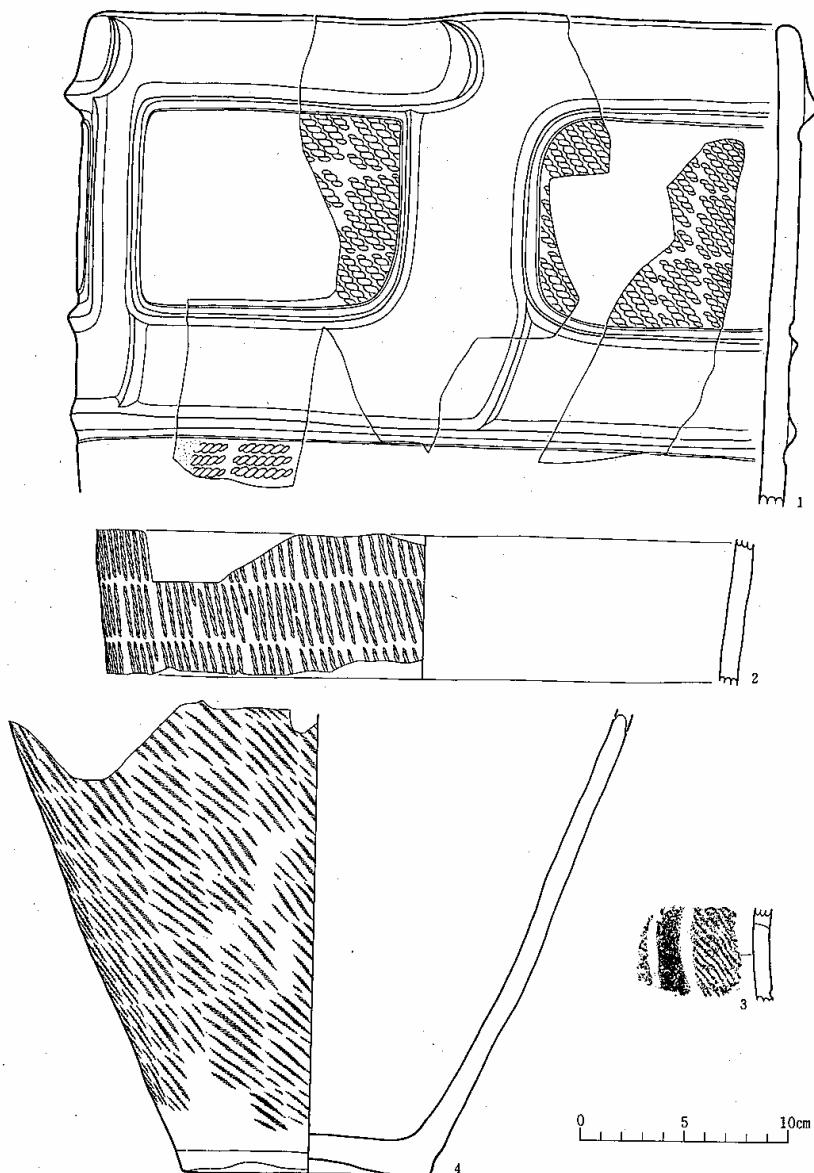


第45図 第14号住居跡



番号	層位	器形	分類	特徴		登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徴		登録	図版
				直	横							直	横		
1	埋 土 深鉢A	II 弧状縫合文		14住-Po.26	31-1			16	埋 土 深鉢B	2 b	口縫～側部：R.L.縫文	14住-Po.28	—		
2	ビット10 深鉢A	II 小輪		14住-Po.14	31-2			17	ビット5 不明	—	口縫部；粗縫な研磨	14住-Po.15	—		
3	埋 土 鈎	II 小輪・追跡状縫合		14住-Po.32	31-3			18	埋 土 不 明	—	口縫部；無文	14住-Po.29	31-12		
4	埋土2層 鈎	I or II 縫合：沈縫文		14住-Po.20	31-4			19	埋 土 不 明	突 起	滑らかの突起 突起部に凹窓	14住-Po.33	—		
5	埋土2層 鈎	I or II 斜線文		14住-Po.22	31-5			20	埋土2層 深鉢B	2 a	口縫部；無文 側部：L.R.縫文	14住-Po.7	—		
6	埋土2層 深鉢A	不 明 「S」字状文様？ R.L.縫文充填		14住-Po.25	31-6			21	埋土2層 不 明	底 部	底部：無文	14住-Po.3	—		
7	埋土2層 深鉢A	不 明 連結「S」字状文様		14住-Po.17	31-8			22	埋 土 不 明	底 部	底部：無文	14住-Po.11	—		
8	埋土2層 深鉢A	3 b 「コ」字状文様 R.L.縫文充填		14住-Po.16	31-10			23	埋土2層 不 明	底 部	朝下端～底部：無文	14住-Po.10	—		
9	埋 土 深鉢A	不 明 連結「S」字状文様 不明縫文充填		14住-Po.31	31-11			24	埋 土 不 明	底 部	朝下端～底部：無文	14住-Po.6	—		
10	埋土2層 深鉢A	不 明 「S」字状文様 L.R.縫文充填		14住-Po.21	31-9			25	埋 土 不 明	底 部	底部：無文	14住-Po.9	—		
11	埋土2層 深鉢A	不 明 「S」字状文様 不明縫文充填		14住-Po.19	31-7			26	埋 土 不 明	底 部	朝下端～底部：無文	14住-Po.5	—		
12	埋 土 深鉢？	不 明 口縫部：平行縫 突起部：R.L.縫文		14住-Po.27	—			27	埋 土 不 明	底 部	底部：無文	14住-Po.34	—		
13	ビット9 深鉢B	1 c 縫合：沈縫 突起部：不明縫 突起部：無文		14住-Po.13	—			28	埋土2層 不 明	底 部	朝下端～底部：無文	14住-Po.4	—		
14	埋 土 深鉢	1 c 縫合：沈縫 突起部：R.L.縫合系文		14住-Po.30	—			29	埋 土 不 明	底 部	朝下端：無文 突起部：側代痕	14住-Po.8	—		
15	埋土2層 深 鈎	不 明 口縫部：無文		14住-Po.18	—										

第46図 第14号住居跡出土土器(1)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土 2層	深鉢 A	3 c	「T」字状文様 L R 繩文充填	14住-Po. 12	31-13
2	炉 埋 設	深 鉢	不 明	胴部: Lc 燃系文	14住-Po. 1	—
3	炉 埋 設	深鉢 A	不 明	「S」字状文様 L R 繩文充填	14住-Po. 24	31-14
4	炉 埋 設	深 鉢	胴底部	胴部: Lr 繩文 脇下端～底部: 無文	14住-Po. 2	—

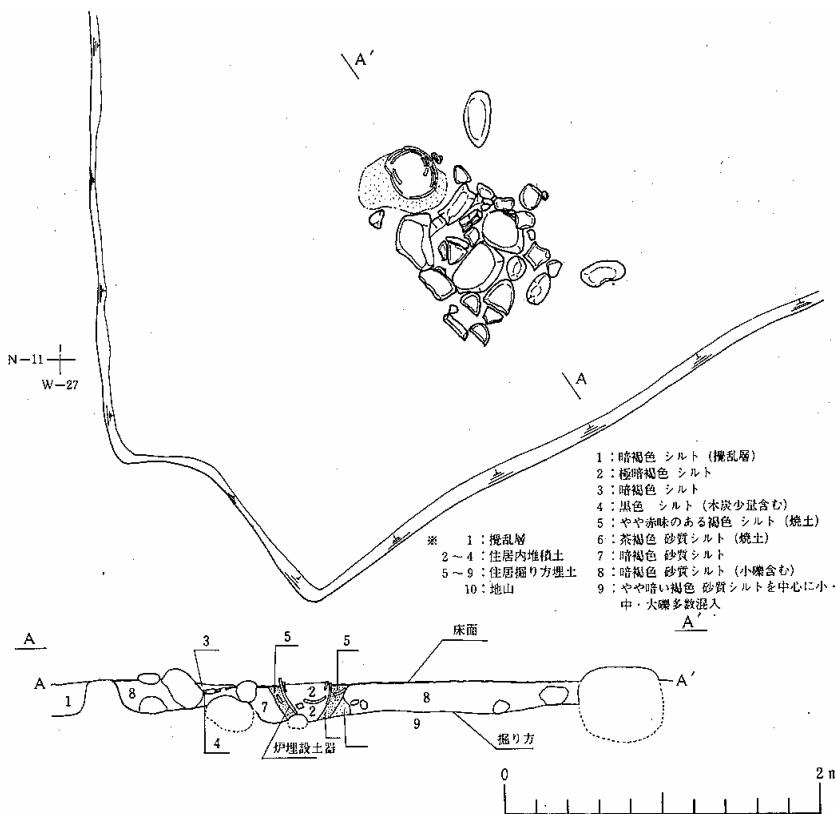
第47図 第14号住居跡出土土器(2)

(周溝)不明。検出できなかった。

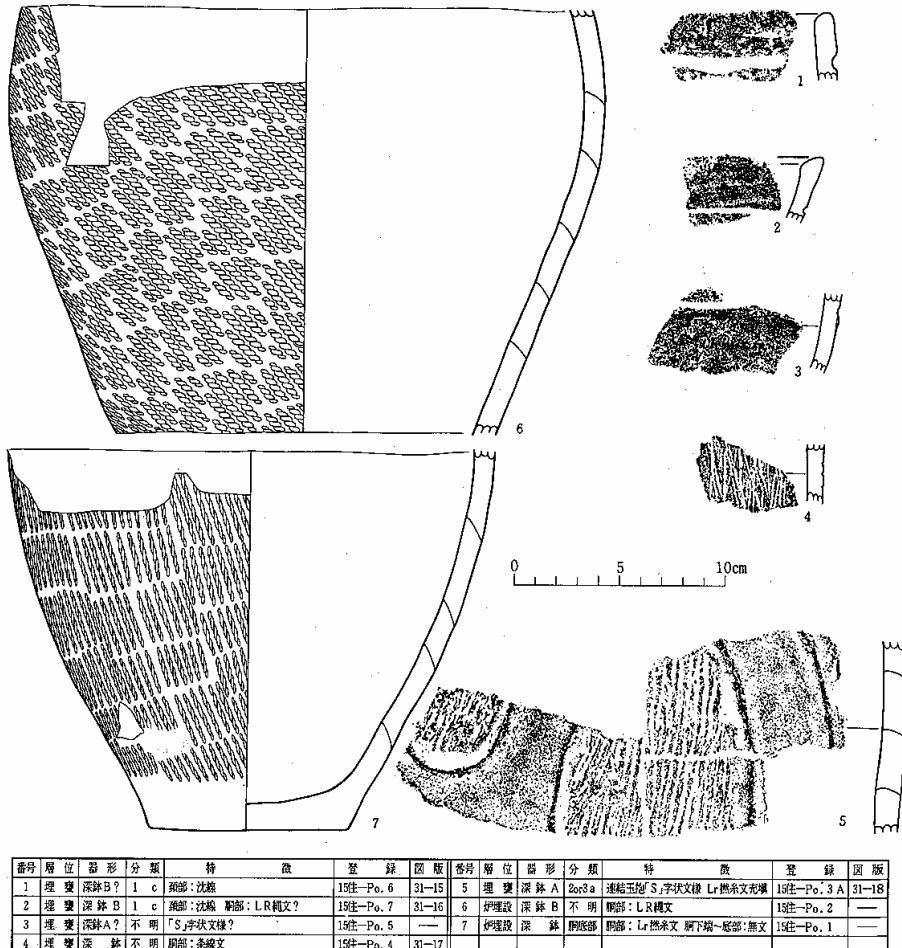
(炉)住居における炉の位置はプランが確認されないため不明である。長軸は北西—南東を指す。この炉は北西に埋設土器、南東に敷石石組部、その南東に9個のやや扁平な石を敷石石組部の側壁とほぼ同じレベルに敷いている部分の3部分から構成される土器埋設石組複式炉である。なお、埋設土器の周りには石囲^{注1)}は存在しない。敷石石組部はほぼ長方形を呈する。この炉の大きさは長軸約130cm、短軸約80cmである。埋設土器は二重であり、内側の土器は胴上3分の1だけである。外側には底部が欠損した土器を埋設している。埋設土器内の堆積土は極暗褐色を呈するシルトで木炭、焼土等は認められない。土器の周りの土は火熱により赤変している。また、敷石石組部内は底面直上1~2cm程の厚さで木炭、灰少量を含む黒色シルト層があり、その上に暗褐色のシルト層が堆積している。

(その他の施設)不明。検出できなかった。

(遺構の年代決定)炉埋設土器が最重要資料である。



第48図 第15号住居跡



第49図 第15号住居跡出土土器

注1) この住居跡は全体に攪乱がおよんでおり、残存していたのは炉とその周縁だけである。炉は埋設土器・敷石石組部・石組部から構成されるとしたが、埋設土器の周りに石組がなかったかどうかには確認が充分でない。また、敷石石組部の両側には床面敷石と考えられるものも一部ある。そして敷石部としたものは、それらの床面敷石と同じ面にあることから、第13号住居跡の場合と同様に炉の一部ではなく、床面敷石の一部である可能性が認められる。

以上の点からすれば、この住居跡の炉は土器埋設石周部・敷石石組部からなるもので、その周囲に床面敷石が存在した可能性がある。その場合、炉の大きさは長軸104×80cmとなる。

第16号住居跡

(遺構の確認) 遺跡南西緩斜面、AS-54・55区周辺の表土を20~30cm掘り下げるに褐色細砂層に達する。この面で遺構の存在(黒褐色土の落ち込みと炉跡の一部を発見)を確認し、第16住居跡とする。

(重複・増改築) 炉が重複している。住居の重複か否か十分検証できなかった。

(平面形・方向) 限丸台形の主体部に巾1.4mの張出し部が北東につく。主体部の大きさは上底3.1m、下底3.7m、高さ3.5m。

(堆積土) 表土下住居跡内には黒褐色ないしは黒色のシルト層がほぼ全域に分布する。住居北側ではその下にさらに褐色ないしは暗褐色の細砂層が分布し、床面となる。

(壁の状況) 壁は褐色の細砂層で部分的に崩れていますが、全体的に7cm程の高さで残っています。住居南側の壁沿には1~2列の縁石(抜取り痕もある)が認められる。

(床面) 炉土器埋設石囲部の周囲およびその北側に平坦な石が敷きつめられている。石と石の間には礫が詰められている部分もある。敷石は大部分河川成のものであるが、中には縁の角張った板状のものもある。床面の敷石のない所は柔らかい。住居北側の壁に近い部分では地山へ続く石が4個床面の上に突き出している。床面の下には掘り方がある。^{注1)}

(柱穴) 柱穴と考えられるピットは四限にあるP₁~P₄である。

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
床面からの深さ	34cm	34cm	28cm	22cm	4 cm	3 cm	4 cm	7 cm
堆積土	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 シルト	黒褐色 シルト	暗褐色 砂質シルト	黒褐色 シルト	黒褐色 シルト	黒褐色 シルト	黒褐色 シルト

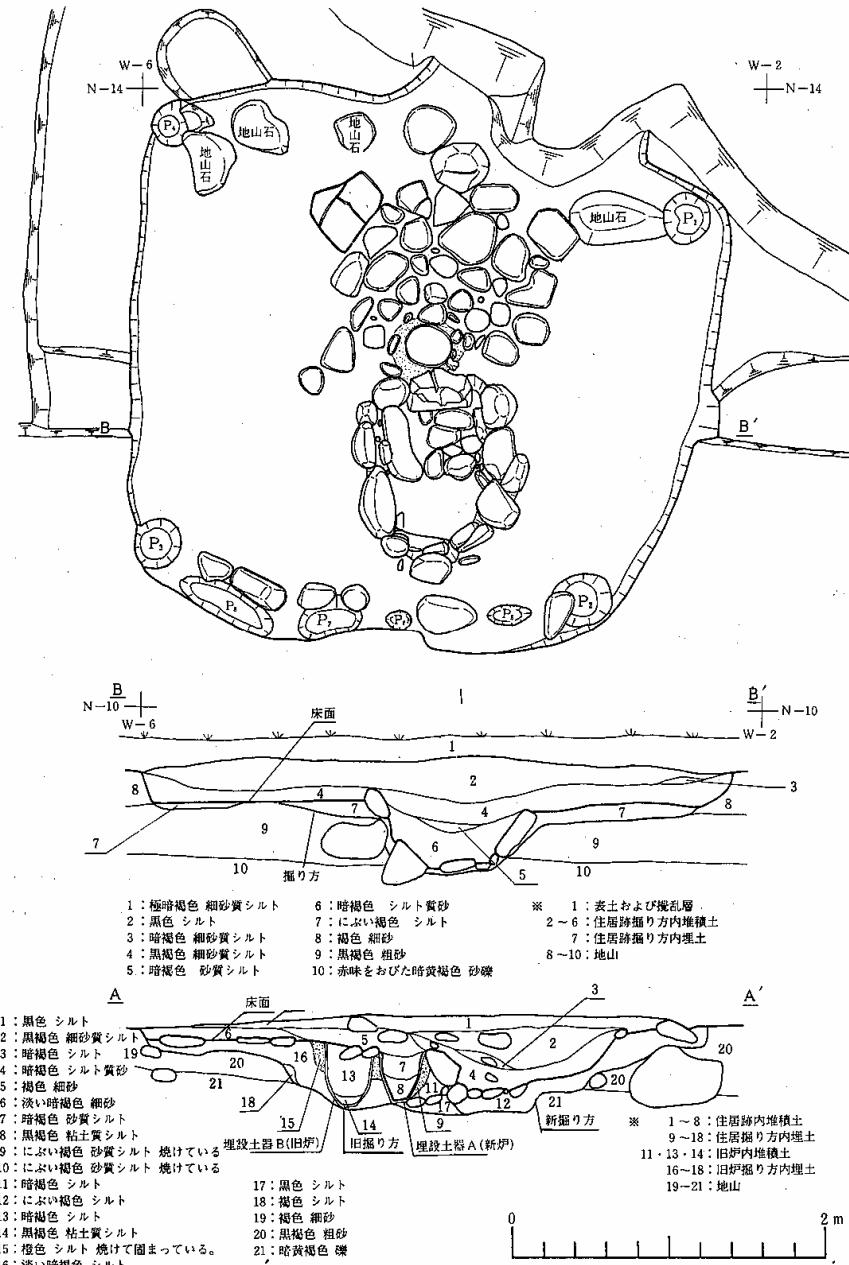
(周溝) 検出されなかった。

(炉) 位置は住居中央から南側の壁。長軸は北北東ー南南東方向。この炉は土器埋設石囲部・敷石組部・石組部(閉鎖)からなる土器埋設石組複式炉である。大きさは長軸174cm、短軸110cm。埋設土器内部下層には黒褐色粘土質シルトが入っている。敷石組部から焼土は検出されなかったが側壁、特に奥壁は著しく焼けている。石組部の底はたたきしめられたように固い。堆積土との間に肌わかれする。火熱を受けた痕跡はない。炉を立ち割ると、ちょうど重なり合った状態で北側に古い(壊されている)炉が検出された。残っているのは埋設土器と敷石組部の敷石のみであるが、同様な土器埋設石組炉と思われる。

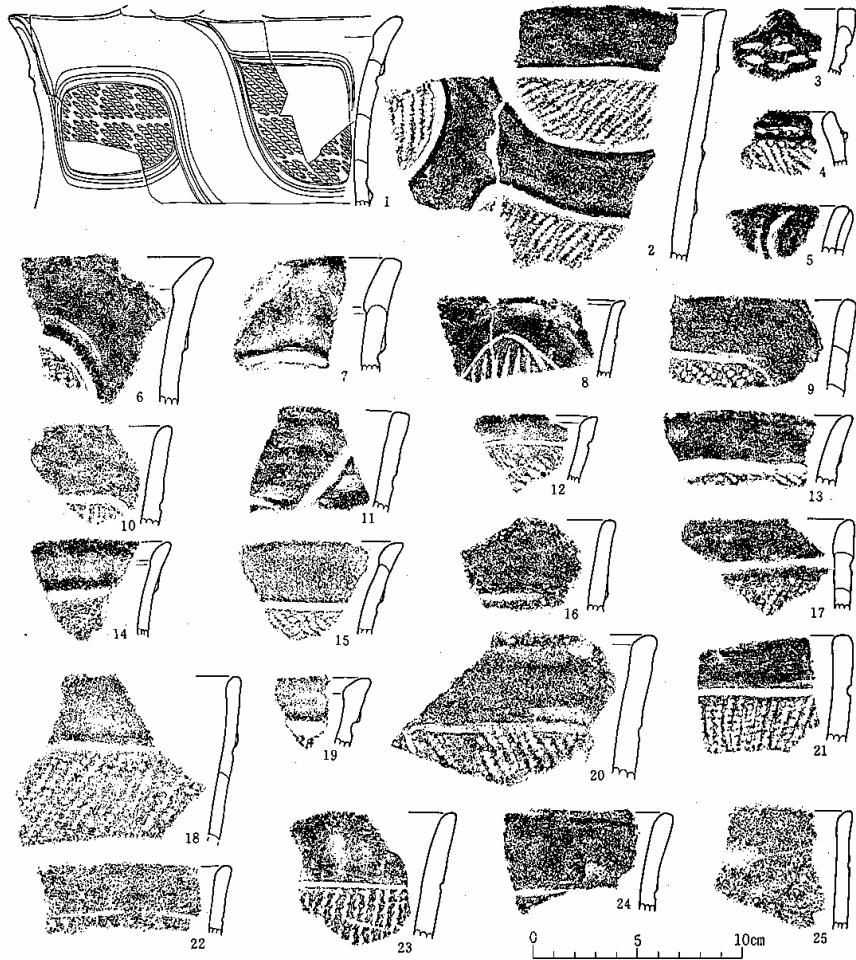
(その他の施設) 住居北東部に張出しがある。出入口と推定される。

(遺構の年代決定資料) 新炉およびその住居構築年代は炉埋設土器(A)によって推定される。新炉によって切られている旧炉の構築年代は埋設土器(B)によって推定される。

注1) 炉土器埋設石囲部を中心としてその北側に半円状の床面敷石がみられる。

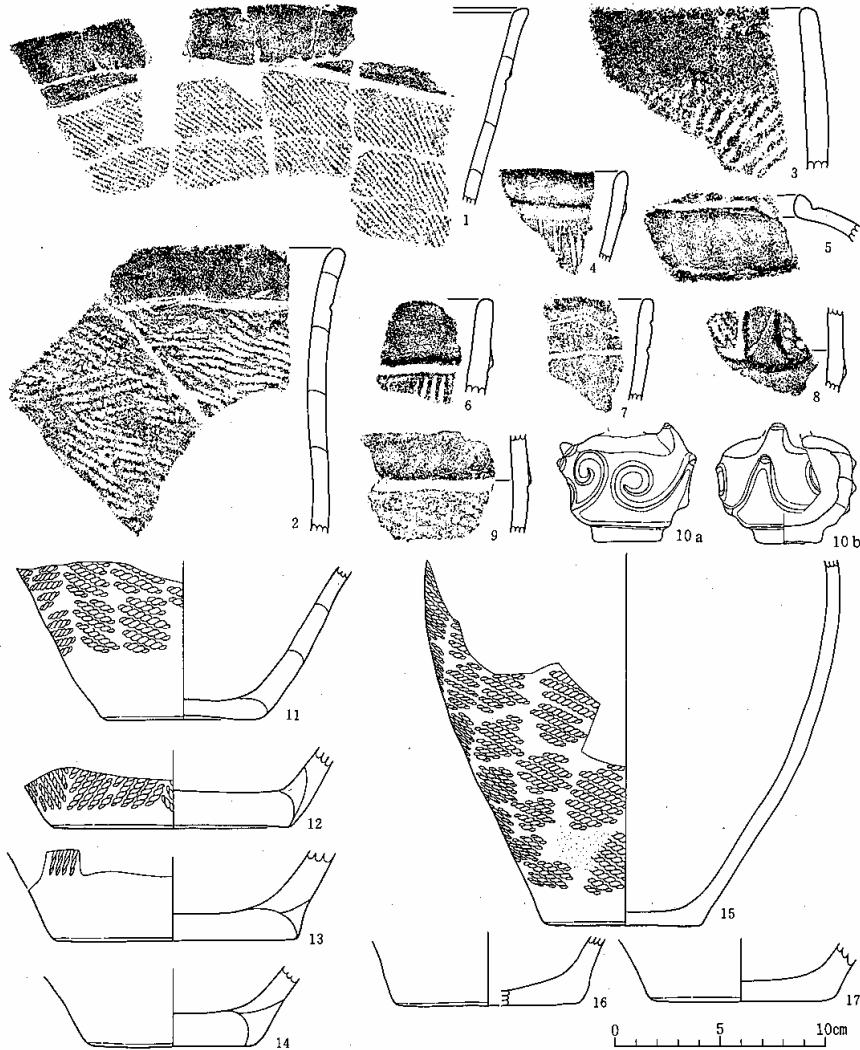


第50図 第16号住居跡



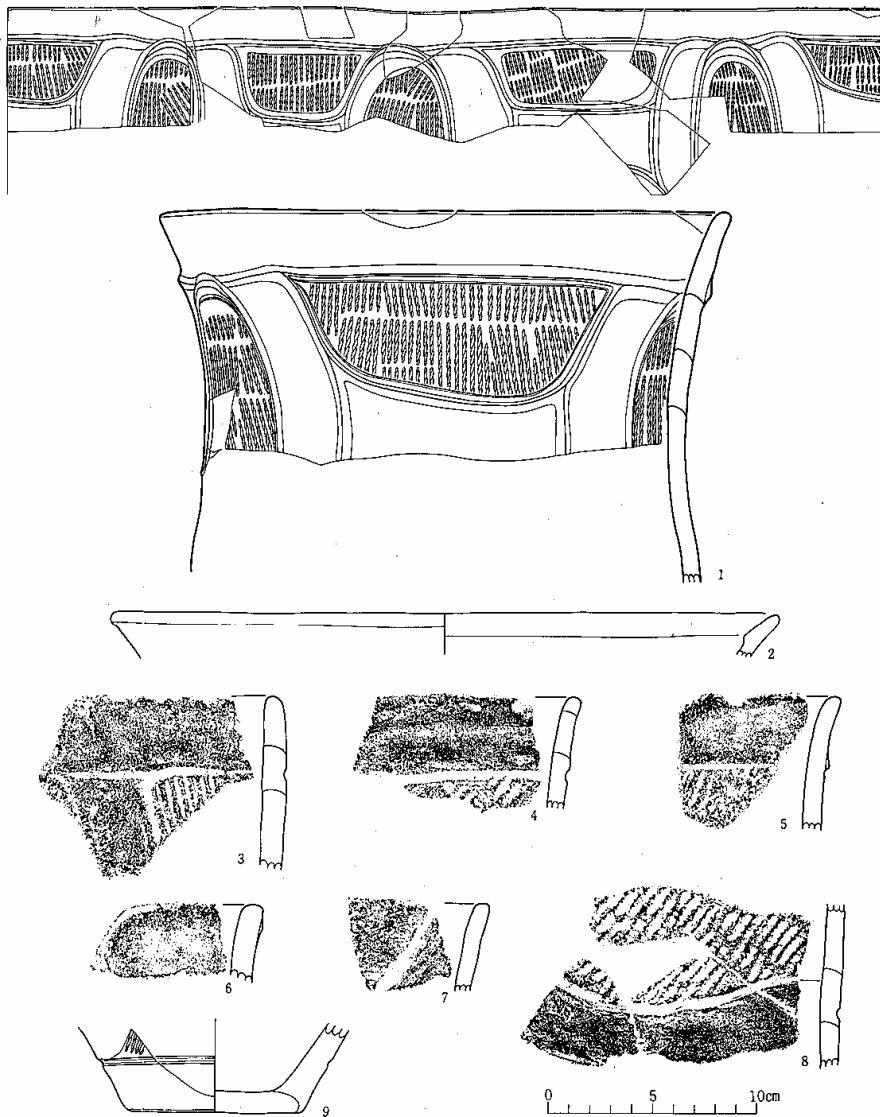
番号	層位	器形	分類	特 質	登 錄	因 版	番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	因 版
1	埋土2層	深鉢 A	3 c	「S」字狀文様 L R横文充填	16E-Po.14 31-19	—	14	埋土2層	深鉢 B	1 b	頭部：隆起 紋部：R L純文	16E-Po.61 —	—
2	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様 L R横文充填	16E-Po.26 31-20	—	15	埋土2層	深鉢 B	1 a	頭部：隆起 紹部：L R横文	16E-Po.42 —	—
3	埋土2層	深鉢 A	不 明	口輪部：刻突文	16E-Po.55 31-21	—	16	埋土2層	深鉢 B	1 b	頭部：隆起	16E-Po.45 —	—
4	埋土2層	深鉢 A?	不 明	頭部：刻突文	16E-Po.56 31-22	—	17	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：浅斜 紹部：R L純文	16E-Po.18 —	—
5	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様	16E-Po.54 31-23	—	18	埋土2層	深鉢 B	1 a	頭部：隆起 紹部：R L R横文	16E-Po.46 31-35	—
6	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様 L Rし縦文充填	16E-Po.50 31-24	—	19	埋土2層	深鉢 B	1 a	頭部：隆起	16E-Po.53 —	—
7	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様	16E-Po.48 31-25	—	20	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：浅斜 紹部：L R横文	16E-Po.29 —	—
8	埋土2層	深鉢 A	3 a?	玉粒文様 L r縦糸文充填	16E-Po.35 31-25	—	21	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：浅斜 紹部：R L純文	16E-Po.37 31-35	—
9	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様 L R横文充填	16E-Po.36 31-28	—	22	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：沈斜 紹部：R L純文	16E-Po.33 —	—
10	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様 L r縦糸文充填	16E-Po.43 31-30	—	23	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：浅斜 紹部：L r 無系文	16E-Po.41 —	—
11	埋土2層	深鉢 A	不 明	「S」字狀文様	16E-Po.49 31-27	—	24	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：沈斜 紹部：不明横文	16E-Po.30 31-31	—
12	埋土2層	深鉢 A?	不 明	「S」字狀文様 L R横文充填?	16E-Po.39 —	—	25	埋土2層	深鉢 B	1 c	頭部：沈斜 紹部：削平	16E-Po.31 —	—
13	埋土2層	深鉢 B	1 a	頭部：隆沈斜 紹部：L R横文	16E-Po.40 —	—							

第51図 第16号住居跡出土土器(1)



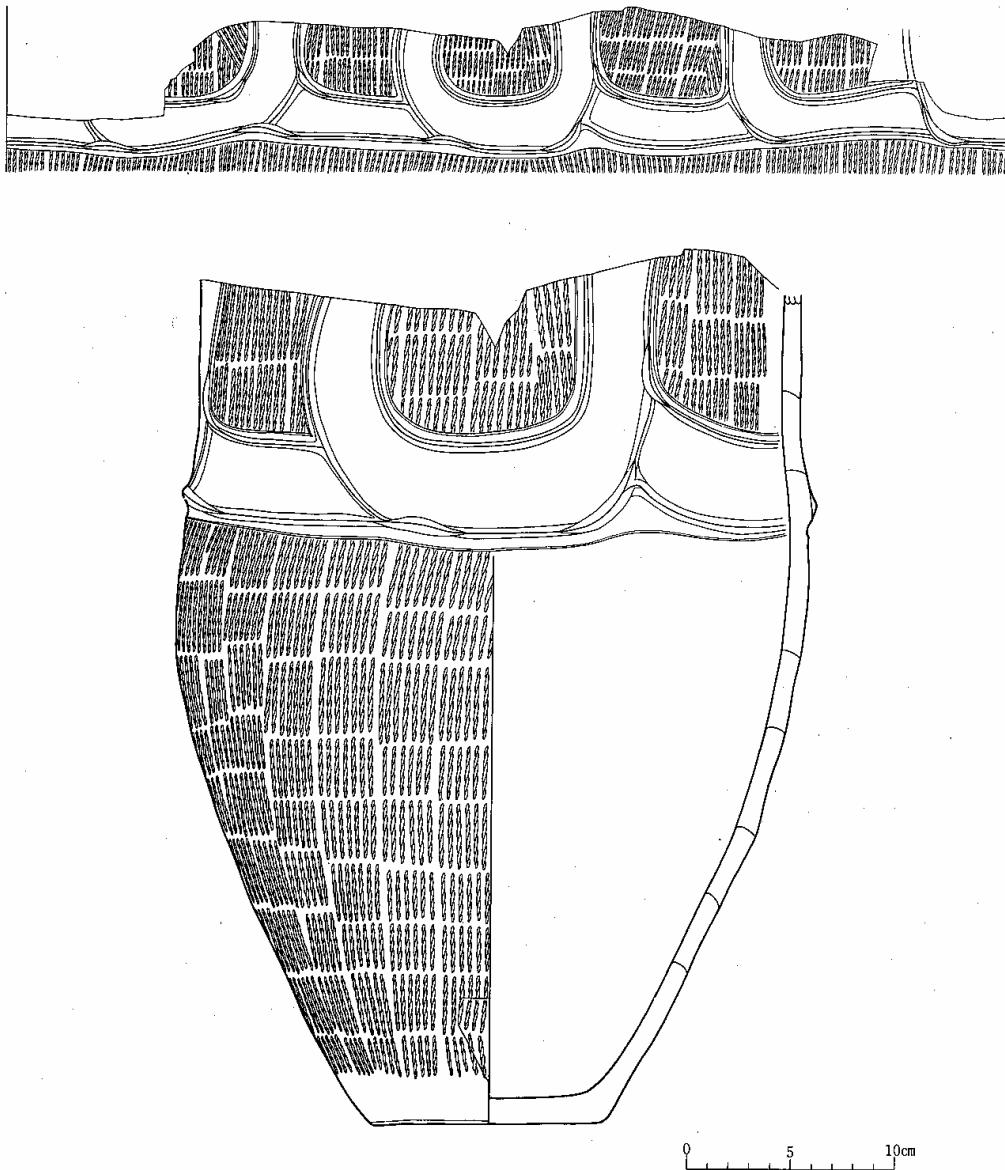
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土2層	深 筋 B	1 a	腹部：隆沈線 脊部：LR繩文	16住-Po.28	32-1	10	埋土2層	袖 穗土	苔		16住-Po.15	—
2	埋土2層	深 鉢 B	2 a	口縁部：無文 脊部：LR繩文	16住-Po.32	32-2	11	埋土2層	深	鉢	脇底部	16住-Po.16	—
3	埋土2層	深 鉢 B	2 a	口縁部：無文 脊部：Lr 繩文	16住-Po.34	32-3	12	埋土2層	深	鉢	底 部	16住-Po.13	—
4	埋土2層	深 鉢 B	1 b	腹部：隆線 脊部：条線文	16住-Po.47	31-29	13	埋土2層	深	鉢	底 部	16住-Po.11	—
5	埋土2層	不 明	姿 ?	口縁部：沈線がめぐる	16住-Po.51	—	14	埋土2層	深	鉢	底 部	16住-Po.10	—
6	埋土2層	深 鉢 B	1 a	腹部：隆沈線 脊部：Lr 繩文	16住-Po.44	31-32	15	層位不明	深	鉢	脇底部	16住-Po.17	—
7	層位不明	深 鉢 ?	不 明	口縁部：山形 平行波線文	16住-Po.58	31-33	16	埋 土	深	鉢	底 部	16住-Po. 8	—
8	埋土2層	深 鉢 A	不 明	連鎖 S字状文様 刻突文 LRL繩文充溝	16住-Po.57	31-34	17	埋土2層	深	鉢	底 部	16住-Po. 9	—
9	埋 土	深鉢 A ?	不 明	S字状文様 脊部：LR繩文	16住-Po.60	—							

第52図 第16号住居跡出土土器(2)



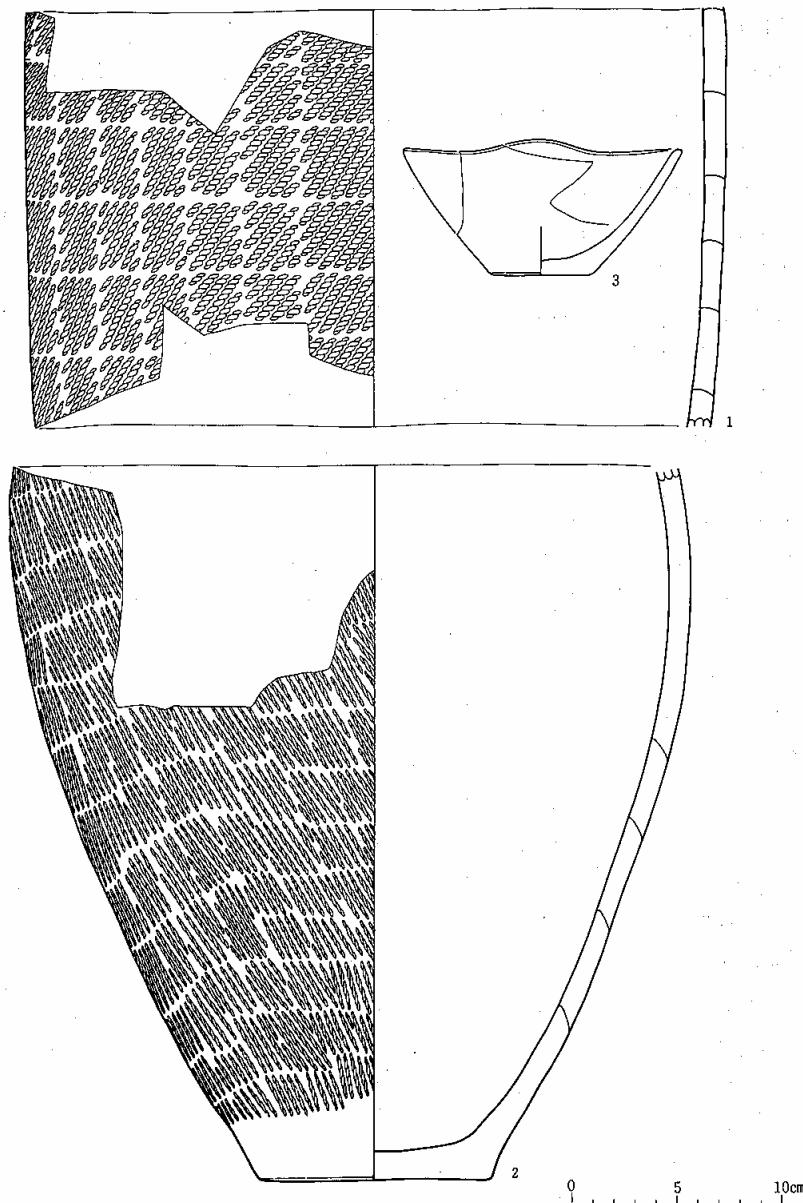
番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	図 版	番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	図 版
1	床面	深鉢A	3 a	玉泡文様 L+燃糸文光澤	16住-Po. 2	32-6	6	石組3層	深鉢A	不 明	「S」字状文様	16住-Po. 21	32-4
2	炉埋土	深 鉢	不 明	口横縞：無文	16住-Po. 5	—	7	炉 球土	深 鉢	不 明	口横縞：無文	16住-Po. 23	—
3	石机3層	深鉢A	3 a?	玉泡文様 L+燃糸文光澤	16住-Po. 19	32-5	8	炉 3 層	深鉢A	不 明	「S」字状文様 R L横文光澤	16住-Po. 20B	—
4	炉埋土	深鉢B	1 c	颈部：沈線 創部：R L横文	16住-Po. 22	—	9	炉 埋土	不 明	底 部	脚下端：平行波状線 底部：無文	16住-Po. 7	—
5	床 面	深鉢B	1 a	颈部：隆沈線 創部：R L横文	16住-Po. 24	—							

第53図 第16号住居跡出土土器(3)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉堀段	深鉢A	3 a	玉抱文様 Lr 摺糸文充填	16住-Po. 3	32-7

第54図 第16号住居跡出土土器(4)



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土	深鉢	不明	胴部: R.L.細文	16住-Po. 4	—
2	埋設	深鉢	胴底部	胴部: L.r.燃系文 脇下邊—底辺: 無文	16住-Po. 1	—
3	掘り方	浅鉢	—	4つの波状口縁 内・外面: 所磨	16住-Po. 6	—

第55図 第16号住居跡出土土器(5)

第17号住居跡

(遺構の確認) 遺跡の南端、BA-56区付近の平坦面に位置し、第16住居跡の北側に隣接する。表土が約30~40cm程あり、暗褐色を呈するシルト層に土器埋設石組複式炉跡、および敷石が確認された。

(重複・増改築) 炉の埋設土器を中心として約250~300cmの楕円状の範囲に敷石(上部敷石)が分布する。さらにその敷石下約2~5cmに黒褐色の砂質シルトがあり、その下にさらに、扁平な川原石がほぼ同じレベルで数10個が東西、南北それぞれ約3mの円状に分布する。この下部敷石の分布は炉埋設土器の西側に片寄っている。長軸の延長方向、すなわち埋設土器A・Bの西側に土器が1個埋設されており、土器A・Bにより切られた形で存在する。土器Cの周囲の土は火熱により赤変していることから炉跡の一部と推定されるが、新炉に伴うものではない。^{注3)}これに伴う炉石組部は存在しないが、現存の炉石組部により破壊されたものと思われる。

(平面形・方向) 上部敷石をもつ住居の壁と思われる立ち上がりが炉の東側約2mの距離に部分的に検出されたが、全体のプランを推定するには足らない。

(堆積土) 表土下に2~10cm程の厚さにポサポサした黒褐色を呈するシルト層が存在していたが、これが住居廃棄後の堆積土と推定される。攪乱が激しくほとんどが表土と混じりあっている。

(壁の状況) 前述したように上部敷石をもつ住居では東側に長さ約50cm、床面との比高2~3cm程に部分的に検出されたのみである。また、下部敷石をもつ住居の壁も不明である。

(床面) (重複・増改築) の項で述べた如く敷石が二重になっている。上部の敷石は一般に凹凸がひどく、敷石間のレベル差は大きいところで約10cmもある。また、下部敷石間のレベル差は大きいところで7~8cmあるが全体的には差は少ない。いずれの石もすべて扁平な川原石を使用している。

(柱穴) 検出できなかった。

(周溝) 不明。

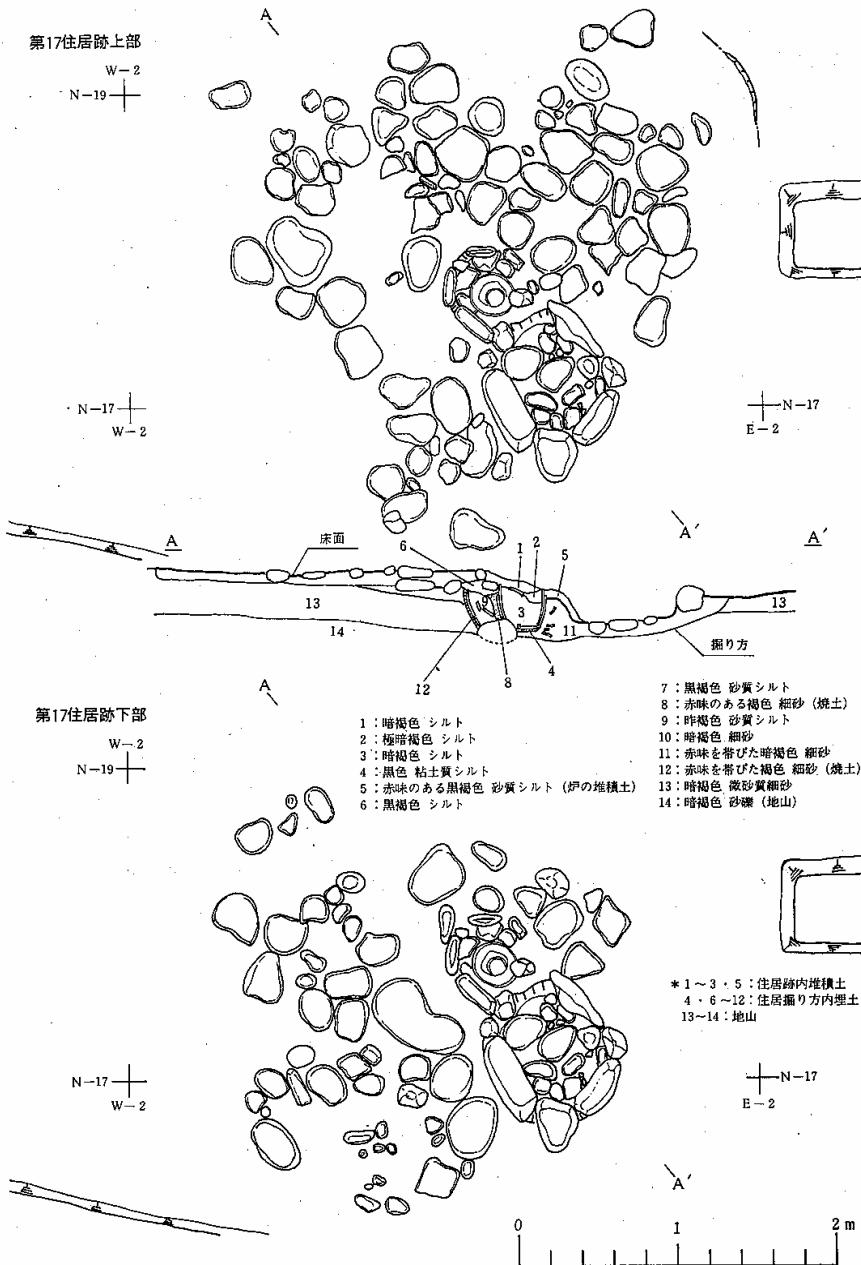
(炉) 住居における炉の位置は敷石の分布から推察すると中央部から南東側に寄っていると思われる。長軸は北西一南東を指す。炉は土器埋設石組部・敷石組部の二部分より構成される。埋設土器は胴下半部を欠いており、その底に土器底部を別に敷いている。

(その他の施設) 不明である。

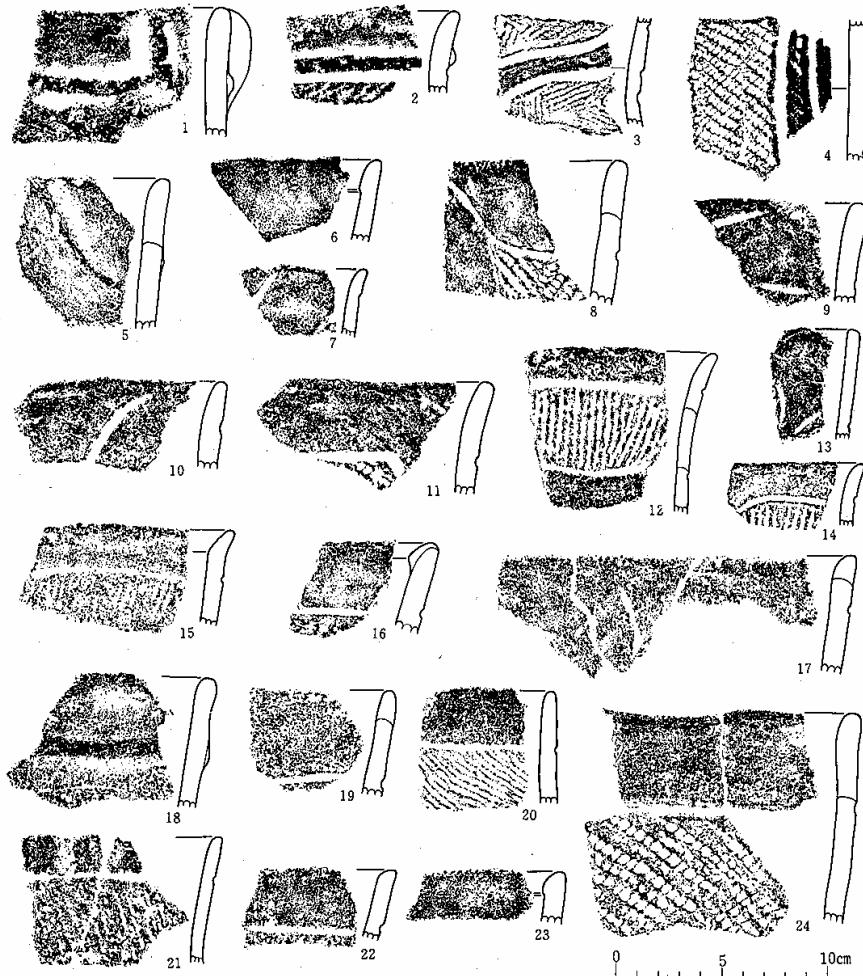
(遺構の年代決定) 炉埋設土器A・Bが最重要資料である。

注1) 埋設土器が二重になっている。 注2) 埋設土器C

注3) 以上のように、炉および床面に新旧二時期がある。しかし、両者とも位置をほとんど変えていないことから、炉の作りかえ、床の貼りかえと考えられる。

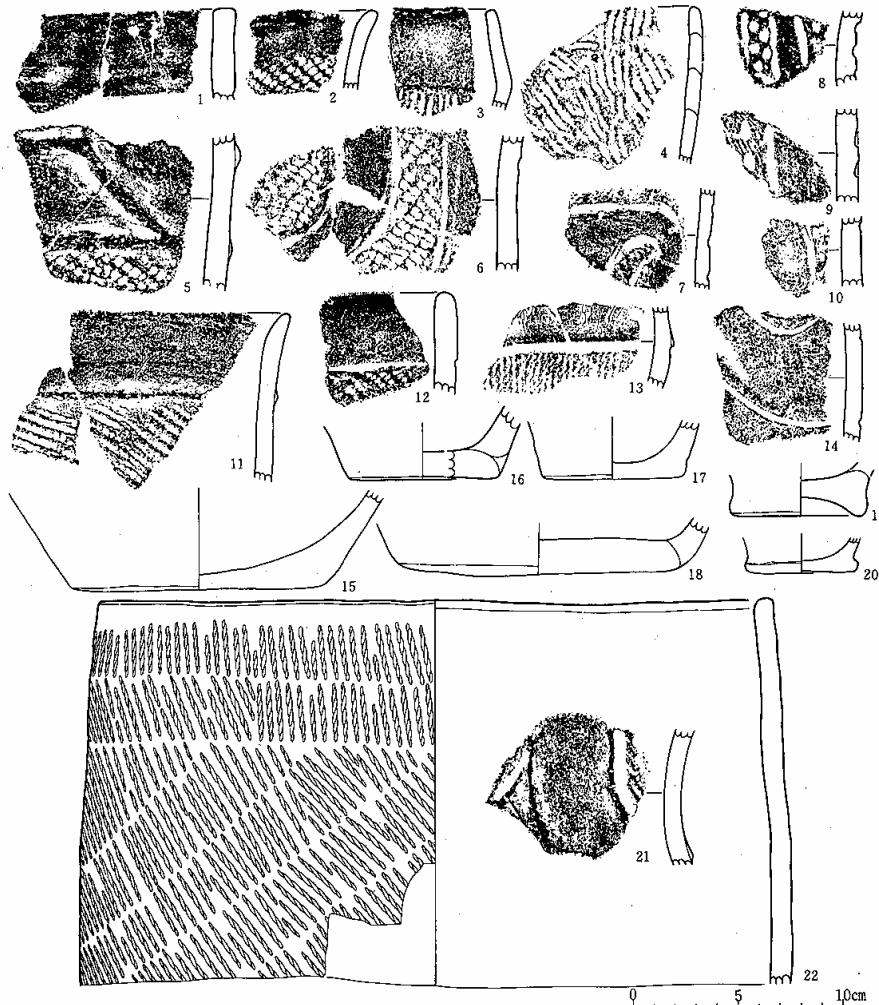


第56図 第17号住居跡



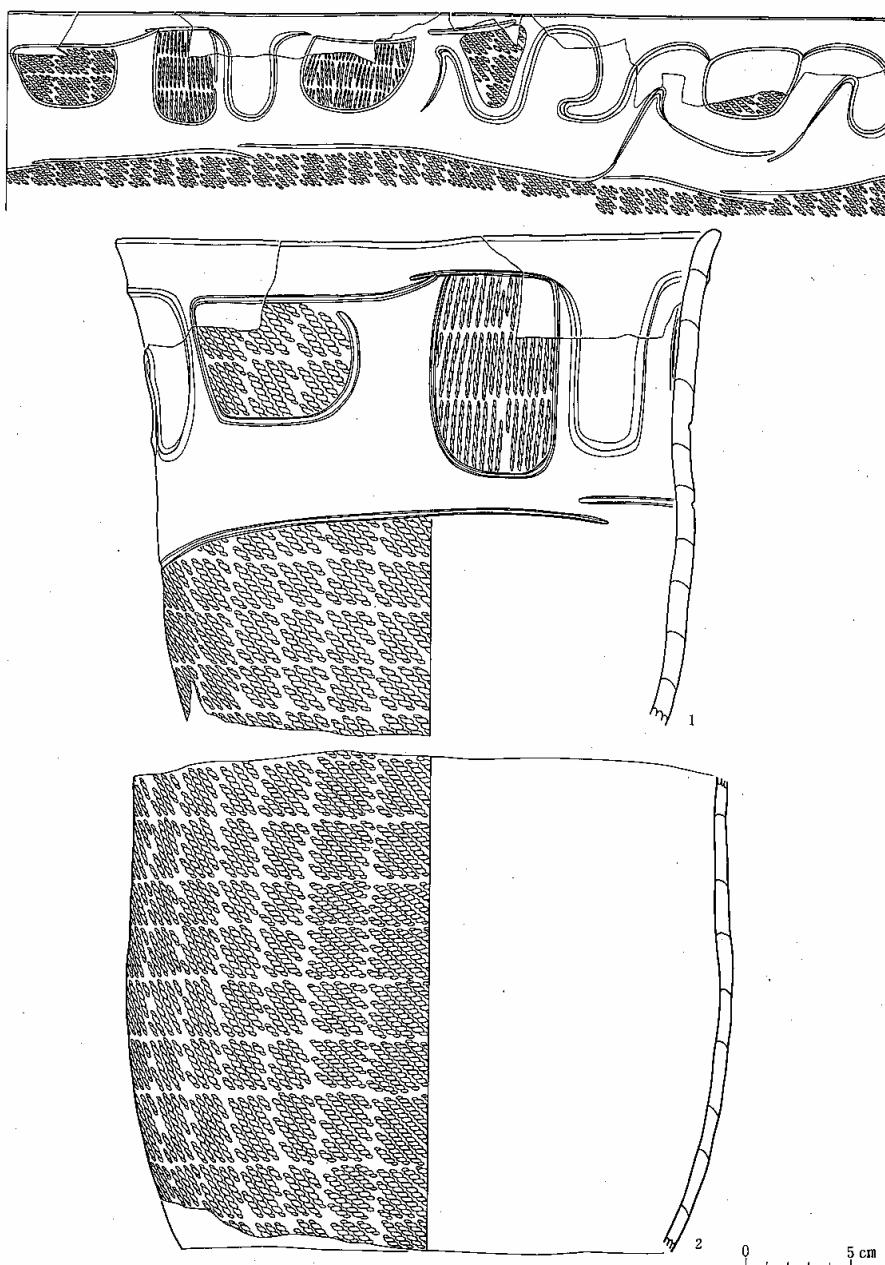
番号	層位	器形	分類	特徵	登録	図版	番号	層位	器形	分類	特徵	登録	図版
1	堆土	深鉢 A	I	「L」字下酒縫文	17住-Po.23	32-9	13	埋土	深鉢 A	不明	「S」字状文様?	17住-Po.43	32-17
2	埋土	深鉢 A	II	梯形階文 L R縫文	17住-Po.24	32-8	14	埋土	深鉢 A	不明	「S」字状文様 L R燃系文充填	17住-Po.27	—
3	層位不明	深鉢	II	梯形階文 L R縫文充填	17住-Po.48	32-11	15	層位不明	深鉢 A	不明	「S」字状文様 L R燃系文充填	17住-Po.39	33-2
4	層位不明	深鉢	II	梯形階文 L R縫文	17住-Po.47	32-10	16	埋土	深鉢 A?	不明	「S」字状文様 L R燃系文充填	17住-Po.19	—
5	層位不明	深鉢 A	不明	「S」字状文様	17住-Po.25	32-12	17	埋土	深鉢 A	不明	「S」字状文様	17住-Po.38	33-4
6	層位不明	深鉢 A?	不明	口縫縫無文	17住-Po.37	—	18	埋土	深鉢 B	1 c	縫部: 隆起 周部: 楽落	17住-Po.16	33-5
7	埋土	深鉢 A	不明	「S」字状文様	17住-Po.42	32-16	19	埋土	深鉢 B	1 c	縫部: 楽線	17住-Po.28	—
8	埋土	深鉢 A	不明	連続「S」字状文様 L R縫文充填	17住-Po.17	32-13	20	層位不明	深鉢 B	1 c	縫部: 楽線 間部: L R縫文	17住-Po.33	33-6
9	埋土	深鉢 A	不明	「S」字状文様	17住-Po.34	32-14	21	埋土	深鉢 B	1 c	縫部: 楽線 間部: R燃系文	17住-Po.50	33-7
10	層位不明	深鉢 A	不明	「S」字状文様	17住-Po.31	32-15	22	埋土	深鉢 B	1 c	縫部: 楽線 周部: 楽落	17住-Po.29	—
11	層位不明	深鉢 A	不明	「S」字状文様 L R縫文充填	17住-Po.32	33-1	23	埋土	深鉢 B	不明	口縫縫無文	17住-Po.35	—
12	埋土	深鉢 A	不明	「S」字状文様 L R燃系文充填	17住-Po.26	33-3	24	埋土	深鉢 B	1 c	縫部: 楽線 周部: L R縫文	17住-Po.39	33-8

第57図 第17号住居跡出土土器(1)



番号	層位	器 形	分類	特 徴	登 録	図 版	番号	層位	器 形	分類	特 徴	登 録	図 版
1	附近不明	深鉢 A	1 c	底部：沙粒	17住-Po. 40	—	12	炉壁鉢内	深鉢 B	1 c	底部：沙砾 創部：LR繩文	17住-Po. 13	—
2	埋土 2層	深鉢 B	2 a	口縁部：無文 刨部：LR繩文	17住-Po. 18	—	13	炉壁鉢内	深鉢 A	不明	「S」字状文様 剔下部：RLR繩文	17住-Po. 11	—
3	埋 土	深鉢 B	2 a	口縁部：無文 刨部：Re撫糸文	17住-Po. 36	33-9	14	炉壁鉢内	深鉢 A	不明	「S」字状文様？	17住-Po. 14	33-18
4	埋土 2層	深鉢 B	2 b	口縁一部部：LR繩文	17住-Po. 20	—	15	埋 土	不明	底部	削下端～底部：無文	17住-Po. 4	—
5	埋 土	鉢 A	不明	邊縁 S字状文様 扉下部：LR繩文	17住-Po. 45	33-14	16	裙位不明	不 明	底部	削下端～底部：無文	17住-Po. 56	—
6	附近不明	深鉢 A	不明	「S」字状文様 RL繩文光澤	17住-Po. 49	33-16	17	埋土 2層	不 明	底部	削下端～底部：無文	17住-Po. 6	—
7	削位不明	深鉢 A	不明	「S」字状文様 LR繩文光澤	17住-Po. 46	33-15	18	炉壁鉢 A	不 明	底部	削下端～底部：無文	17住-Po. 5	—
8	埋 土	鉢 II	不明	帶状文 刺突文光澤	17住-Po. 54	33-11	19	削位不明	不 明	底部	削下端～底部：無文	17住-Po. 55	—
9	削位不明	深 鉢 II	不明	帶状文 刺突文光澤	17住-Po. 53	33-12	20	埋 土	不 明	底部	削下端～底部：無文	17住-Po. 7	—
10	埋 土	深鉢 A	不明	「S」字状文様 LR繩文光澤	17住-Po. 52	33-10	21	炉壁鉢 C	深鉢 A	不明	邊縁 S字状文様	17住-Po. 8	33-17
11	炉壁鉢内	深鉢 B	1 b	地縁：陶輪 刨部：LR繩文	17住-Po. 9	33-12	22	炉壁鉢 C	深鉢 B	2 b	口縁一部部：L-撫糸文	17住-Po. 2	33-19

第58図 第17号住居跡出土土器(2)



番号	場所	器形	分類	特徴	登録	図版
1	炉壺段A	深鉢A	3 d	並列区間文様 L R 繩文・R e 摺糸文充填	17住-Po. 1	33-20
2	炉壺段A	深鉢B	不明	胴部：L R 繩文	17住-Po. 3	---

第59図 第17号住居跡出土土器(3)

第1小豎穴遺構

第9住居跡の西側に存在する。形態は直径約110cmの円形で、遺構確認面からの深さは約30cmである。内部は中～巨礫を埋めてあり、特に底部近くの巨礫間は中礫で固めてある。遺構中心からやや北寄りの暗褐色土上面から頭部、腕部、脚部を欠いた板状土隅が出土した。しかし、表土直下であるためこの遺構に伴うものかはつきりしない。

第2小豎穴遺構

第9住居跡の東側に隣接した地点で表土直下の黄色砂礫層上面で確認された。ほぼ楕円形を呈し、長軸は北東一南西を指す。その北東端に一個体の深鉢形土器が胴上半を欠き土圧によりつぶされた状態で検出された。小豎穴内の土は黄味のある暗褐色砂質シルトで細・中礫を含みサラサラしているが、土器内の土は黒褐色シルトである。

第3小豎穴遺構

第2小豎穴遺構の東側に隣接した地点で検出された。形態、規模の点で第2小豎穴と近似する。遺構内東端に胴下半から底部に至る土器が底部を上にし、ふせた状態で出土した。遺構内の土は小～大礫を含む黒味の強い暗褐色砂質シルトである。

第4小豎穴遺構

第5住居跡の東側約1mの距離に隣接する。かどのとれた台形を呈し深さは140cm程ある。埋土1～5層は黒褐色ないし黒褐色のシルト層である。遺物は第5、7層から少量の土器片が出土しただけである。第9、11、13、14、15層は地山の砂礫層に黒褐色のシルトが少量混入する程度である。10、12層はシルトが主体をなす。

第5小豎穴遺構

第8住居跡の南側に位置し、住居と切り合った形で存在する。長径約180cm、短径約120cmの楕円からダルマ形を呈し、底部は二段になって西側の方がやや深い。東端には地山に食い込んでいる巨礫がほぼ掘り方の全体を埋める。

西側の一段低い部分では底面より約5cm程のところで、相当強く踏み固められて一つの面をなす。この面上より少量の骨片が出土している。遺構の南端では後世のピットとの切り合いが認められる。

第6小豎穴遺構

第11a住居跡の南東端に位置し炉の掘り方と切り合っている。長軸が南北を指し約140cm、短軸が約110cm程の楕円形を呈し、深さは約50cmある。中央よりやや南側上部に土器を一個垂直に埋めている。土器の内部には特記すべき混入物はない。

第7小豎穴遺構

第6小豎穴遺構の北東、第11a住居炉跡の東側に隣接し、長軸約180cm、短軸約140cmの楕円

を呈し長軸は南東一北西を指す。遺構の南端に土器が垂直に埋設されており木炭を少量混入している。シルトで埋められている。また、掘り方向は中礫および、大礫が多量に混じる砂質シルトで埋めている。

第8 小豎穴遺構

第14住居跡の西側約60cm離れた地点で表土下の暗褐色を呈する砂質シルト層でこの遺構が確認された。直径約100cmのほぼ円形を呈し深さは約60cmである。壁はほぼ垂直で、底面は凹凸が少ない。内部の埋土3層からは少量の骨片、木炭、および縄文中期末から後期初頭にかけての土器片数十点と袖珍土器一個等が出土している。また、中～大礫も多く含み地山の黄褐色砂礫層と同質のものがブロック状に混入している。遺構南端の1層上面には数個の扁平な川原石が重なって存在するが、これは後世に落ち込んだものであろう。

第9 小豎穴遺構

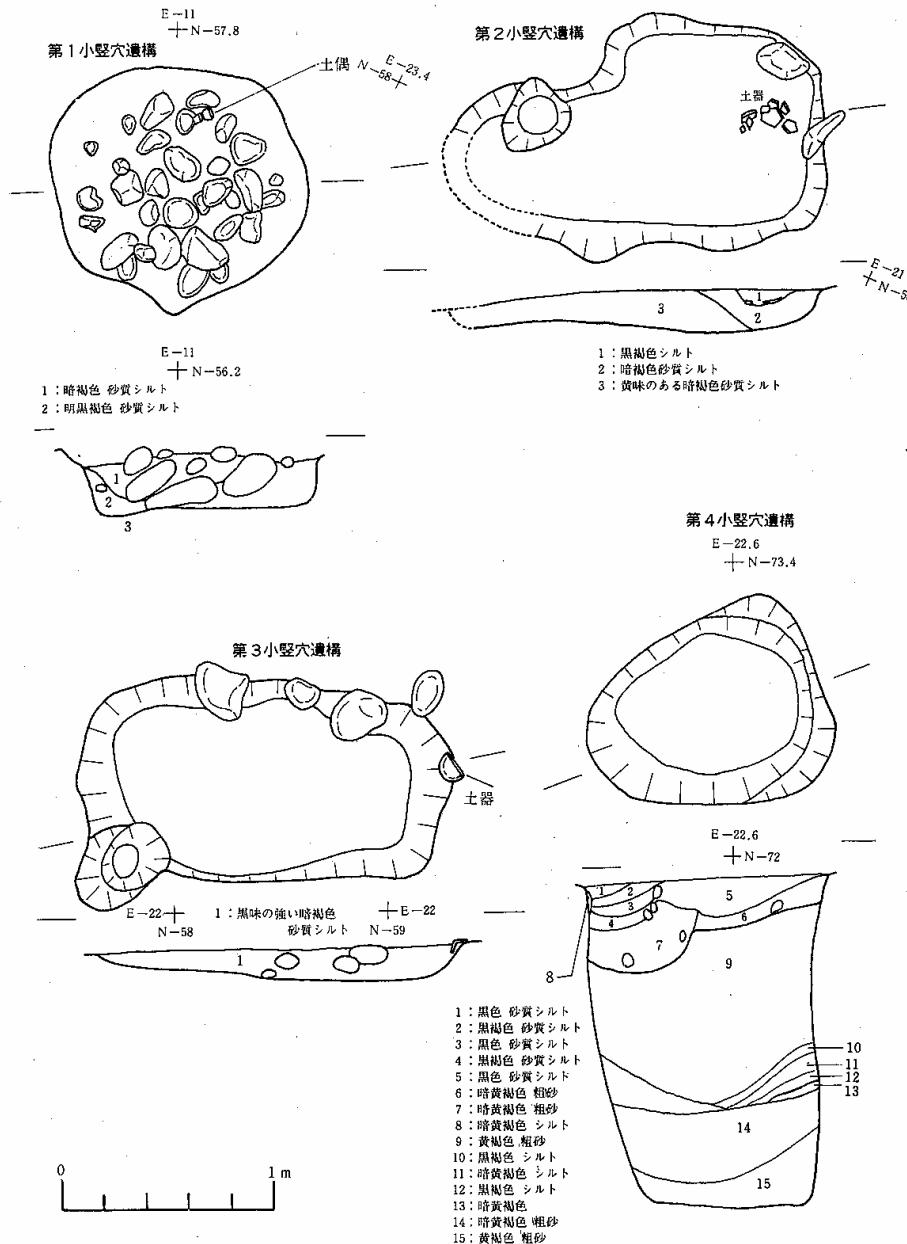
第14住居跡の東方約4m程離れ、表土直下の黄褐色砂礫層で遺構を確認した。長軸約140cm、短軸約70cmの楕円からややダルマ形を呈し、長軸は南西一北東を指す。長軸の西端に深鉢が一個垂直に埋設されている。掘り方の底部は埋設された土器のある部分が最も深く、北東に行くに従ってゆるい傾斜であがっていく。掘り方内は粗砂、細～大礫を多数含む暗褐色の砂質シルトで埋めてある。

第10 小豎穴遺構

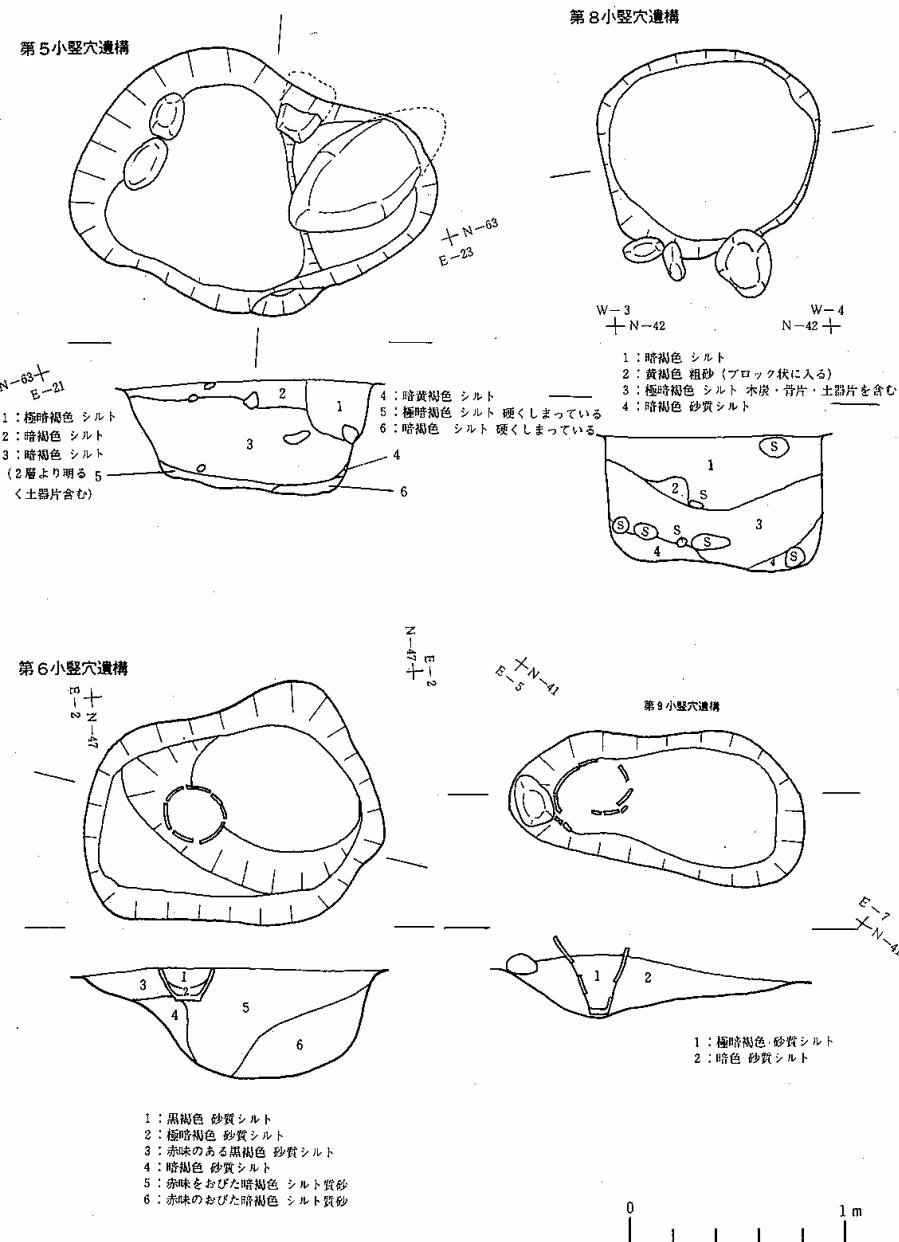
第16住居跡の南方約4.4mの地点で、暗褐色シルト質砂層に達した時、埋設土器を伴う遺構が確認された。長軸約200cm、短軸約110cmの楕円形を呈し、深さは最深部で遺構検出面より約62cmある。遺構は底部近くで黄褐色砂礫層をも掘り込んでおり、底面は舟底形を呈す。遺構の中心部よりやや南側に、底部に穿孔のある土器が埋土上部にやや東側に傾けて埋設してある。土器底部の孔は径2.5mの円形を呈し、底部中心よりやや端に寄っている。また、土器内には同土器の口縁部破片を含む極赤褐色の砂質シルトが存在し、底部より1～2cm程が固くしまっている。また、掘り方内の埋土は小～大礫を含む黒褐色の砂質シルトで土器、石器等の遺物は全く含まない。

第11 小豎穴遺構

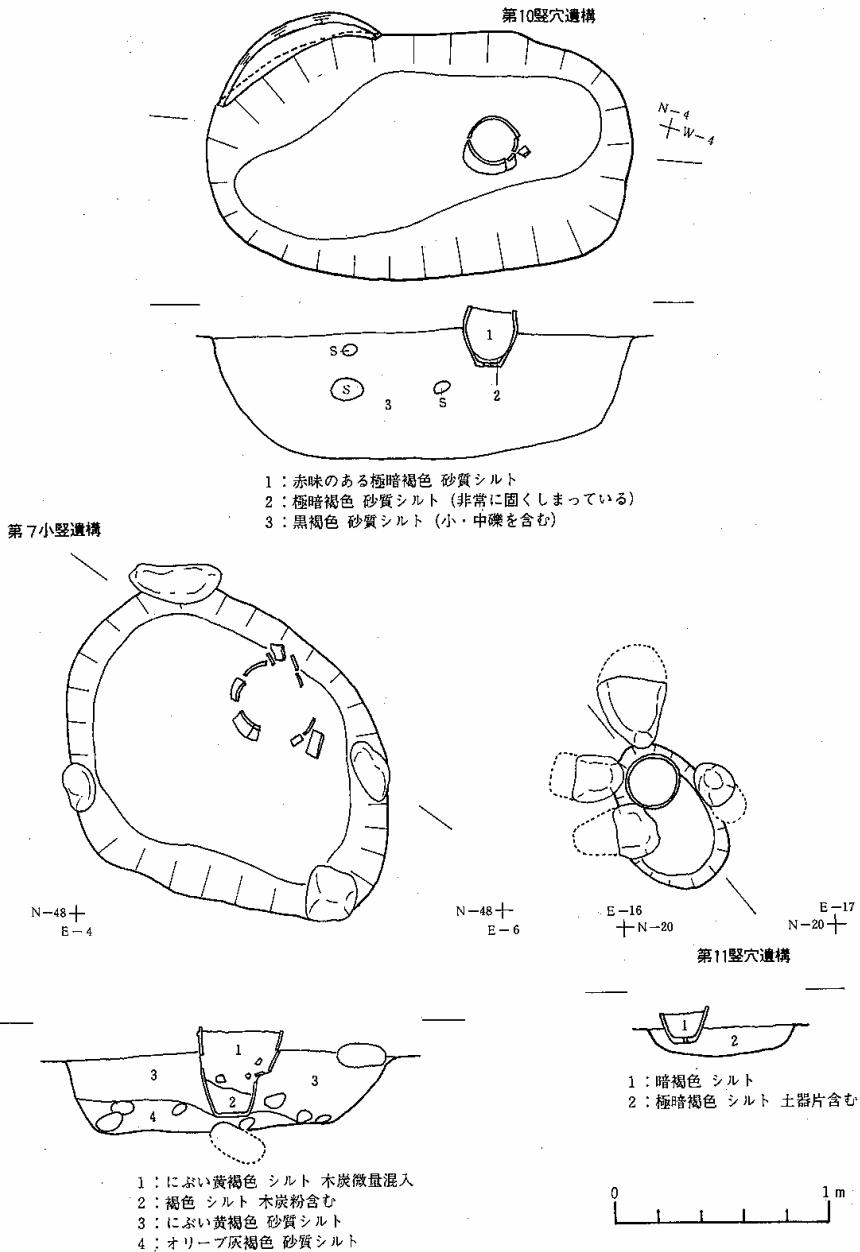
遺跡の南側平坦面の表土下暗褐色シルト層で確認された遺構である。長軸約70cm、短軸約50cmの楕円形を呈し長軸は南東一北西を指す。遺構検出面からの深さは浅く12cmであるが、遺構の北端に埋設された土器は地山に食い込んでいる四個の巨礫で囲まれている。この土器の底部中央には径約2cmの穿孔がある。埋土は一層で埋設土器とは異個体の土器片が数点出土している。



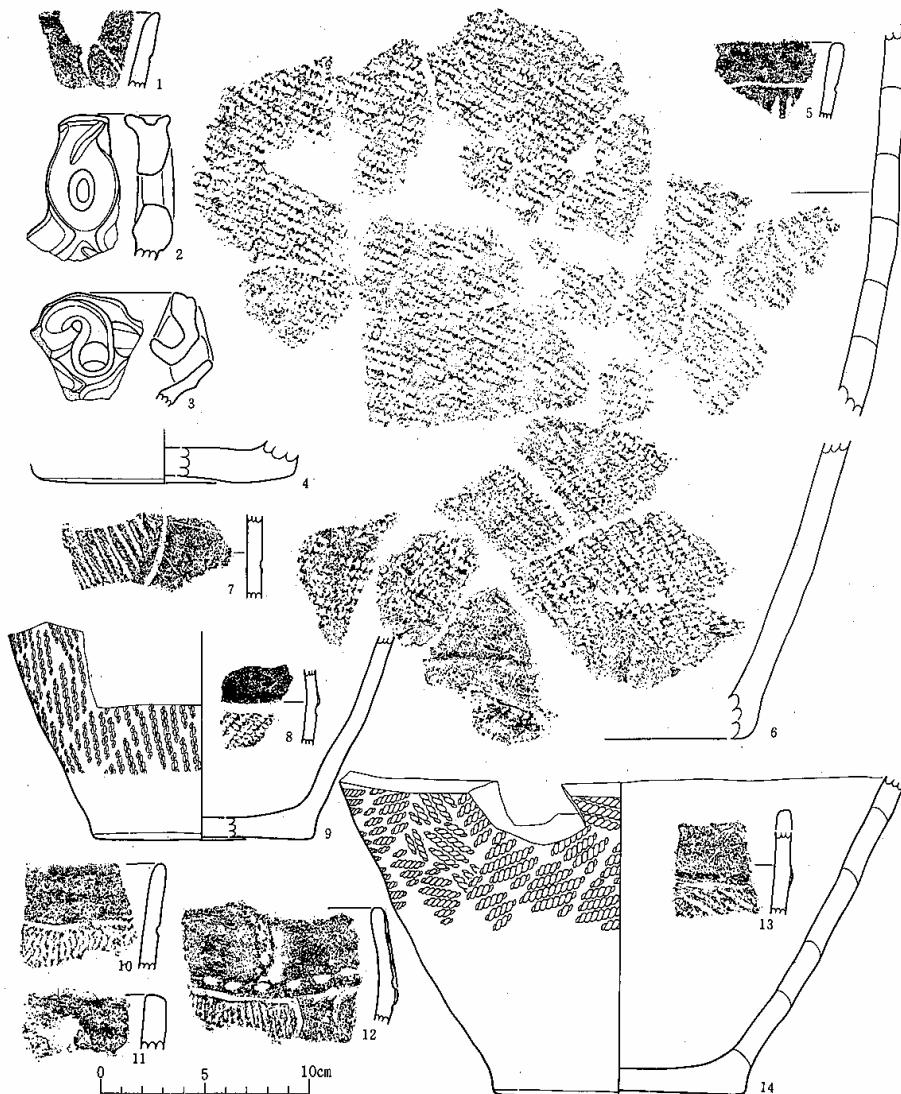
第60図 第1~4小堅穴遺構



第61図 第5・6・8・9小竪穴遺構

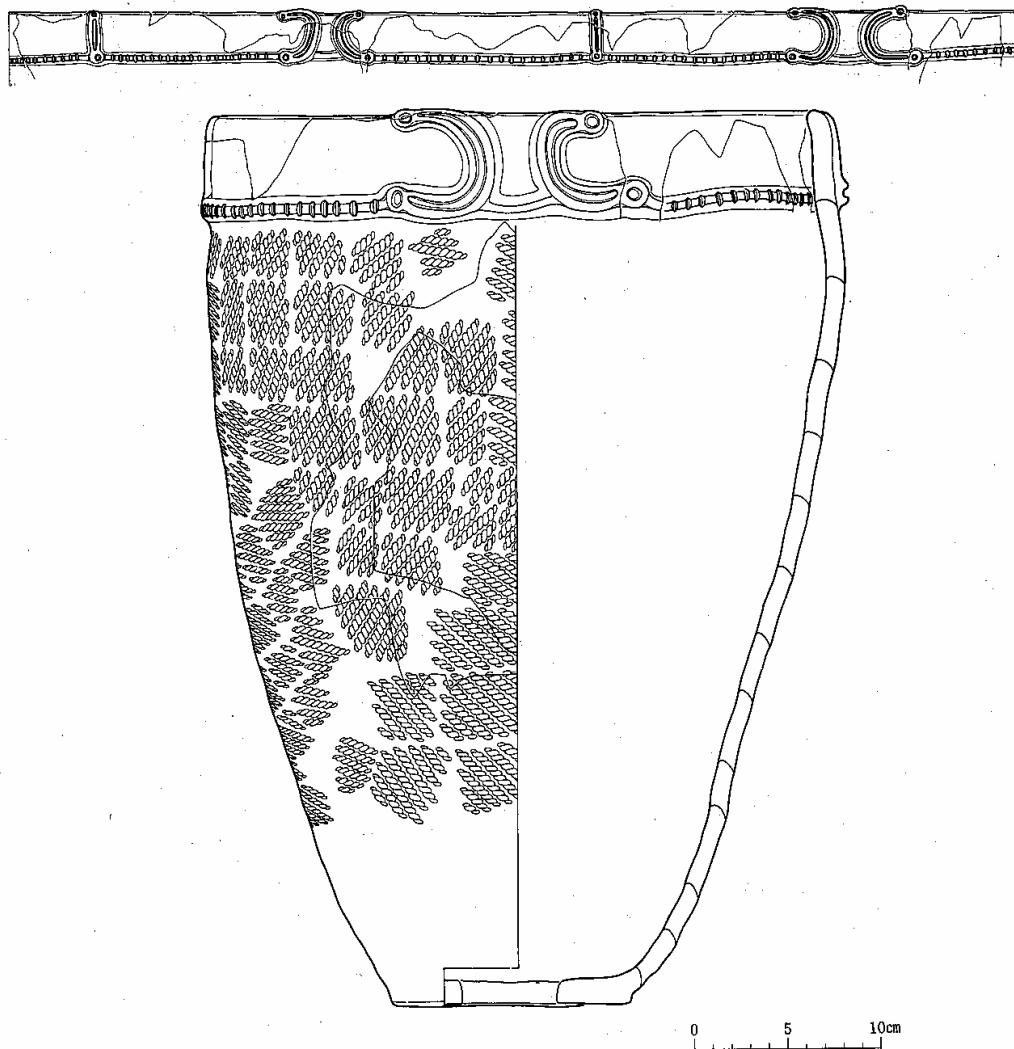


第62図 第7・10・11小堅穴遺構



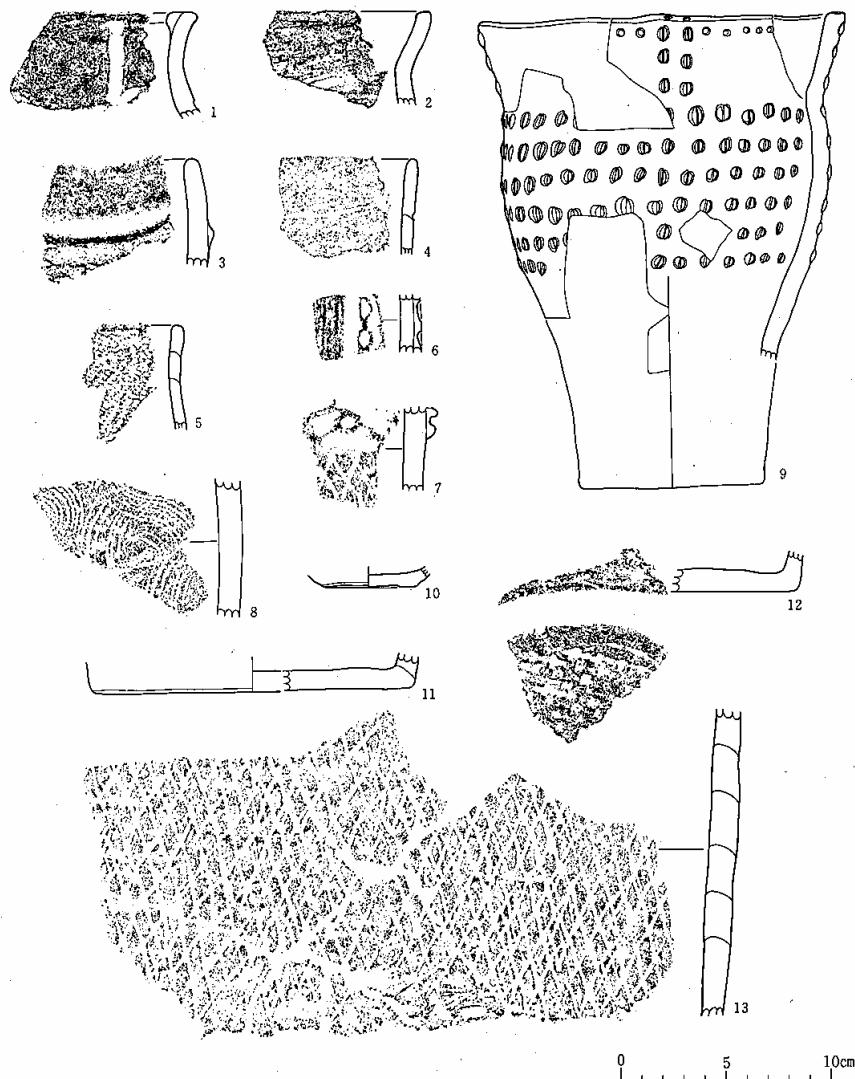
番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋土3層	深鉢A	不明	「S」字状文様	1小-Po. 2	——
2	埋土3層	突起	「S」字状文起	1小-Po. 1	——	3小-Po. 2
3	埋土	注口付突起	不明	2小-Po. 2	——	3小-Po. 1
4	埋土	不 明	底部:不明	2小-Po. 1	——	5小-Po. 3
5	埋土	深鉢B	1 c	腹部:沈線 腹部:不明燃系文	2小-Po. 3	「/」字状文様 6小-Po. 2 34-3
6	埋土	深 鉢	腹部:R	腹部:LR燃文 腹下端一部:無文	2小-Po. 4	腹部:R燃文 6小-Po. 4
7	埋土	深鉢A	不明	「S」字状文様 R2燃系文支渠	3小-Po. 3	——
8	埋 土	深鉢A	不明	「S」字状文様	8	8
9	埋 土	深 鉢	鋸齿部	腹部:R L R燃文 腹下端一部:無文	9	9
10	埋 土	深鉢B	1 c	腹部:沈線 腹部:L;燃系文	10	10
11	埋 土	深鉢B	1 b	腹部:沈線 腹部:LR燃文	11	11
12	埋 土	深鉢A	4	「/」字状文様 L燃系文充填	12	12
13	埋 土	深鉢B	1 b	腹部:沈線 腹部:LR燃文	13	13
14	埋 土	深 鉢	鋸齿部	腹部:LR燃文 腹下端一部:無文	14	14

第63図 第1～6小堅穴遺構出土土器



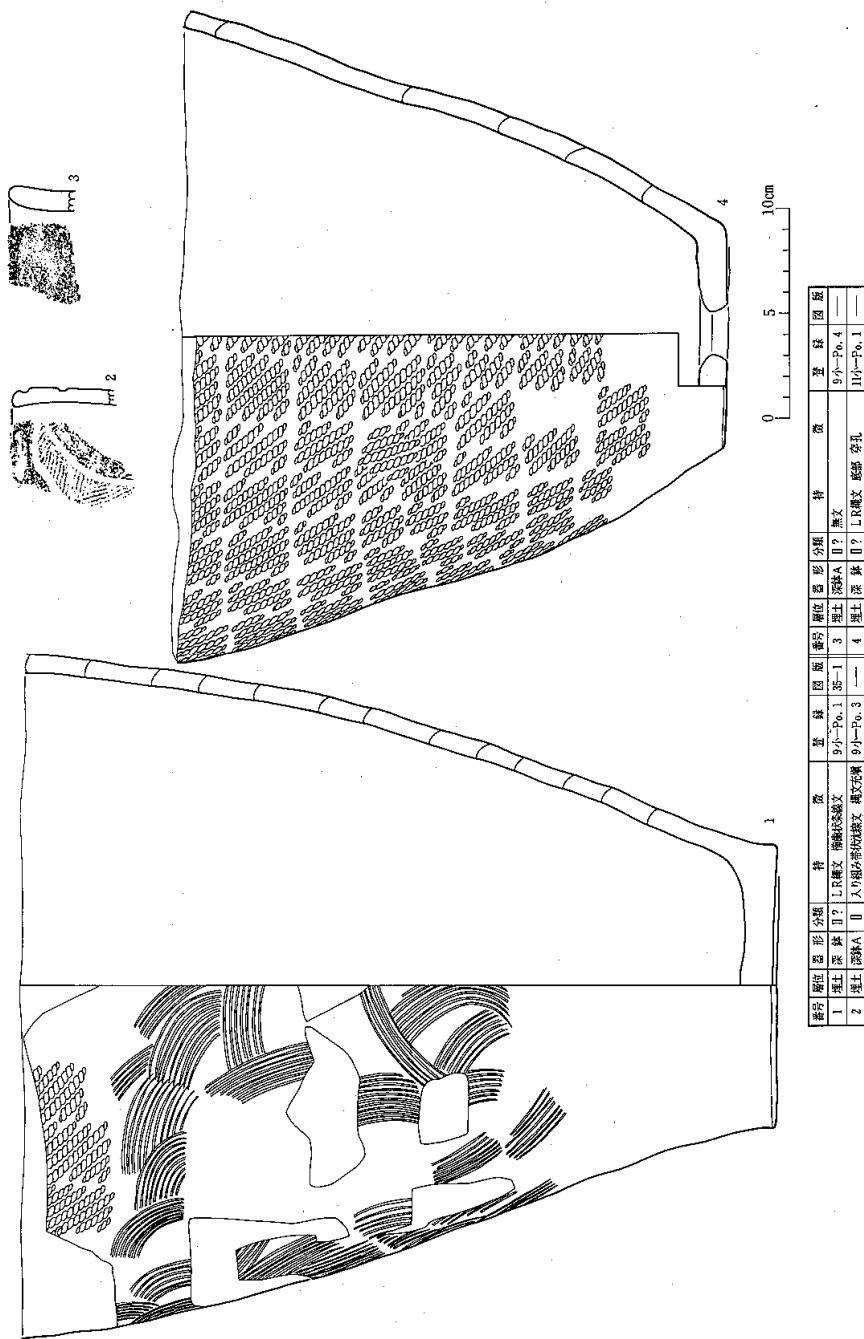
番号	層位	器形	分類	特 微	登 錄	図 版
1	埋設	深鉢 A	II 2 c	背中合せ弧状陰沈線文 小輪 L R 細文	7小一Po. 1	34-1

第64図 第7小竪穴遺構出土土器

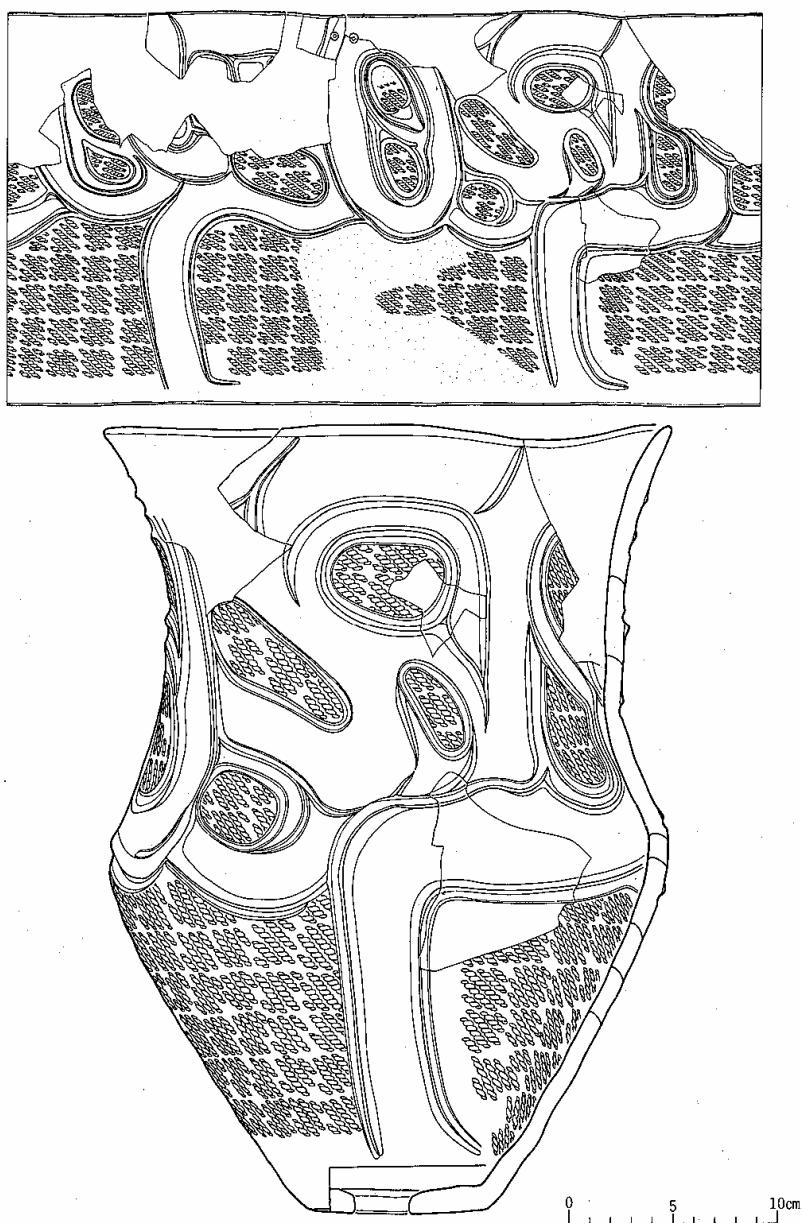


番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	図 版	番号	層位	器 形	分類	特 質	登 錄	図 版
1	埋土	深鉢B	II	波線文	8小-Po. 3	—	8	埋土	馬 部	口	横唐草波線文	8小-Po. 11	—
2	埋土	深鉢B	II	波線文	8小-Po. 2	—	9	埋土	深鉢B	口	口縁部:下垂斜笑文 腹部:刺突文	8小-Po. 1	—
3	埋土	深鉢A	II	直部波線文	8小-Po. 4	34-4	10	埋土	底 部	口	粗雜なミガキ	8小-Po. 13	—
4	埋土	深鉢A	II	直部波線文	8小-Po. 6	34-5	11	埋土	底 部	口	粗雜なミガキ	8小-Po. 12	—
5	埋土	深鉢A	II	R L轉文	8小-Po. 7	34-6	12	埋土	底 部	口	網代底 粗雜なミガキ	8小-Po. 14	—
6	埋土	馬 部	II	順立刻文波線文	8小-Po. 8	34-7	13	埋土	馬 部	口	網目状(波) 深赤文	8小-Po. 10	—
7	埋土	馬 部	II	小輪 陰線文 網目状(波) 深赤文	8小-Po. 9	—							

第65図 第8小堅穴遺構出土土器



第9・11小型六連構出土器
第66図



番号	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	埋設	深鉢A	2 a	玉抱連結「S」字状文様A L R縦文充填	10小堅穴	34-2

第67図 第10小堅穴遺構出土土器

第1・第2埋設土器遺構

第2号住居跡の南方、5.2mの地点にあり、昭和43年の予備調査の時に発見された遺構である。第1埋設土器は、遺構確認面である2層黒色土、及びその下の3層暗褐色砂質土層を約20cm掘りこんで埋設されており、掘り方も確認できた。土器は、口縁部の欠損した3個分の縄文のみ施文された深鉢が三重に埋設されている。外側の土器と内側の土器の間には、砂質の焼土がつまっていた。土器の内部や周囲に焼土、灰はみられない。第2埋設土器は2つの土器が東西に並んでいる。両方とも口縁が欠損し、底部もない。文様はどちらも縄文のみで、掘り方はあまり明確ではないが、2層黒色土を掘り込んで埋設されている。ふたつの土器の間に焼土混じりの暗褐色土がつまっていた。第1埋設土器も第2埋設土器も縄文時代中期末葉に属するものと思われる。周囲にこれと関連するような遺構は確認できなかった。

第3埋設土器遺構

第1、第2埋設土器よりさらに南に6mの地点に発見された。土器は2個体分埋設されており、口縁部が欠損した個体に別の個体が落ちこんでいる形であった。その底の方に焼土がたまっていた。掘り方は明確ではない。土器は縄文のみ施文されているものである。

埋め甕の東脇に扁平な割石が3ヶほど並んでおり、両側に焼けた石が数個ある。

周囲にはそれ以外の遺構などは確認できなかった。

第4・第5埋設土器遺構

調査区東端中央部、第2号住居跡の約30mほど南に、1mの間隔をおいて2つの埋め甕が検出された。他の埋め甕と異なり、双方とも一個体の土器がそのまま埋設されているだけである。断面を観察した結果、第4埋設土器には若干掘り方と思われる落ちこみが確認されたが、第5埋設土器においてはみられなかった。また周囲に発見された礫群は、断面においても雑然としており、埋設土器遺構とは無関係と思われる。

第6埋設土器遺構

表土を掘りあげ、にぶい黄褐色の砂礫層(地山)に達すると土器が埋設されていることを確認。第6埋設土器遺構とする。位置はBF-70区、第9住居跡の南側である。この埋設土器のまわりを精査すると、90×60cmのかなり大きい掘り方が検出された。掘り方の埋土は黒褐色砂質シルトである。土器は胴下半部でその上は欠失している。内部の土は下層が黒褐色砂質シルト、上層が極暗褐色砂質シルトで混入物は礫を除いて特に認められない。

第7埋設土器遺構

第6埋設土器遺構の南西1.6mの地点(BF-69区)にも同様な埋設土器が確認された。第7埋設土器遺構とする。遺構確認面は南側が褐色の砂質シルト層で北側は黄褐色の砂礫層である。埋設土器のまわりには楕円形(大きさ90×50cm)のかなり大きい掘り方が検出された。内部の埋

土はオリーブ黒色の砂質シルトである。土器は胴下部で他は欠失している。底部には穿孔が認められる。土器内部には黒褐色砂質シルトが入っていたが混入物は特にない。

第8埋設土器遺構

遺跡西側斜面に近い平坦面上、AS-62区は表土を約30cm掘りあげると黄褐色砂礫層(地山)に達する。この面で二重に埋設された土器を確認、第8埋設土器遺構とする。埋設土器のまわりには、僅かに土器より大きい輪郭で掘り方が検出された。掘り方の埋土は暗褐色の砂質シルトである。二重に埋設されている土器は外側が胴部で内側が胴下部である。中に入っている土は両者とも暗褐色の砂質シルトで、焼土を僅かに含む。

第9埋設土器遺構

第8埋設土器遺構の南東3mの地点(AT-62区)にも埋設土器が確認された。遺構確認面は黄褐色砂礫層(地山)である。第9埋設土器遺構とする。第8埋設土器遺構同様、埋設土器のまわりに僅かにそれより大きい掘り方を検出した。掘り方の埋土は暗褐色のシルト質砂。土器は底部に近い胴下部で、その上は欠失している。内部の土は極暗褐色砂質シルトで混入物は特にない。

第11埋設土器遺構

遺跡南側緩斜面には表土下に10~20cmの遺物包含層が堆積している。この遺物包含層を掘りあげると極暗赤褐色の粘土質シルト層(地山)に達する。この面で埋設土器の存在を確認、第11埋設土器遺構とする。位置はAT-52区、第10小竪穴遺構の南東3mの地点である。埋設土器に接して掘り方が認められた。掘り方の埋土は暗褐色の砂質シルトである。埋設土器は二個体分の土器を組み合わせているが、両者とも胴上半部は欠失している。土器内部には極暗褐色のシルトが入っていたが、その他特に混入物は認められなかった。

遺物包含層

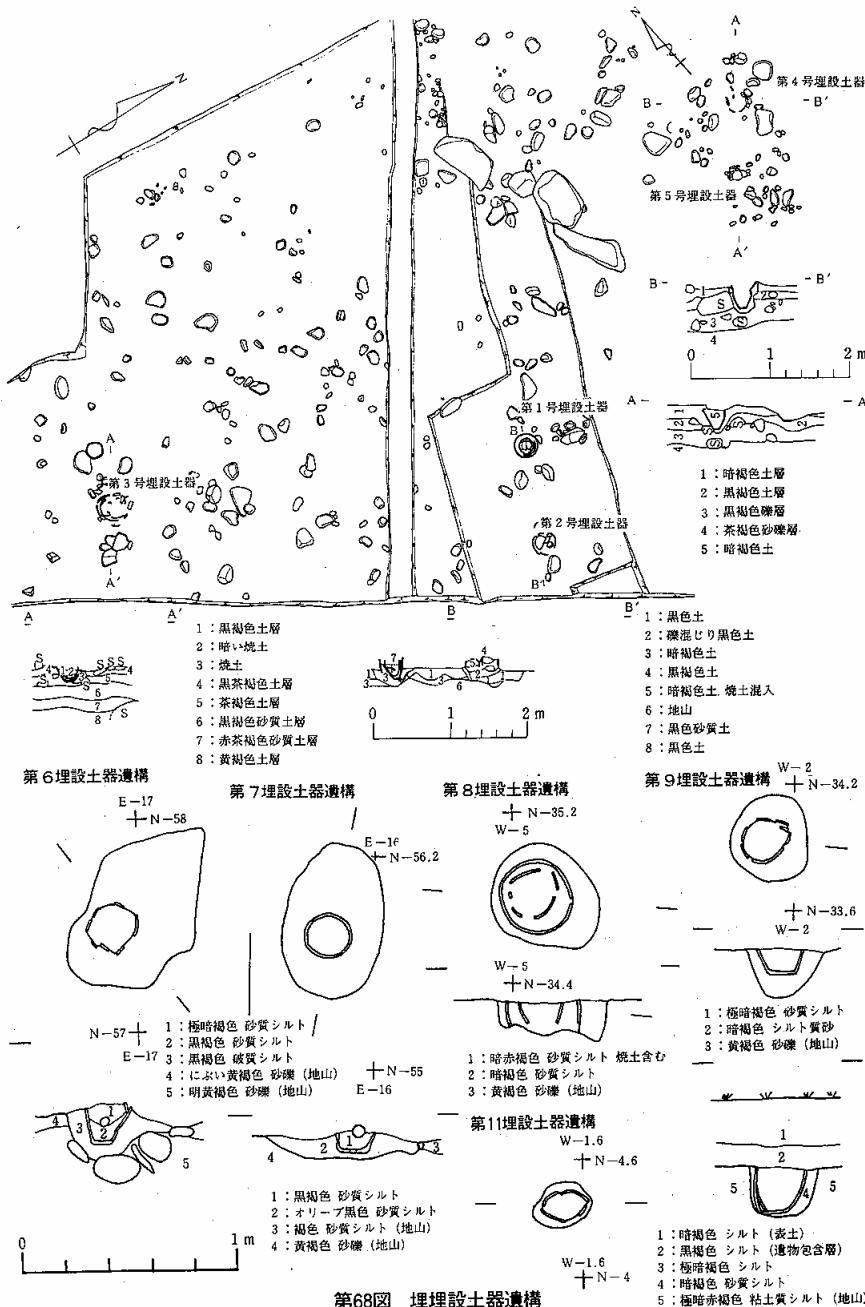
北側斜面に分布する遺物包含層：遺跡北から北西端にかけての段丘の急な傾斜をなす部分に遺物包含層が分布する。段丘の平坦面と下の水田との比高は約2m程ある。この遺物包含層の基本的な層位は次の4層であり、その下の地山は数層に分類される。

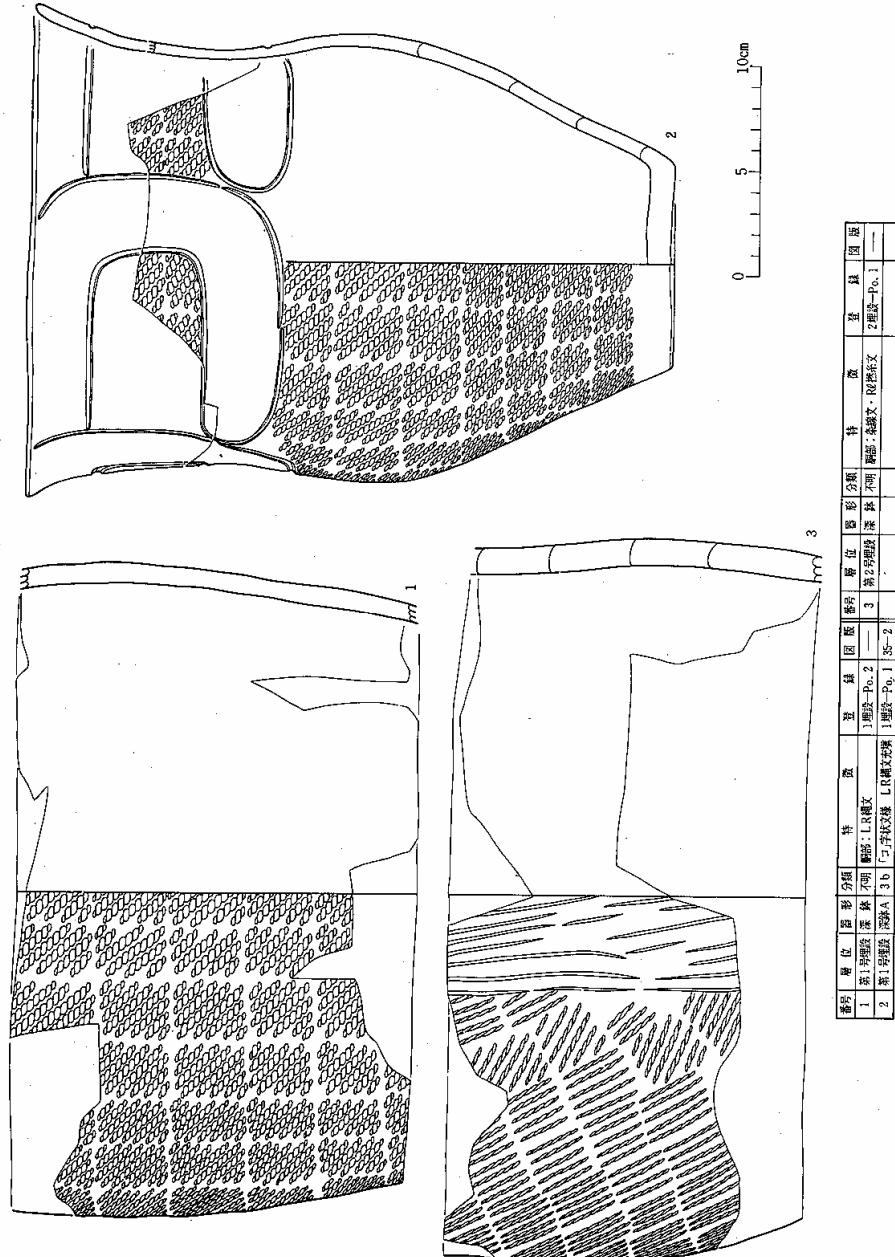
第1層 ボサボサしている。暗褐色砂質シルト。(表土)

第1b層 極暗褐色砂質シルト、間隙性がやや大きく僅かに粘りがある。(攪乱された遺物包含層)

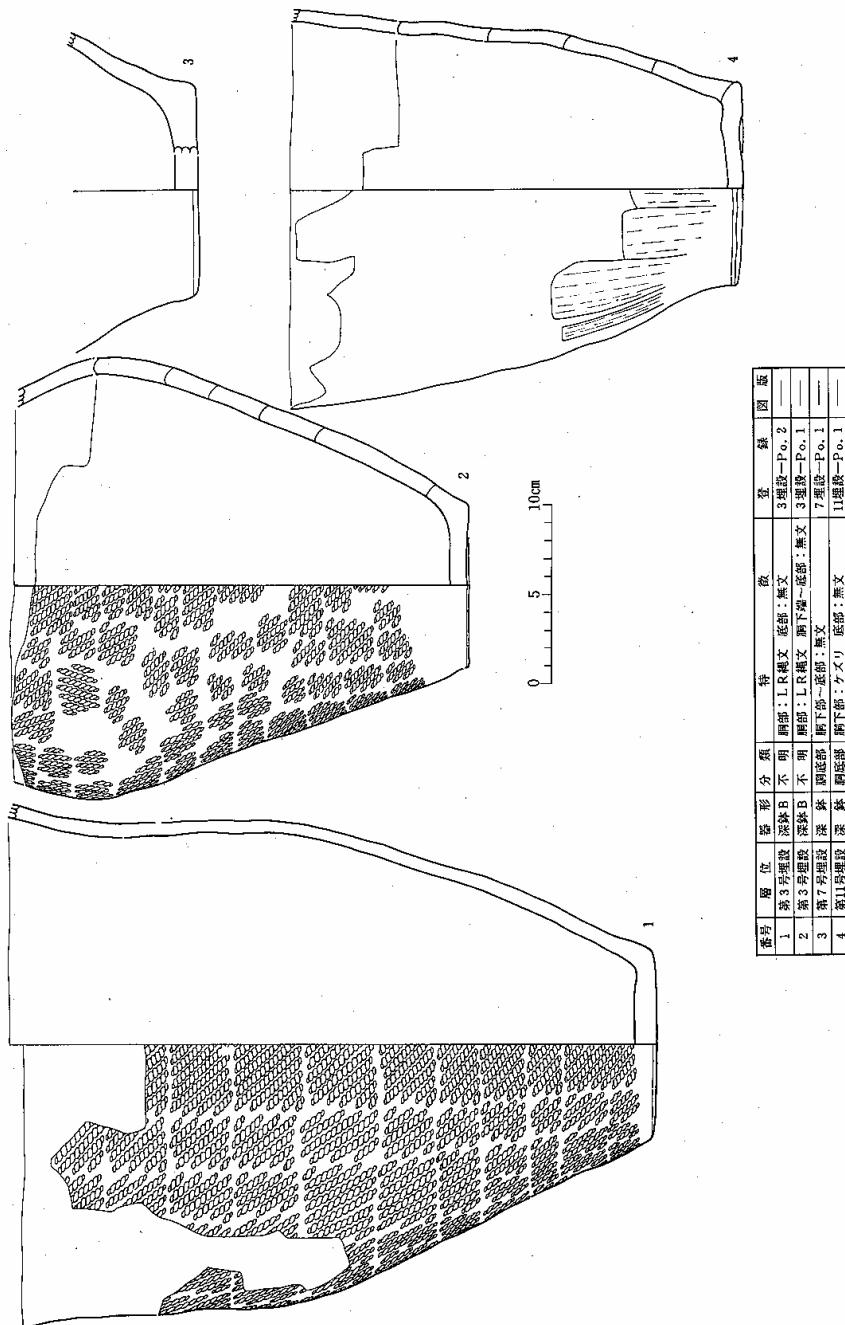
第2a₁層 黒褐色砂質シルト、ややしまりがあり、僅かに粘りがある。(遺物包含層)

第2a₂層 やや赤味のある黒褐色砂質シルト、間隙性がやや小さく、僅かに粘りがある。(遺物包含層)





第69図 第1・2号理款土器



第70図 第3・7・11号埋設土器

第2b層 黒色砂質シルト、2a層と同様、しまりがあり、僅かに粘りがある。(遺物包含層)

第3層 暗褐色砂質シルト、小~大礫を多数含む。僅かに可塑性がある。(地山)

第4層 黄褐色砂礫層、粗砂を主体にし小~巨礫を多数含む。可塑性はほとんどない。(地山)

第1b層は攪乱を受けてはいるが第1層とは明確に分層可能なものである。第2a₁層は調査区A S -75~B A -75 E の範囲に分布するだけである。また、2a₂層は北斜面一体に広範囲に分布する。第2b層はAT-74~75 区にその分布がみられる程度である。遺跡全体の基盤をなす黄褐色砂礫層直上に分布する第3層は調査区ごとで数層に分層されるが無遺物層である。

発見された遺物は縄文時代中期~後期初頭の土器、および石器である。第2a₁層中より口縁部欠損の双口土器が出土している。他にまとまりのある土器はなくほとんどの破片が磨滅している。

南側斜面に分布する遺物包含層：遺跡の南側は段丘の凹地状になっている部分で、非常にゆるやかな傾斜をなしている。46 区~54 区にあたるこの部分にかなり広範な遺物包含層の分布が認められる。

B A -46~53 区の層位は次のようになる。他の部分でも地山の違いを除いてはほぼ同じである。

第1層 極暗褐色砂質シルト、ボサボサしている。(表土)

第2層 黒褐色シルト、僅かに粘りがある。遺物を含む。(遺物包含層)

第3層 僅かに暗い褐色細砂。(地山)

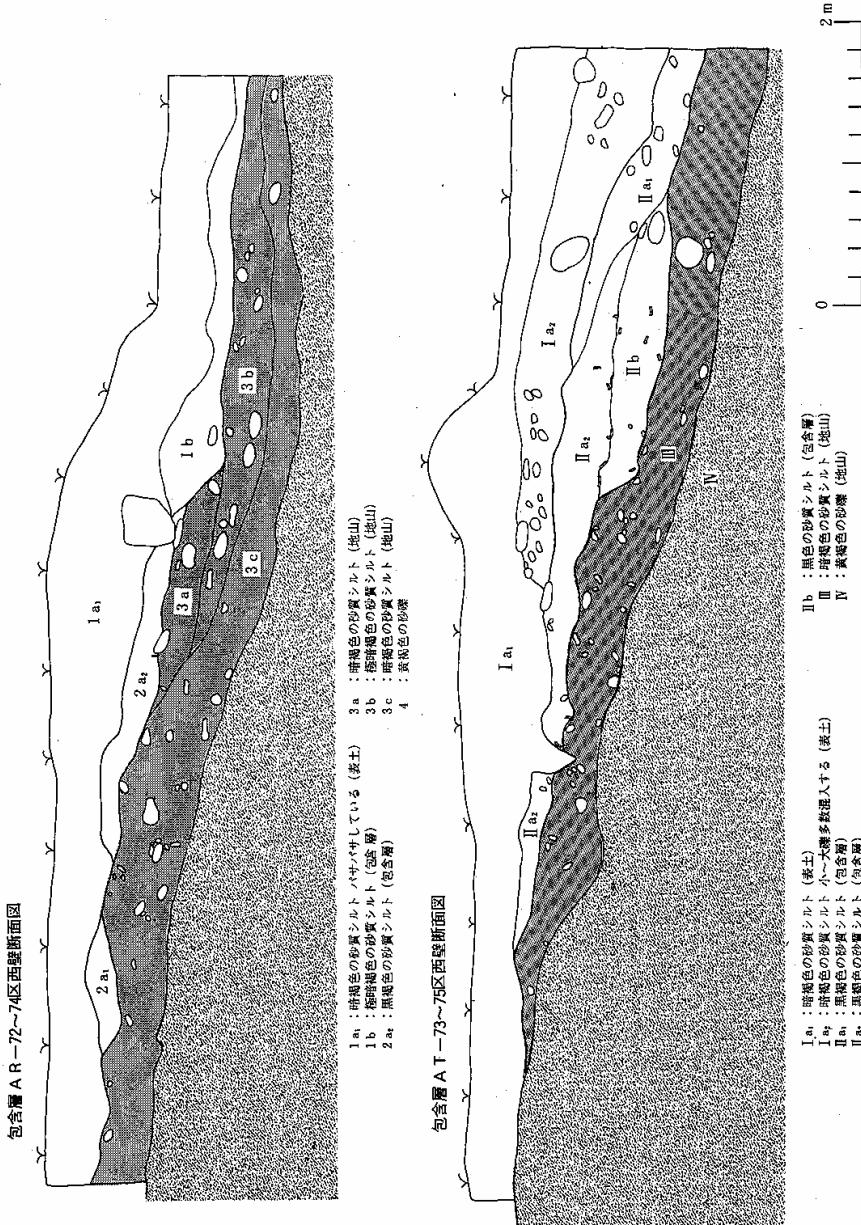
第2層は厚さ 10~20cm の単層でこの南側斜面全域に分布する。しかし、かなり攪乱が激しく、比較的良く残っていたのは A R ~ T -52~53 区のみであった。

遺物包含層から発見された遺物は縄文時代中期末~後期初頭のものである。

(補注)

北側遺物包含層で、遺物が集中して発見されたのは、AT-73~75 区の第2層である。この第2層はA₁・A₂・B層(a₁・a₂・b層に同じ)と細分したが、いずれも黒褐色砂質シルトで、基本的には同じ特徴からなる層である。遺物はA₁・A₂・B層の層理面および層中から発見されたが、復元可能な土器が少なく、その出土状況にきわだった規則性(一面にならぶ)がみられなかった。このため、発掘調査の段階では、この第2層は二次堆積の可能性が強いものと考えた。ところが、出土土器を検討したところ、後述するように大部分のものは後期初頭の第II群土器で、中期末の第I群土器は僅かに過ぎなかつた。このような遺物のあり方は、時期の異なる(中期と後期)層が崩れて再堆積したものではないことを示している。

以上のような理由から、北側遺物包含層(第2層)は、後期初頭の一次的な堆積層か、その層が再堆積した層であると考えられる。



III. 遺物の検討

発掘調査によって出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・各種土製品・各種石製品がある。土器は大部分のものが、住居跡などの遺構や遺物包含層から出土している。住居跡を中心として出土した土器を第Ⅰ群土器、遺物包含層を中心として出土した土器を第Ⅱ群土器とする。後述するように、第Ⅰ群土器とは縄文時代中期末の大木10式土器、第Ⅱ群土器とは縄文時代後期初頭の南境式土器である。これらの土器群は菅生田遺跡において主体を占めるもので重要な意味をもつと考えられるので、それぞれ分類作業を行ないその出土状況を吟味し、編年の位置・地域的特性などについて検討を加えることにする。第Ⅰ・Ⅱ群以外の土器については、量が少なく層位的まとまりもみられないで、その他の土器として一括し、特徴を述べるに留めたい。

土製品・石製品には各種のものがある。これらの大部分は中期末から後期初頭に属するものである。限られた時期における土製品や石製品の内容を知ることができるという点で資料的価値がある。ただ、全体量があまり多くないので、可能な範囲において時期的な特性について検討を加えることにする。なお、袖珍土器や蓋は本来土器に含めるべきものであるが、特殊なものであることから、今回は便宜上土製品の項で扱うこととした。

第 群土器

第Ⅰ群土器は前項の「遺構とその出土土器」で述べたように、住居跡・小堅穴遺跡・埋設土器遺構などから出土しているが、その大部分は住居跡からのものである。ここでは、住居跡の出土土器を中心として分類し、編年の位置・地域性について検討を加えることにする。

土器の分類

第Ⅰ群土器には深鉢・その他の器形（浅鉢・器台）などがあり、総数（復元資料50点・口縁部資料231点・胴部資料59点・底部資料64点）404点である。このうち、出土量が最も多く、特徴の明らかな深鉢を対象として分類を行なってみたい。なお、浅鉢・その他の器形については個別的に説明を加えることにする。

深鉢

深鉢はA類：文様をもつもの、B類：地文だけのものに大別される。前者は文様の形状、後者は頸部にめぐる区画線の有無によって細分することができる。

深鉢A類：文様をもつもの**第1類**：連結「S」字状文様（一部非連結）のもの（第72図1・2）。

1は口縁・胴下部を破損しているが、胴中央部が僅かに脹らみ、胴下部ですぼまるものと推定される。胴上部には文様が描かれ、胴下部は地文のみとなっている。胴上部に描かれた文様は「S」字状無文帯が一部で連結し、その間に生じた「ſ」字状区画に縄文を充填したもので、それらが交互に繰り返されて横方向に展開している。2は口縁部が緩やかに外反し、口縁内面には稜がめぐり肥厚する。残存部分が少ないが、1と同様、一部で連結する「S」字状文様と推定される。文様を描く隆沈線（1・2）の隆線部分は高さに対し、基底幅が広く、頂部が稜状になっている（以下、このような特徴をもつ隆線を稜線と呼ぶ）。沈線部分は幅が広く浅い。稜線・沈線（内面・側縁周辺）は共に研磨調整されている。前者は後者に較べ丁寧に研磨されている。施文された地文はL R L縄文（1・2）である。

第2類：玉抱連結「S」字状文様（各部分連結）のもの**a類**：玉抱連結「S」字状文様A（第72図3～5）。

3は口縁部が緩やかに外反し、胴中央部が強く脹らみ、胴下部ですぼまる。胴上部に描かれた文様は「S」字状無文帯が複雑に連結し、各部分に歪んだ円形や橢円形状の区画を生じさせ、その内部に縄文を充填したものである。そして、「S」字状無文帯の一部が胴下部に下垂する。4は胴中央部、5は胴下部が残存しているだけだが、3と同様各部分で連結し、複雑に入り組む玉抱連結「S」字状文様と推定される。4・5の文様は隆沈線によって描かれている。文様を描いた隆沈線（3～5）は隆線部分が稜線で、沈線部分は幅が広く浅い。稜線・沈線（内面・側縁周辺）は研磨されている。特に稜線は丁寧に研磨調整されている。施文された地文はL R縄文（3・4）・L R L縄文（5）である。

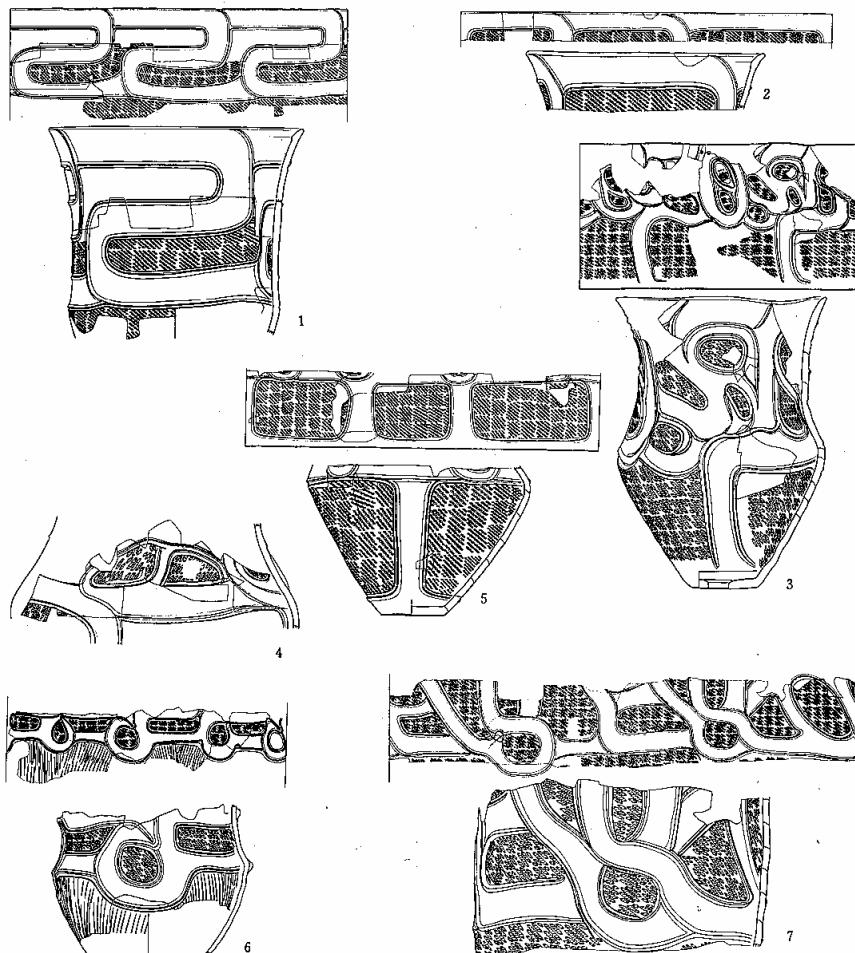
b類：玉抱連結「S」字状文様B（第72図6・7）。

6は胴上部から胴下部、7は胴中央部が残存している。文様は胴上部に限定され、胴下部は地文のみとなっている。胴上部に描かれた文様は「S」字状無文帯が各部分で複雑に連結し、その末端に玉を抱きながら横方向に展開したもので、無文帯の間に生じた区画内には縄文が充填されている。なお、玉を抱いた無文帯の末端は鰐状になっている。文様は隆沈線で描かれているが、沈線の省略される部分もある。隆線部分は稜線で、無文帯末端が鰐状になるところでは特に高くなる。沈線部分は幅が広く浅い。稜線・沈線は共に丁寧に研磨されている。施文された地文は6が区画内にL R縄文、胴下部に櫛目状条線文、7は区画内・胴下部ともL R縄文である。

第3類：変形「S」字状文様のもの

a類：玉抱文様（第73図1～4）。

1は胴中央部以下、2は口縁部、3・4は口縁・胴下端が破損しているが、文様はいずれも胴上部に描かれ、胴下部は地文のみとなる。胴上部に描かれた文様は変形「S」字状無文帶が各部分で連結し、その内部に玉を抱きながら横方向に展開し、無文帶の間に生じた区画内には縄文が充填されている。この玉抱変形「S」字状文様は上・下二段の文様からなる玉抱連結「S」字状文様の一段を省略し、縦に縮めた文様である。文様を描いた隆沈線（1～3）・隆線（4）は隆線部分が稜線で丁寧に研磨調整されている。沈線部分は幅が広く深い。隆線ほど



第72図 深鉢A第1・2a・2b類

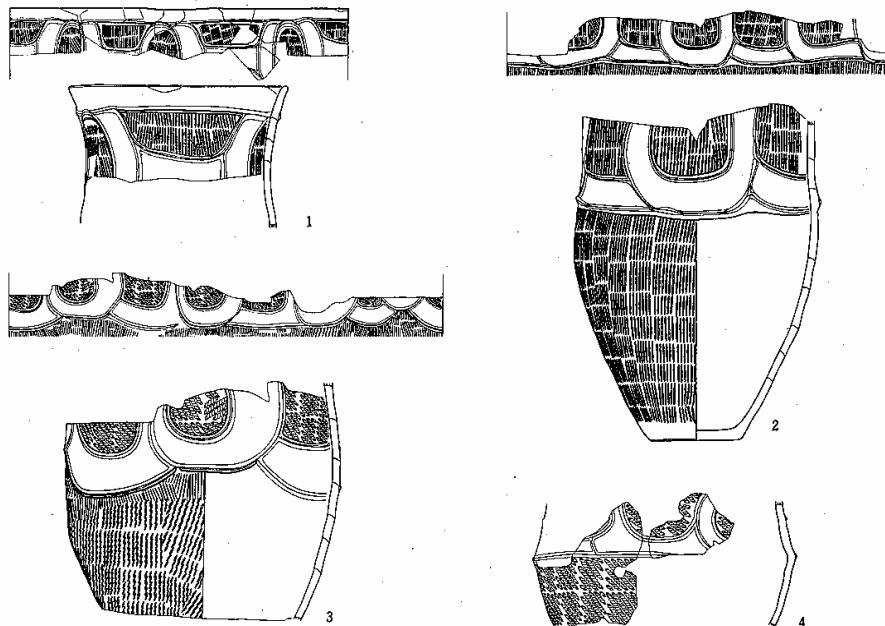
丁寧ではないが沈線内面・側縁周辺は研磨されている。施文された地文は L r 摳糸文(1・2)、LR縄文(4)、LR縄文・LR撋糸文→櫛目状条線文(3)である。

b類：「コ」字状文様（第74図1～7）。

1は胴部から口縁部まで直線的に外傾し、波状口縁となる。3は胴上半部から口縁部まで外傾し、胴中央部が僅かに脹らみ、胴下部ですぼまる。また、底部には木葉痕が認められる。4・5は口縁部、7は口縁・胴下端、2・6は胴下部を破損している。これらの土器はいずれも胴上部に文様が描かれ、胴下部は地文のみとなっている。胴上部に描かれた文様は「コ」字状無文帯が連結し横方向に展開したもので、無文帯の間に生じた区画内には縄文が充填されている。この「コ」字状文様は各部分で連結する「S」字状文様の下半部を省略した文様である。1は「コ」字状無文帯連結部が鰓状になっている。3は「コ」字状無文帯に円形隆線で囲まれた部分があり、その内側に刺突文が充填されている。文様を描いた隆線・沈線は隆線部分が稜線で丁寧に研磨されている。沈線は幅が狭く、ほとんど調整が加えられていない。区画内や胴下部に施文された地文はLR縄文(1・4・5)、RLR縄文(7)、L r (2・6)・R ℥ (3)撋糸文である。

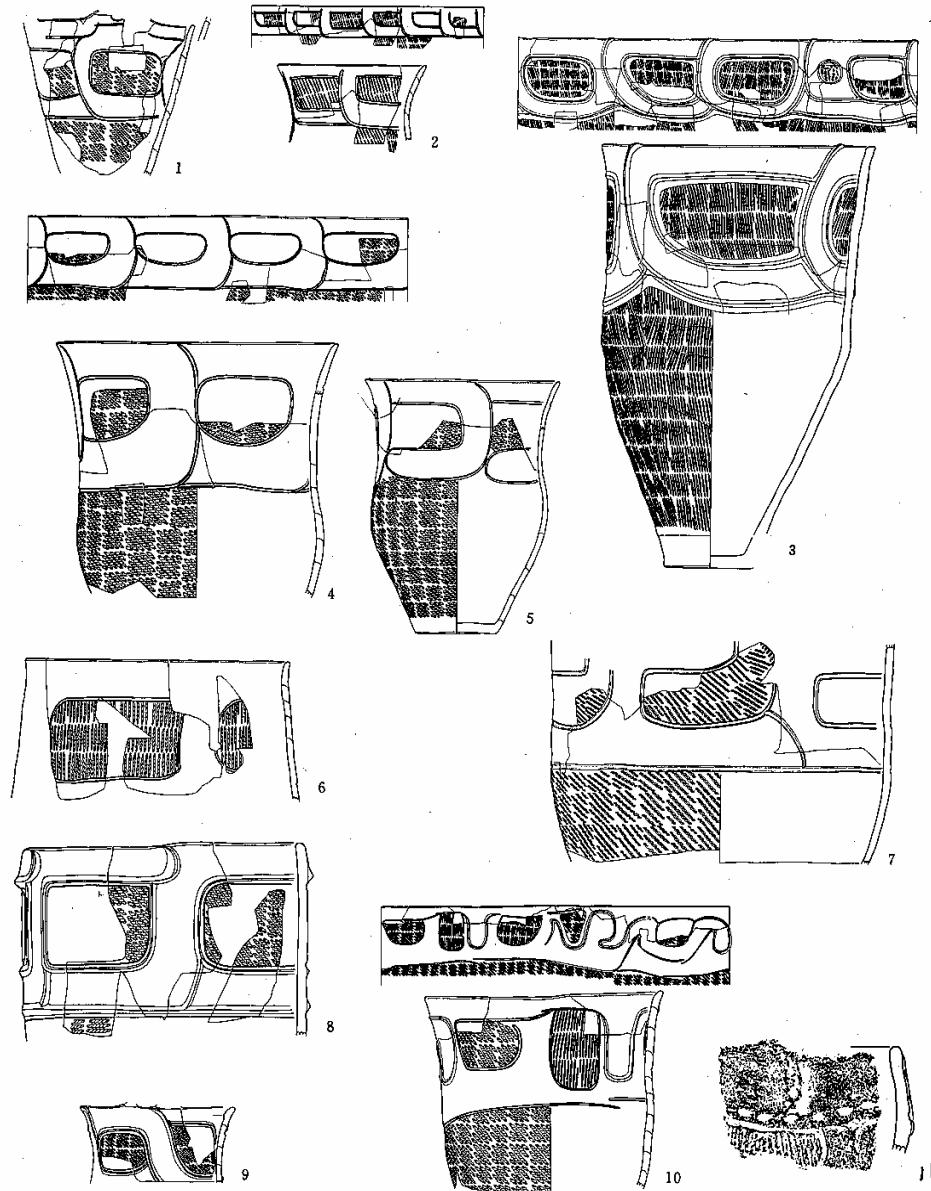
c類：「フ」字状文様（第74図8・9）。

8・9とも胴上部が残存している。口縁部が直立するもの(8)と口縁部が緩やかに外反す



第73図 深鉢 A第3a類

るもの（9）とがある。文様帶は胴上部に限定され、胴下部は地文のみとなる。胴上部に描かれた文様は「ſ」字状無文帶が連結し横方向に展開し、無文帶の間に生じた区画内には縄文が



第74図 深鉢A第3b・3c・3d・4類

充填されている。8は「ſ」字状無文帯の出発点が鰭状になっている。文様を描いた隆沈線は隆線部分が稜線で、無文帯が鰭状のところでは特に高くなる。沈線は幅が広く深い。稜線・沈線は共に研磨調整されている。施文された地文はLR縄文(8・9)である。

d類：並列区画文様（第74図10）

10は底部を破損しているが、口縁部は緩やかに外反し、胴中央部で僅かに脹らみ、胴下部ですぼまる。胴中央部には緩やかな波状の沈線がひかれ、胴上部文様帯と胴下部地文帯とを区画している。胴上部に描かれた文様は連結した「S」字状無文帯間に生じた楕円形区画を横に並列したもので、楕円形区画内には縄文が充填されている。「S」字状無文帯は崩れて各部分で変形し、その端部は鰭状になっている。文様を描いた隆線は稜線で丁寧に研磨されている。沈線は幅が狭く浅い。沈線内面・側縁周辺は軽い研磨ないしはナデ状の調整が加えられている。施文された地文は区画内がLR縄文・ ℓ 撚糸文、胴下部はLR縄文である。

第4類：「ノ」字状文様（第74図11）

11は口縁・胴部破片である。口縁部は内傾気味に直立し、波状口縁となる。口縁部文様は波状口縁頂部から下垂した隆線が頸部で横位にめぐり、この隆線に沿って楕円形の連続刺突文が加えられている。胴部文様は破片のためその全容は明確でないが、「ノ」字状無文帯が連續し、横方向に展開し、無文帯の間に生じた区画内にはLr撚糸文を充填したものと推定される。

深鉢B類：地文だけのもの

地文だけのものは第1類：頸部に区画線をめぐらし、その下部に地文を施文するもの。第2類：頸部に区画線をめぐらさず地文を施文するものに分けることができる。さらに、前者は地文を区画する方法によって細分される。なお、深鉢B第1類の中には小破片のため深鉢A類と区別できないものがあった。このように判定不可能なものは便宜上深鉢B第1類に含めた。

第1類：頸部に区画線をめぐらし、その下部に地文を施文するもの

a類：頸部に隆沈線をめぐらすもの（第75図1）。

地文にはLR L・LR・RL縄文、Lr撚糸文がある。

b類：頸部に隆線をめぐらすもの（第75図2）。

地文にはLR・RL縄文がある。

c類：頸部に沈線をめぐらすもの（第75図3～5）。

地文にはLR・RL縄文、LR・R ℓ ・Lr撚糸文、櫛目状条線文がある。

第2類：頸部に区画線をめぐらさず地文を施文するもの

a類：口縁部が無文で、胴部に地文が施文されるもの（第75図7）。

地文にはLR・RL縄文、 ℓ 撚糸文がある。

b類：口縁部から胴部に地文が施文されるもの（第75図6）
地文にはL R・R L縄文、L r撚糸文がある。

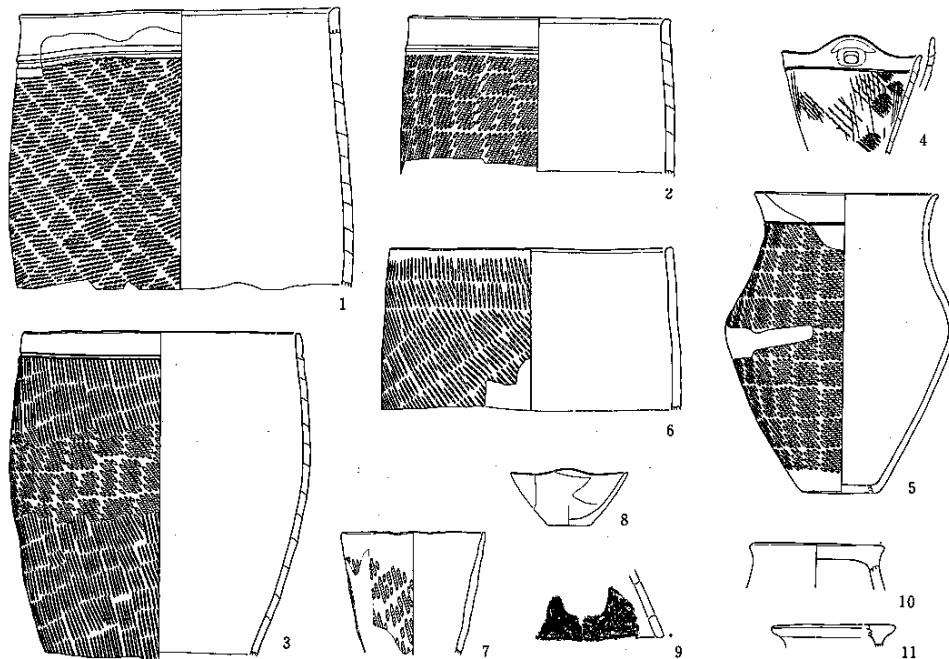
その他の器形

浅鉢（第75図8）

8は4つの波頂部をもつ波状口縁で、口縁部は外傾する。全面が研磨されている。

器台（第75図9～11）

10・11は台部、9は脚部である。9の脚部には円窓がある。



第75図 深鉢B・その他の器形

土器の共伴関係と編年の位置

土器の共伴関係

共伴関係の検討

前項において、第I群土器の分類を行なった。第I群土器に含まれることは判明しても、小破片のため、その中で分類が不可能なものが多い。このため、分類可能な資料は完形品や大形破片に限られ、分類できたものの量的な関係については不充分な点が多い。しかし、限られた資料であっても、住居跡内における一括資料を検討することによって一定時期の土器の組み合せについては、ある程度知ることができる。このような中で、一定の時間幅における共伴関係を検討できる資料は第2・10号住居跡出土土器である。以下、これらの住居跡を中心として共伴関係を検討することにする。共伴関係の資料としては炉跡・床面から出土した土器を対象とする。その理由として、炉埋設土器は住居構築時のもの、炉内・床面出土土器は住居が機能していた時期から住居廃絶後、堆積土が埋まり始まるまでの時期のものである。これらは厳密には時間差が想定されるが、一定のまとまりのある土器群で占められているため、土器の変化をひき起す程のものではなく、わずかな差と考えられる。そのため、ここではこれらの土器群を広い意味での共伴関係にある資料として、一括して取り扱うこととする。共伴関係を検討するにあたっては、主に深鉢A類を対象として行なうが、深鉢B類との関係をもみていきたい。以下、その共伴関係・組み合せについて検討してみたい。

二つの土器群

深鉢A類は第2号住居跡において、第1類（連結「S」字状文様）と第2a類（玉抱連結「S」字状文様A）が共伴関係にある。深鉢B類では第1a類（頸部隆沈線）が共伴する。第10号住居跡においては、第2b類（玉抱連結「S」字状文様B）と第3a類（玉抱変形「S」字状文様）・第3b類（「コ」字状文様）が共伴関係にある。さらに、深鉢B類では第1a類（頸部隆沈線）・第1b類（頸部隆線）・第1c類（頸部沈線）・第2b類（地文）が共伴する。以上のように、第2号住居跡と第10号住居跡では土器群に相違がみられる。ここでは前者をAグループの土器群（第1類・第2a類）、後者をBグループの土器群（第2b類・第3a類・第3b類）とする。

また、これ以外の住居跡で深鉢A類についてみると、第16号住居跡では第3a類、第11A号住居跡では第3a類・第3b類、第4・11B・13号住居跡では第3b類、第17号住居跡では第3d類が出土している。深鉢B類は第4号住居跡では第2a類、第13号住居跡では第1c類が出土している。

これらの住居跡から出土している土器は第17号住居跡の第3d類を除くとすべてBグループに属するものである。また、A・Bグループのどちらに属するのか共伴関係の上で指摘できない

ものは、この第3d類の他に、第3c類、第4類がある。第3c類は第16号住居跡において堆積土から第3a類とともに出土している。住居跡内堆積土の場合、共伴関係とするには幾分問題も含むが、Bグループの土器だけが出土していることから、第3c類もほぼ同時期のものと考えられる。

以上のこと整理すると、Aグループの土器：深鉢A第1類・第2a類・深鉢B第1a類、Bグループの土器：深鉢A第2b類・第3a類・第3b類・第3c類、深鉢B第1a類・第1b類・第1c類・第2a類・第2b類、共伴関係の不明なもの：深鉢A第3d類・第4類となる。

第 群土器の編年的位置

以上で述べたA・Bグループの土器群とそれ以外の土器群（A・Bグループの土器と共に伴関係が認められなかった土器群）について、従来の研究成果に基づいて編年的位置づけを検討してみたい。

A・Bグループの土器

A・Bグループの土器のような「S」字状文様を特徴とする土器群は各地でかなり発見されており、縄文時代中期末（大木10式土器）に位置づけられている。近年、大木10式土器は第I～第IV段階まで細分されている（丹羽茂：1981・11）。この中で、A・Bグループの土器は連結された「S」字状文様という特徴から大木10式土器の第II段階に含まれる。第II段階の土器には一部非連結「S」字状文様と各部分が連結し、入り組んで玉を抱く「S」字状文様のものが一括されている。この両者の土器群が第II段階において同一時期のものか、あるいはさらに細分されるものかは明らかになっていなかった。

この点、Aグループの土器は一部非連結「S」字状文様で、前者のものであり、Bグループの土器は各部分が連結し、入り組んで玉を抱く「S」字状文様で、後者の特徴をもっている。

A・Bグループの土器群は菅生田遺跡において直接層位的関係を示さなかったが、第2号住居跡と第10号住居跡からそれぞれ異なる内容をもつ土器群として出土しており、同一時期における土器組成の違いとみるよりは時期的な差を示していると考えられる。この点を文様のあり方から検討してみたい。

Aグループの土器は連結「S」字状文様（一部非連結）と玉抱連結「S」字状文様Aからなる。この連結「S」字状文様は第I段階の「S」字状文様を横に連結したもので、文様変遷の直接的関連を指摘することができる。しかし、第III段階の「ノ」字状文様との間には文様変遷の上で大きなひらきがある。これに対し、Bグループの土器は玉抱連結「S」字状文様B・玉抱変形「S」字状文様・「コ」字状文様・「フ」字状文様からなる。これらの文様から玉の部分やその他の一部を省略すると第III段階に特徴的にみられる「ノ」字状文様となり、文様変遷の直接的関連を指摘することができる。しかし、第I段階の「S」字状文様とは大きなひらき

がある。このように、A グループの土器は第Ⅰ段階と、B グループの土器は第Ⅲ段階との文様変遷を直接指摘できるものである。また、このような面を A・B グループの土器についてみると、B グループの土器は A グループの「S」字状文様の連結をさらに強め、複雑化した玉抱連結「S」字状文様 B と、玉抱連結変形「S」字状文様を縦に縮め簡略化することによって横方向への文様展開を強めた「コ」字状文様からなると考えることができる。

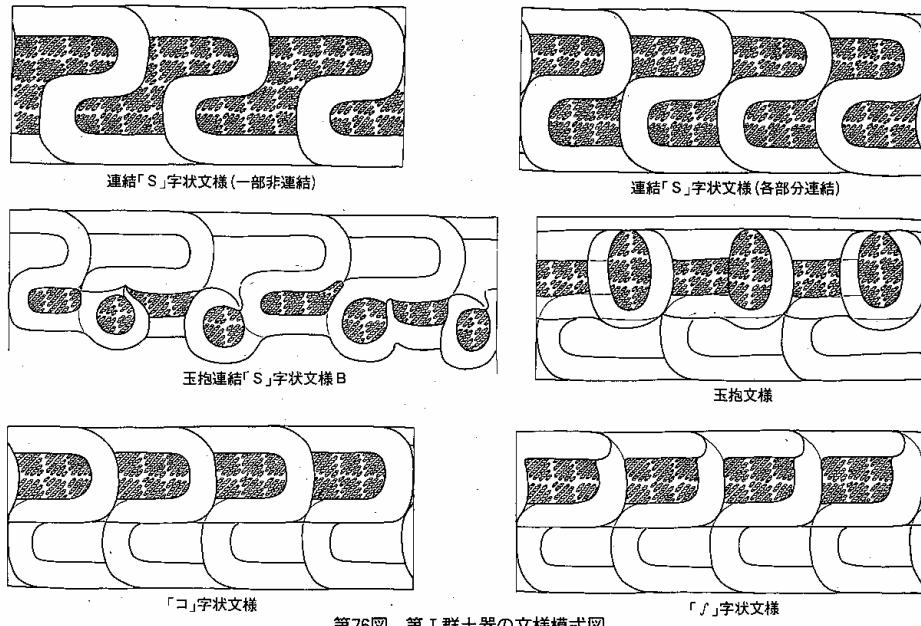
したがって、文様の変遷という観点からみても B グループの土器が A グループの土器よりも一段階新しいものとすることができる。

A・B グループ以外の土器

A・B グループの土器群と共に伴関係が認められなかった深鉢 A 第 3d 類・第 4 類について編年の位置づけを行なう。

深鉢 A 第 3d 類は各部分で連結する変形「S」字状文様で、胴上部に文様が展開している。この点、B グループの土器と類似した特徴をもっており、第Ⅱ段階の中でも比較的新しい時期のものと考えられる。

深鉢 A 第 4 類は A・B グループの土器群とは文様構成・文様表現技法の点で特徴を異にしている。第 4 類の文様と特徴が類似した土器群は西ノ浜貝塚 A トレンチ第 4 層出土土器（後藤・斎藤：1967・3）の中に見られ、第Ⅲ段階（丹羽茂：1981・11）に位置づけられる。



第76図 第Ⅰ群土器の文様模式図

第 群土器の地域性

第 群土器の分布

前項において、A・Bグループの土器が大木10式土器の第Ⅱ段階に属し、その中でBグループの土器群はAグループの土器群よりも新しい段階のものであることを述べた。次に、これらの土器群がどの地域に分布しているかを川崎町湯坪遺跡・鳴瀬町梨木団貝塚・岩出山町玉造遺跡などを取り上げて比較検討してみたい。検討するにあたっては深鉢A類を中心に行なう。

湯坪遺跡：川崎町今宿上の台に所在し、縄文時代中・後期の集落跡である。昭和52年に発掘調査が行なわれ、第1号住居跡の炉跡・床面から大木10式土器が出土している(一条孝夫：1978・3)。床面から出土した土器は胴下部を破損しているが、各部分で連結し、さらに入り組む玉抱「S」字状文様が胴上半部に展開している。この文様は深鉢A第2b類と共通した特徴をもっている。炉跡から出土した土器は胴上部を破損しているが、残存部分から推定して、各部分で連結する「S」字状文様が胴上半部に展開するものと思われる。いずれの土器も文様は隆沈線で描かれており、隆線部分が稜線、沈線部分は幅の広いもので研磨調整されている。地文としてRL縄文が充填されている。湯坪遺跡第1号住居跡出土の土器は各部分で連結する「S」字状文様であること、さらに文様表現技法(稜線・充填縄文)などの点でBグループと共通している。

梨木団貝塚：鳴瀬町宮戸里浜に所在し、主に縄文時代中期末(大木10式土器)の貝塚で、昭和36年に発掘調査が行なわれた(芳賀良光：1968・12)。今回、梨木団貝塚出土の土器を直接観察し、再検討を行なった。その結果、アサリ層から混土層までが一定のまとまりのある土器群で占められていることを確認した。以下、その特徴を述べることにする。出土土器のほとんどが深鉢で、文様が描かれたものは全て胴上部に限定され、胴下部は地文のみとなっている。これらの土器群の大半は連結「S」字状文様(各部分連結)・玉抱連結変形「S」字状文様・「コ」字状文様で、深鉢A第3a・3b類と共通した特徴をもっている。また、これらの文様の出発点や結合部分などには鰐状の隆線がみられる。文様は沈線で描かれるものが多く、隆線のものは少ない。沈線は幅の狭いもので、隆線は丁寧に研磨された稜線である。鰐状隆線は頂部だけ研磨しているものが多い。また、各種「S」字状文様の無文帶部分は粗雑で、ほとんどのものが研磨調整を受けていない。地文として縄文と撫糸文が充填されているが、撫糸文施文のものが大部分である。また、口頸部の隆線に沿って横長の橢円形もしくは円形の連続刺突文が施文されているものがある。器形においては、口縁部が平口縁・波状口縁で緩やかに外反するもの、直立するもの、内弯するものなどがある。

以上のように、梨木団貝塚の土器群の文様は連結「S」字状文様(各部分連結)・玉抱連結

変形「S」字状文様・「コ」字状文様でBグループの土器と共に通しているが、文様表現技法・地文の種類などの点で相違が認められる。また、梨木囲貝塚と類似した特徴をもった土器群は雄勝町天雄寺貝塚(辺見鞆高:1976・12)、仙台市下ノ内遺跡6・7号住居跡(篠原信彦他:1982・3 仙台市教委:1982・7)などでもまとめて出土している。

玉造遺跡: 岩出山町一栗字玉造に所在し、縄文時代中期末・平安時代の集落跡である。昭和54年に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期末の住居跡が4軒確認された(千葉宗久:1980・3)。第7号住居跡の炉跡・床面・堆積土から大木10式土器がまとまって出土している。これらの土器群の文様は胴上半部に展開する「S」字状文様のものと、頸部で連結する「S」字状文様・変形「S」字状文様のものがある。これらの文様は隆線(稜線)で描かれるものが多く、隆沈線・沈線のものは少ない。地文として縄文と撚糸文が充填されているが、縄文のものが大部分である。なお、頸部で連結する「S」字状文様・変形「S」字状文様には頸部隆線に沿って円形刺突が施文されているものがある。玉造遺跡第7号住居跡出土土器群は胴上部に「S」字状文様・連結「S」字状文様が展開すること、さらに文様表現技法(稜線・充填縄文)などの点でAグループの土器群と共に通しているが、「S」字状文様・変形「S」字状文様の連結の方法に違いが認められる。また、玉造遺跡と類似した特徴をもつ土器群は大和町下原囲遺跡(高橋富雄他:1975・11)でも発見されている。

以上のように、A・Bグループの土器群とそれに類似した特徴をもつ土器群の類例を比較検討した。その結果、このような土器群が前述の通り県内各地に分布していることが明らかとなると同時に、その中に、遺跡によって種々の相違する特徴のあることも明らかになった。このような相違は大木10式土器にみられる地域性と考えられる。

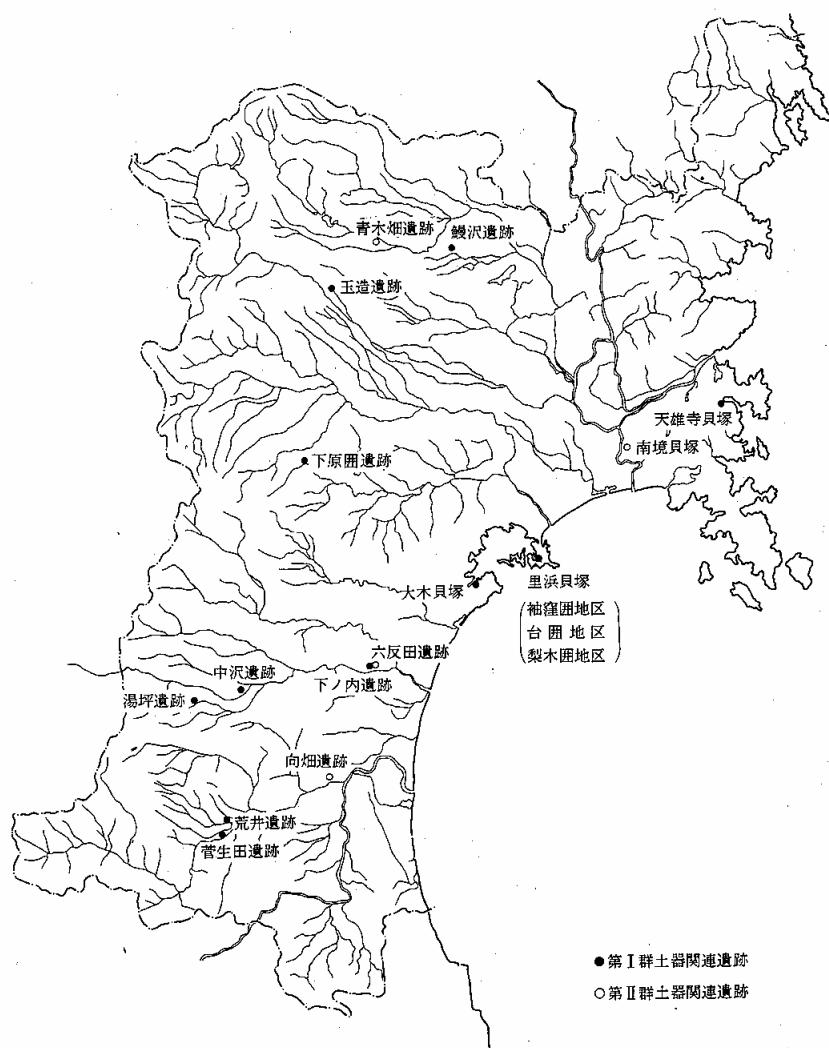
第二 群土器の地域性

Aグループの土器段階: この段階の資料が発見されている遺跡は上述の通り、菅生田遺跡の他に玉造遺跡・下原囲遺跡がある。菅生田遺跡は宮城県南部に、玉造遺跡・下原囲遺跡は宮城県北西部に位置している。両地域のAグループ段階の土器は文様表現技法として隆線を多用することと区画した文様に縄文を充填することが多いという共通性をもっている。しかし「S」字状文様を連結する場合、菅生田遺跡では横方向で連結するのに対して、玉造・下原囲遺跡では頸部隆線と連結しており、連結方法に違いが認められる。前者の文様的特徴は菅生田遺跡の他に白石市荒井遺跡(佐藤庄吉:1958・10)、川崎町中沢遺跡(後藤勝彦他:1972・9)などにもみられ、宮城県南部では一般的なあり方と考えられる。後者の文様は、現在上記二遺跡で示したように、宮城県北西部における特徴を示すものと考えられる。しかし、この段階の宮城県北東部については良好な比較資料に欠けるため、明確でない。

Bグループの土器段階: この段階の資料は菅生田遺跡のほかに湯坪遺跡・下ノ内遺跡・梨木囲

貝塚・天雄寺貝塚で発見されている。菅生田遺跡・湯坪遺跡は前述のように宮城県南部、下ノ内遺跡・梨木団貝塚・天雄寺貝塚は宮城県北東部に位置している。両地域のBグループ段階の土器は連結「S」字状文様（各部分連結）・玉抱連結「S」字状文様・玉抱連結変形「S」字状文様であるという点で共通している。ただ、菅生田遺跡の場合、「S」字状文様が複雑に入り組んで、その中に玉を抱くものが特徴的であるのに対し、宮城県北東部の3遺跡の場合、このようなものはあまりみられず、文様は比較的簡素である。また、文様表現技法として、菅生田遺跡では隆沈線が多用され、隆沈線および無文帶部分は丁寧な研磨調整が加えられたものが多い。湯坪遺跡もこの点同様である。これに対し、梨木団貝塚でみたように宮城県北東部では隆沈線は少なく、鰐状隆線として一部に使用される他、大部分のものは沈線によって文様が描かれることが多く、無文帶の研磨調整もあまり行なわれない。また、菅生田遺跡では地文として縄文が充填されることが多いのに対し、宮城県北東部の3遺跡では撫糸文が特徴的である。この他、梨木団貝塚などでは口縁部から頸部にめぐる隆線に沿って刺突の加えられたものが特徴的で、このようなものは菅生田遺跡などではほとんどみられない。このように、Bグループの土器段階では宮城県北東部と南部とでは文様表現技法に地域差がみられる。この点、山内清男氏が写真で示した大木団貝塚の大木10式土器（小岩末治：1966）はこの段階における宮城県北東部の様相を示す良好な資料と理解することができる。ただ残念なことに、この段階の宮城県北西部の状況については資料が不充分で検討を加えることができない。築館町鰐沢遺跡（古川工高郷土研究部：1974・11）の土器はこの段階のものであるが、量が少ないため、地域性の把握に困難が伴う。今後の資料の蓄積を待ちたい。

以上、大木10式土器の第II段階が、菅生田遺跡においてAグループの土器段階とBグループの土器段階に細分され、さらにAグループの土器段階には宮城県北西部と南部、Bグループの土器段階には宮城県北東部と南部に、前者は文様、後者は文様表現技法を主とした地域差が存在することを指摘した。宮城県北東部と北西部との関係は資料が充実した段階で再度検討を加えることにしたい。



第77図 第I・II群土器関連遺跡

第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器は北側遺物包含層（AT-73～75区第2層）、第5・11A・11B・13・14号住居跡堆積土、第7・8小堅穴遺構、各地区第1・2層から出土している。この中で、復元可能資料や大形破片資料が多いのは小堅穴遺構や各地区的第1・2層から出土したものである。しかし、これらの資料は器形や文様構成は判明するものの、単独出土であるため、群としての土器の組み合せを知ることができない。この点、北側遺物包含層から出土した資料は、破片資料が多く器形や文様構成を把握しがたい面もみられるが、同一層位における土器の組み合せを知る上で有効である。この他、各住居跡堆積土のものは、いずれも小破片資料で、発掘調査時の不備とあいまって、第Ⅰ群土器との混在も著しく、資料的に良好なものとは言えない。

したがって、第Ⅱ群土器については、まず北側遺物包含層出土土器を検討し、その結果に基いて他の遺構や各地区出土土器との比較を行ない、土器群としての特徴を把握し、その編年の位置・地域性について述べることにする。

北側遺物包含層出土の土器

北側遺物包含層から出土した土器には復元資料と破片資料（口縁部・胴部・底部）がある。この中から明らかな混入と判断される少量の第Ⅰ群土器（第84図18～24）と小破片・底部資料（第84図12～17など）を除外し、比較的の特徴の明瞭な復元資料2点・口縁部資料82点・胴部資料40点を対象として検討を加えたい。

復元資料・口縁部資料

器形は深鉢と浅鉢がある。深鉢には口縁部が直立気味のもの（深鉢A）、口縁部が外傾し胴部が僅かに脹むもの（深鉢B）、口縁部が外傾し胴部が球形に脹むもの（深鉢C）がある。浅鉢には口縁部が内傾するもの（浅鉢A）と口縁部が外傾するもの（浅鉢B）がある。以下、器形ごとに分類し特徴を述べる。

深鉢A：口縁部が直立気味のもの（第78～81図）

口縁部が僅かに内弯・外傾するものはみられるが、全体として直立気味である。胴部は円筒形か、僅かに脹む。

第1類：口縁部から胴部に連続する文様帶をもつもの（第78図1）

1は口縁から胴部に隆沈線による菱形状の文様が描かれ、その一部が渦巻状になっている。菱形状文の頂部角は円形の刺突が加えられ、小輪となっている。文様間にはLR縄文が充填さ

れている。

第2類：口縁部文様帯と胴部文様（地文）帯からなり、口縁部文様帯の上・下端が各種文様によって結ばれるもの（第78図2～第79図13）

a類：「上」状下垂線文のもの（第78図2～9）

a類は「上」状下垂線文を描く隆線の種類によって $a_{1\sim 5}$ 類に細分される。 a_1 類：断面半円形の隆線によるもの（2・3）。 a_2 類：連続刻目隆線によるもので、下端連結部分が小輪となるもの（4）。 a_3 類：連続刺突隆線によるもの（5）。 a_4 類：上・下端が小輪となる隆線によるもの（6・9）。 a_5 類：上下端が小輪となる隆沈線によるもの（7・8）。

b類：三角形状文のもの（第78図10・第79図1）

b類は三角形状文を描く隆線の種類によって $b_{1,2}$ 類に細分される。 b_1 類は断面隅丸三角形の隆線によるもので、三角形状文の角にあたる部分がふくらんで丸くなっている（10）。 b_2 類は連続刺突隆線によるもので、三角形状文の角にあたる部分は小輪となっている（1）。

c類：弧状文のもの（第79図2～7）

c類は弧状文の種類によって $c_{1\sim 3}$ 類に細分される。 c_1 類は弧状文が向いあって縦長の楕円状になるもの（2～4）。3は隆沈線によるもので、連結部分が突き出している。4は隆線と隆沈線によるもので、頂部連結部分に丸い凹みがついている。2は小破片である。 c_2 類は隆沈線による弧状文が連続するもので、弧の上端と連結部分が小輪となっている（5・6）。 c_3 類は横向きの弧状文（隆沈線）と下向きの弧状文（沈線）が組み合ったもので、それぞれの両端は小輪となっている（7）。7は下向き弧状沈線から胴部に向って波状沈線が下垂している。

d類：口縁部上端から頸部にそのままのびるもの（第79図8～13）

d類は隆（沈）線の種類によって $d_{1\sim 5}$ 類に細分される。 d_1 類は断面半円形の隆線によるもの（8）。 d_2 類は隆線に沿って連続長方形刺突の加えられるもの（10・11）。 d_3 類は連続刻目隆線によるもの（12）。 d_4 類は頸部隆線との連結部分が小輪状となるもの（13）。 d_5 類は沈線によるもの（9）。

第3類：口縁部文様（地文）帯と胴部文様帯からなり、胴部文様帯に各種文様が描かれるもの（第79図14～16・第80図1～7）

a類：胴部文様帯に隆線による方形区画文様が描かれるもの（第79図14～16）。

14・15の隆線は断面半円形であるが、16は隆線に沿って連続する方形刺突が加えられている。

b類：胴部文様帯に沈線による縦位渦巻文様が描かれるもの（第80図1～3）

1・2は2条の沈線が縦に引かれ、その上部が渦巻状になっている。渦巻部分からは、さらに口縁に平行な横位沈線がのびている。縦位渦巻沈線に囲まれた部分は無文であるが、その外側には縄文が施文されている。3は、1・2と同様なものと考えられるが、「V」字状文様の一部の可能性もある。

c類：胴部文様帶に数条の横位沈線を引き、地文部分と無文部分を配置したもの(4～7)

4・5はLR縄文、6は長方形連續刺突文を充填したものである。5はさらに口縁部に長方形連續刺突を一列に配したものである。7は、小破片のためはつきりしないが、同様なものと考えられる。

第4類：口縁部無文帶と胴部文様(地文)帶からなるもの(第80図8～22・第81図1～7)

a類：頸部に隆沈線がめぐるもの(11)

11は胴部に下垂する沈線文の一部がみえる。

b類：頸部に隆線がめぐるもの(9・10・12・17)

隆線の断面形は半円状である。

c類：頸部にめぐる隆線が一部鍔状にふくらむもの(15・16)

d類：頸部にめぐる隆線に沿って方形の連續刺突が加えられるもの(19)

e類：頸部にめぐる隆線に連續刺突が加えられるもの(18・20～22)

f類：頸部に沈線がめぐるもの(第81図1～6)

f類は胴部に縄文が施文されるもの(1～4)と条線文が施文されるもの(5・6)がある。

g類：頸部に連續する刺突がめぐるもの(第81図7・8)

g類の頸部をめぐる刺突には長方形状(7)のものと斜行する橢円状(8)のものがある。

第5類：地文(無文)だけのもの(第81図10～15)

a類：口縁部が無文で胴部に地文が施文されるもの(10・11)

胴部の地文は10がLR縄文、11がR撚糸文である。

b類：口縁～胴部に地文が施文されるもの(12・13)

胴部の地文は12がLR縄文、13がR撚糸文である。

c類：無文のもの(14・15)

深鉢B：口縁部が外傾し、胴部が僅かに脹むもの(第81図16～29)

深鉢Bはいずれも口縁部から頸部の破片である。16～21は波状口縁の波頂部もしくは突起部、22・23は谷部である。24～29は、波状口縁か平口縁かはつきりしない。口縁・頸部には、下垂(16・24)、弧状(19・22・23・25～28)の隆線文様があり、その他の部分は無文である。

深鉢C：口縁部が外傾し、胴部が球形に脹むもの(第82図1)

1は口縁部が大波状となり、口唇部が肥厚する。突起状の波頂部は肥厚が著しく、隆沈線による弧状文が形成され、その端部は小輪状になるか丸くなる。波頂部から肩部へは立体的な橋状把手によって連結される。胴部には斜めにおりる沈線によって文様が描かれるが、磨滅のた

めその形状は不明確である。また、肩部には3条の横位沈線がみられる。

浅鉢A：口縁が内傾するもの（第82図5・6）

5・6とも四つの大波状突起をもち、突起部に注口が付けられている。注口の数は、5は2個であるが、6は1個と推定される。5の突起はいずれも橋状になっている。突起間の口縁部文様帶は下垂する隆線によって上・下端がつなげられている。胴部文様帶には各突起下に沈線による渦巻文があり、渦巻文と渦巻文の間には沈線による2個一組の区画文様（下向き弧状）があり、条線文が充填されている。胴中央部には、この弧状区画文に対応する緩やかな弧状沈線文があり、その下には条線文が施文されている。6は、突起部が渦巻状になっているが、その他の部分は無文である。

浅鉢B：口縁部が外傾するもの（第82図2～4）

浅鉢Bは、頸部でくびれ、肩が張る。2は口縁～肩部の破片で、口縁部突起から肩部が渦を巻く橋状把手で連結されている。口縁・胴部は無文であるが、肩・胴部には粘土を片側に寄せた刺突文が施文されている。3・4は、頸～胴上部の破片である。3は頸部にめぐる隆線が渦を巻きながら肩部まで伸びている。隆線には連続する円形刺突が加えられている。肩部には縦に長い刺突が二段施文され、胴部の境には横位沈線が引かれている。胴部は無文である。4は肩部に隆沈線による弧状文がある。胴部上端には橢円形の刺突が横一列に加えられ、その下にはR L縄文が施文されている。

胴部資料

胴部資料については、文様の描かれているものと特徴的な地文をもつものについて説明する。

第83図1～16は縦位・横位の隆線が描かれているもので、1・2・3・6・7は「上」状になり、方形区画文様の一部と考えられる。5は、頸部にめぐる横位隆線であるが、他の4・8～16は胴部にみられるもので、これらも方形区画文様の一部の可能性がある。また、1・2は隆線、3・5・9・10・11・15・16は連続刻目隆線、12～14は連続刺突隆線、4・6・8は端部に小輪が形成されるものである。7の隆線は幅が広く隆帯状をしており、その中に橢円形の刺突が連続して加えられている。

第83図17は隆線によって袈裟襷状の文様が描かれており、交叉する部分が小輪となっている。

第83図18～26・28は2本一組の沈線もしくは隆線で渦巻状の入組文様を描き、その内側もしくは外側に地文を充填しているものである。27・28は、渦巻状の入組文様か「V」字状の文様かはつきりしないが、内部に刺突文が充填されている。

第84図1～3は数条の沈線で弧状文が左右向い合う紡錘形状の文様を描き、その内側と外側にLR縄文を施文している。

第84図4～6は数条の沈線を横位・斜位に引いて文様を描いているものである。4・5はLR縄文、6はL撲糸文が施文されている。

第84図7～10は頸部に隆線をめぐらし、胴部に地文を施文したものである。8～10は隆線の一部が鐸状にふくらんでいる。地文は7が斜格子沈線文、8はLR縄文、9はLR L縄文、10はL撲糸文である。

第84図11は胴下部に片側に粘土を寄せる刺突文を施文したものである。

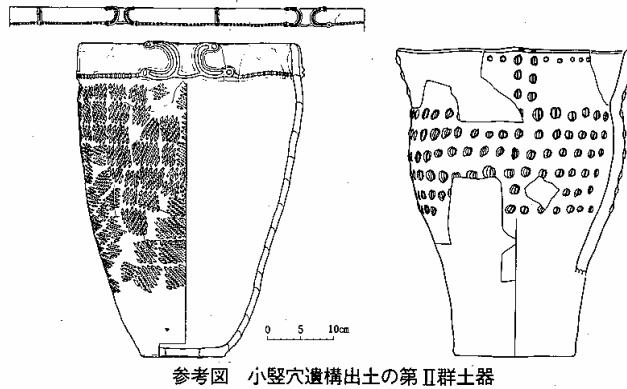
各遺構・各地区出土の第II群土器

北側遺物包含層出土の第II群土器に類似するものを、各遺構・各地区出土土器から復元資料もしくはそれに準じるものに限って摘出したのが参考図(第64図・第65図9)・第85～87図(3・4・5は除く)である。

第85図は胴上部に隆線による方形区画文を8個配したものである。方形区画文両側の隆線は上下にのび、口縁部上端および胴中央部横位隆線まで達している。方形区画内にはRL縄文が充填されているが、区画間は長方形の無文帯となっている。隆線の断面は半円状をしている。この土器は、頸部隆線が連続していないことを除けば、方形区画文や隆線の形状において、深鉢A第2a₁類や第3a類と似ている。

第64図は頸部に連続する刻目を加えた隆線をめぐらし、隆沈線による下垂線文・弧状文で口縁部上・下端をつないでいるものである。下垂線文と弧状文の両端は小輪状になっている。また、弧状文は背中合せに2個組み合せたものである。このような口縁部文様帶の特徴は深鉢A第2a₅類・第2c類と似ている。

第86図は頸部に断面半円形の隆線をめぐらし、口縁部上・下端を隆沈線による三角形状文で



つないでいる。三角形状文の頂角にあたる部分は小輪となっているが、両角の部分は小輪状になるものといくぶん脹むだけのものがある。この土器は深鉢A第2b₂類と似ているが、小輪がさらに明瞭で、小輪間も刺突隆線ではなく隆沈線となっている。このような形状は第2c類の弧状文とも似ており、両者の中間的様相を示している。

第87図1は口縁部が外傾し、胴部が球形となるもので、深鉢Cと同じ器形のものである。口縁部は四つの大波状となり、口唇部は肥厚する。口縁波頂部と肩部は上端が渦を巻く橋状把手によって連結される。肩部には橋状把手から続く隆線がめぐる。この隆線には連続する刻目が加えられている。胴部には下垂する渦巻文が沈線で描かれ、横位・斜位の沈線で連結される。渦巻間の沈線で囲まれた区画状部分にはR L縄文が充填されている。この土器は文様の点でも深鉢Cと共通している。

第65図9は深鉢Bと同じ器形のものであるが、さらに全体的器形の判明するものである。口縁部は外傾し、頸部でしめる。胴上部は僅かに脹むが、胴中央部ですぼまり、胴下部は円筒状になる。口縁部の下垂文および胴部の地文は、粘土を片側に寄せた刺突文である。この他、口縁部上端には一列に円形刺突文が施文されている。深鉢Bは口縁部下垂文が隆線であった点、技法上の相違はあるが、胴部資料の中にこの土器と同じ刺突文の施文された土器がみられること（第84図11）から、同じ種類のものと考えられる。

第87図6は深鉢の胴下部である。紡錘形に隆沈線による弧状文が向い合って、その下に連続する刻目の加えられた隆線が下垂している。両者の連結部分は小輪状になっている。この土器の弧状文や刻目隆線は胴部資料第83図9・10・15・16、第84図1～3などにみられるものである。

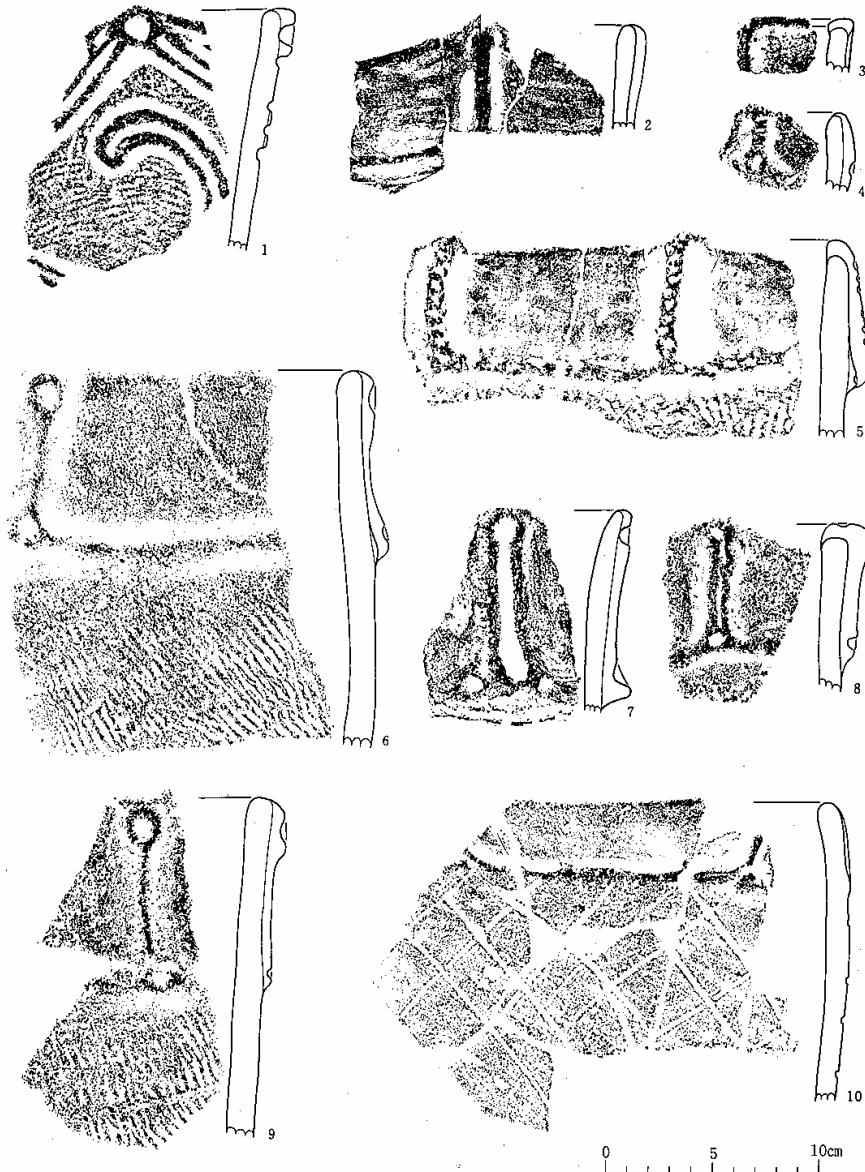
第87図2は深鉢の胴部である。2本の沈線で端部が渦巻になる入組文様を描き、LR縄文を充填している。このような文様は胴部資料第83図18～26にみられるものと同じである。

第II群土器の特徴とその編年的位置

第 群土器の特徴

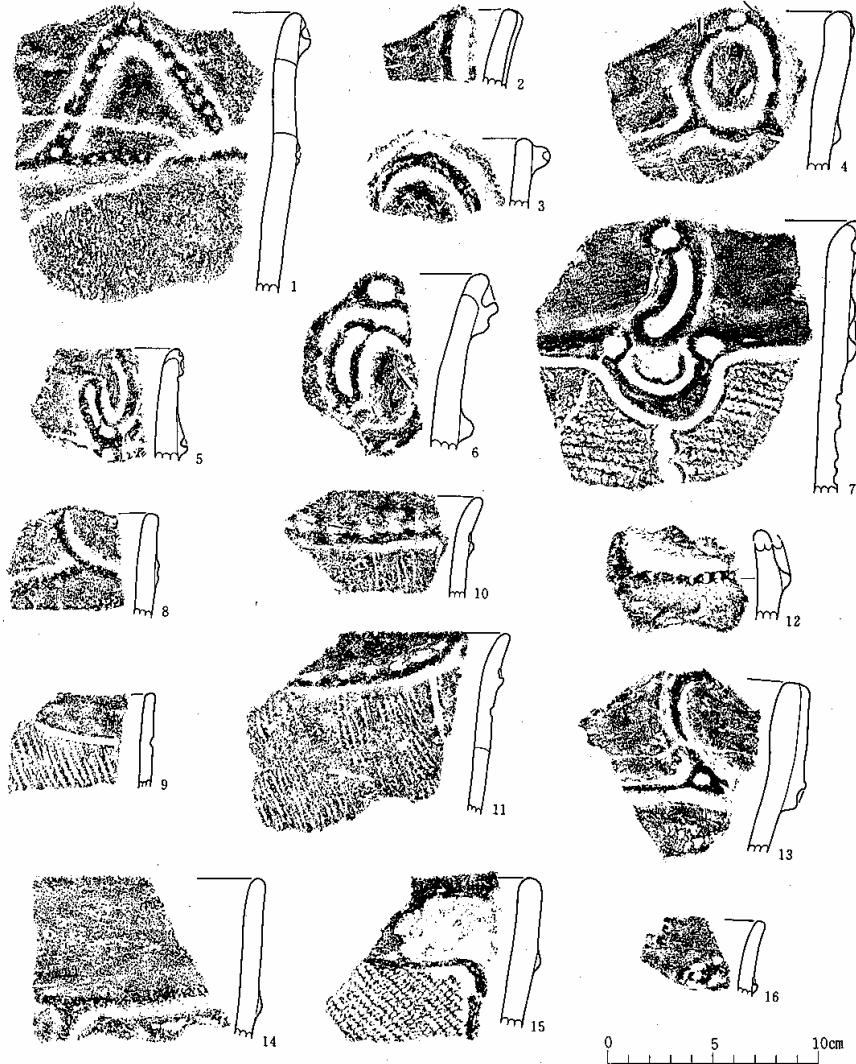
北側遺物包含層および各遺構・各地区出土の第II群土器を検討した結果に基いて、その特徴を整理してみたい。

器形と文様：第II群土器には深鉢が3種類(A・B・C)、浅鉢が2種類(A・B)ある。これらを文様の有無という点からみると、文様を有するものは深鉢A第1・3類・深鉢C・浅鉢A・浅鉢B、地文のみのものは深鉢A第5類となる。それ以外のものは両者の中間的なものか、区別が困難なものである。深鉢A第2類は、口縁部に文様はみられるが、胴部については不明である。深鉢A第4類は第2類の一部なのか、それとも頸部に隆(沈)線などがめぐらされただけのものか区別できない。深鉢Bは、口縁部に文様はあるが、胴部には地文(刺突文)が施



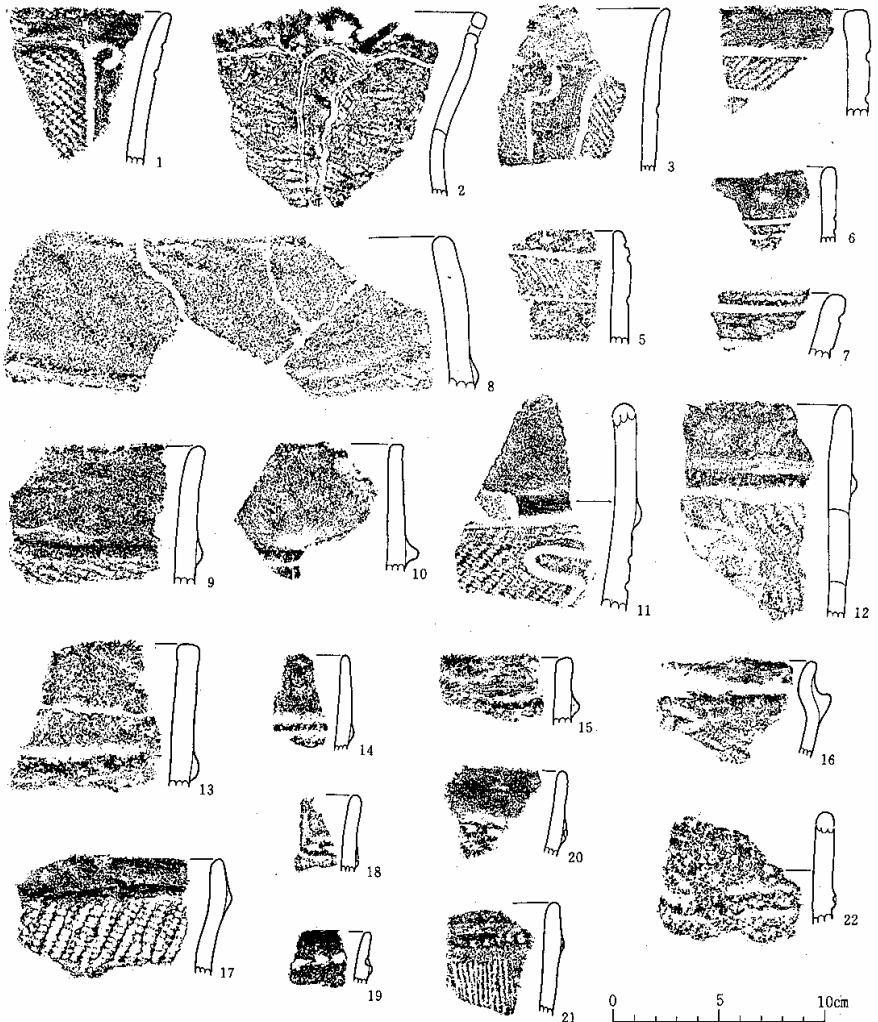
番号	地区・層位	器形・部位	分類	特　徴	基　地	図　版	番号	地区・層位	器形・部位	分類	特　徴	基　地	図　版
1	AT-73-75区 第2A層	深　鉢 A 1		菱形格子文 附浅腹 LR楕円支脚	包P. 86	35-1	6	AT-74-75区 第2B層	深　鉢 A 2a ₁	「L」状下垂腹文 附斜面堆疊小輪・直条文	包P. 84	35-6	
2	AT-73-75区 第2層	深　鉢 A 2a ₁		「L」状下垂腹文 斜面堆疊小輪	包P. 85	35-2	7	AT-74-75区 第2層	深　鉢 A 2a ₁	「L」状下垂腹文 附斜面堆疊小輪	包P. 11	35-8	
3	AT-74-75区 第2層	深　鉢 A 2a ₁		「L」状下垂腹文 斜面堆疊小輪	包P. 46	35-3	8	AT-73-75区 第2A層	深　鉢 A 2a ₁	「L」状下垂腹文 附斜面堆疊小輪	包P. 69	35-9	
4	AT-73-75区 第2層	深　鉢 A 2a ₂		「L」状下垂腹文 連續凹槽 C小輪	包P. 235	35-4	9	AT-73-75区 第2A層	深　鉢 A 2a ₂	6点脚・團体	包P. 116	35-7	
5	AT-74-75区 第2B層	深　鉢 A 2a ₂		「L」状下垂腹文 連續凹槽 LR楕圓支脚	包P. 85	35-5	10	AT-73-75区 第2A層	深　鉢 A 2b ₁	三角形突起 斜面堆疊小輪	包P. 87	35-12	

第78図 北側遺物包含層出土土器(1)



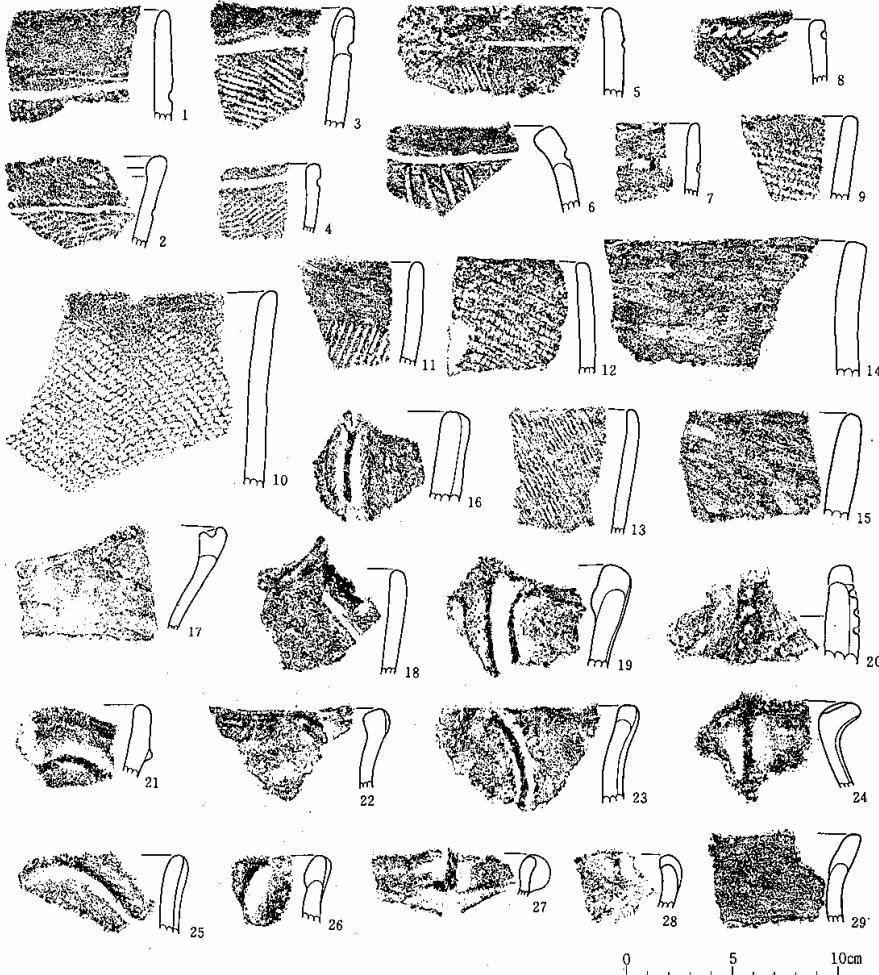
番号	地区・層位	吉影・縫合	分類	特 記	益 錄	圓 版	番号	地区・層位	吉影・縫合	分類	特 記	益 錄	圓 版
1	AT-73-75区 第2層 深 縫 A 2b	吉影文	漆鉢の縫合	角付小柄	BPo. 7	25-13	10	AT-73-75区 第2層 深 縫 A 2d	吉影文	漆鉢の縫合	漆鉢の縫合	BPo. 41	35-19
2	AT-74-75区 第2層 深 縫 A 2c	吉影・縫合	漆鉢	漆鉢	BPo. 62	36-10							
3	AT-74-75区 第2層 深 縫 A 2c	吉影・縫合	漆鉢	漆鉢	BPo. 261	—	11	AT-73-75区 第2層 深 縫 A 2d	10-11cm両側縫合	漆鉢	漆鉢	BPo. 42	35-20
4	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 2c	吉影・縫合	漆鉢	小輪灰色	BPo. 89	36-11	12	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 2d	吉影・縫合	漆鉢	漆鉢	BPo. 218	35-20
5	AT-74-75区 第2層 深 縫 A 2c	吉影文	漆鉢	小柄	BPo. 89	35-15	13	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 2d	吉影・縫合	漆鉢	漆鉢	BPo. 73	35-22
6	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 2c	吉影文	漆鉢	小柄	BPo. 80	36-14	14	AT-73-75区 第2層 深 縫 A 3a	方縫合直縫	漆鉢	漆鉢	BPo. 87	37-1
7	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 2c	吉影文	漆鉢	小柄 R.L直縫	BPo. 12	36-18	15	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 3a	方縫合直縫	漆鉢	漆鉢	BPo. 47	37-2
8	AT-74-75区 第2B層 深 縫 A 2d	口縫・縫合	漆鉢	漆鉢	BPo. 76	36-17	16	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 3a	方縫合文	漆鉢	漆鉢	BPo. 58	37-3
9	AT-73-75区 第2A層 深 縫 A 2d	吉影・縫合	漆鉢	L形文	BPo. 17	36-18							

第79図 北側遺物包含層出土土器(2)



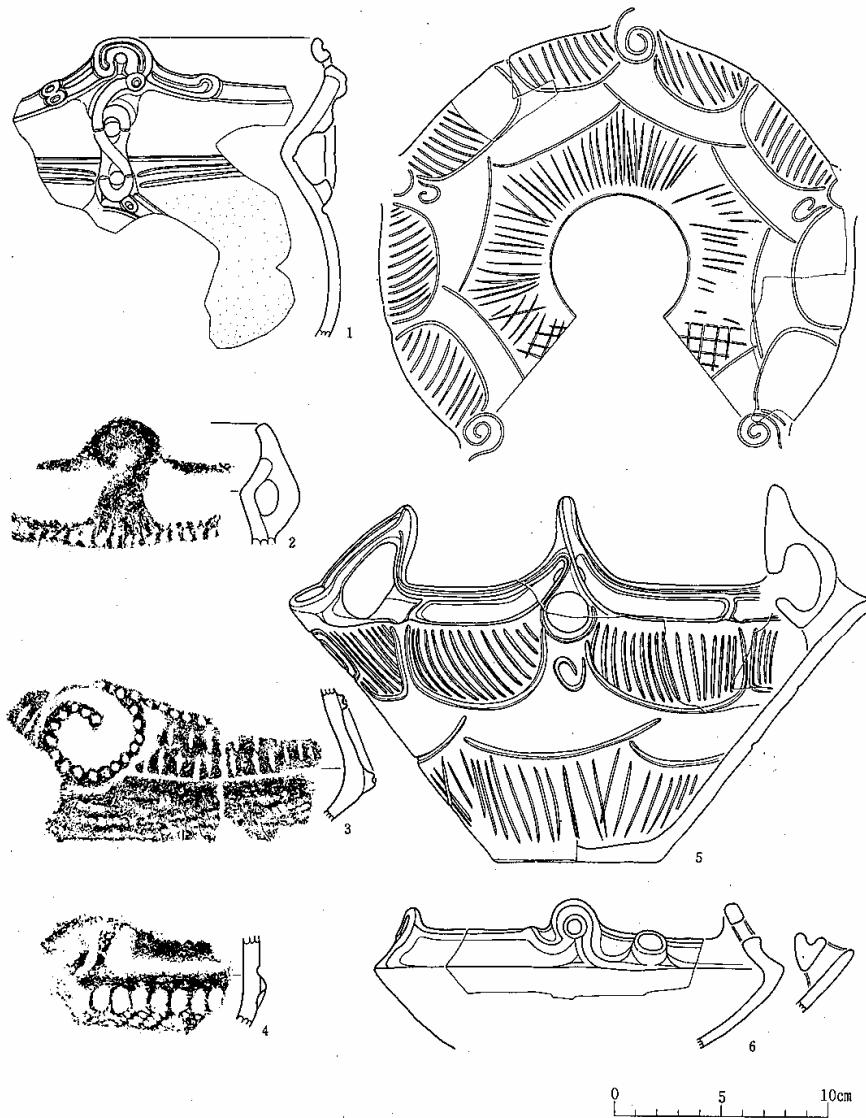
番号	地区・層位	形態・部位	分類	特　　徴	登　録　図　版	番号	地区・層位	形態・部位	分類	特　　徴	登　録　図　版
1	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	3 b	方形凹面削除文 R.L横文充満	包Po. 13 37-4	12	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 b	施錐削除文 R.R横文	包Po. 38 3P-15
2	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	3 b	方形追削削除文 R.R横文充満	包Po. 83 37-5	13	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 b	施錐削除文	包Po. 37 3P-16
3	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	3b?	方形追削削除文 R.R横文充満	包Po. 40 37-6	14	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 b	施錐削除文	包Po. 110 —
4	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	3 c	横性平行削除文 R.R横文充満	包Po. 23 37-7	15	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	4 b	施錐削除文	包Po. 34 3P-17
5	AT-73-75区 第2層	深 枝 A	3 c	側面V字状削除文 R.L横文・長方形削除文充満	包Po. 22 37-8	16	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 c	施錐削除文・削跡 R.L横文	包Po. 28 3P-18
6	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	3 c	側面V字状削除文 斜方彌縫斜文充満	包Po. 16 37-9	17	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	4 b	施錐削除文 R.L横文	包Po. 77 3P-19
7	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	3 c	側面平行削除文	包Po. 29 37-10	18	AT-74-75区 第2層	深 枝 A	4 c	施錐削除平行削除斜文	包Po. 187 —
8	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 b	施錐削除文	包Po. 68 37-11	19	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 d	施錐削除文・追跡平行削除文合子	包Po. 57 —
9	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 b	施錐削除文 R.R横文	包Po. 51 37-12	20	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 c	施錐削除平行削除斜文	包Po. 58 3P-21
10	AT-74-75区 第2B層	深 枝 A	4 b	施錐削除文	包Po. 27 37-13	21	AT-74-78区 第2層	深 枝 A	4 c	施錐削除斜文 R.R 棱杀文	包Po. 44 3P-20
11	AT-73-75区 第2A層	深 枝 A	4 a	施錐削除文 混合削除文 R.R横文	包Po. 209 37-14	22	AT-73-74区 第2A層	深 枝 A	4 c	施錐削除斜文	包Po. 125 3P-22

第80図 北側遺物包含層出土土器(3)



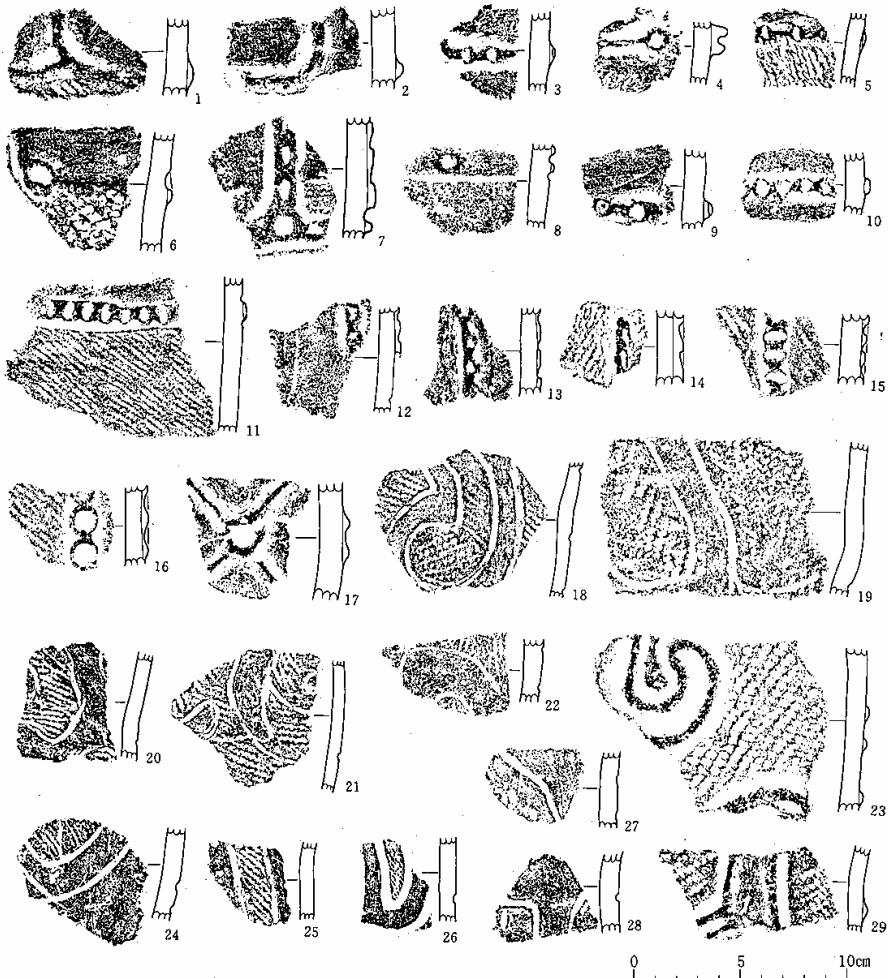
番号	地区・層位	形態・部位	分類	特徴	登録	図版	番号	地区・層位	形態・部位	分類	特徴	登録	図版
1	AT-74-75区 第2B層	深 扉 A	4 f	面部 沈刻文	包 Po. 10	37-23	15	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	5 c	無文	包 Po. 25	37-36
2	AT-74-75区 第2B層	深 扉 A	4 f	面部 沈刻文 R.L横文	包 Po. 96	37-25	16	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	波状口輪突起 下垂縫隙文	包 Po. 75	38-3	
3	AT-74-75区 第2B層	深 扉 A	4 f	面部 沈刻文 R.R横文	包 Po. 21	37-24	17	AT-74-75区 第2B層	深 扉 B	波状口輪突起 口背部凹彎切刃	包 Po. 95	38-4	
4	AT-73-75区 第2層	深 扉 A	4 f	面部 沈刻文 R.L横文	包 Po. 52	37-25	18	AT-74-75区 第2B層	深 扉 B	波状口輪突起 沈刻文	包 Po. 20	38-2	
5	AT-74-75区 第2A層	深 扉 A	4 f	面部 沈刻文 條縫文	包 Po. 49	37-27	19	AT-74-75区 第2B層	深 扉 B	波状口輪突起 亂状縫隙文	包 Po. 72	38-5	
6	AT-73-75区 第2B層	深 扉 A	4 f	面部 沈刻文 余線文	包 Po. 19	37-28	20	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	波狀輪突起 錐狀輪縫(密)	包 Po. 64	38-6	
7	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	4 g	扇形 連續長方形刻文字	包 Po. 93	37-29	21	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	波状口輪突起 波状縫隙文	包 Po. 22	38-7	
8	AT-74-75区 第2B層	深 扉 A	4 g	扇部 連續円形刻文字 L.R横文	包 Po. 33	37-30	22	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	波状口輪突起谷部 篦状隆縫文	包 Po. 24	38-8	
9	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	5 a	R.R横文	包 Po. 100	37-31	23	AT-73-75区 第2 層	深 扉 B	波状口輪縫各部 篦状隆縫文	包 Po. 50	—	
10	AT-74-75区 第2層	深 扉 A	5 a	R.R横文	包 Po. 88	37-32	24	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	下垂縫隙文	包 Po. 63	38-9	
11	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	5 a	R.R 横文	包 Po. 43	37-33	25	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	垂直縫隙文	包 Po. 61	—	
12	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	5 b	R.R横文	包 Po. 60	—	26	AT-74-75区 第2B層	深 扉 B	垂直縫隙文	包 Po. 54	—	
13	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	5 b	R.R 暈条文	包 Po. 20	37-34	27	AT-73-75区 第2A層	深 扉 B	垂直縫隙文	包 Po. 57	—	
14	AT-73-75区 第2A層	深 扉 A	5 c	無文	包 Po. 9	37-35	28	AT-74-75区 第2B層	深 扉 B	無文	包 Po. 26	38-10	

第81図 北側遺物包含層出土土器(4)



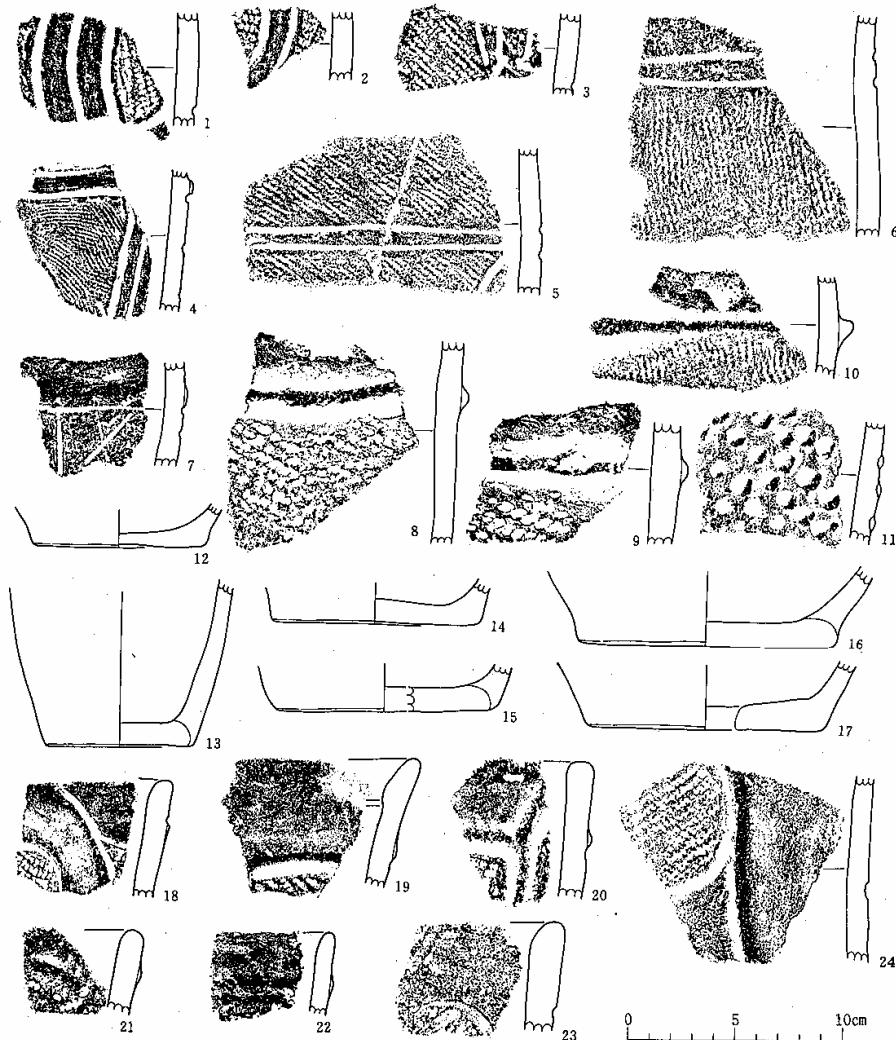
番号	地区・層位	器形・部位	分類	特徴	登録	図版
1	A T-73~75区 第2A層	深鉢 C	弧状隆線文 小輪 满巻块状線文		包 Po. 2	38-11
2	A T-74・75区 第2B層	浅鉢 B	满巻橋状把手 刺突文		包 Po. 5	38-12
3	A T-73~75区 第 A, 層	浅鉢 B	满巻刺突隆線文 刺突文		包 Po. 4	38-14
4	A T-73~75区 第2A, 層	浅鉢 B	弧状隆線文 刺突文 RL繩文		包 Po. 211	38-13
5	A T-73~75区 第2A, 層	浅鉢 A	四大波状突起 二側注口部 满巻区画沈線文 条線文		包 Po. 1	38-16
6	A T-73~75区 第2A, 層	浅鉢 A	四波状突起 注口部あり 满巻隆線文		包 Po. 2	38-15

第82図 北側遺物包含層出土土器(5)



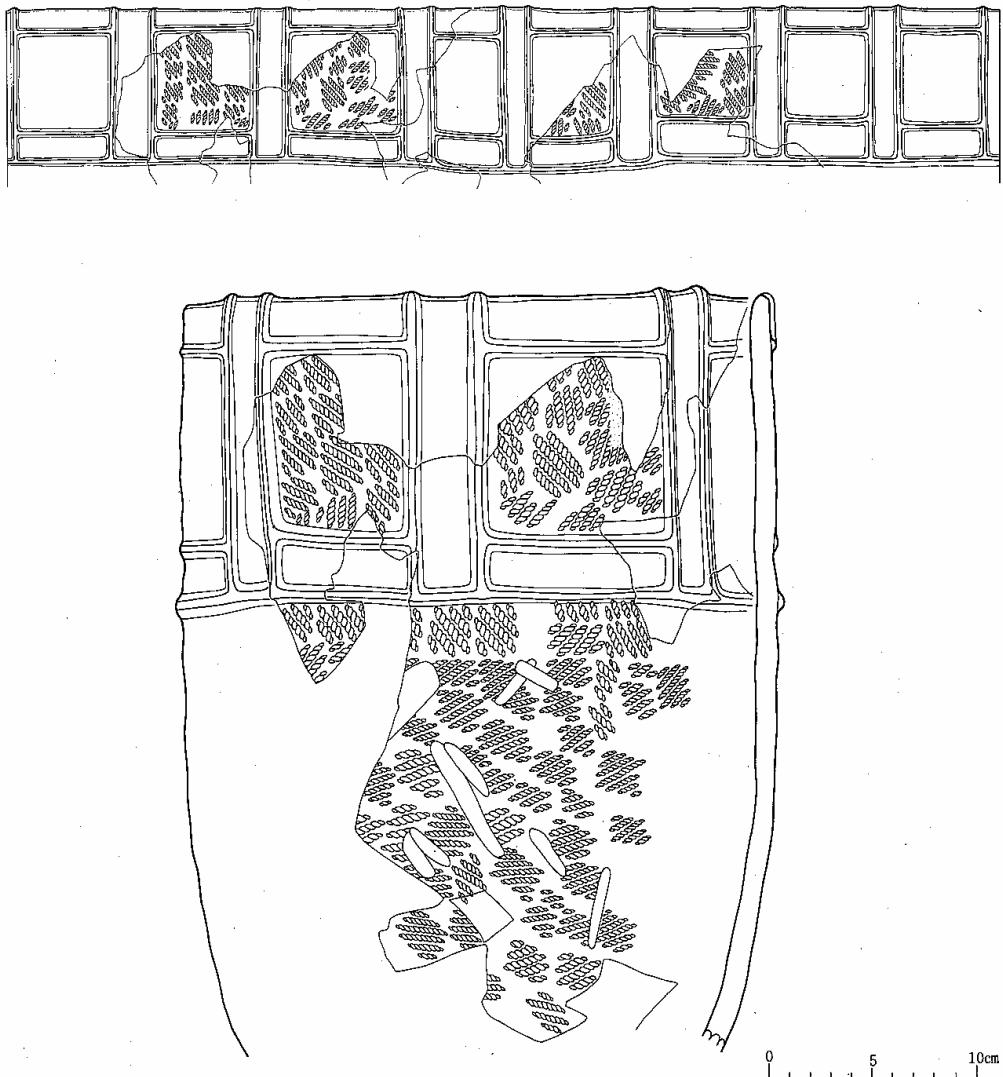
番号	地区・層位	器形・部位	特徴	直径	図版	番号	地区・層位	器形・部位	特徴	直径	図版
1	AT-73~75区 第2層	深鉢 脚部	方形区隔縫線文 LR模文	包 Po.251	38~17	16	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	複位連続刻印縫線文	包 Po.222	39~3
2	AT-74~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	方形区隔縫線文	包 Po.246	38~18	17	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	複位連続刻印縫線文 小輪	包 Po.135	39~4
3	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	方形区隔刻印縫線文	包 Po.194	—	18	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文 LR模文光面	包 Po.177	39~7
4	AT-74~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	方形区隔縫線文 小輪	包 Po.182	—	19	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文？ RL模文光面	包 Po.207	39~6
5	AT-74~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	横位連続縫線文	包 Po.192	35~19	20	AT-74~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文 LR模文光面	包 Po.214	39~8
6	AT-73~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	方形区隔縫線文 小輪	包 Po.150	35~24	21	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文 LR模文光面	包 Po.178	39~9
7	AT-74~75区 第2層	深鉢 脚部	方形区隔兩側突張縫文 小輪	包 Po.109	38~26	22	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文 RL模文光面	包 Po.219	39~11
8	AT-74~75区 第2層	深鉢 脚部	方形区隔文？ 小輪	包 Po.14	35~25	23	AT-74~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文 RL模文光面	包 Po.134	39~16
9	AT-73~75区 第2層	深鉢 脚部	横位連続縫線文	包 Po.189	—	24	AT-74~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文 RL模文光面	包 Po.239	39~10
10	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	横位連続刻印縫線文	包 Po.191	38~21	25	AT-73~75区 第2層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文？ LR模文光面	包 Po.161	—
11	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	横位連続刻印縫線文	包 Po.160	38~22	26	AQ-73区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文？	包 Po.190	39~13
12	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	横位連続刻印縫線文	包 Po.226	39~1	27	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文？ 刺突文光面	包 Po.230	39~14
13	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	横位連続刻印縫線文	包 Po.233	—	28	AT-74~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文？ 刺突文光面	包 Po.186	39~15
14	AT-73~75区 第2A ₁ 層	深鉢 脚部	横位連続刻印縫線文	包 Po.202	38~28	29	AT-74~75区 第2B ₁ 層	深鉢 脚部	渦巻人相沈縫文？ RL模文光面	包 Po.118	39~17
15	AT-74~75区 第2層	深鉢 脚部	横位連続刻印縫線文	包 Po.197	38~27						

第83図 北側遺物包含層出土土器(6)



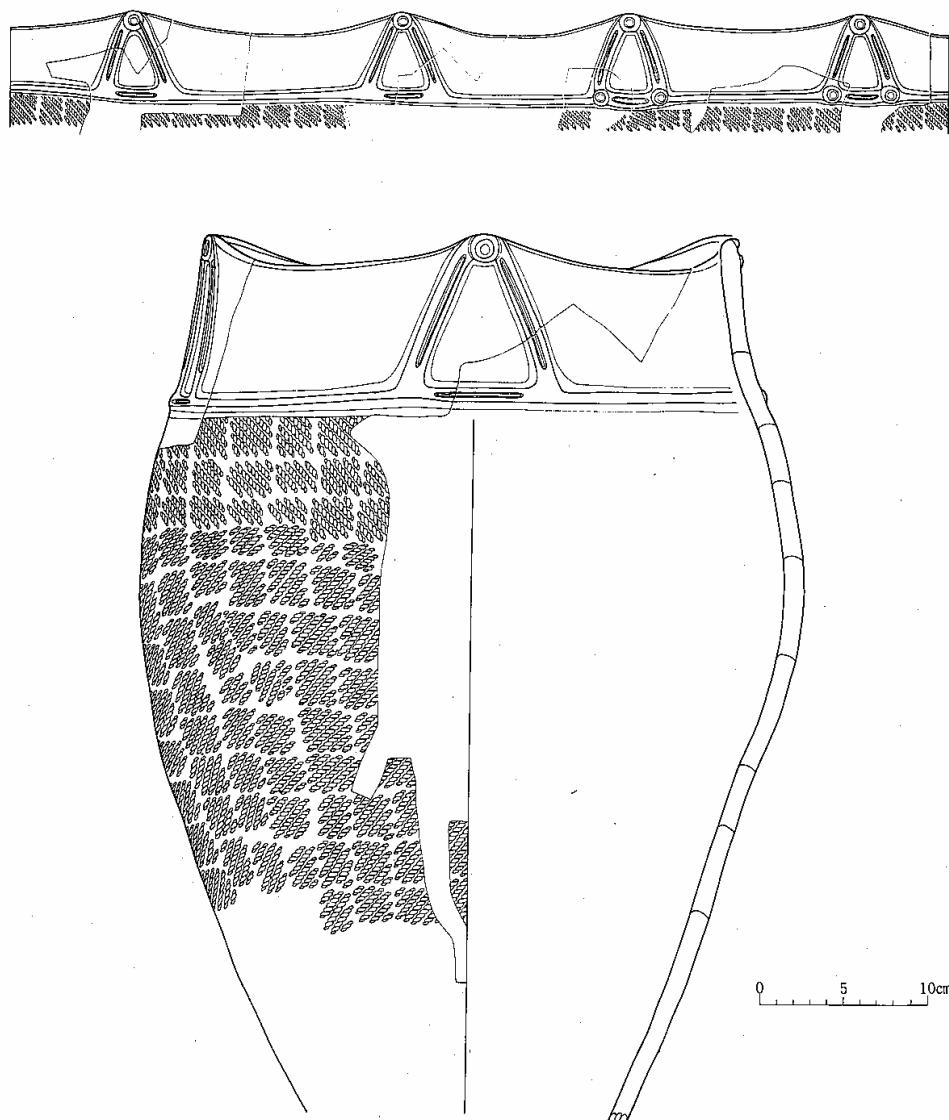
番号	地区・層位	器形・部位	特徴	登録	図版	番号	地区・層位	器形・部位	特徴	登録	図版	
1	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	輪縁形状沈線文 L.R.縦文光痕	包 Po.144	39-18	13	AT-74-75E 第2B層	深鉢 底 部	粗縞文織痕	包 Po.259	—	
2	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	輪縁形状沈線文 L.R.縦文光痕	包 Po.253	39-19	14	AT-73-75E 第2A層	深鉢 底 部	粗縞文織痕	包 Po.262	—	
3	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	輪縁形状沈線文 L.R.縦文光痕	包 Po.17	39-20	15	AT-73-75E 第2A層	深鉢 底 部	粗縞文織痕	包 Po.264	—	
4	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	横・斜状沈線文 L.R.縦文	包 Po.81	39-22	16	AT-73-75E 第2A層	深鉢 底 部	粗縞文織痕	包 Po.266	—	
5	AT-74-75E 第2層	深鉢 痕 部	横・斜状沈線文 L.R.縦文	包 Po.132	39-23	17	AT-73-75E 第2A層	深鉢 底 部	粗縞文織痕	包 Po.267	—	
6	AT-74-75E 第2層	深鉢 痕 部	横・斜状沈線文 L.燃系文	包 Po.12	39-24	18	AT-73-75E 第2A層	深鉢 第1群	連續S字状沈線文 L.R.縦文光痕	包 Po.79	39-30	
7	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	斜角十字沈線文	包 Po.119	39-28	19	AT-73-75E 第2A層	深鉢 第1群	連續S字状沈線文？ L.R.縦文光痕	包 Po. 3	39-31	
8	AT-73-74E 第2A層	深鉢 痕 部	深鉢路線文 一部跡状 L.R.縦文	包 Po.105	39-27	20	AT-73-75E 第2A層	深鉢 第1群	連續S字状沈線文？ R.L.縦文光痕	包 Po. 94	39-32	
9	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	深鉢路線文 一部跡状 L.R.縦文	包 Po.106	39-26	21	AT-73-75E 第2A層	深鉢 第1群	連續S字状沈線文？	包 Po. 39	—	
10	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	深鉢路線文 一部跡状 L.燃系文	包 Po.140	39-25	22	AT-73-75E 第2A層	深鉢 第1群	連續S字状沈線文？	包 Po. 31	39-33	
11	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	斜突文	包 Po.139	39-29	23	AT-73-75E 第2A層	深鉢 第1群	沈線文 R.L.縦文光痕	包 Po. 90	—	
12	AT-73-75E 第2A層	深鉢 痕 部	粗縞文織痕	包 Po.263	39-28	24	AT-74-E 区	第2層	深鉢 第1群	輪縁形 S字状路線文 R.L.R.縦文光痕	包 Po.268	39-36

第84図 北側遺物包含層出土土器(7)



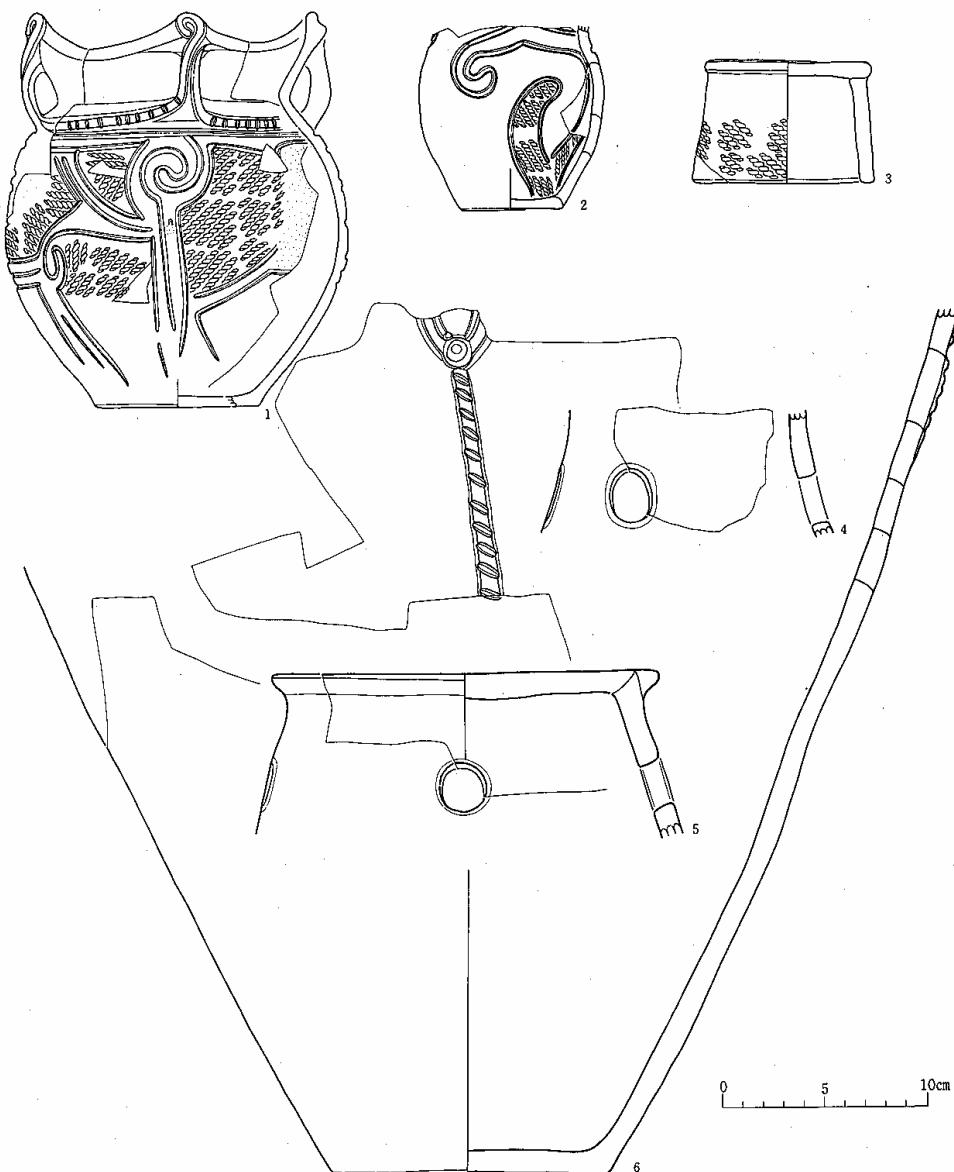
番号	地区・層位	器 形	分 類	特 徴	微	登 錄	図 版
1	B F-69区 第1層	深鉢A	2 a, or 3 a	肩上部：溝線による方形区画文 二種類のR L純文充填 肩下部：二種類のR L純文 縦の広い網目		区 Pb. I	35-3

第85図 各地区出土の土器(1)



番号	地区・層位	器形	分類	特	徴	建録	図版
1	BF-62区 第2層	深井A	2a, or 2c	口縁部: 三角形状陽文 横文 角の一部は小輪	底部: 陰線 脚部: RL横文	IX, Po. 2	35-4

第86図 各地区出土の土器(2)



番号	地区・削位	器 形	特 質	貢	登録 号	図 版	番号	地区・穴位	器 形	特 質	登録 号	図 版
1	AN-52区 第2削	深鉢C	内縁：凹凸波状 織部：織目斜線 制部：織目斜線 染文 R.L.英文光素		区 Pa.3	—	4	AK-61区 第2削	盆 台	有空器台 制部：丸窓	区 Pa.6	—
2	BF-70区 第1削	深 鉢	渦巻人相波紋 L.R.英文光素		区 Pa.4	—	5	AD-68区 第2削	盆 台	有空器台 制部：丸窓	区 Pa.7	—
3	BC-59区 第1削	盤 古	無空器台 制部：L.R.英文		区 Pa.5	—	6	BG-61区 第2削	深 鉢	横縞斜波紋文 小輪 織目斜線下垂	区 Pa.8	—

第87図 各地区出土の土器(3)

文されている。

以上の中で、文様の特徴を捉えることが可能なのは、口縁部もしくは胴部に文様がみられるもので、深鉢A第1・2・3類、深鉢B、深鉢C、浅鉢A、浅鉢Bが該当する。これらの土器には各種の器形があるが、器形の相違を越えて共通してみられる特徴的な文様がある。それは弧状・渦巻状の文様である。これらの文様は隆（沈）線や沈線で描かれるが、弧状文の場合端部に小輪を形成することが多く、それが特徴ともなっている。このような文様をもつ土器をAグループ（深鉢A第1類・第2c_{1~3}類・第3b類・深鉢B・深鉢C・浅鉢A・浅鉢B）とする。次に、弧状文や渦巻文ではないが、これらと関連の認められる文様がある。第64図にみられる口縁部文様は隆沈線による弧状文と「上」状下垂線文で、両者とも端部に小輪が形成されている。頸部をめぐる隆線には連続する刻目が加えられている。深鉢A第2a₂類の口縁部「上」状下垂線文は連続刻目隆線で、頸部をめぐる隆線と連結する部分に小輪が形成されている。深鉢A第2b₂類の口縁部三角形状文は、各辺が連続刺突隆線で、角の部分に小輪が形成されている。このような例は、口縁部下垂線文・三角形状文の小輪・連続刻目隆線・連続刺突隆線が、弧状文と強い関連があることを示している。また、深鉢A第3c類の口縁部に平行する数条の横位沈線文は、深鉢A第3b類や深鉢Cの渦巻間を連結する沈線文様と相似した点がある。したがって、ここでは、Aグループの土器と強い関連のある文様をもつ土器を一括してBグループ（深鉢A第2a_{2~5}類・第2b₂類・第2d_{3~4}類・第3c類）とする。

次に、A・Bグループに含めることができなかった文様をもつ土器をCグループ（深鉢A第2a₁類・2b₁類・2d_{1~2~5}類・第3a類）とする。Cグループの土器は、口縁部文様が「上」状下垂線文のものと頸部隆線がそのまま口縁部上端に達するもの、胴部文様が方形区画文のものである。口縁部文様は隆線（第2a₁・b₂・d₁類）・隆線に沿って連続刺突の加えられたもの（第2d₂類）・沈線（第2d₅類）、胴部文様は隆線（第3a類）で描かれている。Cグループの土器は、口縁部の「上」状文・三角形状文などBグループの文様との関連はみられるものの、Aグループの文様との関連が弱いものである。

出土状況における問題点：上述のように、第II群土器は文様の上でA・B・Cグループの土器に分けて考えることができる。次に、この三グループの土器を出土状況の点から検討してみたい。第II群土器は北側遺物包含層からまとまって出土しており、原則的には同じ時期の土器群と考えられる。ところが、この北側遺物包含層では既に述べたように少量の第I群土器が混入していたのである。そこで問題となるのは、第II群土器としたものがすべて同じ時期のものなのか、それとも第I群土器以外のものがさらに混入している可能性がないのかということである。

この点、A・Bグループの土器は、文様的にも技法的にも強い関連があり、同じ時期の土器

群とみて問題はない。ところが、Cグループの土器の文様・技法はBグループの土器と一部関連はみられるが、既に述べたようにAグループの土器との関連が弱い。さらに、Cグループの土器は第I群土器の文様とは異なるものの(方形区画文)、無文帯で区画し、その区内に縄文を充填するという点に共通性がうかがわれる。これは、頸部線文が口縁部上端に達するという点でも同じである。このようにCグループの土器は第II群A・Bグループの土器と第I群土器との過渡的文様・技法をもつものとみることができる。したがって、このCグループの土器については、A・Bグループと同じ時期のものなのか、それとも前時期のものが混入したものなののか、2つの可能性が存在し、現段階ではそのいずれとも決め難い。^{注)}

注) 第I群土器が大木10式土器で、その主体は第II段階のものであること、第III段階のものは1点みられただけであることなどは既に述べた。大木10式土器については、第III段階の次に最終段階のものが存在することが指摘されている。しかし、まだまとまった資料の公表はなされていない。このため、第II群Cグループとした土器が、大木10式土器最終段階のものなのか、それよりも新しいもので第II群A・Bグループの土器と同じ時期のものなのかについては結論を出せない。なお、大木10式土器最終段階のものは沼津貝塚(三塚・阿部・佐藤:1976・3)と六反田遺跡(田中則和他:1981・12)出土のものなどが報告されている。前者では復元資料4点(第17図版2・第20図版・第21図版)、後者では復元資料1点と破片資料数点(第46図)が示されている。両者とも方形区画文を特徴とするものであるが、土器群としての全容を知り得るほどのものではない。

第二 群土器の編年的位置

第II群土器は弧状文・渦巻状文・三角状文、さらにはそれらに附隨する小輪・連続刺突隆線・連続刻目隆線などによって特徴づけられる。このような特徴をもつ土器群は、後期前葉に位置づけられる南境式土器の中にみられる(伊東信雄:1957・3・伊東信雄他:1981・9)。このように、宮城県内の後期前葉の土器型式は一般的に南境式と呼ばれている。それに対し、後期前葉の土器群を数型式に細分し、南境式土器については、型式設定時に使用された資料に限定し、それ以外のものは別な型式名で呼ぼうとする考え方もある。すなわち、林謙作氏は袖窪式・宮戸I式(南境式)、後藤勝彦氏はA群土器(宮戸Ia式?)・B群土器(宮戸Ib式)・C群土器(南境式)という型式を設定し、編年を行なっている(林謙作:1967・7・後藤勝彦:1974・11)。しかし、これらの考え方は資料を充分に提示した上でなされているわけではないため、各型式の内容が必ずしも明確になっておらず、特に後藤氏の場合は、各型式の内容が論文や報告においてその部度変更され^{注)}当事者以外には理解し難いものとなっている。また、林氏の袖窪式や後藤氏の宮戸I式は鳴瀬町里浜貝塚台団地区・袖窪団地区・石巻市南境貝塚など、いずれも宮城県北部の資料を基準として設定されており、このような細別型式が宮城県南部の遺跡に

対しても有効かどうかは、全県的な立場で示された伊東信雄氏の南境式土器の内容（伊東信雄他：1981・9）と較べた場合疑問が多い。このように、林氏や後藤氏の諸論には種々の問題が含まれている。しかし、そのような問題を含みながらも明らかになったことは、後期前葉の土器群に幾段階かの変遷があり、その中に地域性がみられるということであろう。したがって、ここでは後期前葉の土器を南境式とする立場に従い、その中で第II群土器の時期的・地域的位置について検討することにしたい。

注) 後藤勝彦氏は次の論文・報告で、後期前葉の土器型式について述べている。

「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器編年について」(後藤：1957)

資料	型式	関東地方の型式
第3層土器第1類	宮戸I a式	堀之内I式
第2類	宮戸I b式	堀之内II式

「陸前宮戸島里浜台圓貝塚出土の土器について」(後藤：1962・2)

資料	型式	関東地方の型式
第1類土器	宮戸I式	堀之内式の諸型式

※第1類土器を第1群・第2群に分類し、第1群から第2群に発展するとしているが、I a式・I b式の型式名は使用されていない。

「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」(後藤他：1967・3)

資料	型式	関東地方の型式
Aトレンチ下部貝層(第四層)土器	宮戸I式の第1群土器 (大木10式の新しいもの)	
Aトレンチ上部貝層(第三層)土器	宮戸I式	堀之内式

「宮古I b式周辺の吟味」(後藤：1974・11)

資料	型式	関東地方の型式
A群土器	広義の門前式・宮戸I b式	称名寺式
B群土器	宮戸I b式	堀之内I式
C群土器	南境式	堀之内II式

※A群土器は宮戸I b式から細分分離すべきとし、さらに宮戸I a式を「後期初頭の編年的位置づけとして改めて考えなければならない」としている。

「縄文後期の土器—東北一」(後藤：1981・10)

東北地方南半の型式	関東地方の型式
袖窓式	綱取1式
南境式(宮戸I b式)	綱取2式

以上のように、宮戸 I a 式の内容、そして宮戸 I b 式と南境式の関係が不明確で一定しない。すなわち、宮戸 I a 式が中期に属するのか(後藤：1967・3)、それとも後期に属するのか(後藤：1957 1974・11)か不明確で、資料自体も台囲貝塚第3層土器第1種・西ノ浜貝塚第四層土器・南境貝塚A群土器では、それぞれ内容に違いがみられる。また、南境式(C群土器)が「宮戸 I b 式に後続する土器群として層位的に検出」され、堀之内 II 式に併行している(後藤：1974・11)にもかかわらず、その後再び南境式(宮戸 I b 式)とし、堀之内 I 式に併行するものとしている(後藤：1981・10)。

第II群土器はA・B・Cグループの土器群からなり、Aグループの土器が第II群土器をもつとも特徴づけるもので、Bグループの土器と一体となって存在する。それに対し、Cグループの土器はBグループの土器と口縁部の「上」状下垂線文や三角形状文など類似点が認められるが、大木 10 式土器の最終段階のものとの区別も困難で、A・Bグループの土器と同じ時期のものか結論を出せなかった。しかし、このことは別の見方をすれば、Cグループの土器を介在させることによって、大木 10 式土器から第II群A・Bグループの土器への変遷が理解し得るわけであり、第II群土器が南境式土器の中でも初期のものであることを示している。^{注)}

注) 第II群土器が大木 10 式土器に後続する南境式土器初期のものであることを文様変遷の立場から、Aグループの特徴的文様である菱形状文・弧状文・渦巻状文について簡単に補足しておきたい。菱形状文は、三角形状文を折り返すか、袈裟襟方形区画文を連続させると成立する。弧状文は三角状文を曲線的にして一部を省略すると成立する。渦巻状文は方形区画文の無文帶上端部が変形し渦巻状になるか、さらにその渦巻部分の独立性が強まると成立する。このように菱形状文や弧状文・渦巻状文は、方形区画文とまったく異なるようにみえながら、その全体もしくは一部が変化することによって容易に成立するものと理解できる。大木 10 式最終段階の土器はその全体像を知り得る資料がまだ公表されていないため予測的な面もあるが、方形区画文が大木 10 式最終段階の土器に存在することは明らかで、その方形区画文から菱形状文や弧状文・渦巻状文が成立したとみることに矛盾は感じられない。

第二 群土器の地域性

第II群土器の類例を宮城県内に求めると、柴田町向畠遺跡(志間・芳賀：1974・3、芳賀寿幸：1974・4)・仙台市六反田遺跡(田中則和他：1981・12)・鳴瀬町里浜貝塚袖窪地区(林謙作：1965・7)・一迫町青木畑遺跡(加藤道男：1982・3)などがある。

向畠遺跡：今回、調査者である芳賀寿幸氏とともに向畠遺跡の土器を観察したところ、第II群土器とほぼ同じ土器群で、さらに内容が豊富なことを確認した。第II群土器では、2本の沈線による「V」字状文をもつものが小破片のため不明確であったのに対し、向畠遺跡の口縁部

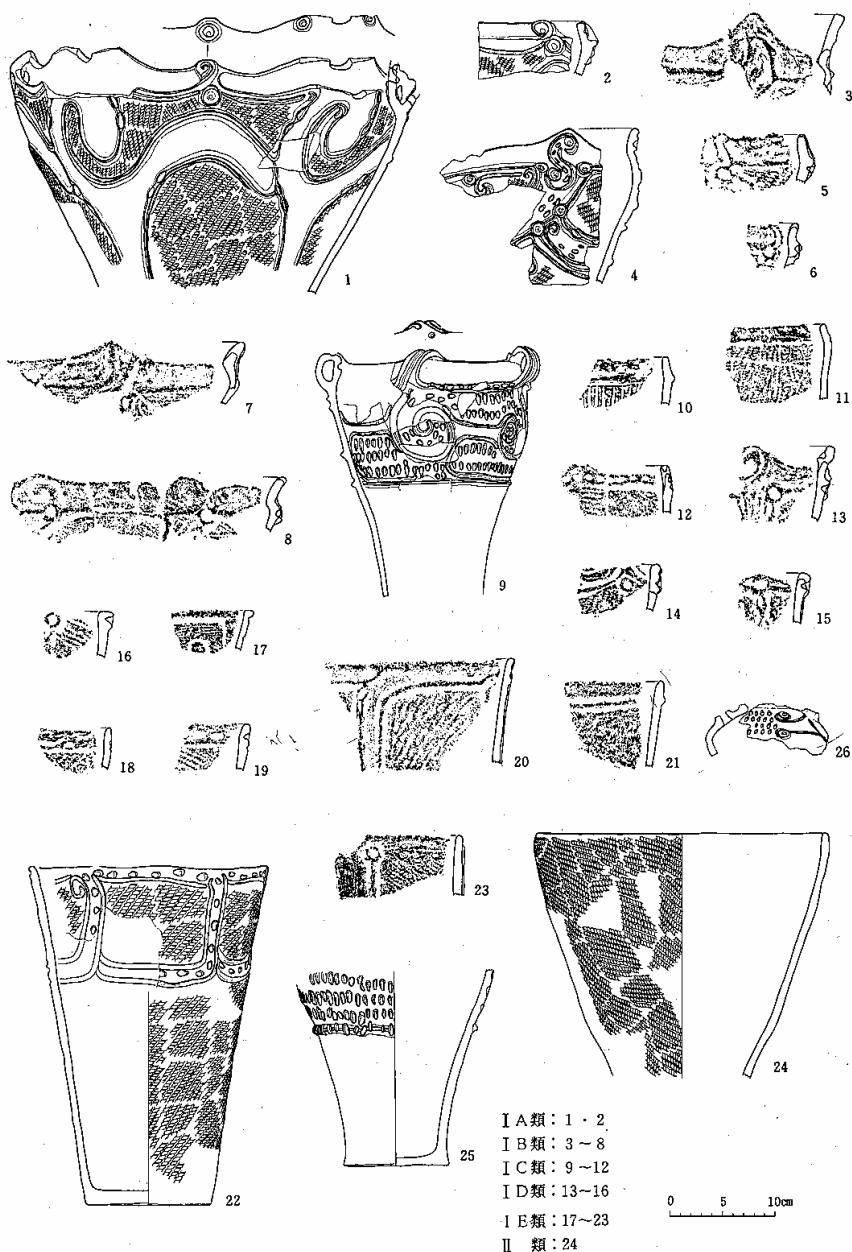
に弧状文をもつ大形破片の中にも明瞭にみられた。また「V」字状文だけのものは向畠遺跡調査概報（芳賀寿幸：1974・3）にも紹介されている（報告第4図4）。

六反田遺跡：六反田遺跡の土器は器形組成の上で第II群土器と共に、口縁部の直立気味のものが主体を占めている。口縁部文様は小輪の附された弧状文・「上」状下垂線文が多く、連続弧状文や組み合せ弧状文・三角形状文などはあまりみられず比較的単純である。胴部文様は沈線による弧状文や渦巻状文を組み合せたものが多く、中には渦巻状文が独立し蕨手状をなすものもある。この点、第II群土器よりも多少時期的幅が大きい可能性がある。この他、量的には少ないが、第3類として分類されている特異な器形のものがある。口縁部が強く内反し、四個の中空突起をもつ波状口縁で、胴部は上部が脹らんで中・下部がすぼまるものである。胴部には連鎖状隆線による「Y」字状もしくは「の」字状文を連続して描いたものである（報告第48図14他）。

里浜貝塚袖窪囲地区：袖窪囲地区貝塚出土の土器は4点図示され、そのうち文様の判明するものが2点ある（論文図26）。この2点は口縁部が直立気味で第II群土器の深鉢Aと共に通する器形である（1・3）。1点は口縁部に小輪をもつ下垂隆線文（あるいは「8」字状文）、胴部に粗雑な渦巻状沈線文のみられるもの（1）で、もう1点は胴部に小輪をもつ袈裟襷状区画文を描いたものである（3）。

青木畠遺跡：青木畠遺跡の土器は、深鉢形土器がA～E類に分類されている。A～D類は口縁部が内反し胴上部の脹らむもので、六反田遺跡の第3類と、E類は口縁部が直立気味で第II群土器の深鉢Aと共に通する。文様は、A～D類は六反田遺跡の第3類と共に通するが、内容はさらに豊富である。E類は胴部に方形区画文が描かれ、縄文が充填されるが、区画をつくる無文帶端部が渦巻状になったり、小輪が附されたり、隆線に連鎖状刺突が加えられたりする。これらの中で主体を占めるのはA～D類で、E類は少ない。

以上の遺跡の出土土器で共通するのは、口縁部が直立気味の深鉢が存在し、各種の方形区画文（袈裟襷状・端部渦巻状など）や渦巻状文がみられることである。また、隆線には刺突が加えられたり小輪が形成されたりしている。ところが、青木畠遺跡と菅生田遺跡の第II群土器を較べると、前者では口縁部が内反するもの（青木畠A～D類）が主体で、直立気味のもの（青木畠E類）が少ないのでに対し、後者では直立気味のもの（第II群深鉢A）によって大部分が占められており、器形組成に大きな違いがみられる。また、青木畠遺跡の深鉢E類は口縁部が簡素であるのに対し、菅生田遺跡の深鉢Aには弧状文・三角形状文・「上」状下垂線文などがみられ、極めて多様である。このように、宮城県北部の青木畠遺跡と南部の菅生田遺跡では器形組成と文様に大きな違いがあり、地域差がみられる。この点、向畠遺跡は菅生田遺跡と同じであり、六反田遺跡もほぼ同じ内容を示している。ただ、六反田遺跡の場合は口縁部の弧状文の發



第88図 青木畠遺跡包含層出土土器

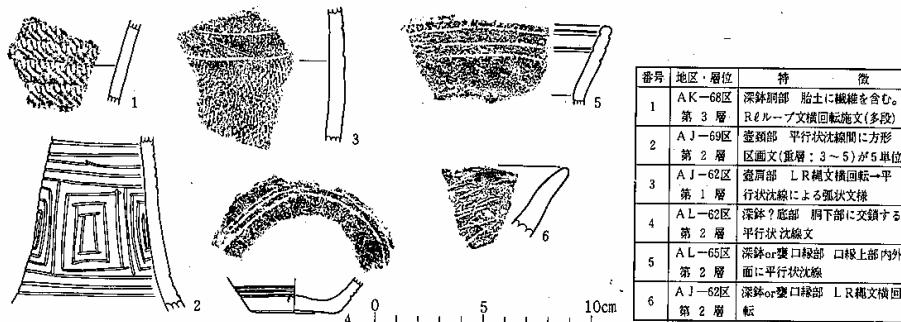
達が少なく比較的単純で、前述したように時期的な幅の問題も含むであろうが、宮城県南部に位置しながら北部に近いという地域性が影響しているものと考えられる。青木畠遺跡に多い器形（六反田第3類）が少量みられることもこのことを示している。この点、里浜貝塚袖窪地区出土土器は図示された土器が少ないので明確ではないが、器形・文様の点で宮城県南部と北部の中間的な姿を示している。

このように、南境式土器は初期の段階において宮城県北部と南部では器形組成・文様細部に顕著な地域差がみられる。そして、青木畠遺跡の土器群は岩手県門前貝塚で第2類とされている土器群^{注1)}（吉田義昭：1957）とも共通し、その分布はさらに北部にのびることも指摘されている（加藤道男：1982・3）。これに対し、六反田遺跡・向畠遺跡・菅生田遺跡のような土器群は、福島県壇ノ岡遺跡（梅宮・日黒・丹羽：1971・1）や同県いわき市綱取貝塚C地点（金子・和田：1968・5）・大畑貝塚（馬目順一他：1975・3）などでも出土し、宮城県南部から福島県に分布している。ただし、いわき市綱取貝塚C地点・大畑貝塚のものは、胴部に「V」字状の文様の描かれたものが多く、この種の文様は宮城県南部の遺跡ではあまり多くない。したがって、宮城県南部から福島県という大きな分布圏の中でも、先に六反田遺跡の場合でも指摘したように、細かな地域差がみられるものと考えられる。

以上述べたように、第II群土器は南境式土器の初期のもので、宮城県南部から福島県に分布する地域的特性をもつものと言える。

注1) この土器群は門前式土器とも呼ばれている（林謙作：1967・7）が、その中からa類に近似するものだけを抽出して門前式土器とする見解もある（及川旬：1974・10）。

注2) 馬目順一氏は綱取貝塚C地点出土の第3群土器を綱取I式土器と呼び、関東地方の称名寺式土器と併行するいわき地方特有の型式であるとしている（馬目順一：1977・3）。綱取I式土器の成立を大木10式土器に求めており、この見解は第II群土器の検討結果と矛盾しない。



第89図 繪文前期初頭の土器・弥生土器

その他の土器

菅生田遺跡からは、縄文時代中期末(大木 10 式第Ⅱ段階)から後期初頭(南境式初期)の土器の他に、極めて少量ではあるが、縄文時代前期初頭の土器と弥生土器が出土している。第 89 図はそれらのうち、口縁部資料・底部資料および時期を知る上で有効な破片資料を示したものである。

1 は、深鉢の胴部破片で、単位(幅)の小さいループ文が密接して施文されているもので、胎土に纖維を含んでいる。縄文時代前期初頭のものと考えられる。

2・3 は壺の頸部・胴部破片である。2 は細い沈線による数条の平行状文が上・下端に引かれ、その間に方形区画文(大小のものが重層)が 5 単位描かれている。3 は弧状沈線文で、渦巻文の一部かも知れない。4~6 は甕もしくは深鉢の口縁部・底部である。5 は口縁部の内外面に、4 は胴部下端に平行状沈線が数条引かれている。6 は細かな L R 縄文が施文されている。これらの土器は細い沈線で平行状・方形状・弧状の文様が描かれており、弥生時代の円田式土器と考えられる。地文だけが施文された 6 も、ほぼこの時期のものであろう。

土製品

蓋

蓋は 11 点出土している。全体の形状からみると、次の三種類がある。

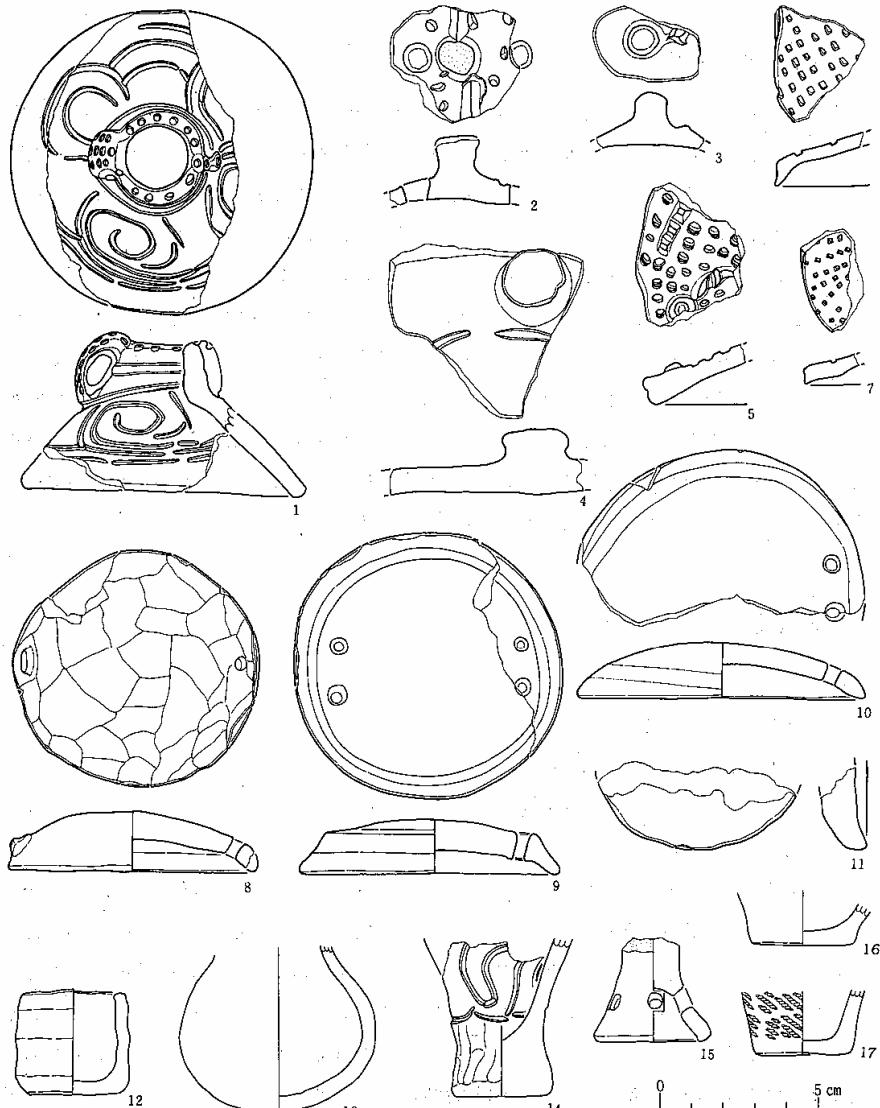
第 1 類：天井部中央に貫通孔をもつもの(1)

第 2 類：天井部中央につまみをもつもの(2~4)

第 3 類：天井部が皿状のもの(8~11)

第 1 類は 1 だけである。天井部貫通孔は大形のつまみ状をしており、片側に橋状の把手がついている。つまみ状貫通孔外縁と橋状把手には円形刺突文が一面に施文されている。橋状把手の対称的な位置には上・下端に円形刺突の加えられた縦位隆線がある。天井部外面には沈線による連弧状の渦巻文が描かれている。内面は研磨されている。この蓋は表土から出土しているため、他の土器との伴出関係は明らかでないが、天井部外面の連弧状渦巻文、つまみ状貫通孔外面の刺突隆線などの特徴は、南境式土器の初期のものと共通している。したがって、この蓋は後期初頭・南境式初期のものと考えられる。

第 2 類は 3 点ある。いずれも頂部円形のつまみがついている。2 はつまみの両側に一対の隆線と貫通孔があり、天井部外面に円形刺突文が一面に施文されている。3 は隆線、4 は沈線によって文様が描かれている。2 の円形刺突文や 4 の沈線文は後期初頭の南境式初期の土器文様と類似しており、この時期のものと思われる。3 については時期を特定できないが中期末(大



番号	地区・層位	特　　徴	登　録	図　版
1	A N - 56 区 第 7 層	中央に直通孔あり。片側に把手。外面上に円錐状文様、沈漫文様。	C.M. 40	40-7
2	A M - 66 区 第 2 層	中央につまみあり。つまみの深溝に一村の押出があり。外面上に斜線文様。	C.M. 40	40-9
3	A N - 69 区 第 2 層	中央につまみあり。外面上に斜線文様。	C.M. 40	—
4	第 8 小 穴	中央につまみあり。外面上に沈漫文様。	C.M. 40	40-5
5	A M - 64 区 第 2 層	波渦形。外面上に粗面陰線・円錐陰線・斜線文様。	C.M. 40	—
6	第 4 住 P.	波紋模。外面上に方形斜線。	C.M. 40	40-6
7	AT - 73-75 区 第 2 層	波紋模。外面上に方型斜線。	C.M. 40	—
8	N - 68 区 第 3 層	天井部は直伏。口縁近くの内側的な位置に角と円孔あり。	C.M. 40	40-10
9	第 10 住 第 2 層	天井部は直状だが、口縁部との間に棱あり。二箇一対の円孔あり。	C.M. 40	40-11
10	第 5 住 第 1-2 層	天井部は圓状。口縁近くに二箇一対の円孔あり。	C.M. 40	40-12
11	第 11 住 墓	天井部は圓孔。	C.M. 40	—
12	AT - 68 区 第 1 層	円錐状の筋形。内井面ともオサエ。底部外面上のみ軽いミガキ？	C.M. 40	—
13	第 8 小 穴	透視的の筋形。底部が毛根をもつ。外面上はヨーヨー段段文様。内面はオサエ。	C.M. 40	—
14	AT - 65 区 z 層	透視的の筋形。底部が毛根をもつ。外面上はヨーヨー段段文様。内面はオサエ。	C.M. 40	—
15	第 10 住 墓	透視的の筋形。円形窓 5 個。内面はオサエ。	C.M. 40	—
16	第 17 住 墓	内面オサエ・ナデ。外面軽いミガキ。	C.M. 40	—
17	AL - 62 区 第 2 層	内面ミガキ。外面上 R 補文類印模。底部外面上ミガキ。	C.M. 40	—

第90図 蓋・袖珍土器

木10式第Ⅱ段階)から後期初頭(南境式初期)のものであろう。

第3類は4点ある。いずれも天井部が皿状をしており、口縁に近い部分に円孔か角がついている。これらのうち9は第10号住居跡、10は第5号住居跡、11は第11号A住居跡から出土しており、いずれも中期末大木10式期第ⅡB段階のものである。8は遺構以外からの出土であるが、その形状が9~11と類似しており、同じ時期のものと推定される。

以上その他に蓋の破片(口縁部付近)が3点ある。いずれも口縁が大波状をなすものである。5は円形刺突文が一面に施文され、円形浮文・刻目隆線が貼り付けられたもので、後期初頭南境式初期の土器文様と共通していることから、この時期のものと推定される。6・7は方形刺突文が施文されている。土器文様との関係は不明であるが、6は第4号住居跡の柱穴、7は北側遺物包含層から出土していることから、中期末(大木10式第Ⅱ段階)から後期初頭(南境式初期)のものと推定される。

以上のように、蓋は刺突文や沈線・隆線文様が多用される第1・2類が後期初頭(南境式初期)、無文の第3類は中期末(大木10式期第Ⅱ段階)のものと推定された。また、5~7のように刺突文であっても、それが方形のものは両時期にまたがって存在することを指摘した。

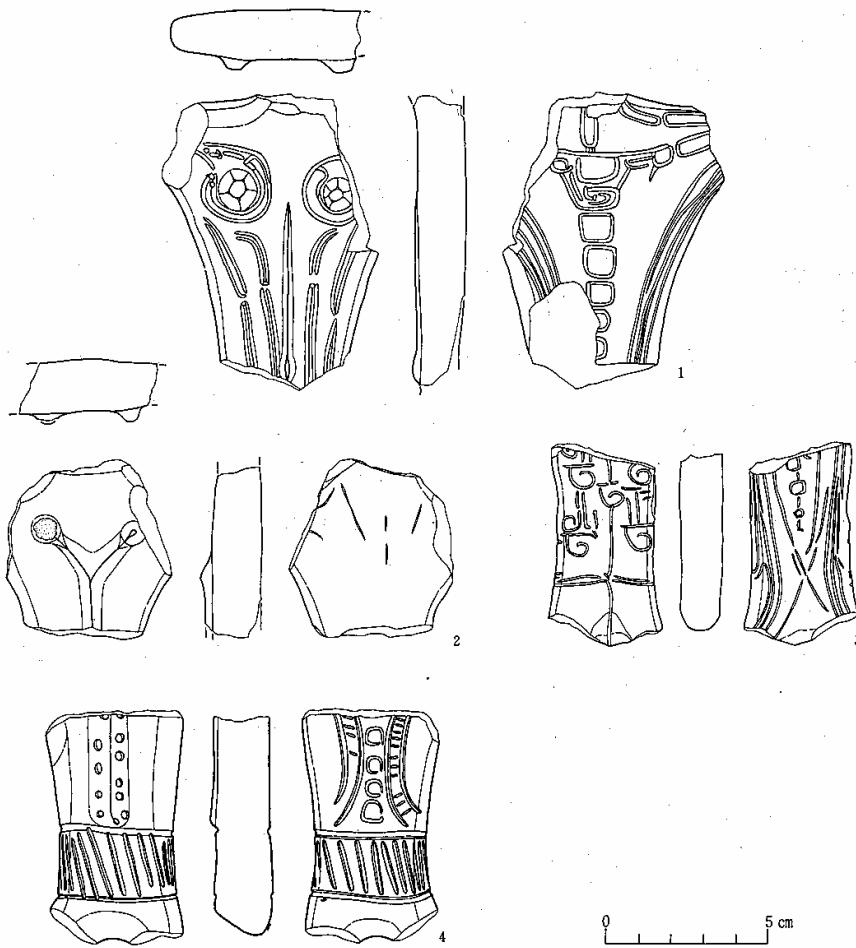
袖珍土器

袖珍土器は6点あり、深鉢(12)・壺(13)の他、台付(15)や特殊な器形のもの(14)などがある。16・17は深鉢の底部破片である。この中で時期を推定できるのは13・16である。13は第8小堅穴遺構から後期初頭南境式土器初期のもの、16は第17号住居跡から中期末大木10式土器第ⅡB段階のものとともに出土していることから、それぞれに応じた時期のものと推定される。12・14・15・17は遺構外出土であるが、今回の調査で出土した土器の大部分が中期末大木10式第Ⅱ段階から後期初頭南境式初期のものであることから、この中に包括される時期のものと推定される。

土偶

板状の土偶が4点出土している。1・2は逆三角形をした胴上半部で、頭と両腕を欠いている。胸には粘土塊を貼り付けて乳房を表現している。1は両乳房から隆線が中央部にのび、結合する部分から下垂し、正中線を形成している。背面には細い線描の文様がみられるが、明瞭な形をしていない。2は隆線による正中線が下垂し、脇に達している。乳房のまわりには渦巻状に沈線がめぐり、胸から腹へは両脇に平行な2本一単位の平行状区画沈線文が描かれている。背面中央には連続する方形区画沈線文様が下垂する。この方形区画沈線文様は上端で渦巻文と組み合い、この部分から首・両腕の方向に平行状区画沈線文がのびている。また、背面両端には脇に沿って数条の平行状沈線が走っている。

3・4は胴下半部で、下端に足のつけ根がある。3は正中線が股の部分まで細い沈線で描かれているが、脇の部分から横に2本の平行状沈線がのびている。胸下部から腹部には下垂曲折文と渦巻文を組み合せた文様が一面に描かれている。背面中央には、連続する方形区画沈線文が縦位沈線でつなげられながら下垂している。この下垂方形区画沈線文の両側には下部で交錯する弧状文がある。背面の両端には、脇に沿って数条の平行状沈線が走っている。4は正中線が隆線で表現され、脇まで達している。この正中線とをとりまくように、円形刺突文が連続して施文されている。下腹から腰の部分には斜行沈線を充填した帶状文様がめぐらされている。背面中央には連続する方形区画沈線文が下垂し、その両側に弧状の帶状文様（斜行沈線充填）が配されている。

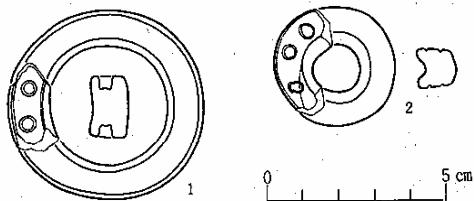


第91図 土偶

以上のように、1・2は胴部の横幅が広く扁平なのに対し、3・4は横幅が狭くやや厚手である。前者には足が付くか否か不明であるが、後者には2本の足が表現されていたと推定される。表面に描かれている文様は、渦巻文・方形区画文・平行状区画文で、両者とも共通する点が多い。したがって、形態に多少の違いはあっても、時期的には近接したものと考えられる。文様の中で、沈線渦巻文や区画内に沈線を充填する帶状文様に類似するものは、第II群土器の浅鉢Aなどにもみられ、後期初頭南境式初期の可能性が認められる。しかし、胴部逆三角形の板状土偶である点は、中期の一般的土偶との共通性もみられる。また、これらの土偶は土器との共伴関係が不明確で、出土状況によって直接時期を推定するのは困難である。したがって、ここでは、形態・文様の特徴と、今回の調査で出土した土器の全体的傾向から中期末（大木10式土器第II段階）から後期初頭（南境式初期）のものとするに留めたい。

滑車状耳飾

滑車状耳飾は2点出土している。1・2とも厚手のもので、2は溝が深く、1は浅い。両側面には、2が沈線、1が刺突による円形文が連続して見られる。その時期は、土偶の場合と同様に、出土土器の全体的傾向から中期末（大木10式土器第II段階）から後期初頭（南境式初期）のものと考えられる。



第92図 滑車状耳飾

円板状土製品

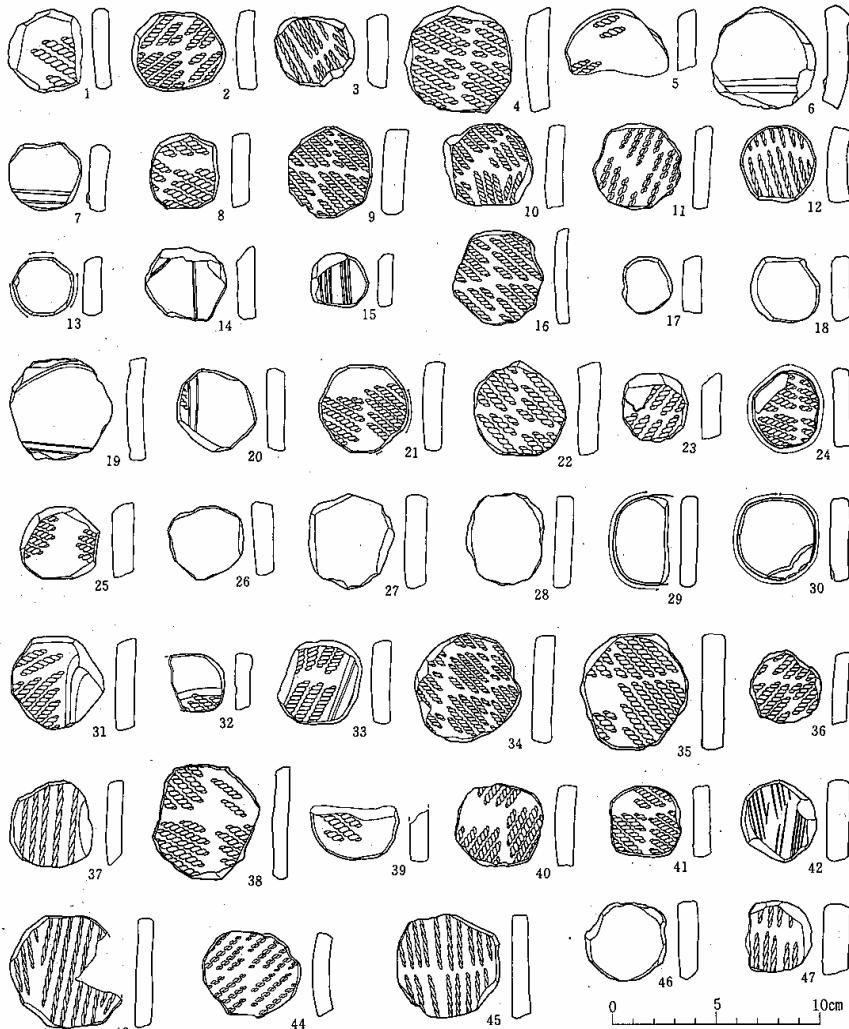
円板状土製品は338点出土している。それらを出土状況に応じて分類すると、住居跡出土のもの46点、小竪穴遺構出土のもの1点、北側遺物包含層出土のもの10点、各地区出土のもの281点となる。これらの中で、時期が判明するのは、第2・10・13・16・17号住居跡から出土した15点と、第1小竪穴遺構・北側遺物包含層から出土した11点である。共伴する土器および遺構の年代から、前者は大木10式土器第II段階、後者は南境式土器初期のものと推定される。その他の円板状土製品は、中期末（大木10式土器第II段階）から後期初頭（南境式土器初期）の時期のものとせざるを得ない。

次に、菅生田遺跡における円板状土製品の特徴を検討してみたい。第93～96図は遺構および北側遺物包含層から出土した57点と、各地区出土の281点から任意に抽出した107点を実測図で示したものである。実測図で示したものを中心として、円板状土製品の特徴を整理すると、次のようになる。

1. 大きさは直径 1 ~ 6 cm で、4 cm 前後のものが多い。
2. 素材となっている土器片は胴部が大部分で、その他は底部が 1 点あるにすぎない。
3. 円板状土製品には有文のもの、地文のみのもの、無文のものがあり、そのいずれかに集中することはない。
4. 円板状土製品の周縁は敲打調整が加えられ、全体の形が作られている。一部には、その後さらに研磨しているものもある(矢印でその範囲を示した)。
5. 円板状土製品に加えられる敲打調整は、両側面が主体である。上・下端は敲打調整が加えられても一部に限られ、土器成形時の接合面(粘土紐積み上げ)そのままのものが多い。

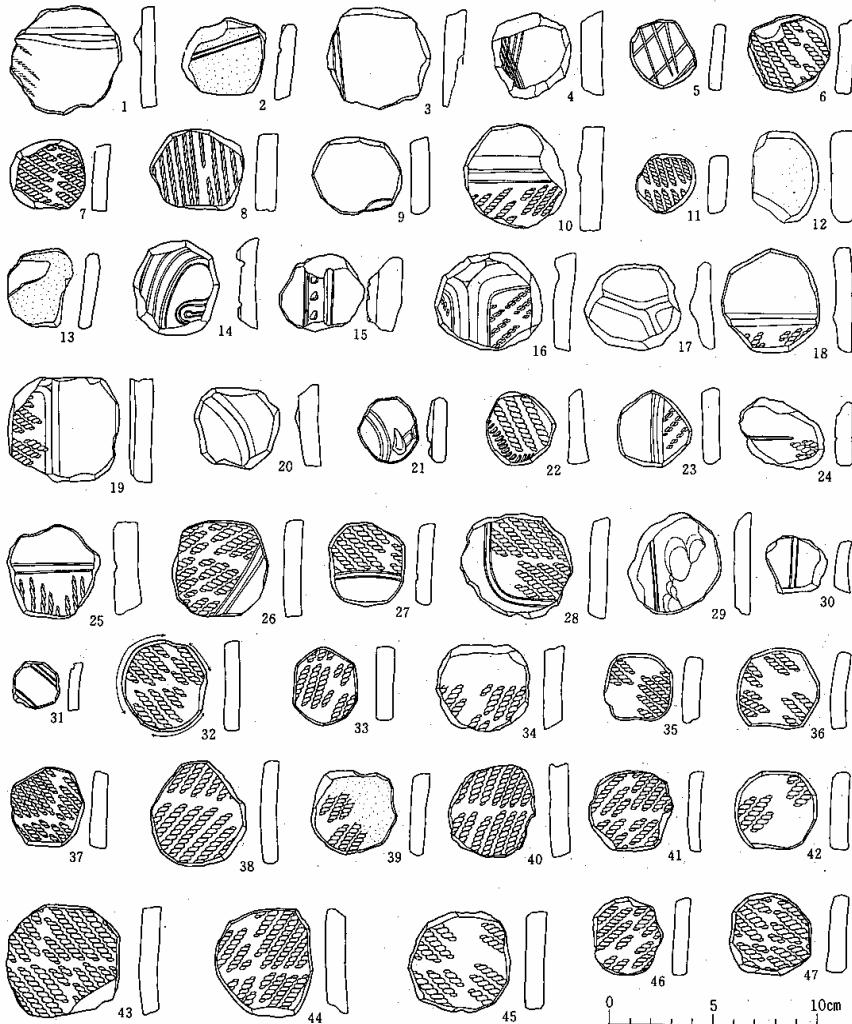
以上の特徴は、大木 10 式期・南境式期・大木 10 式～南境式期としたものの、いずれにおいても共通しており、時期的な相違はみられない。1～5 の特徴で、1～3 は円板状土製品の形状・大きさ・素材を示すもので、最も基本的なものであろう。4 の製作技法は周縁研磨が必ずしも必要不可欠なものではなく、敲打調整だけでも充分なことを示している。周縁研磨は、敲打調整だけのものに較べ、より丁寧に製作・仕上げられたものとみることができる。この点は、5 で示したように敲打調整自体が上・下両端部分では不徹底をことからも裏付けられる。すなわち、土器がこわれた時のこわれ目(土器成形時の粘土紐積み上げ接合面と一致する場合が多い)をそのまま生かして、特に手を加えていないのである。以上から、円板状土製品はその製作・仕上げが丁寧か否かを除いて、こわれた土器片を利用して一定の大きさの範囲内において円い形にすることに目的をおいて製作されたものと考えることができる。

次に、このような特徴をもつ円板状土製品が多量に必要とされた時期について検討してみたい。菅生田遺跡の円板状土製品は 338 点あり、いずれも中期末(大木 10 式第 II 段階)～後期初頭(南境式初期)のものである。全体の遺物量からみても、極めて多い数量である。この点を他の時期の遺跡例と比較してみたい。中期中葉大木 8 b 式期の勝負沢遺跡(丹羽・阿部・小野寺: 1982・3)ではほとんど出土していない。また、中期後葉大木 9 式期の上深沢遺跡(宗教委: 1978・3)^{注1)}では僅か 3 点である。中期末大木 10 式第 II A 段階を主体とする中沢遺跡(後藤勝彦他: 1975・4)^{注2)}では 30 点の出土が報じられている。したがって、大木 9 式期までは少量の製作に留まっていたものが、大木 10 式期に至って増加の傾向を示すことを知ることができる。ところが、菅生田遺跡の場合 300 点を越えており、その増加は爆発的である。菅生田遺跡では大木 10 式第 II A 段階のものも 1 点あるが、大部分は大木 10 式第 II B 段階から南境式初期のものである。この頃盛んに作られるようになった事を示している。また、この点、六反田遺跡(田中則和他: 1981・12)^{注3)}でも後期初頭の土器とともに 136 点の出土が報じられている。金取遺跡(小野寺祥一郎: 1980・3)^{注4)}では後期前葉の土器とともに 56 点出土している。これら後期初頭・前葉の遺跡は遺物の総量はそれぞれ異なるが、菅生田遺跡の総量に換算すると、いずれ



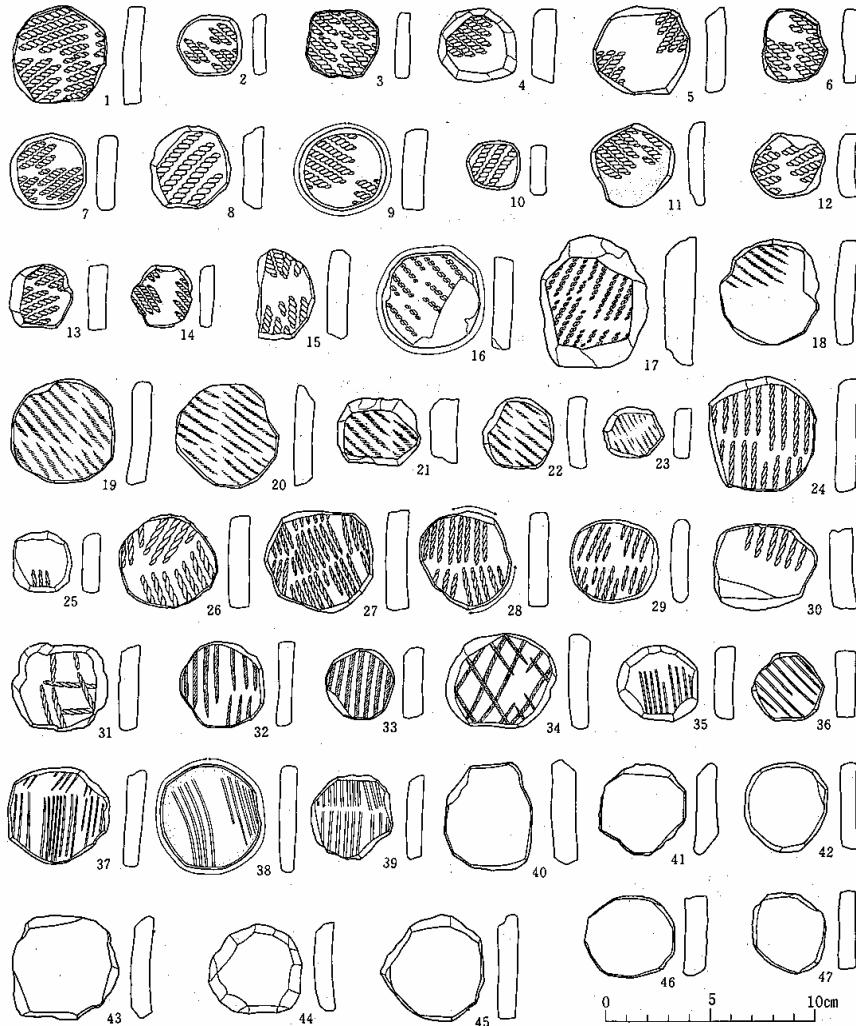
番号	造拂・層位	参考番号	12	第10号住 堆積土	C.M. 165	24	第11号B住 堆積土	C.M. 181	35	第14号住 堆積土	C.M. 186
1	第2号住 沈西 第3層下	C.M. 169	13	第10号住 第2層	C.M. 165	25	第11号B住 堆積土	C.M. 178	37	第14号住 堆積土	C.M. 189
2	第5号住 第3層	C.M. 180	14	新11号住 堆積土	C.M. 188	26	第11号B住 P ₁	C.M. 177	38	第14号住 堆積土	C.M. 184
3	第5号住 第3層	C.M. 181	15	第11号住 堆積土	C.M. 170	27	第11号B住 堆積土	C.M. 176	39	第14号住 堆積土	C.M. 190
4	第5号住 第2層	C.M. 182	16	第11号住 堆積土	C.M. 167	28	第11号B住 炉石組内	C.M. 180	40	第16号住 炉内	C.M. 193
5	第8号住 貼り床上	C.M. 183	17	新11号住 堆積土	C.M. 171	29	第11号B住 第3層	C.M. 182	41	第16号住 堆積土	C.M. 194
6	第9号住 堆積土	C.M. 180	18	第11号住 堆積土	C.M. 169	30	第13号住 堆積土	C.M. 183	42	第16号住 第2層	C.M. 195
7	第9号住 堆積土	C.M. 159	19	第11号B住 堆積土	C.M. 175	31	第14号住 炉石組内	C.M. 188	43	第16号住 第2層	C.M. 196
8	第10号住 堆積土	C.M. 161	20	第11号B住 第3層	C.M. 179	32	第11号住 P ₁	C.M. 192	44	第17号住 堆積土	C.M. 199
9	第10号住 堆積土	C.M. 161	21	第11号B住 第3層	C.M. 172	33	第14号住 堆積土	C.M. 191	45	第17号住 第2層	C.M. 197
10	第10号住 床面	C.M. 164	22	第11号B住 第3層	C.M. 174	34	第14号住 P ₁	C.M. 187	46	第17号住 堆積土	C.M. 198
11	第10号住 灼燒設土窓内	C.M. 163	23	第11号B住 第3層	C.M. 173	35	第14号住 堆積土	C.M. 185	47	第1小窓穴内	C.M. 200

第93図 円板状土製品(1)



番号	地区・層位	鉢類番号	12	AR-74区 第2層 C.M. 212	24	AO-68区 第2層 C.M. 92	36	AO-64区 第1層 C.M. 69
1	AT-73-75区	C.M. 202	13	AQ-74区 第2A層 C.M. 210	25	AK-62区 第2層 C.M. 85	37	AN-69区 第2層下 C.M. 78
2	AT-73-75区	C.M. 209	14	AL-65区 第3層 C.M. 23	26	AD-51区 第2層 C.M. 20	38	AN-68区 第2層 C.M. 32
3	AT-73-75区 第2A層	C.M. 211	15	AN-69区 第3層 C.M. 97	27	AN-69区 第2層下 C.M. 58	39	AK-62区 第2層 C.M. 84
4	AT-73-75区 第2A層	C.M. 203	16	第7住地区 C.M. 154	28	AO-68区 第2層 C.M. 44	40	AO-68区 第2層 C.M. 88
5	AT-73-75区 第2A層	C.M. 238	17	AO-68区 第2層 C.M. 94	29	AO-68区 第2層 C.M. 95	41	AN-68区 第2層 C.M. 28
6	AT-73-75区 第2A層	C.M. 206	18	AM-64区 第2層 C.M. 23	30	AN-69区 第3層 C.M. 89	42	区 第0層 C.M. 102
7	AT-73-75区 第2A層	C.M. 207	19	AJ-67区 第2層 C.M. 73	31	AO-68区 第2層 C.M. 80	43	AO-70区 第2層 C.M. 51
8	AT-73-75区 第2層	C.M. 204	20	AM-66区 第2層 C.M. 13	32	AJ-67区 第2層 C.M. 29	44	AO-68区 第2層 C.M. 75
9	AT-73-75区 第2A層	C.M. 205	21	AN-68区 第2層 C.M. 33	33	AN-68区 第4層 C.M. 25	45	AN-68区 第2層 C.M. 62
10	AQ-72-73区 第2A層	C.M. 201	22	AO-70区 第2層 C.M. 52	34	AN-68区 第3層 C.M. 67	46	第7住地区 第2層 C.M. 153
11	BA-73区 第1層	C.M. 213	23	第7住地区 第2層 C.M. 155	35	AO-70区 第3層 C.M. 100	47	AL-65区 第1層 C.M. 6

第94図 円板状土製品(2)



番号	地区・層位	登録番号	12	AO-68区 第 3 層	C.M. 79	24	AO-68区 第 2 層	C.M. 41	36	AN-68区 第 2 层	C.M. 56
1	AF-51区 第 2 層	C.M. 18	13	AM-66区 第 2 层	C.M. 17	25	AN-69区 第 3 层	C.M. 64	37	AM-68区 第3層下	C.M. 74
2	AN-61区	C.M. 83	14	AK-L-62区第2層	C.M. 81	26	7住地区 第 2 层	C.M. 157	38	AO-68区	C.M. 50
3	AM-68区 第 2 层	C.M. 8	15	第7住地区 第 2 层	C.M. 156	27	AD-51区 第 2 层	C.M. 21	39	AN-68区 第 2 层	C.M. 47
4	AI-69区 第 1 层	C.M. 4	16	AN-69区 第3層上部	C.M. 71	28	AO-68区 第 2 层	C.M. 45	40	AO-68区 第 2 层	C.M. 40
5	AK-68区 第 2 层	C.M. 12	17	AN-68区 第 2 层	C.M.-37	29	AN-67区 第 2 层	C.M. 65	41	AO-70区 第 2 层	C.M. 39
6	AM-68区 第 2 层	C.M. 9	18	AL-65区 第 2 层	C.M. 10	30	AN-69区 第 3 层	C.M. 90	42	AO-62区 第 2 层	C.M. 72
7	区 X 第 0 层	C.M. 63	19	AK-L-62区 第2層	C.M. 31	31	AO-68区 第 2 层	C.M. 35	43	AO-70区 第 2 层	C.M. 38
8	AN-68区 第 3 层	C.M. 59	20	AO-68区 第 2 层	C.M. 55	32	AN-69区 第2層下	C.M. 49	44	AN-68区 第 2 层	C.M. 68
9	AK-68区 第 2 层	C.M. 34	21	AK-62区 第 2 层	C.M. 34	33	AN-68区 第 2 层	C.M. 103	45	AD-51区 第 2 层	C.M. 19
10	AN-68区 第 2 层	C.M. 66	22	AN-68区 第 2 层	C.M. 60	34	AO-68区 第 2 层	C.M. 70	46	AO-68区 第 2 层	C.M. 91
11	AK-L-62区 第2層	C.M. 90	23	AN-68区 第 2 层	C.M. 98	35	AN-69区 第 4 层	C.M. 57	47	AN-68区 第 3 层	C.M. 96

第95図 円板状土製品(3)

も200点近い数量になる。それに対し、後期後葉の土器が主体を占める東足立遺跡（黒川利司：1981・9）では18点とやや少ない。^{注5)}

円板状土製品は、個々の所属時期を決めるることは困難なことが多いが、その遺跡の主体を占める出土土器によって、大筋としての所属時期を知ることが可能である。以上の遺跡における検討結果に従うと、次のような事柄を指摘することができる。

1. 中期中葉大木9式期までの製作量は少量である。
2. 中期末大木10式第II A段階になると増加する傾向がある。
3. 中期末大木10式第II B段階から後期前葉の南境式期には多量に製作された。
4. 後期中葉は不明であるが、後葉になると製作量は減少の傾向にある。

したがって、宮城県内では中期末に至って需要の爆発的拡大をみ、それが後期前葉まで継承されたが、後期後葉には次第に需要が減少していったものと考えられる。

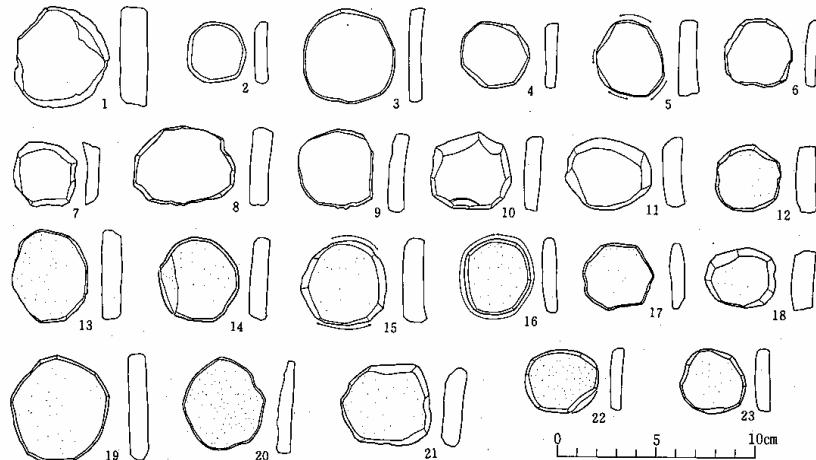
注1) 遺物量は菅生田遺跡とほぼ同じである。

注2) 遺物量は菅生田遺跡の約²/₅である。

注3) 遺物量は菅生田遺跡とほぼ同じである。

注4) 遺物量は菅生田遺跡の約¹/₄である。

注5) 遺物量は菅生田遺跡の約¹/₃である。



番号	地区・層位	登録番号	6	AN-68区 第4層	C.M.82	12	AL-65区 第1層	C.M.7	18	AM-66区 第2層	C.M.14
1	AN-69区 第2層下	C.M.87	7	AO-68区 第2層	C.M.46	13	AN-68区 第2層	C.M.85	19	AM-66区 第2層	C.M.15
2	AN-68区 第2層	C.M.99	8	AM-66区 第2層	C.M.16	14	AN-68区 第2層	C.M.35	20	AO-68区 第2層	C.M.43
3	AL-46区 第2層	C.M.26	9	AO-68区 第2層	C.M.42	15	AO-68区 第2層	C.M.48	21	AO-70区 第2層	C.M.93
4	AO-68区 第2層	C.M.61	10	AN-68区 第2層	C.M.76	16	AL-65区 第2層	C.M.53	22	AN-68区 第2層	C.M.27
5	AN-67区 第2層	C.M.54	11	AK-62区 第2層	C.M.77	17	AL-65区 第2層	C.M.11	23	AL-65区 第1層	C.M.-5

第96図 円板状土製品(4)

石製品

石鏸 (第 97 図～101 図)

石鏸は合計 113 点出土している。このうち完形品が 45 点、破損品が 68 点である。完形品を中心として形態の判明するものについて分類する。分類は基部形態で大別し、尖頭部側縁形で細分する。

第 1 類：凹基のもの (第 97 図～第 100 図 1～4)

a 類：尖頭部側縁が直線的なもの (第 97 図～第 98 図 1～10)

a 類には、二等辺三角形のもの (第 97 図～第 98 図 1～4) と正三角形のもの (第 98 図 5～10) がある。両者には種々の大きさのものがみられるが、全体の傾向として、前者に大形のもの、後者に小形のものが多い。

b 類：尖頭部側縁が内弯するもの (第 98 図 11～20、第 99 図 1・2)

b 類にはゆるやかに内弯するもの (第 98 図 11～20) と屈曲を持ちながら内弯するもの (第 99 図 1・2) がある。前者には二等辺三角形 (第 98 図 11～18) と正三角形 (第 98 図 19・20) のものが見られるが、後者は二等辺三角形のもの (第 99 図 1・2) に限られている。

c 類：尖頭部側縁が外弯するもの (第 99 図 3～20)

c 類には尖頭部側縁上部が直線的で下部が強く外弯するもの (C_1 類: 第 99 図 3～12) と尖頭部側縁上部が内弯し下部が強く外弯するもの (C_2 類: 第 99 図 13～18) がある。そして、基部の抉りが深いものは両脚状になり、両脚状のものは C_2 類において顕著である。また、 C_1 類には二等辺三角形のもの (第 99 図 3～10) と正三角形のもの (第 99 図 11・12) がみられるが、 C_2 類は二等辺三角形のものに限られている。

第 2 類：平基のもの (第 100 図 5～7)

a 類：尖頭部側縁が直線的なもの (第 100 図 5～7)

a 類には大形で二等辺三角形のもの (第 100 図 5) と小形で正三角形のもの (第 100 図 6・7) がある。

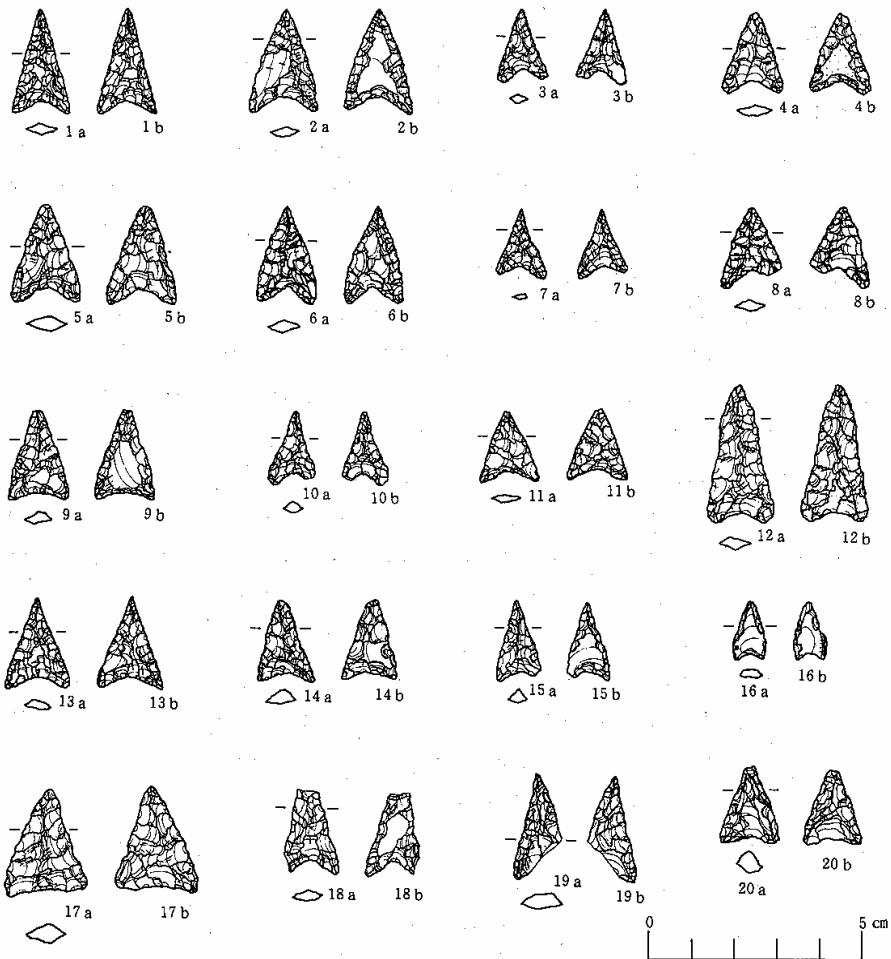
b 類：尖頭部側縁が外弯するもの (第 100 図 8～10)

b 類には尖頭部側縁の中央部が僅かに外弯するもの (b_1 類: 第 100 図 8・9) と、尖頭部側縁の下部が僅かに外弯するもの (b_2 類: 第 100 図 10) がある。両者とも二等辺三角形をしている。

第 3 類：丸基のもの (第 100 図 11～17)

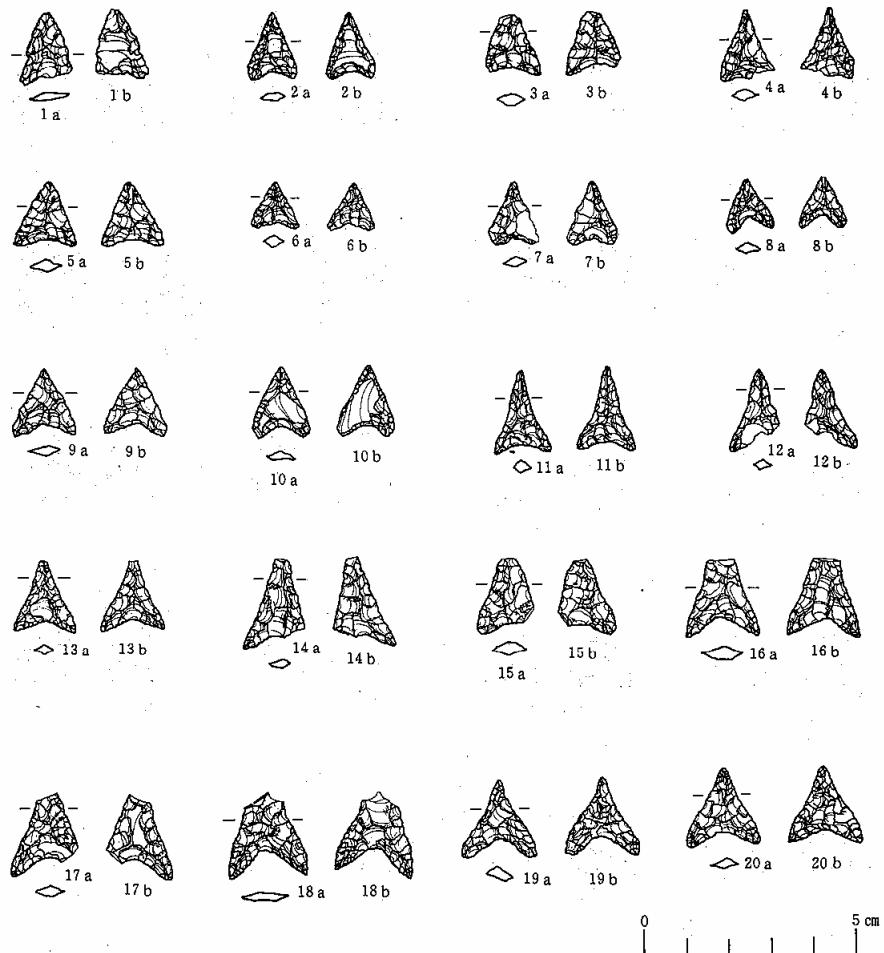
尖頭部側縁は僅かに外弯し、全体に丸味をもった二等辺三角形をしている。厚手で大形のものが多く、粗い調整剥離によって仕上げられているのが特徴である。

第 4 類：不整形のもの (第 100 図 18・19、第 101 図)



番号	地区	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	長幅指数 (L/W)	厚さ (mm)	重量 (g)	分類	登録 No.	図版
1	A K -	61 - 2 層	24.9	13.6	183.0	3.35	0.75	1 a	1141	41-1
2	第 6 住居 -	2 層	24.5	16.0	153.1	3.2	1.0	1 a	1157	41-2
3	A O -	70 - 2 層	(17.2)	(16.9)	—	2.7	(0.5)	1 a	53	41-3
4	B E -	70 - 1 層	(19.0)	14.3	132.8	2.4	(0.2)	1 a	295	41-4
5	A N - 69 - 2 b 層下 ブロック	(23.0)	16.0	—	—	3.2	(0.75)	1 a	126	41-5
6	第 6 住居 -	2 層	23.0	14.1	163.1	3.3	0.8	1 a	1158	41-6
7	第 11 b 住居 -	埋土	(16.5)	(11.8)	—	2.2	(0.3)	1 a	66	41-7
8	A K -	61 - 2 層	(18.9)	(19.0)	—	2.8	(0.6)	1 a	3	41-8
9	A P -	72 - 2 a, 層	(21.0)	19.1	109.9	(2.6)	(0.7)	1 a	380	41-10
10	B D -	63 - 1 層	(17.1)	(11.0)	—	3.2	(0.2)	1 a	1063	41-11
11	A J -	57 - 1 層	(17.0)	14.0	—	2.25	(0.5)	1 a	878	41-12
12	A N -	69 扇 - 2	32.3	15.7	205.7	6.4	2.05	1 a	128	41-13
13	第 5 住居 柴 (石組)	—	21.5	15.0	143.3	2.65	0.5	1 a	7345	5 41-15
14	A N - 89 - 2 b 層下 ブロック	20.0	13.5	148.1	3.8	0.85	1 a	127	41-16	
15	第 11 住居 -	埋土	19.0	10.0	190	3.5	0.65	1 a	724	226 41-17
16	第 11 b 住居 -	埋土	14.0	13.0	107.6	2.0	0.3	1 a	70	41-18
17	A N -	69 - 2 層	25.1	19.5	128.7	5.6	1.8	1 a	50	41-20
18	A L -	65 - 2 層	(20.0)	(18.0)	—	(2.1)	(0.7)	1 a	24	41-21
19	A J -	62 - X	(25.0)	(11.5)	—	3.5	(4.0)	1 a	120	41-22
20	第 5 住居 -	2 層	18.0	14.3	125.8	6.0	1.1	1 a	6	41-23

第97図 石 鐵(1)



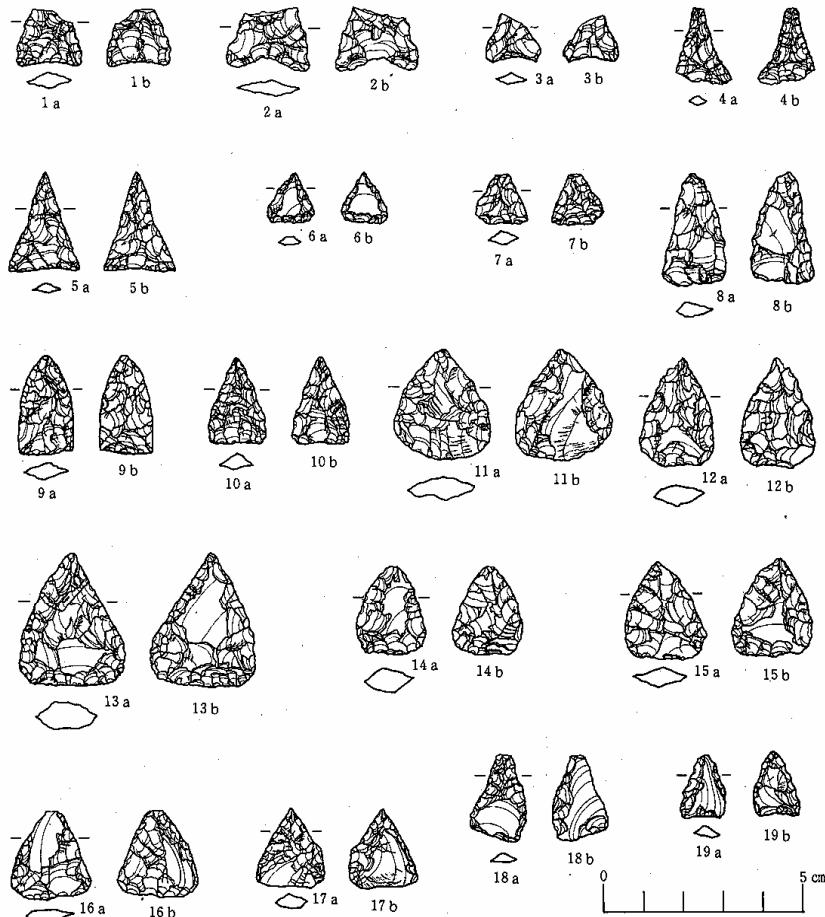
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	長幅指数(L/W)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	A M - 61 - 1層	(16.8)	(12.5)	—	2.2	(2.0)	1 a	88	41-26
2	A T - 74-75-2 b層	15.8	11.5	137.3	2.9	0.6	1 a	457	41-27
3	A M - 68 - 2 層	(14.6)	(13.0)	—	3.0	(0.6)	1 a	7	41-28
4	A N - 68 - 2 層	(17.0)	(12.7)	—	4.0	(0.7)	1 a	125	41-29
5	A L - 65 - 2 層	15.0	14.8	101.3	3.7	0.7	1 a	4	42-2
6	A K - 62 - 2 層	11.0	(11.7)	—	3.1	(0.4)	1 a	46	42-3
7	第11号住居 - 塗土	15.0	(12.0)	—	(2.3)	(0.5)	1 a	226	42-4
8	B I - 74-75-1層	(12.2)	11.0	—	2.65	(0.3)	1 a	301	42-5
9	A K - 62 - 2 層	16.0	15.0	106.6	3.1	0.5	1 a	47	42-6
10	B A - 65 - X	16.3	13.9	117.2	2.4	0.3	1 a	873	42-7
11	第7号住居 - 2層	19.7	13.9	141.7	4.3	0.8	1 b	411	42-8
12	第14号住居 - 塗土	(19.0)	(12.0)	—	(3.15)	(0.5)	1 b	654	42-9
13	A K - 61 - 2 層	(17.0)	15.0	—	3.35	(0.55)	1 b	45	42-10
14	A K - 62 - 2 層	(21.4)	(14.6)	—	3.35	(0.85)	1 b	58	42-11
15	第13号住居 - 床面	(18.0)	(13.5)	—	3.9	(0.9)	1 b	386	42-12
16	A K - 62 - 2 層	(18.5)	17.4	—	3.6	(0.9)	1 b	55	42-13
17	第6号住居 - 2層	(20.0)	(16.0)	—	3.3	(0.7)	1 b	1137	42-14
18	A Q - 72 - 2 a層	(20.2)	18.8	—	2.6	(0.85)	1 b	563	42-15
19	第13号住居 - 塗土	18.5	17.7	104.5	4.3	0.7	1 b	314	42-16
20	A L - 49 - 2 層	18.9	17.5	108	2.5	0.65	1 b	252	42-17

第98図 石 鰩(2)



番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	長幅指数 (L/W)	厚さ (mm)	重量 (g)	分類	登録 No.	図版
1	第 10 住居 - 2 層	(24.0)	(14.1)	—	(14.1)	(0.75)	1 b	47	42-18
2	第 11 b 住居 - 墓土	(22.0)	(13.5)	(162.9)	4.6	(0.8)	1 b	64	42-19
3	第 8b 住居 - 脱り床下	25.1	17.0	147.6	3.2	0.9	1 c,	72年 35	42-20
4	第 11 b 住居 - 墓土	24.5	13.4	182.8	2.8	0.65	1 c,	72年 69	42-21
5	A E - 52 - 2 層	(24.1)	14.2	—	2.3	(0.8)	1 c,	80	42-22
6	第 3 小壁穴 - 3 層	(19.0)	(11.8)	—	2.5	(0.5)	1 c,	1136	42-23
7	A T - 74-75 - 2 b 層	(19.9)	(10.5)	—	(3.85)	(0.6)	1 c,	492	42-24
8	A N - 68 - 1 層	24.3	18.1	134.2	4.3	2.1	1 c,	124	42-25
9	B D - 63 - 1 層	19.9	13.9	143.1	3.4	0.45	1 c,	872	42-26
10	A N - 62 - 2 層	20.0	13.8	144.9	3.4	0.7	1 c,	49	42-27
11	第 13 分 住 - 2 層	(17.0)	13.5	—	3.6	(0.85)	1 c,	414	42-28
12	第 7 住居 - 2 層	(13.5)	12.0	112.5	3.0	0.45	1 c,	72年 19	42-29
13	B F - 66 - 1 層	25.0	19.7	126.9	2.6	0.6	1 c,	298	43-2
14	B H - 71 - X	18.4	14	131.4	2.65	—	1 c,	—	43-3
15	第 11 b 住居 - 墓土	18.0	11.2	160.7	2.3	0.4	1 c,	72年 68	43-4
16	A J - 62 - 2 層	(20.5)	15.2	—	3.4	(1.0)	1 c,	78	43-5
17	A K - 62 - 2 層	(15.5)	(14.0)	—	3.3	(0.75)	1 c	44	43-6
18	A S - 72-73 - 2 層	(13.0)	(14.2)	—	(3.3)	(0.7)	1 c	1070	43-8
19	第 11 a 住居 - 墓土	(14.0)	16.6	—	4.55	(1.1)	1 c	348	43-9
20	第 11 b 住居 - 墓土	(10.5)	(9.8)	—	(2.2)	(0.4)	1 c	65	43-10

第99図 石 鑽(3)

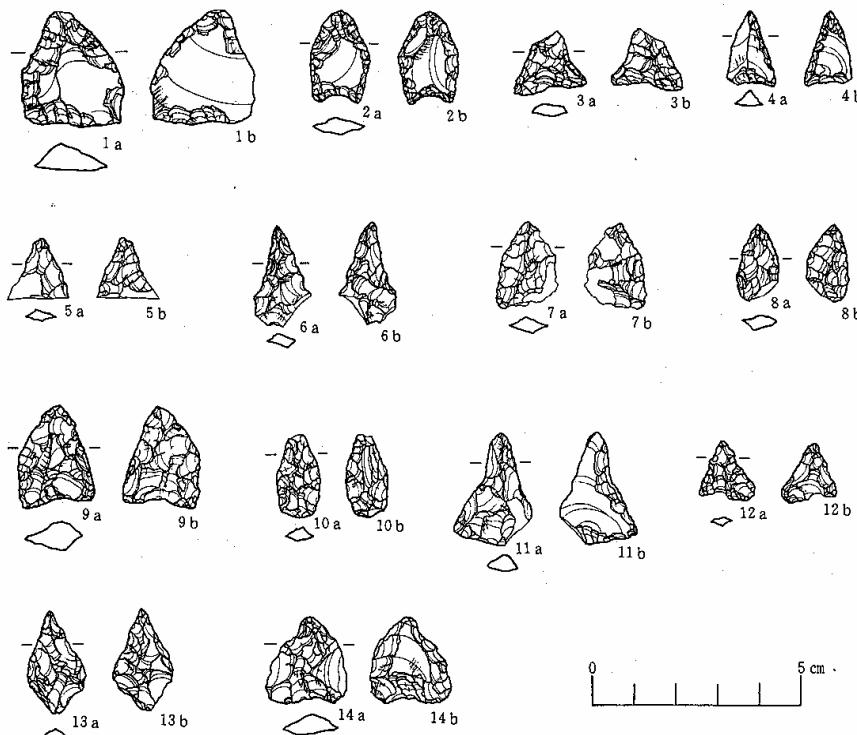


番号	地区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	長幅指数(L/W)	厚さ(cm)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	A K - 62 - 2層	(14.0)	16.4	—	4.4	(0.9)	1	57	43-13
2	A K - 62 - 2層	(15.9)	(21.0)	—	(4.0)	(1.0)	1	56	43-14
3	A K - 62 - 2層	(12.0)	14.0	—	2.8	(0.6)	1	48	43-15
4	A O - 72-73-2a層	(19.0)	(14.0)	—	2.7	(0.7)	1	540	43-16
5	第10住居 - 2層	24.5	18.0	133.3	3.9	0.9	2a	46	43-17
6	A K - 61 - 2層	12.4	11.8	105	3.1	0.5	2a	81	43-18
7	A L - 65 - 2層	(12.2)	(13.0)	—	4.0	(0.7)	2a	1	43-19
8	A K - 62 - 2層	28.0	16.0	175.0	4.6	1.55	2b	54	43-20
9	X -	24.7	14.0	176.4	4.8	1.2	2b	780	43-21
10	第11住居 - 塗土	21.2	14.6	145.2	5.7	1.45	2b	227	43-22
11	A M - 62 - 2層	27.5	24.4	112.7	8.8	4.5	3	6	43-27
12	A N - 67 - 2層	27.0	18.5	145.9	8.3	2.45	3	83	43-28
13	第5住居 - 3層	33.1	26.8	123.5	9.6	7.5	3	73年 4	43-29
14	A K - 61-62 - 7層	22.0	17.7	124.2	6.4	1.7	3	122	43-30
15	B B - 61 - 1層	24.2	20.5	118.0	6.8	2.4	3	907	44-1
16	A K - 62 - 2層	(22.3)	20.4	—	4.8	1.95	3	221	44-2
17	第14住居 - 塗土	20.0	17.1	116.9	5.1	1.1	3	1145	44-3
18	第13住居 - 塗土	(21.5)	14.1	—	3.2	(0.9)	4	72年 311	44-4
19	B J - B J - 56 - 1層	15.5	11.5	134.7	4.0	0.4	4	888	44-5

第100図 石 鋸(4)

基部及び尖頭部が非対称不整形のものを一括する。尖頭部・基部の縁辺には調整剥離が加えられているが、素材としての剥離面を多く残している。このため厚手のもの、薄手のものなど種々があり、一定していない。

以上、石鎌は4類に分類したが、1・2類は最も形が整っており仕上げの調整剥離も丁寧なものが多い。これに対し、第3・4類は左・右の形が非対称で、仕上げの調整剥離も粗いものが多い。第4類ではそれが特に顕著である。また、1・2類は薄手で軽いものが多いのに対し、第3類は厚手で重量感にあふれている。この点、第4類は種々のものがあり雑多である。これらを量的な面で見ると、第1類が約62%で主体を占めており、第2・3・4類は少ない。



番号	地 区	層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	皮朝指数 (L/W)	厚さ (mm)	重 量 (g)	分 類	登 錄 号	図 版
1	B C -	72 - 1 層	(26.4)	25.0	—	6.2	(3.2)	4	827	44-6
2	A T -	65 - 1 層	22.0	14.5	151.7	3.6	1.0	4	619	44-7
3	第 5 号住居 - 3 層	(15.0)	17.8	—	—	3.4	(0.9)	4	1138	44-8
4	第 11 b 住居 - 地土	(18.0)	(11.9)	(151.2)	3.85	(0.7)	4	72年 196	44-9	
5	A K -	62 - 2 層	(15.0)	(14.7)	—	(3.2)	(0.7)	4	44	44-10
6	A K -	62 - 2 層	(20.0)	(10.0)	(171.4)	4.0	(0.5)	4	43	44-11
7	A K -	62 - 2 層	(20.7)	(14.9)	—	(7.4)	(1.9)	4	42	44-12
8	第 11 号住居 - 地土	(18.2)	(9.8)	—	—	(3.7)	(0.8)	4	72年 240	44-16
9	A S -	72 - 73 - 2 層	24.3	18.2	133.5	6.8	2.65	4	1072	44-17
10	A S -	72 - 73 - 2 層	(20.0)	10.8	—	4.0	(1.1)	4	1071	44-18
11	第 2 住居 - 炉内 3 層	(21.6)	(18.8)	—	—	6.0	(1.85)	4	1139	44-19
12	A K -	62 - 2 層	(14.0)	(18.2)	—	2.8	(0.3)	4	48	44-20
13	A J -	67 - X	24.0	14.2	169.0	7.75	1.4	4	121	44-21
14	A N -	69 - 4 層	20.9	19.6	106.6	5.7	2.0	4	256	44-22

第101図 石 鎌(5)

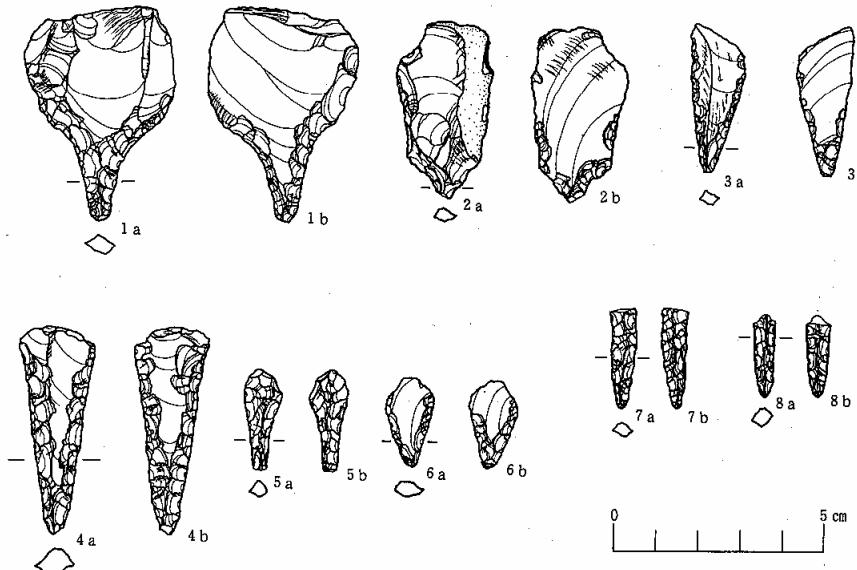
石錐（第102図）

合計8点出土している。このうち完形品は2点、破損品は6点である。

1・2はつまみ部と錐部の境界が明瞭なものである。1は幅の広い扁平なつまみ部を有し、2はやや厚手で細長いつまみ部を有している。1の錐部の長さは約1.8cmで、断面はやや扁平な菱形である。先端部は丸味をもっている。錐部全体に著しい摩耗痕が観察され、使用頻度が高かったものと考えられる。

3～6はつまみ部と錐部の境界が不明瞭なものである。6を除くといずれも錐部の先端が欠損している。錐部の断面は4・6が扁平な菱形、5は菱形である。4・6は錐部全体に著しい摩耗痕が観察される。

7・8は錐部のみが残存している。錐部にはいざれも入念な調整剥離が施されており、断面は菱形で細長い。先端は極めて鋭く造り出されている。錐部全体に摩耗痕が認められる。



番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	尖頭部長 (mm)	重量 (g)	登録番号	図版	
1	A T - 73-75-2層	51.0	35.5	9.8	18.5	12.5	634	44-23	
2	X — X (41.0)	22.6	9.5	—	—	—	72年 320	44-24	
3	第5号住居北-2層	35.5	13.3	4.3	—	1.2	507	44-26	
4	A M - 68 - 2層 (49.0)	18.5	6.5	—	(4.9)	5	45-1		
5	X — X (23.6) (9.5) (6.5) (12.5) (7.)	—	—	—	—	775	45-2		
6	B A - 67 - 1層	20.8	11.5	3.3	—	0.6	282	45-3	
7	第11号住居P1-埋土	(24.0) (6.2) (3.4) (24.0)	(3.85)	(19.1)	(—)	(—)	1150	45-4	
8	A S - 73 - 1層 (19.5) (5.2) (3.85)	(19.5)	(5.2)	(3.85)	(19.1)	(—)	921	45-5	

第102図 石錐

石匙 (第 103・104 図)

石匙は合計 11 点出土している。このうち完形品は 7 点、破損品は 4 点である。

石匙はつまみ部を上に据えた時の平面形 (全体の形態) を見ると I : 縦長の形態のもの、II : 横長の形態のもの、III : 縦長と横長の中間形態のものの 3 種類が認められる。

：縦長の形態のもの (第 104 図)

1・6 は薄手で幅の広いものである。両側辺には粗雑な調整剥離が加えられ、緩傾斜の刃部を形成している。1 は右側辺、6 は左側辺に摩耗痕が認められる。

2・3・5・7 は厚手で、両側辺に丁寧な調整剥離が加えられ刃部を形成している。刃角は左・右ほぼ同じで急斜度である。2・7 は幅の広いもの、3・5 は幅の狭いものである。2・3・7 は左・右の側辺に摩耗痕が認められ、5 は右側辺に摩耗痕が認められる。

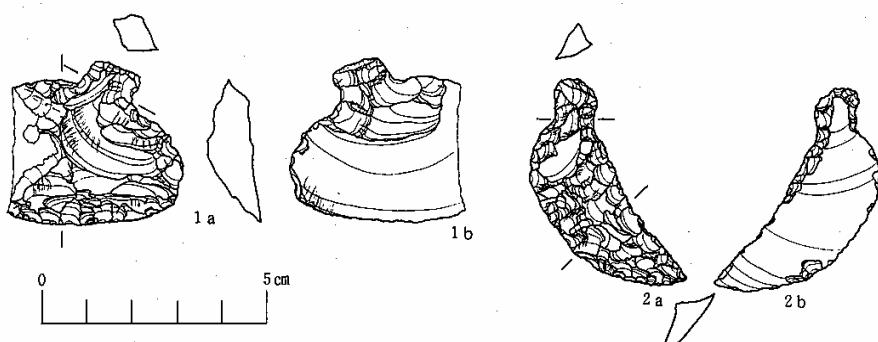
4・8 は厚手で幅の広いものであるが、調整剥離によって形成された刃部角度がそれぞれ左・右側辺で緩斜度・急斜度と異なっている。4 は、左・右の側辺に摩耗痕が認められ、左側辺により顕著な摩耗痕が認められる。8 は松原遺跡 (奏昭繁 : 1977・11)、勝負沢遺跡 (丹羽・阿部・小野寺 : 1982・3) 等で確認されている技法 (詳細は前掲の報告書を参照) によって製作されている石器である。左・右の両側辺に摩耗痕が認められる。

9 は刃部が大きく欠損している。調整剥離は右側辺にのみ施されている。

：横長の形態のもの (第 103 図 1)

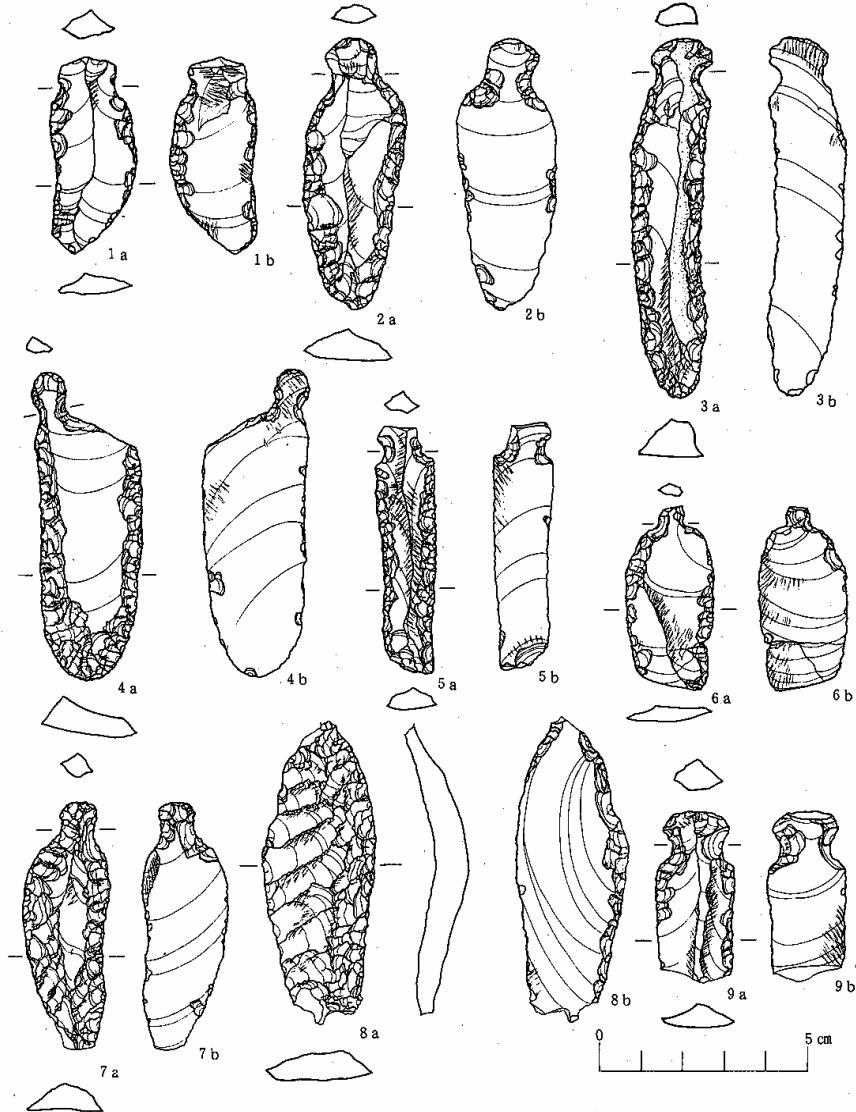
左半分が大きく欠損している。刃部は片面加工の緩傾斜の刃部である。刃縁には摩耗痕が認められる。

：縦長と横長の中間形態のもの (第 103 図 2)



番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	登録No	図版
1	B A - 67 - X	(39.0)	(36.5)	(8.9)	— — 44°	(11.7)	II	284	45-16
2	第10号住居 - 2 層	64.5	27.2	6.2	34° 42° —	10.3	III	50	45-15

第103図 石匙(1)



番号	地区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	刃部角度(左・右・先)	重量(g)	分類	登録No.	図版
1	A S - 72 - 73 - 2 層	47.9	21.0	6.3	34° 31°	4.8	I	1069	45-6
2	B C - 59 - 1 層	66.0	24.5	7.0	38° 50°	11.9	I	289	45-7
3	X - X	87.0	19.5	7.65	54° 64°	15.4	I	326	45-8
4	A T - 68 - X	74.0	24.5	5.0	56° 40°	14.5	I	276	45-9
5	B C - 59 - 1 層	60.0	14.0	6.2	51° 51°	5.3	I	290	45-10
6	A T - 73~75 - 2a 層	44.7	21.5	3.3	23° 34°	3.2	I	1143	45-11
7	第 13 号 住居跡 P.1	(60.0)	20.9	6.4	44° 47°	(8.5)	I	322	45-12
8	A T - 73~75 - 2a 層	(71.3)	(27.0)	(7.4)	52° 50°	(16.8)	I	556	45-13
9	A N - 69 - 2 層	(41.3)	(19.2)	(7.7)	35° 46°	(5.3)	I	987	45-14

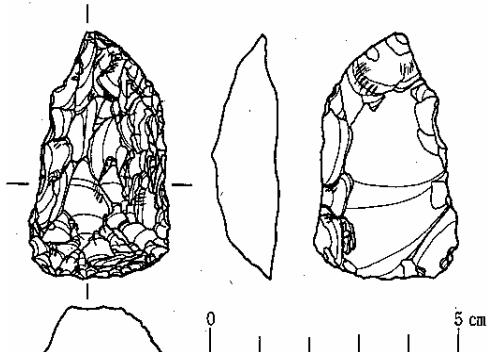
第104図 石匙(2)

左側辺がゆるく外方に張り出し、右側辺は内側にゆるやかに弯曲している。先端は鋭く尖っている。左・右の側辺には摩耗痕が認められる。

石籠（第105図）

完形品が1点出土している。平面形は各辺に脹らみを持った隅丸二等辺三角形である。

大きさは最大長が4.99cm、最大幅が2.84cm、最大厚が1.37cmである。横断面形は蒲鉾形である。最大厚の位置は石器のほぼ中心にある。刃部は部厚い片刃で細かな調整剥離が施されている。刃線には若干ではあるが摩耗痕が認められた。



第105図 石籠

その他の剥片石器（106～113図）

不定形な石器を一括した。多数出土しているがここでは完形品を中心として説明を加える。

第106図1～8は周縁に調整剥離を施して形を小形にしているものである。1～3は平面形が三角形で石鏸に近い形態である。1は先端を尖頭状に、反対側を丸くつくっている。先端には調整剥離が及んでいない部分もあり、その部分は厚く取り残されている。下端の丸い部分には摩耗痕が認められる。2は、1同様に先端は尖頭状であるが反対側は平端であり1とはやや異なる。最大厚は尖頭部先端付近にあり部厚い。尖頭部の開き角も大きい。使用痕は認められない。1も2も石鏸に近い形態であるが上述したように石鏸とは異なるものである。3は縁辺への調整剥離が粗く、石鏸の未成品の可能性がある。4は5ヶ所に抉りが入れられている。最大長が1.8cm、最大幅が1.45cm、最大厚が0.4cm、重量が1.1gと極めて小さい。5・7は縁辺に細かな調整剥離が施されている扁平な石器である。5は両面調整、7は片面調整の刃部である。7の下端には摩耗痕が認められる。6は腹面に粗い調整剥離が施されている。8の下端は厚く、急傾斜の刃部を形成している。この部分に摩耗痕が認められる。

第106図9～10は縦長剥片の一端が鋭利につくり出されている。左・右の側辺には細かな調整剥離が施されており直線的である。9・10の両側辺と11の右側辺は片面調整であるが、11の左側辺は部分的に両面調整となっている。9・10の刃部角は一方が急傾斜、他方が緩傾斜となっており左・右の刃部形態が異っている。11は左・右の刃部形態が同じで、刃部角が急傾斜となっている。9は左・右の側辺、10・11は左・右の刃部及び先端に摩耗痕が観察される。

第 107 図 1～3 は扁平な縦長剥片を素材とし、一端または両端を鋭い尖頭状につくっている。いずれも左・右の側辺には細かな調整剥離が施されており、片面調整の刃部となっている。先端の部分は部厚くなっている。刃部には摩耗痕が認められる。

第 107 図 4～7 はやや厚手の縦長剥片を素材とし、一端または両端を丸くつくっている。いずれも細長い縦長剥片を素材として側辺の一辺または二辺に平端で細かな調整剥離を施して急傾斜な片面調整の刃部をつくり出している。先端の丸い部分は部厚くなっている。4 の上端は鋭く尖っており、この部分にも下端の丸い部分同様丁寧な調整剥離が施されている。左・右の側辺や丸くなっている部分には摩耗痕が観察される。

第 107 図 8 は下端が部厚い刃部を有するものである。刃部は部厚い片刃で、丁寧な調整剥離が施されている。腹面の左・右の側辺にも調整剥離が施されているが不規則である。左側辺と下端には摩耗痕が観察される。

第 107 図 9、第 108 図 1・2 は扁平な縦長剥片を素材とし、一端を丸くつくっているものである。側辺及び先端部分には調整剥離が加えられ、緩傾斜の刃部をつくり出している。丸い先端部分が薄くなっているのが特徴である。側辺の調整は第 107 図 9・第 108 図 2 は両側にみられ、第 108 図 1 は片側だけである。

第 108 図 3 は一部破損しているが、縦長の剥片を素材として両側辺から丁寧な調整剥離が加えられているものである。特に、a 側面では背面の剥離面を残さない程に丁寧な調整剥離が加えられている。左・右の刃部に磨耗痕が観察される。

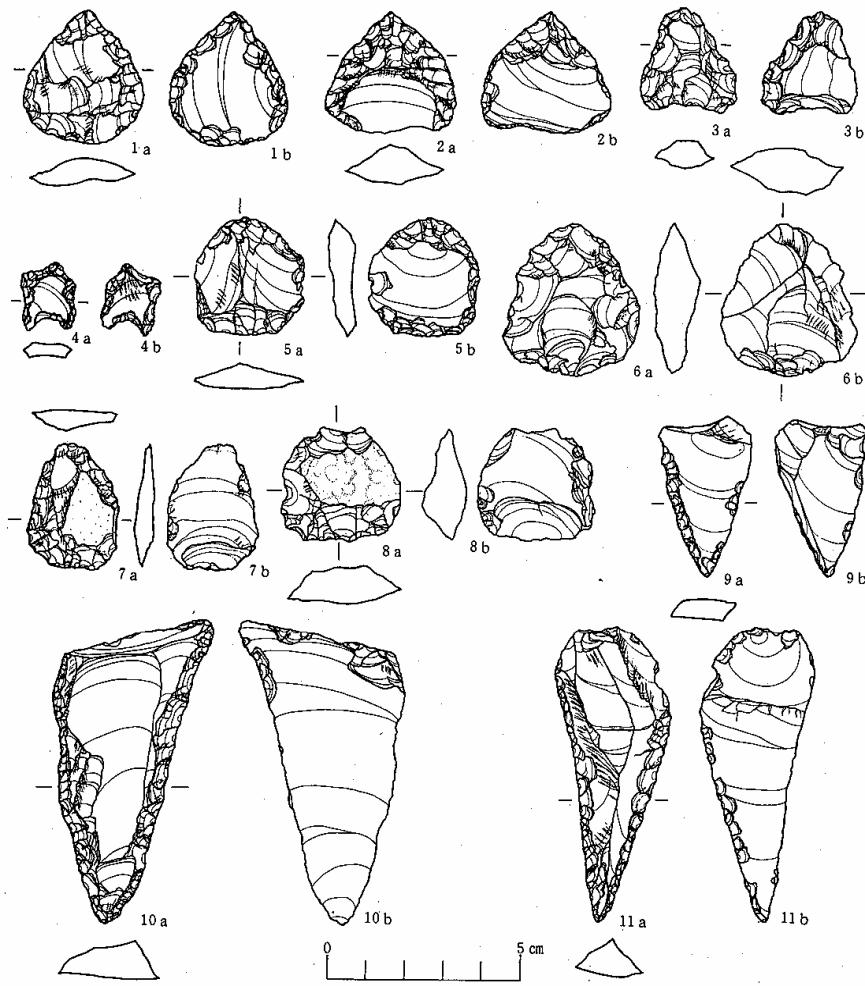
第 108 図 4～8、第 109 図 1・2・4 は縦長剥片の側辺に調整剥離を加えているものである。第 108 図 4～6・第 109 図 1・2・4 は調整剥離が両側辺に、第 108 図 7・8 は片側の側辺にだけ加えられているものである。第 108 図 6・第 109 図 1 の左・右の刃部には著しい摩耗痕が観察される。

第 109 図 3・5～7 図は四角の剥片を素材とし、幅の広い先端部分に調整剥離を加えているものである。3・5・6 は、さらに側辺部分にも調整剥離が及んでいるものである。

第 110 図 1・2 は逆三角形状剥片の両側辺（斜辺）に丁寧な調整剥離を加え、先端を尖頭状にしているものである。1・2 とも薄手の剥辺を素材としている。

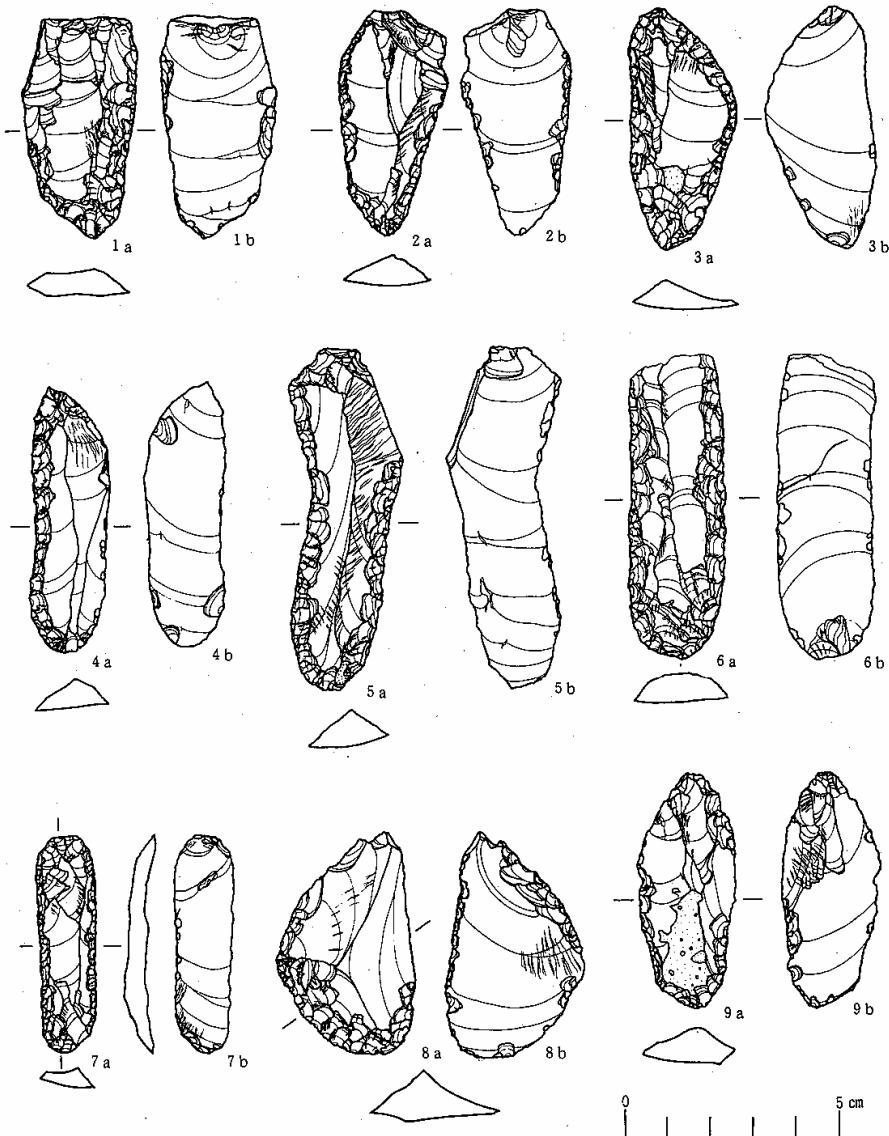
第 110 図 3～5 は不整形の剥片を素材とし、その外弯する側辺に調整剥離を加えているものである。調整剥離は粗雑で、無調整の側辺にも刃こぼれ状の痕跡がみられる。

第 110 図 6・8 は不整形の剥片を素材とし、その内弯する側辺に調整剥離を加えているものである。6 は、さらに幅の広い先端部分にも調整剥離が加えられ、側辺との角は鋭い尖頭状になっている。調整剥離の単位は小さいが、やや丁寧である。これに対し、8 の調整剥離の単位は 6 より大きく粗い。



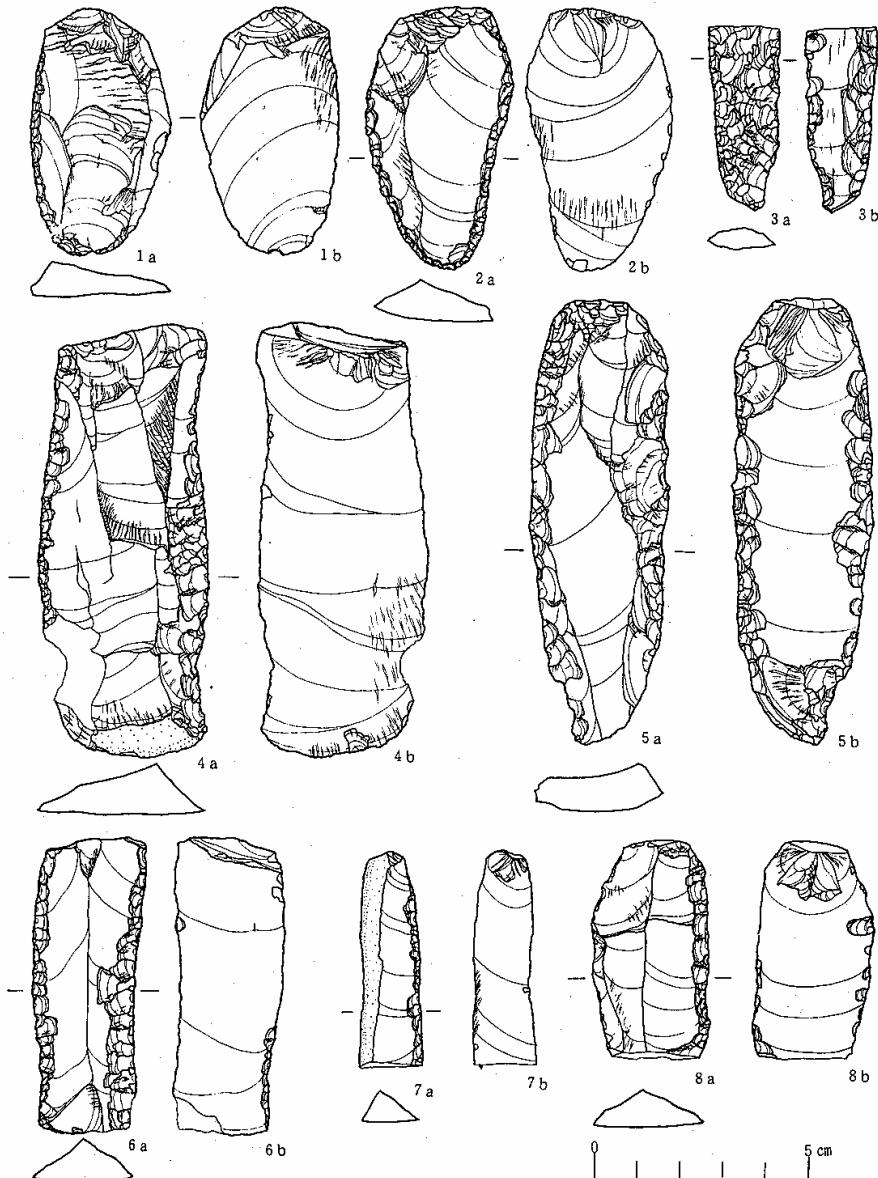
番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録No	図 版
1	AM - 68 - 1層	35.0	31.2	7.5	— 65° 71° 43°	7.4	87	46-1
2	第14住居 - 墓土	32.0	34.0	10.0	— 32° 68° 53°	7.2	1146	46-2
3	BC - 67 - 1層	27.7	25.0	8.8	— 65° 69° 82°	4.5	288	46-3
4	第16住居 - 墓土	18.0	14.5	4.4	90° 87° 70° 67°	1.1	63	46-4
5	AM - 66 - 2層	31.0	28.5	7.5	— 54° 60° 36°	6.2	8	46-5
6	AH - 44 - 2層	40.0	35.0	11.5	63° — 69° 62°	15.1	196	46-6
7	AK - 61 - 2層	33.0	23.5	5.0	35° — 33° 53°	4.2	490	46-7
8	第13住居 - 墓土	30.5	29.8	12.5	52° 66° 55°	10.5	393	46-8
9	BH - 73 - 1層	42.5	23.5	9.55	— 44° 58°	920	46-19	
10	AN - 54 - 2層	79.2	41.5	12.6	— 49° 54°	25.0	65	46-20
11	BA - 72 - 1層	77.2	27.5	9.2	— 63° 68°	18.3	286	46-21

第106図 その他の刮削器(1)



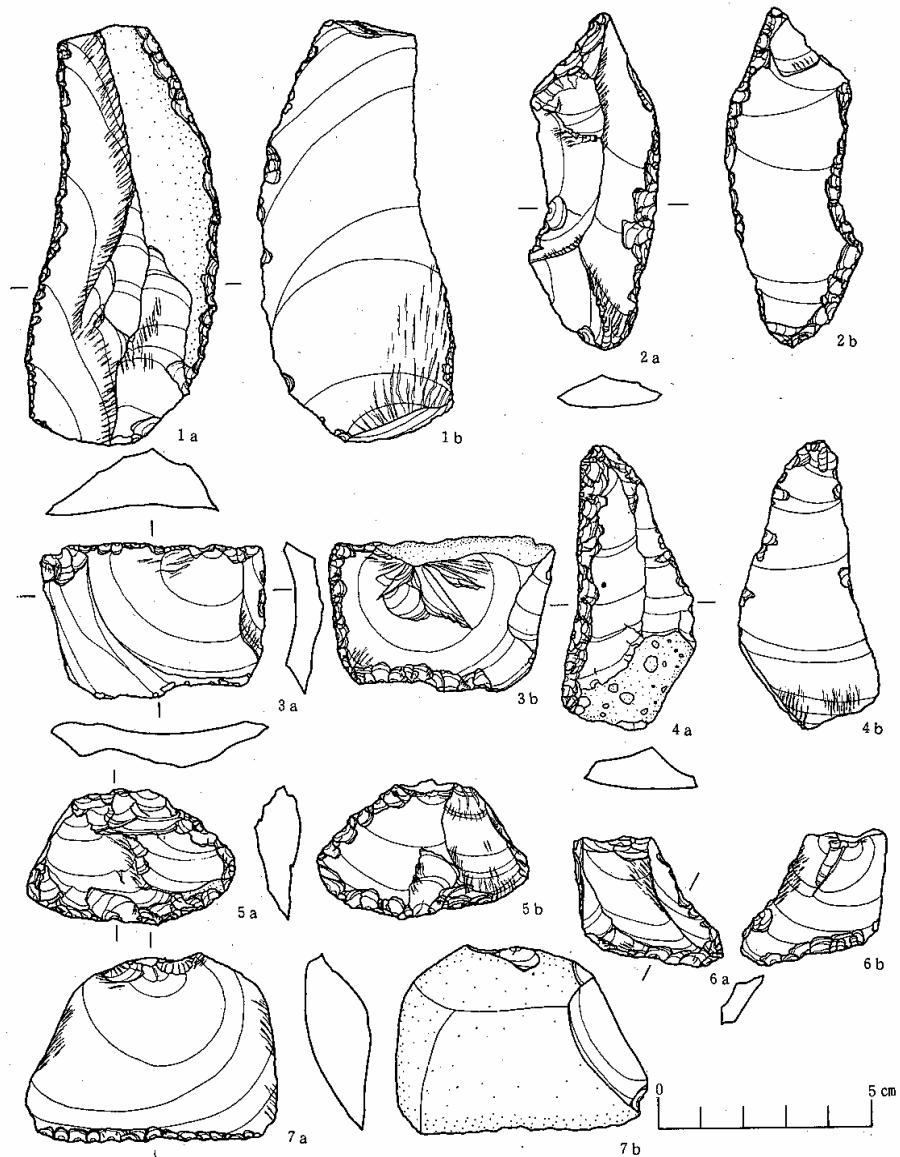
番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録No	図 版
1	第 5 住居 - 1 層	51.8	21.8	8.8	— 46° 44°	12.3	924	47-1
2	第 9 住居 - 2 層	52.5	25.5	7.7	— 41° 53°	8.9	1025	47-2
3	X — X	56.3	25.2	7.2	— 46° 43°	8.9		47-3
4	B F - 64 - X層	61.8	19.5	8.6	— 42° 53°	10.5		47-4
5	第 7 住居 - 2 層	79.5	26.3	9.6	— 50° 57°	18.5	384	47-5
6	AN - 53 - 1 層	(71.0)	(23.0)	(6.4)	— 52° 58°	(16.6)	60	47-6
7	第 8a 住居 - 2 層	50.8	14.3	6.7	— 65° 57°	4.1	25	47-7
8	B H - 71 - 1 層	52.0	33.0	12.4	— 59° 61° 45°	15.8	1050	48-1
9	A T - 73~75 - 2 層	55.0	22.8	8.0	— 62° 46°	8.8	1077	48-2

第107図 その他の剥片石器(2)



番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録No	図 版
1	AM - 66 - 2層	57.7	32.5	9.4	— — 61° 59°	16.0	985	48-3
2	第 17 住居 - 2 層	61.5	34.5	7.8	— — 51° 57°	16.2	72年 319	48-4
3	AN - 67 - 1層 (43.0)	(17.5)	(5.3)	(—)	— — 47° 43°	(4.2)	36	48-5
4	BC - 46 - 1層	100.5	40.0	12.7	— — 53° 54°	61.2	616	48-7
5	AR - 73 - 1層	103.5	34.0	10.7	— — 77° 63°	44.2	789	48-9
6	AT - 58 - 1層 (69.0)	(26.5)	(11.0)	(—)	— — 46° 50°	(15.8)	884	48-8
7	第 14 住居 - 2 層 (51.0)	(15.0)	(7.8)	(—)	— — 46°	(4.8)	439	48-6
8	第 11 住居 - 2 層 (51.0)	(28.2)	(9.8)	(—)	— — 51° 63°	(14.9)	229	48-10

第108図 その他の剥片石器(3)



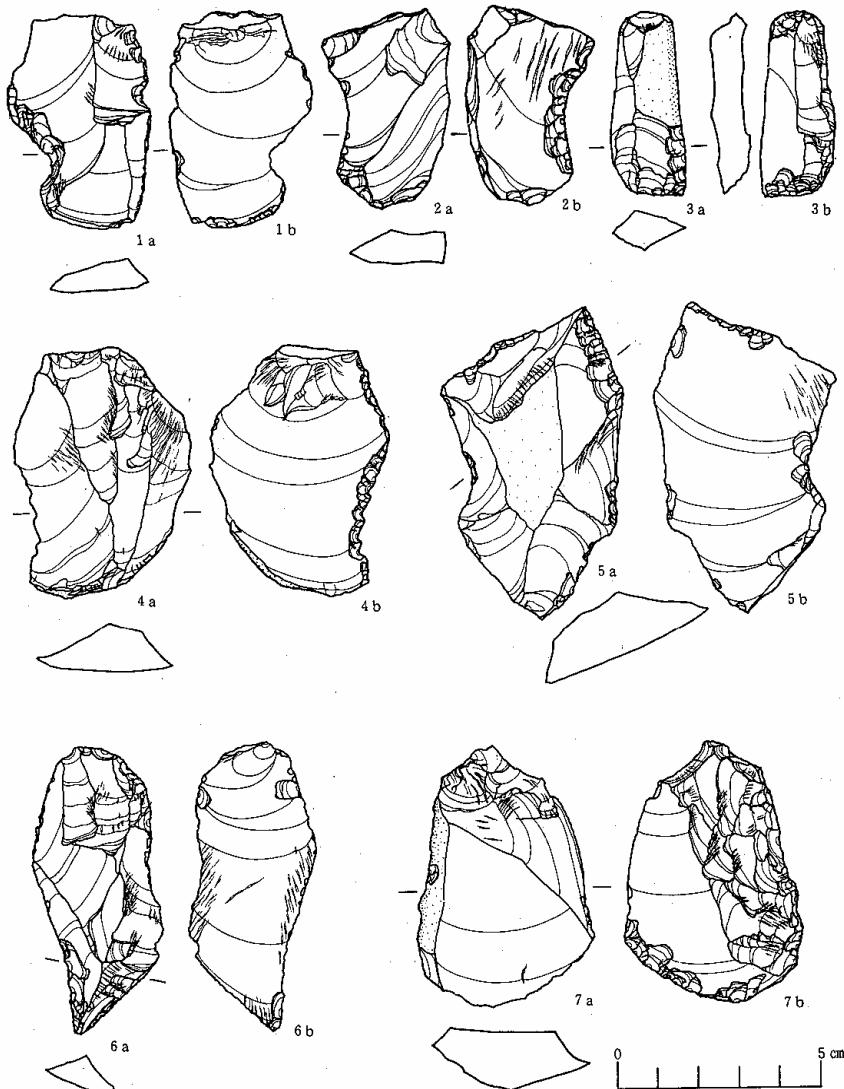
番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録No	図 版
1	第 3 炉跡東 - 2 層	99.2	46.5	15.6	— — 43° 58°	55.7	202	48-12
2	B C - 61 - X	79.8	31.0	7.5	— — 52° 59°	16.2	1040	48-11
3	B A - 64-65-1 層	53.0	37.0	9.0	39° 44°	18.1	866	49-9
4	B C - 49 - 1 層	67.5	26.5	10.2	— — 54° 62°	17.2	900	49-10
5	X - X	49.0	32.4	9.75	— — 52° 56°	15.0	771	49-11
6	第 7 住居 - 2 層	45.0	29.0	5.7	59° 55°	10.1	612	49-12
7	B J - 53 - 1 層	59.1	44.3	14.3	64°	38.8	875	49-13

第109図 その他の剥片石器(4)



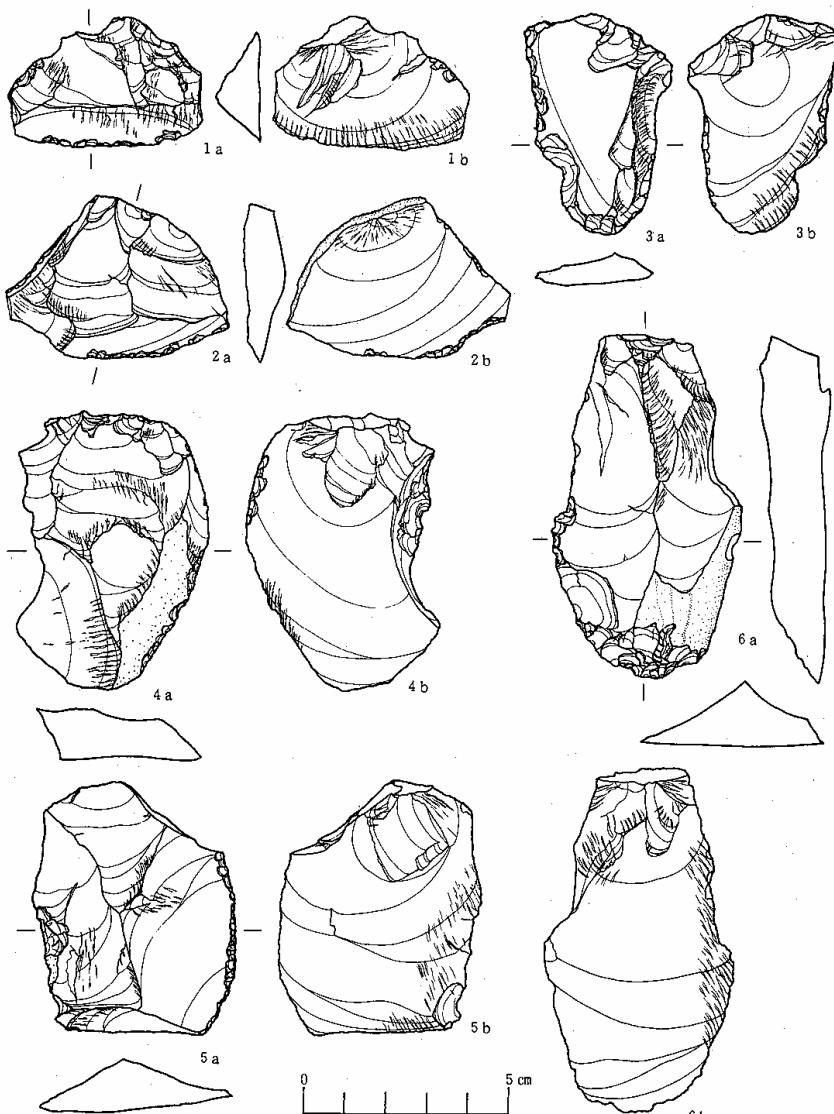
番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録No	図 版
1	AK - 62 - 2層	45.0	39.6	5.6	— — 39° 40°	8.7	132	50-1
2	第8b住居-張り床上	34.8	21.4	4.0	— — 42° 38°	2.5	37	50-3
3	第13住居-理土	38.4	30.2	5.8	— — 48° 54°	6.6	392	50-5
4	B F - 61 - 1層	61.5	50.5	15.2	— 46° — —	30.5	906	50-6
5	第4住居-炉石組内	43.5	36.8	9.4	— 83° 58° —	16.	72年2	50-7
6	A S - 69 - 1層	61.8	56.0	11.2	— 54° — 52°	34.2	910	50-8
7	A N - 69 - 2層	40.3	30.2	8.5	— 54° 54° —	9.6	1011	50-9
8	BA~BB-50-1層	81.5	52.5	13.0	— — — 60°	41.6	856	50-10
9	第6小堅穴-埋土	53.5	22.5	6.0	— — 67° 54°	6.6	441	50-11

第110図 その他の剥片石器(5)



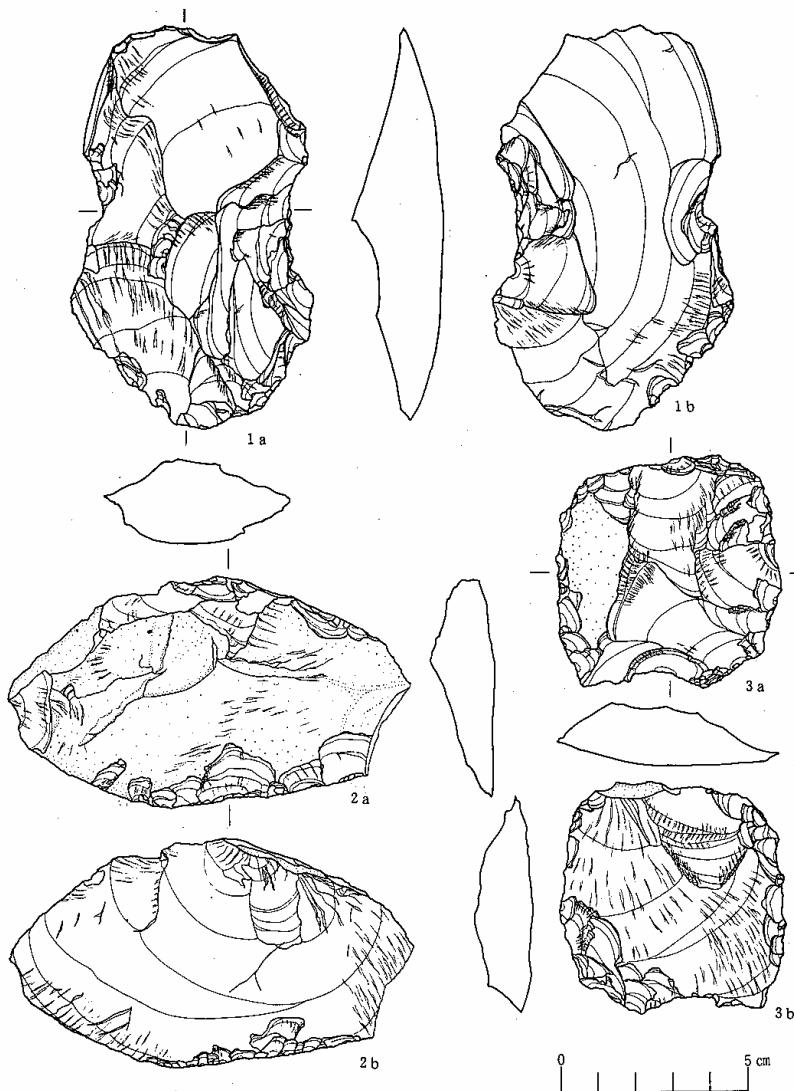
番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録No	図 版
1	B C - 61 - 1層	53.3	35.2	9.3	— — 46° 50°	16.0	1038	50-12
2	第11a住居P ₁ -埋土	50.0	31.0	13.2	— — 59° —	14.0	628	50-13
3	第 6 住居 - 2 層	46.0	18.0	10.8	— 59° — 47°	8.6	11	51-1
4	B B - 67 - 1層	62.0	43.5	15.6	— — 54° 61°	36.4	287	51-2
5	A T - 63 - 1層	77.8	44.6	19.5	73° — 70° 53°	53.1	932	51-3
6	第 9 住居 P ₂ -埋土	71.0	32.0	10.6	— — 55° 49°	17.8	1059	51-4
7	A T - 73~75-2層	65.0	43.5	14.3	— 53° 78° 56°	37.2	520	51-5

第111図 その他の剝片石器(6)



番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登録 No	図 版
1	A K - 62-2層	47.6	32.0	10.4	- 65° - -	13.8	1000	51-7
2	A N - 68-3層	(44.8)	40.0	8.9	- 48° 48° -	(15.8)	1021	51-8
3	A T - 74-1層	53.5	35.8	10.3	- - 43° -	10.5	981	51-6
4	第11B住居-3層	68.5	45.5	11.3	- - - 70°	42.8	174	51-10
5	A K - 62-2層	64.3	49.6	14.0	- - - 50°	44.8	222	51-9
6	A H - 44-2層	84.0	46.5	15.4	- 74° 48° 62°	58.1	197	52-1

第112図 その他の剥片石器(7)



番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	刃部角度 (上・下・左・右)	重量 (g)	登 録 No.	図 版
1	X — X	107.5	75.0	23.0	30° 51° 77° 60°	140	1033	52—3
2	第17住居—埋土	(107.0)	61.0	16.8	— — 29°	(95.5)	1160	52—2
3	AT-73-75-2A層	62.5	59.5	15.9	53° 67° 49° 45°	62.4	1142	52—5

第113図 その他の剥片石器 (8)

第110図7・9は不整剥片を素材とし、側辺や先端に調整剥離を加え嘴状の突起部分をつくり出しているものである。7は右側辺の下端に、9は右側辺の上端に嘴状突起がある。

第111図1・2・4は不整形剥片の側辺に調整剥離を加え、幅の広い抉りを形成しているものである。第111図2は抉りの部分に明瞭な摩耗痕が観察される。

第111図3は、剥片の形状は良くわからないが、a面の右側辺下部に丁寧な調整剥離が加えられ、上・下両端には粗い階段状剥離がなされている。また、b面の右側辺には両極打法状の細長い剥離面が上・下両端から入っている。

第111図5～7は不整形な剥片の一部に比較的丁寧な調整剥離が加えられているものである。5はa面の右側辺上端、6はa面の右側辺下端、7はb面の右側辺と左側辺下端にみられる。

第112図1～5は不整形な剥片の一部に粗雑で不規則な調整剥離を加えているものである。

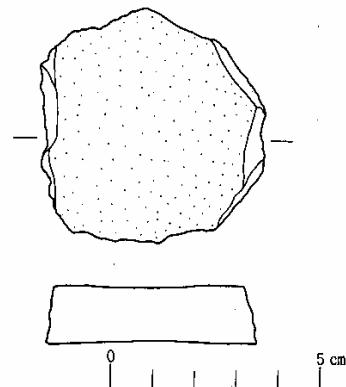
第112図6・第113図1～3は、粗雑で大形の剥片に調整剥離が加えられているものである。第112図6は、縦長剥片の先端部分に粗い調整剥離が加えられている。第113図1は、横長剥片の上・下両端及び中央部に粗い調整剥離が加えられ刃部状になっている。第113図2も横長剥辺を素材とし、幅広の先端に粗い調整剥離を加え、刃部状にしている。第113図3は方形の剥片を素材とし、両側辺を中心として粗い調整剥離を加えて刃部状にしている。

円盤状石器（第114図）

完形品が1点出土している。扁平な石の周縁を打ち欠いて、円盤状に仕上げたものである。大きさは径が約5cmと小形であり、重さも74gと軽い。上・下両面は自然面である。研磨痕や使用痕は認められない。用途については不明である。

磨製石斧（第115図～117図）

合計13点出土している。完形品は僅か3点のみである。完形品には最大長が11.6cmと大形のもの（第115図1）、最大長が9.1cmと中形のもの（第115図2）、最大長が5.8cmと小形のもの（第115図4）の3種類がある。第115図3・5・6や第116図1・2・5は破損品であるが、残存部分から推定して第115図1同様に大形のものと考えられる。また、第116図4は小形のものと考えられる。



第114図 円盤状石器

次に、これらの磨製石斧について、基部と刃部の特徴を述べることにする。

第 115 図 1 は基部の幅が端部から刃部へ向ってゆるやかに広がるもので、最大幅は刃部付近にある。基部横断面は上・下面側に脹みをもつ長方形で、隅の部分が丸くなっている。刃部は外弯刃で、刃部側面が左右対称になっている。また、両側の刃面は脹みをもちながら研ぎ出されている。基部端には敲打痕、刃部には刃こぼれと著しい摩耗痕が観察される。

第 115 図 2 も 1 と同様に基部の幅が端部から刃部へ向ってゆるやかに広がり、最大幅が刃部付近にある。基部横断面は上・下面側に脹みをもつ長方形で、隅の部分には明瞭な稜を形成している。刃部は外弯刃で、刃部側面は左右対称であるが、刃面の脹みは 1 に較べると小さく直線的である。刃部には摩耗痕とともに、刃に直交する線条痕が認められる。

第 115 図 4 は最大長が 5.8cm、最大幅が 2.3cm、最大厚が 0.9cm、重量が 25g と極めて小形で扁平な石斧である。基部は端部が丸くなっているが、幅は全体的にほぼ等しい。基部横断面は上面側が脹らみ、下面側と両側面が平坦で蒲鉾形をしている。刃部は直線刃であるが僅かに外弯している。刃部側面は、左右非対称で、上面側の刃面は脹みをもち、下面側の刃面は直線的になっており、刃縁は下面側に片寄っている。基部端には敲打痕、刃部には微弱な摩耗痕とともに刃縁に直交する線条痕が認められる。

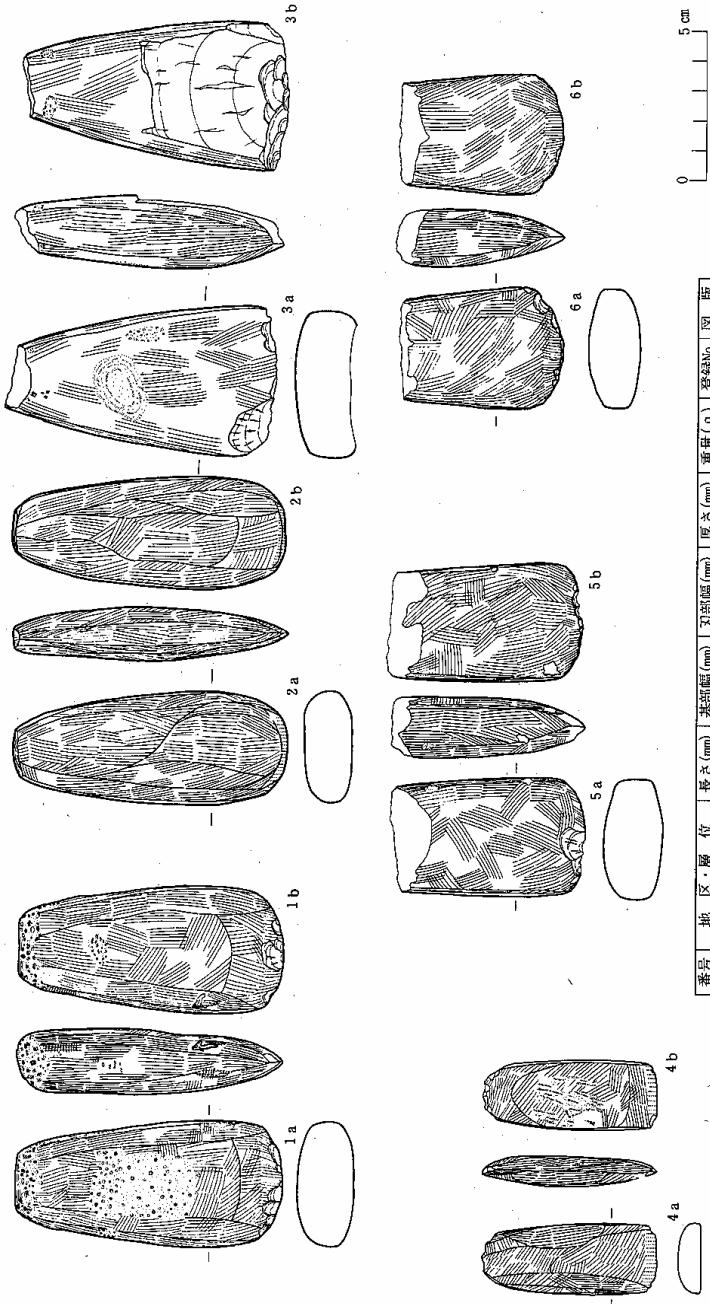
第 115 図 5・6 は基部中央から刃部にかけて残存している。基部断面は上・下面側が僅かに脹む長方形で、隅の稜は明瞭である。刃部は外弯刃で、刃部側面が左右対称に、刃面が脹みをもちながら研ぎ出されている。刃部には刃こぼれや摩耗痕が認められる。

第 115 図 3・第 116 図 1・2・4・5、第 117 図 1・2 は刃部が破損し基部が残存している。いずれも、基部の幅が端部から刃部側に向って広がるものである。基部横断面は上・下面側が僅かに脹む長方形のものが多いが第 116 図 4 は蒲鉾形をしている。いずれも隅の稜は明瞭である。刃部の破損状況を観察すると、破損したままのもの（第 115 図 3・第 116 図 2・4・5、第 117 図 1・2）の他に、破損して折れた面に刃部側から再調整の加撃を行ない、形を整えているものがある（第 116 図 1）。しかし、第 116 図 1 の加撃調整は刃部を再生しているものではなく、他の石器への転用の可能性が強い。

第 116 図 3 は、基部中央部分の破片である。横断面は上・下面側が僅かに脹む長方形で、隅の稜は明稜である。また、残存部分の形状から、基部は刃部側に向って幅が広がるものと推定される。

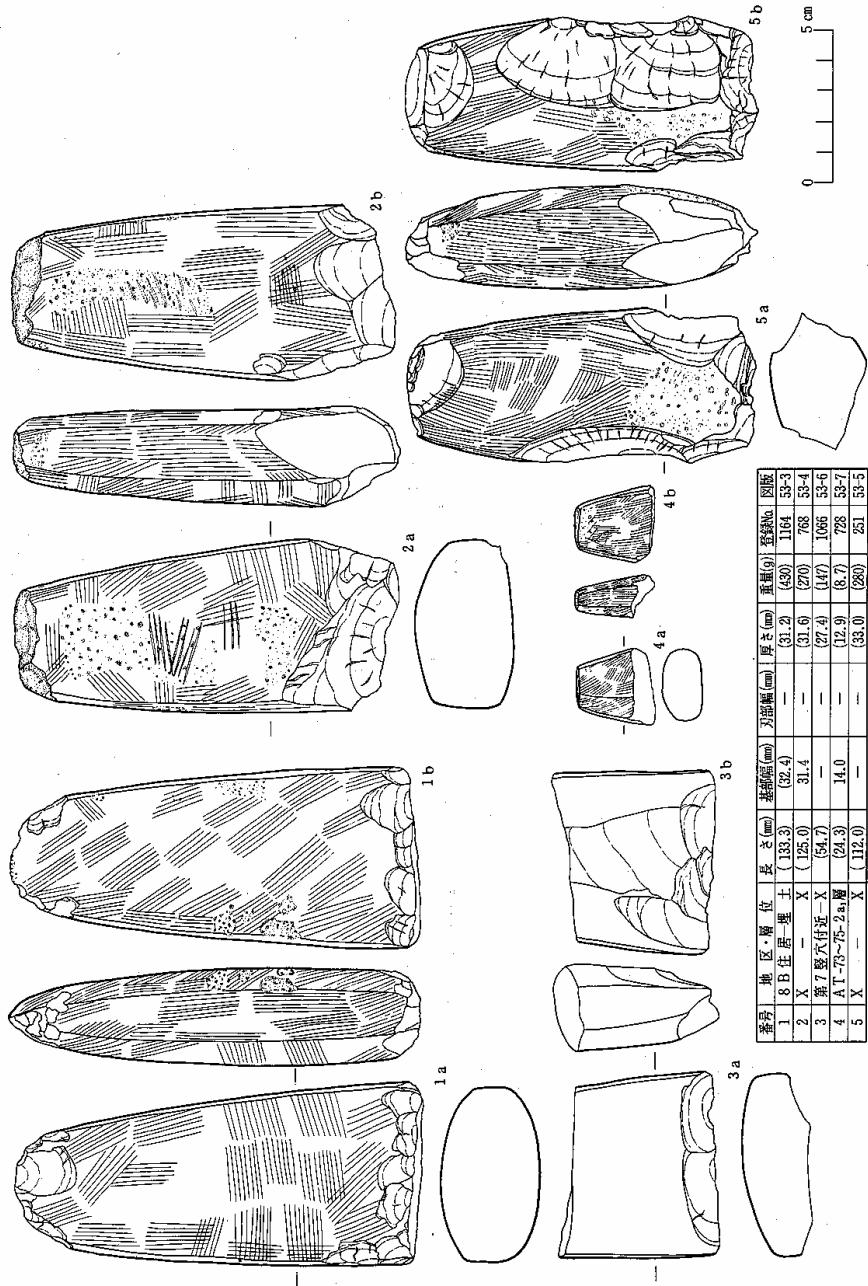
以上、13 点の石斧の特徴を個別的に説明したが、それらを整理すると次のようになる。

1. 形態上最も多いのは、基部幅が刃部側に向って広がり、刃部が外弯刃のものである。これらは全体的に厚手で、刃面が脹みをもち、重量感がある。基部断面は上・下面側が脹みをもつ長方形で、隅に稜を形成するものと丸味をもつものがあり、前者が大部分を占めて



番号	地 区・層 位	長さ (mm)	基部幅 (mm)	刃部幅 (mm)	厚さ (mm)	重 量 (g)	登録No.	圖 版
1	BF - 72 - 1 層	116.7	26.0	28.0	28.0	370	1152	52-10
2	AQ - 72~73-2A, 層	91.4	16.7	37.0	17.7	100	501	52-9
3	AN - 69 - X	(89.8)	-	-	(22.0)	(160)	-	41
4	第10引廻 - 脳り方理土	(58.4)	-	-	9.4	(25)	45	52-8
5	X - 73 - X	(87.0)	-	52.6	(27.6)	(235)	1032	53-1
6	AT-73~75- 2a, 層	(72.4)	-	52.0	(25.0)	(170)	468	53-2

第115圖 磨製石斧 (1)

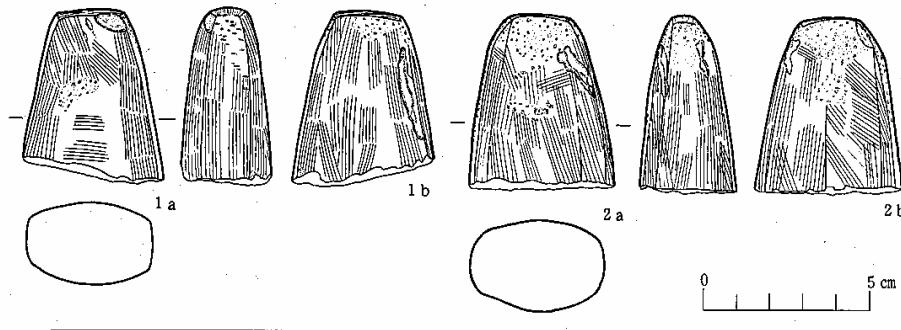


第1165圖 磨製石斧(2)

圖版					
番号	地 区・層 位	長さ(mm)	基部幅(mm)	刃部幅(mm)	厚さ(mm)
1	8B生居里土	(133.3)	(32.4)	—	(31.2)
2	X	(125.0)	31.4	—	(27.0)
3	第7壁穴附近	(94.7)	—	—	(27.4)
4	AT-73-75-2.8	(24.3)	14.0	—	(14.7)
5	X	(112.0)	—	—	(33.0)
					43.0 76.5 53.4 106.6 53.6 72.8 53.7 28.0 25.1 53.5

いる。大きさは大・中形のものがある。これらの刃部には刃こぼれや摩耗痕が観察されるが線条痕は不明確である。

2. この他、基部幅が刃部側に向って広がり外弯刃でやや扁平なものと、基部幅がほぼ等しく直線刃で全体が扁平なものが、それぞれ1点ずつある。前者の刃部は左右対称であるが、



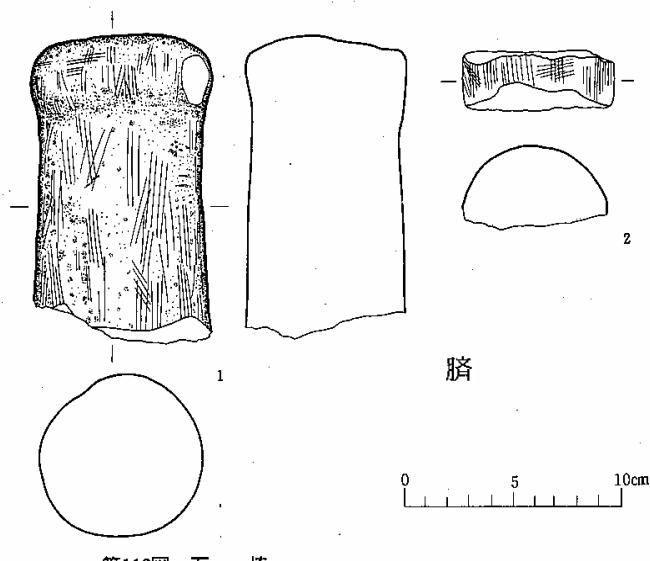
番号	地区・層位	長さ(mm)	基部幅(mm)	刃部幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	登録No.	図版
1	A T - 68 - 1層	(52.65)	(20.0)	—	(26.0)	(100)	752	53-8
2	B A ~ B E - 56 - 1層	(51.9)	(17.8)	—	(28.9)	(90)	862	53-9

第117図 磨製石斧(3)

刃面の脹みが小さく直線的である。後者の刃部は左右非対称で刃縁が下面側に片寄っている。これらは中・小形で大形のものはない。また、刃部には摩耗痕の他に、刃縁に直交する線条痕が観察される。

石棒 (第118図)

欠損品が2点出土している。1は有頭の石棒で、胴部から先端部にかけて大きく欠損している。頭部と胴部とはくびれを持って境とし、頭部と胴部の横断面形はほぼ円形である。大きさは残存する部分で最大長が14.8cm、頭部径が約9.0cm、胴部径が約8.5cmである。表面



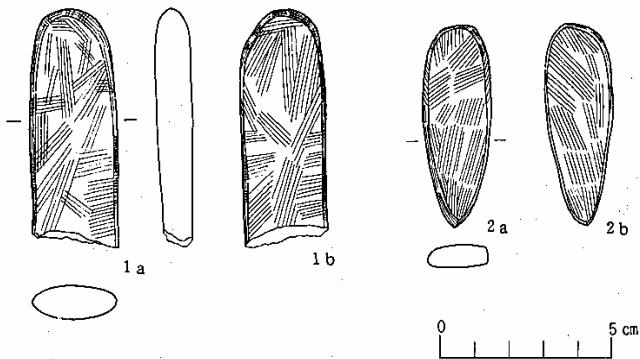
第118図 石棒

には細かい敲打痕が認められ、それを切って研磨の際の擦痕が長軸と平行な方向に認められる。2は胴部の小破片で丁寧に研磨されている。残存部分からの推定胴部径は約5.0cmである。

不明磨製石器（第119図）

2点出土している。いずれも、全体が丁寧に研磨されている。1は欠損しており全体の大きさについては不明である。石器の一端は丸くつくられている。残存部分の大きさは最大長が7.05cm、最大幅が2.53cm、最大厚は1.12cmであり扁平で細長い石器である。

2は完形品であり、最大長が5.92cm、最大幅が1.92cm、最大厚が0.7cm、重量が20gと扁平で小形の石器である。上端は丸く、下端は鋭く尖っている。全面は丁寧に研磨されa・b両面と側面との境には明瞭な稜を持つ。使用痕については認められない。用途については不明である。



第119図 不明磨製石器

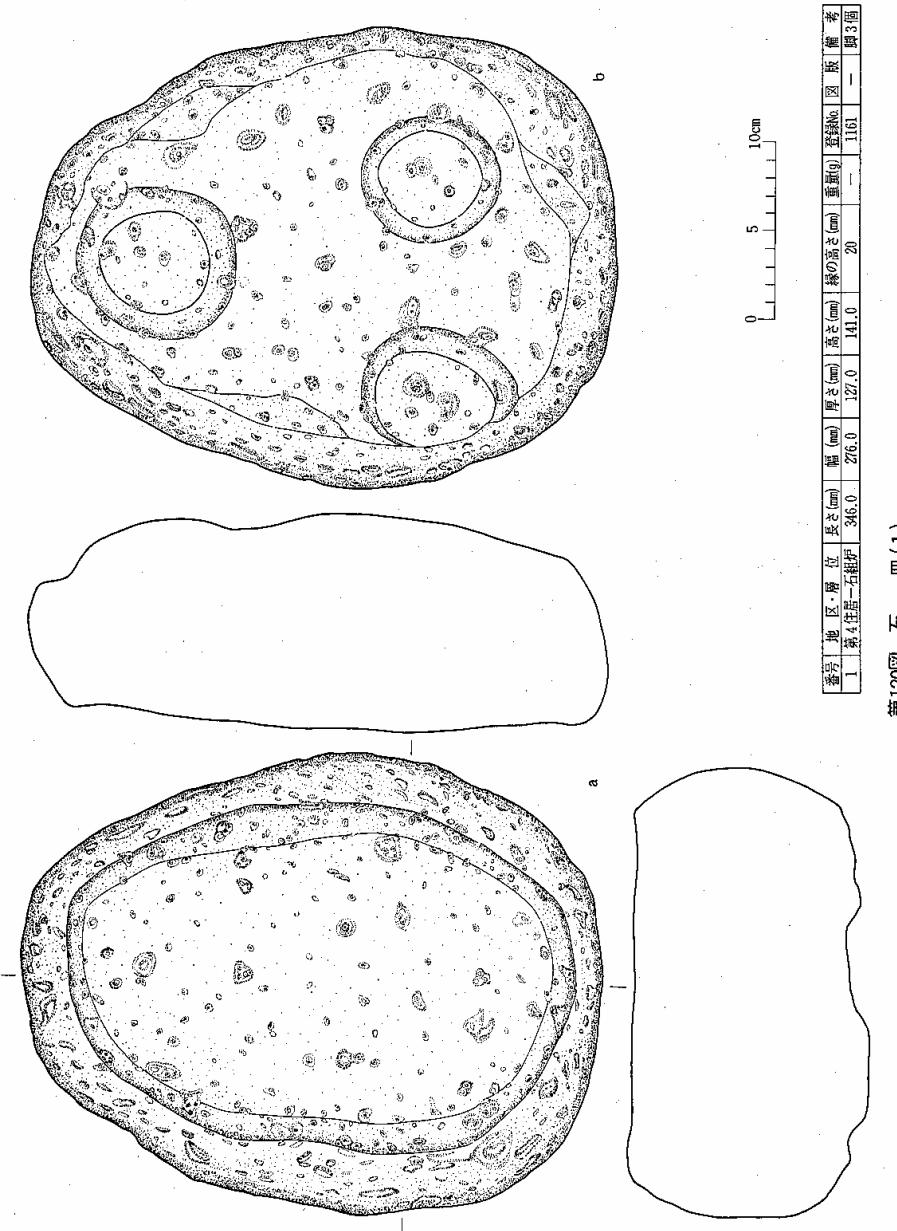
石皿（第120～125図）

石皿は9点出土している。これらについて、大きさ・上面の形状、下面の形状を中心として特徴を述べることにする。

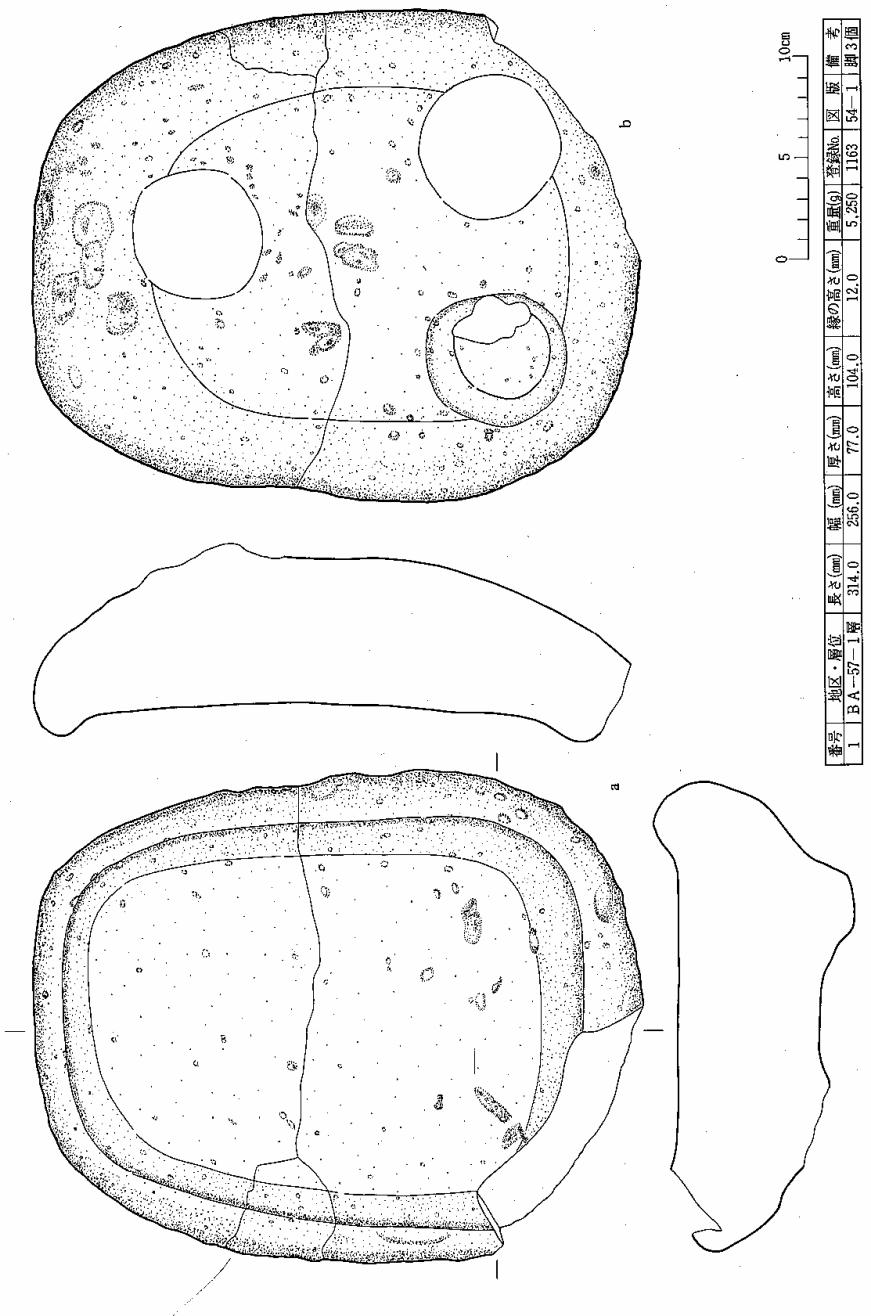
大きさ：第120図は完形品であり大きさが判明している。最大長は34.6cm、最大幅は27.6cm、最大厚は12.7cm、高さは14.1cmである。第121図は一部を破損しているが完形に近い。最大長は31.4cm、最大幅は25.6cm、最大厚は7.7cm、高さは10.4cm、重量は5,250gである。第120図の方が第121図よりもひとまわり大きな数値を示している。その他の石皿については破損が著しく大きさについては不明である。

上面：第120・121図は平面形が判明している。第120図は卵形の平面形を有している。第121図は上面の一部が破損しているが隅丸の台形（上底よりも下底がやや幅が広くなっている）になると思われる。

石皿の周縁には中央の皿状の部分（底面）を取り囲むように高い縁がつくられている。しかし、中には第120図のように極端に縁の低いものもある。

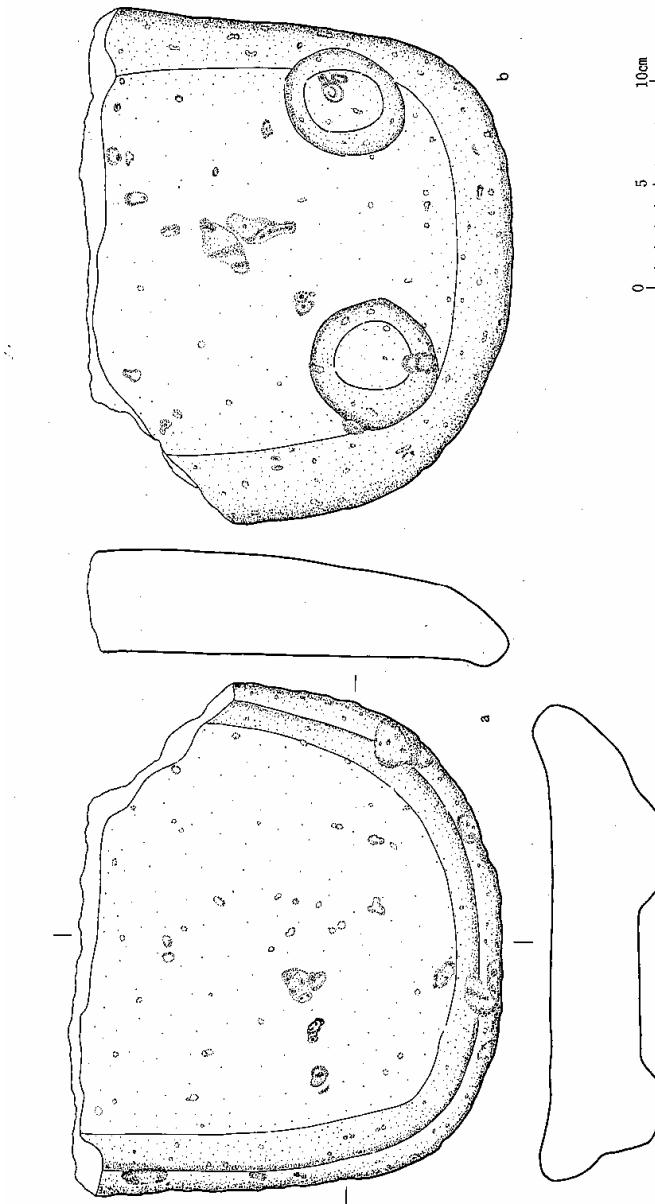


第120図 石 皿(1)



番号	地区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	高さ(cm)	緑の高さ(cm)	重量(g)	登録No.	図版	参考
1	BA-57-1層	314.0	256.0	77.0	104.0	12.0	5,250	1163	56-1	脚3個

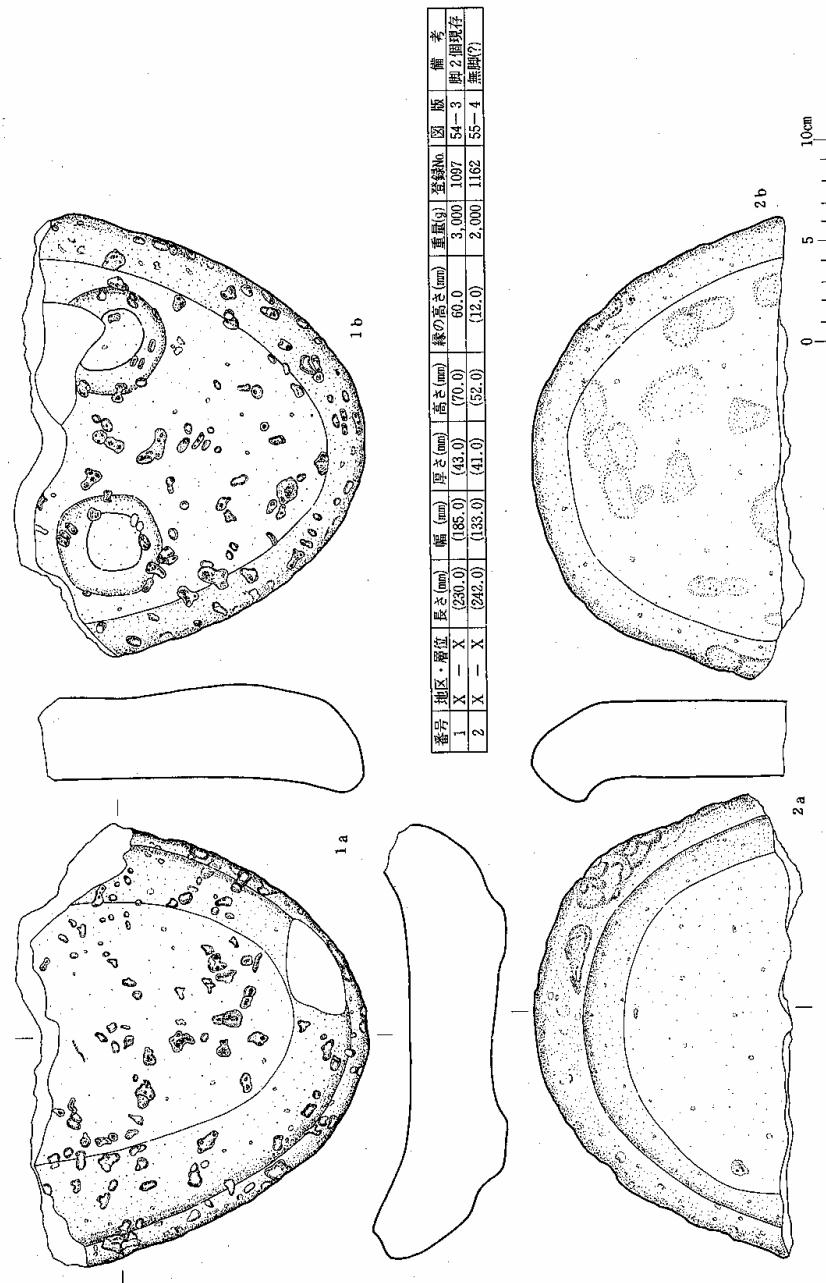
第121図 石 III(2)



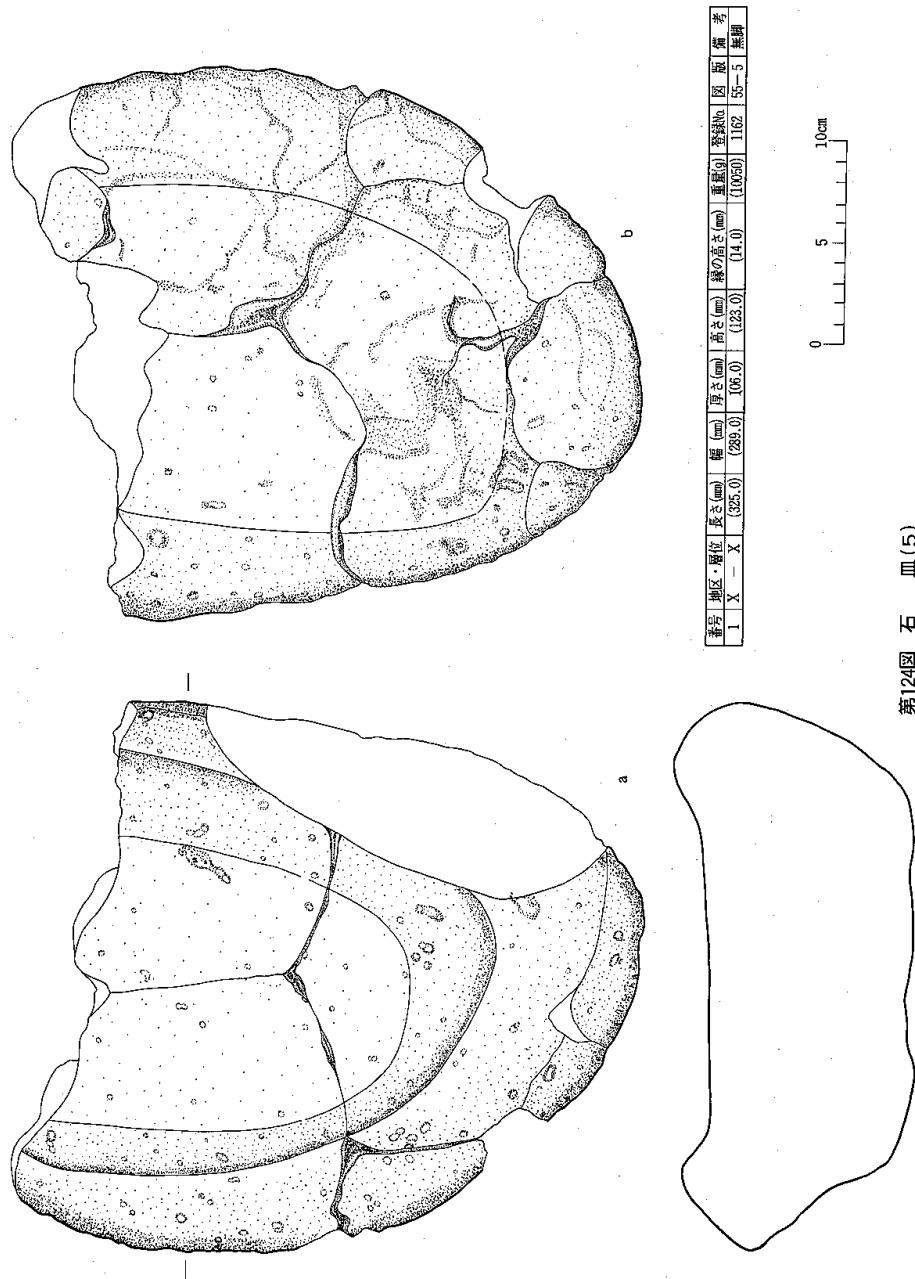
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	高さ(mm)	縁の高さ(mm)	重量(g)	登録No.	図版	備考
1	A 0-68-2層	(259.0)	(216.0)	(46.0)	(69.0)	10.0	5,000	734	54-2	脚2個現存

第122図 石皿(3)

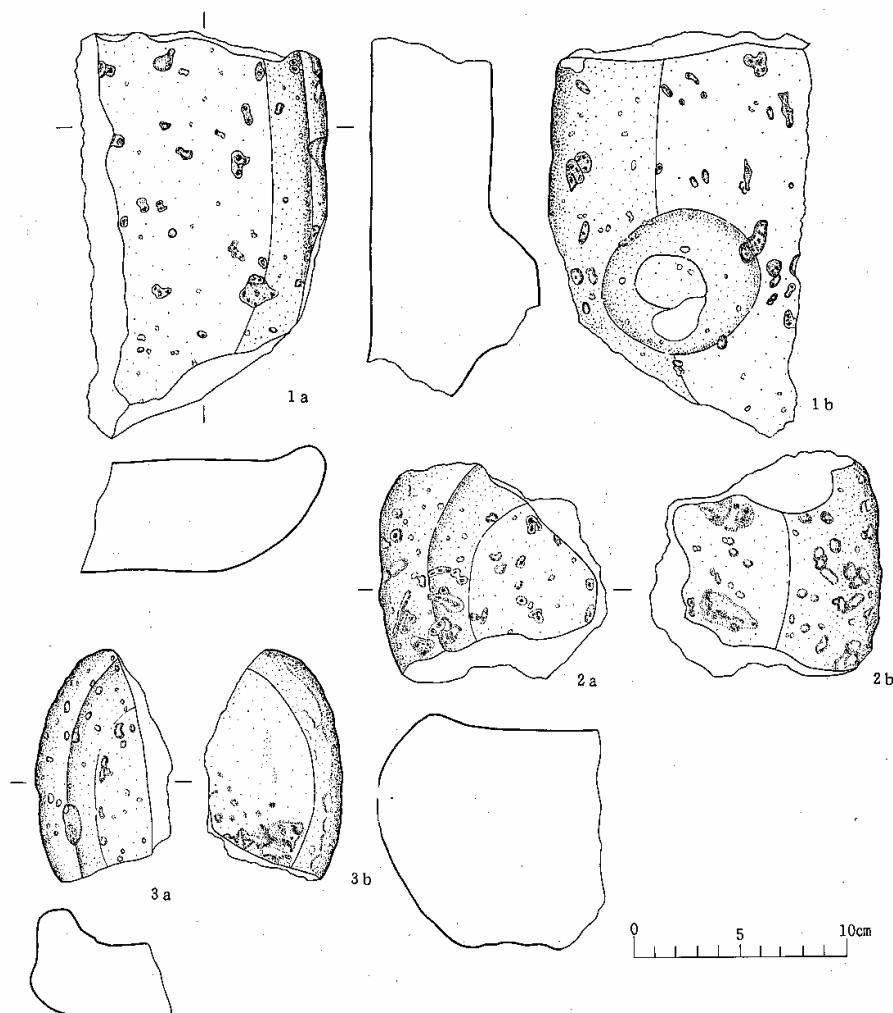
第123図 石皿(4)



第124図 石 皿(5)



下面:下面に脚が付けられているものが5点出土している(第120~122図、第123図1、第125図1)。第120・121図は3個の脚があり三角形になるように配置されている。第122図・第123図1は2個、第125図1は1個の脚を確認できるが、全体の脚の数と配置関係については不明である。



番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	高さ(mm)	縁の高さ(mm)	重量(g)	登録No	図版	備考
1	X	(177.0)	(131.0)	(61.0)	(85.0)	(80)	2,400	750	55-6	脚1個現存
2	AM-63-X	(113.0)	(112.0)	(109.0)	(115.0)	(80)	1,260	749	-	
3	第2号住居-石組炉	(114.0)	(67.0)	(37.0)	(55.0)	(13)	290	203	55-7	

第125図 石皿(6)

第 123 図 2、第 124 図は残存部分が比較的大きいにもかかわらず脚が見られないことから無脚の可能性が大きい。なお、第 125 図 2・3 については小破片のため、有脚か無脚のものなのか不明である。

凹石（第 126 図～第 129 図、第 130 図 1・2・4・5、第 131 図 1～3）

26 点出土している。このうち完形品は 22 点、破損品は 4 点である。凹石のなかには磨痕や敲打痕の認められるものも見られるがここでは凹石のなかに含めた。

平面形は橢円形のものと円形のものが大部分を占めており、棒状のもの（第 126 図 1）が僅かに 1 点含まれている。

横断面は長橢円形のものと橢円形のものが主体であり、僅かに隅丸台形のもの（第 126 図 1）や円形のもの（第 130 図 1）が見られる。

大きさは第 126 図 1 が最大長 18.15cm、最大幅 6.4cm、最大厚 4.6cm、重量 570g、第 127 図 5 が直径 16.5cm、短軸 15.7cm、最大厚 4.7cm、重量 2,000g とやや大きめであるがその他のものは長軸（直径）7.8cm～13.1cm、短軸 6.9cm～10.9cm、最大厚 4～6.6cm、重量 450～870g と比較的狭い範囲におさまっており、手に持てる程度の小形のものである。

凹部の位置は片面に見られるものと上・下両面に見られるものとがあり、両者の量比は約 1：2 である。凹部は石器のほぼ中央に見られるものが多い。第 126 図 1 の b 面に見られる凹みのように平面形が橢円形で横断面形が「V」字状の深い凹みとなっているものは少なく、ほとんどの場合平面形が不整形で横断面形が凹凸のある浅い凹みとなっている。

凹石には凹みの他に敲打痕が見られるもの（第 129 図 1～4、第 130 図 2・4・5）、敲打痕と磨痕が見られるもの（第 131 図 1・2）、磨痕が見られるもの（第 131 図 3）がある。敲打痕はいずれも石器の周縁に見られる。磨痕は上・下両面に見られる。凹石の例のように礫の石質・形状・大きさなどが使用の目的にさえ合えば、複数の用途に用いられる場合が多かったものと思われる。

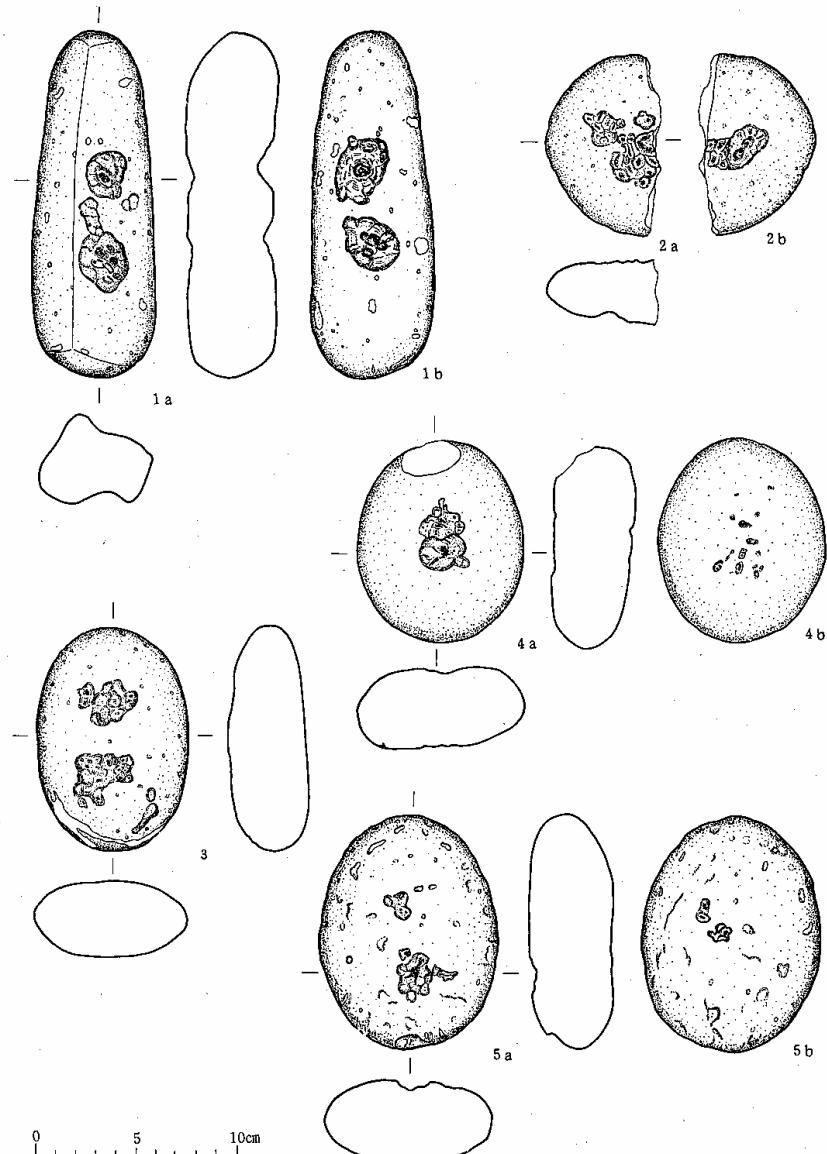
敲石（第 130 図 3）

完形品が 1 点出土している。棒状で横断面は隅丸の正方形である。大きさは最大長 20.5cm、最大幅 6.0cm、最大厚 5.7cm、重量は 1160g である。敲打痕は上端と下端に認められる。

磨石（第 131 図 4・5、第 132 図 1～4）

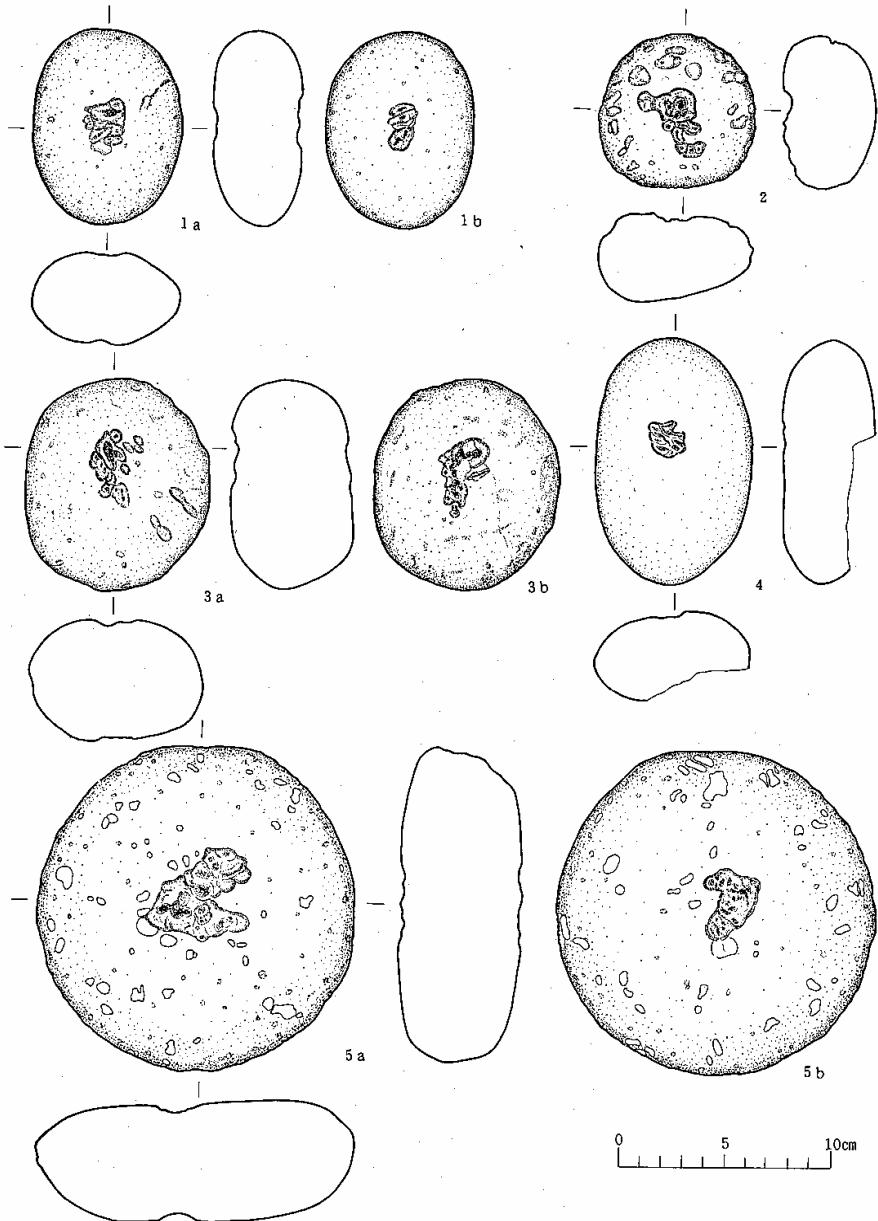
6 点出土している。このうち完形品は 4 点、破損品は 2 点である。

平面形には橢円形のもの（第 132 図 1・3・4）とほぼ円形のもの（第 132 図 2）がある。



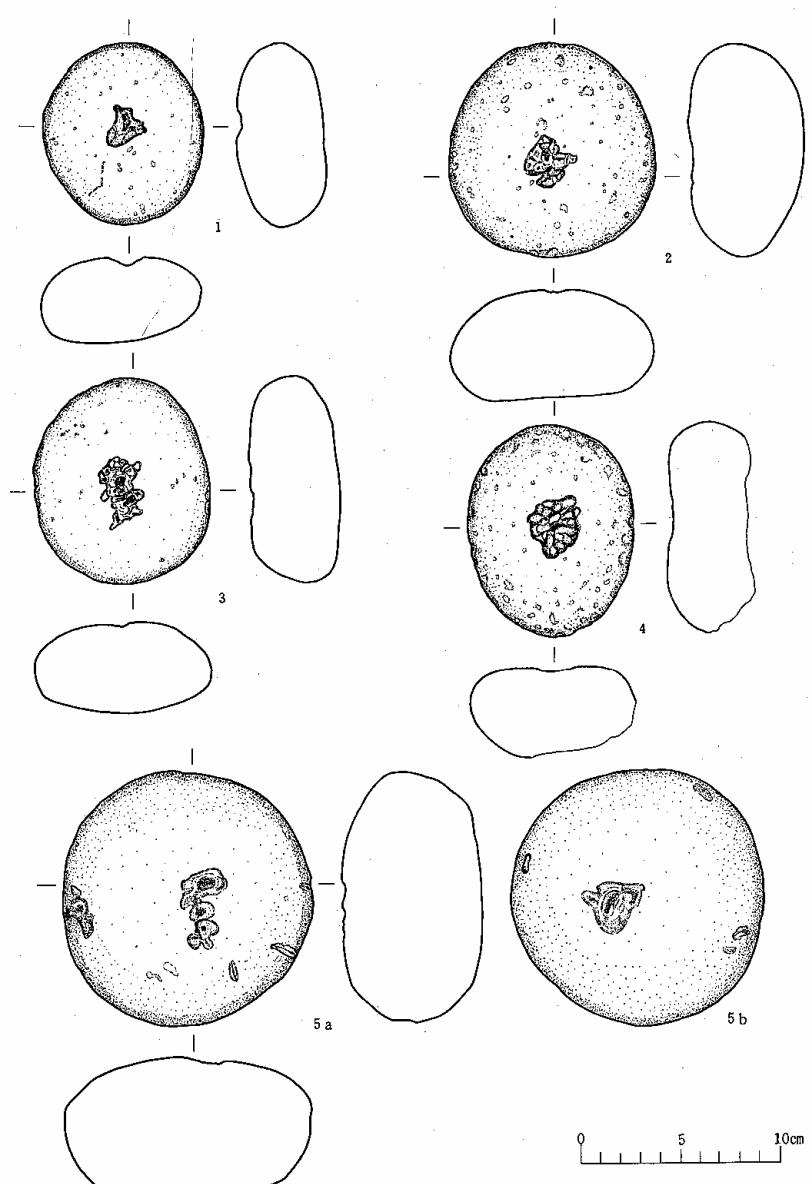
番号	地 区・層 位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	登録No.	図 版	備 考
1	第1小竪穴-2層	182	64	46	570	446	56-1	a, b両面に凹み
2	第10住居-1層	(95)	(58)	(34)	(220)	429	56-2	a, b両面に凹み
3	第17住居-埋土	117	80	40	560	433	56-3	片面にのみ凹み
4	第5住居P ₃ -埋土	(106)	88	41	(560)	426	56-4	a, b両面に凹み
5	第16住居-2層	123	94	42	750	428	56-5	a, b両面に凹み

第126図 凹 石(1)



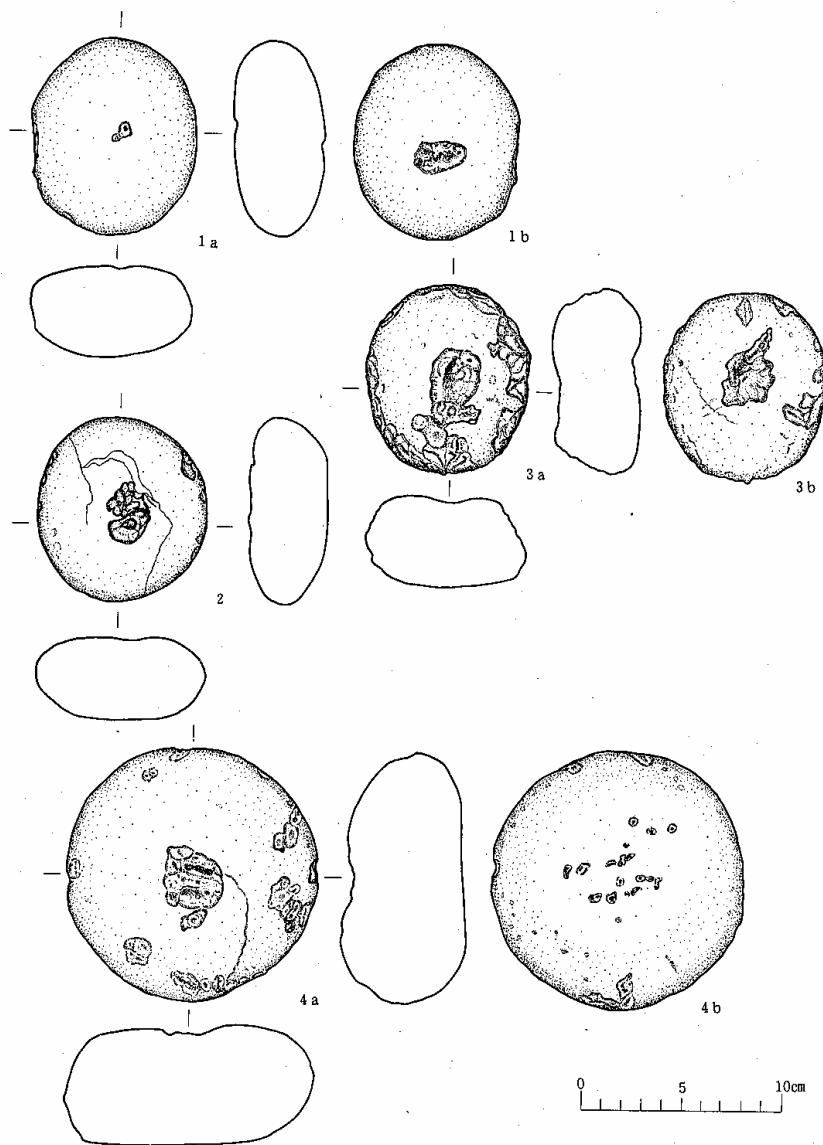
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	登録No.	図版	備考
1	第6住居-2層	100	75	47	470	10	56-6	a, b両面に凹み
2	第13住居-炉石組	78	72	45	370	430	56-7	片面に凹み
3	AK-61-2層	107	92	62	900	129	56-8	a, b両面に凹み
4	AO-68-2層	125	78	(46)	(550)	732	56-9	片面に凹み、片面は欠損のため不明
5	AT-56-1層	165	157	61	2,000	1100	56-10	a, b両面に凹み

第127図 凹 石(2)



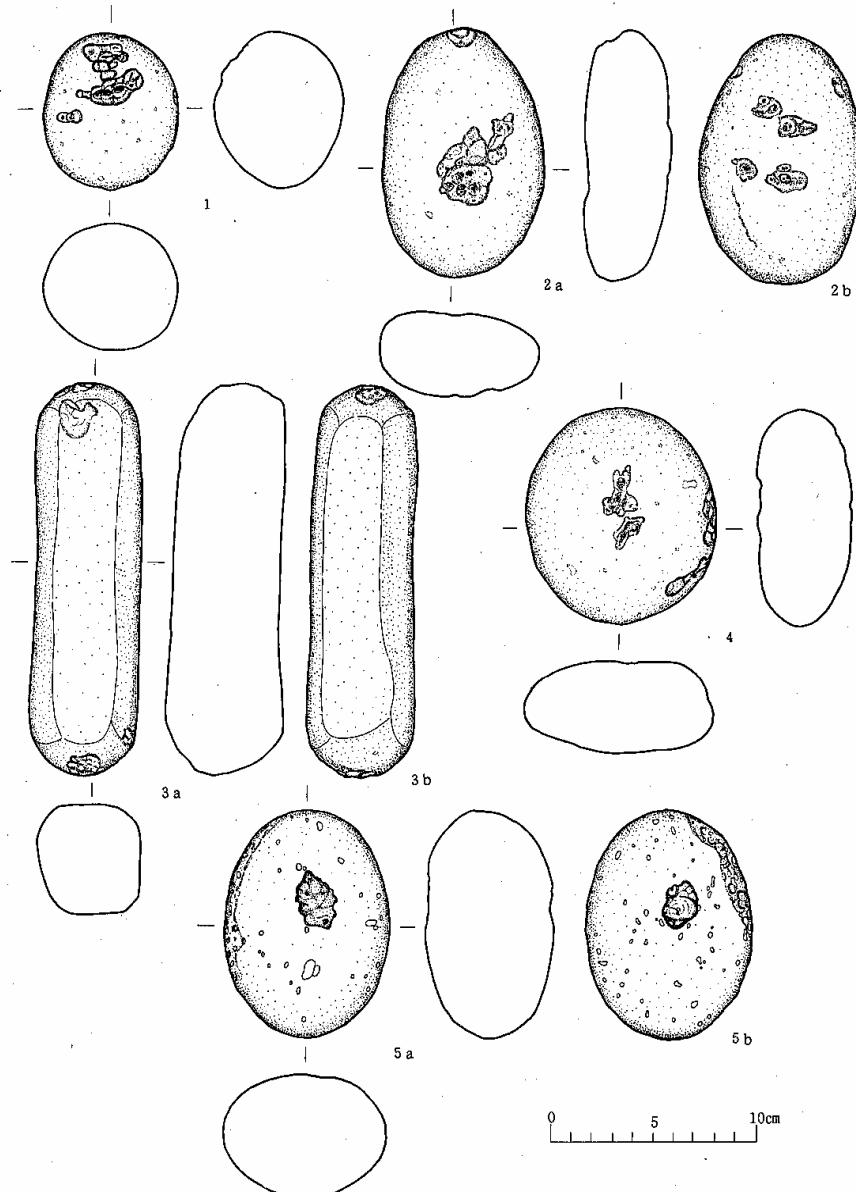
番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	登録No	図 版	備 考
1	A K - 61 - 2 層	97	85	46	450	722	56-11	片面にのみ凹み
2	A R - 54 - 1 層	113	109	61	980	744	57-1	片面にのみ凹み
3	B A - 68 - 1 層	109	94	49	740	735	57-2	片面にのみ凹み
4	A R - 67 - 1 ₄ 層 (112)	(88)	(48)	(650)	(650)	736	57-3	片面に凹み、片面は欠損のため不明
5	A S - 72-75-1 層	103	101	57	870	1155	57-4 a - b	片面に凹み

第128図 四 石(3)



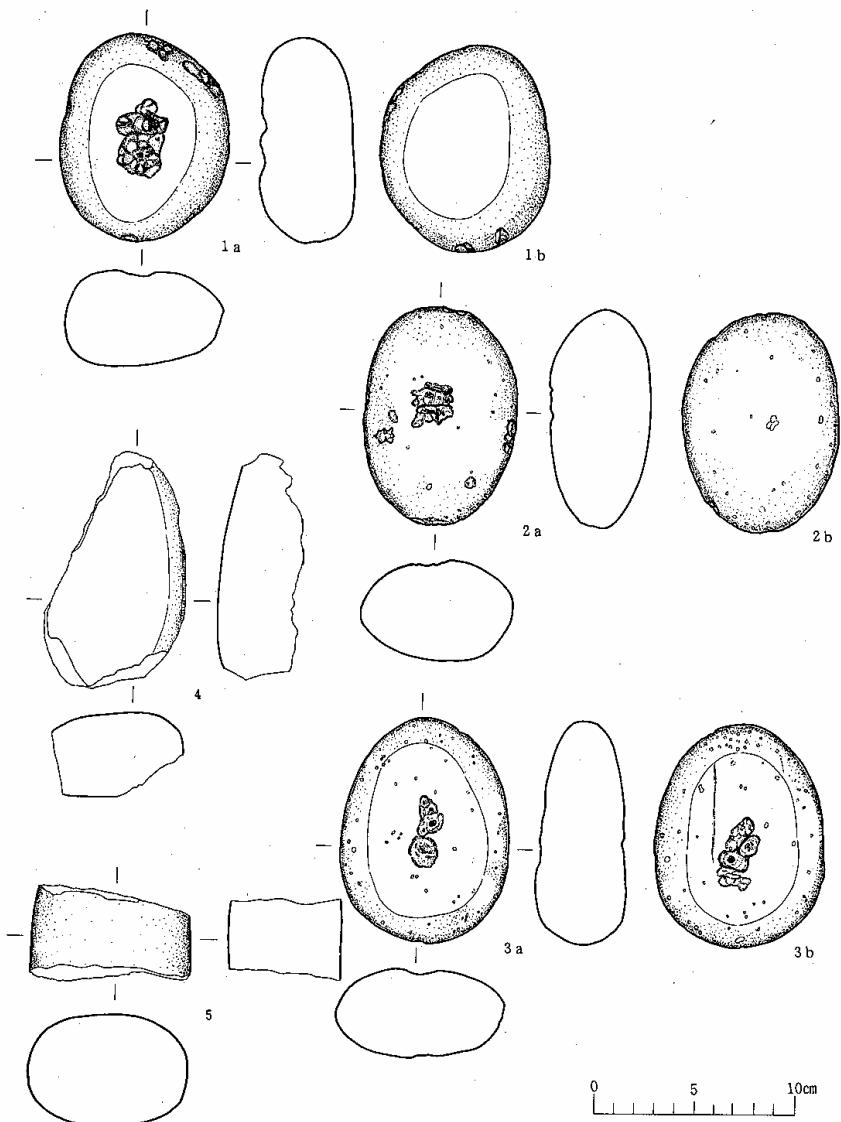
番号	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	登録No.	図版	備考
1	第11B住居-3層	104	86	48	640	432	57-5	a・b両面に凹み、側縁に敲打痕
2	A T -66-1層	97	90	42	550	1029	57-6	片面に凹み、側縁に敲打痕
3	第15住-床面	100	87	47	590	429	57-7	a・b両面に凹み、側縁に敲打痕
4	AM-53区-1層	103	100	50	800	61	57-8	a・b両面に凹み、側縁に敲打痕

第129図 凹 石(4)



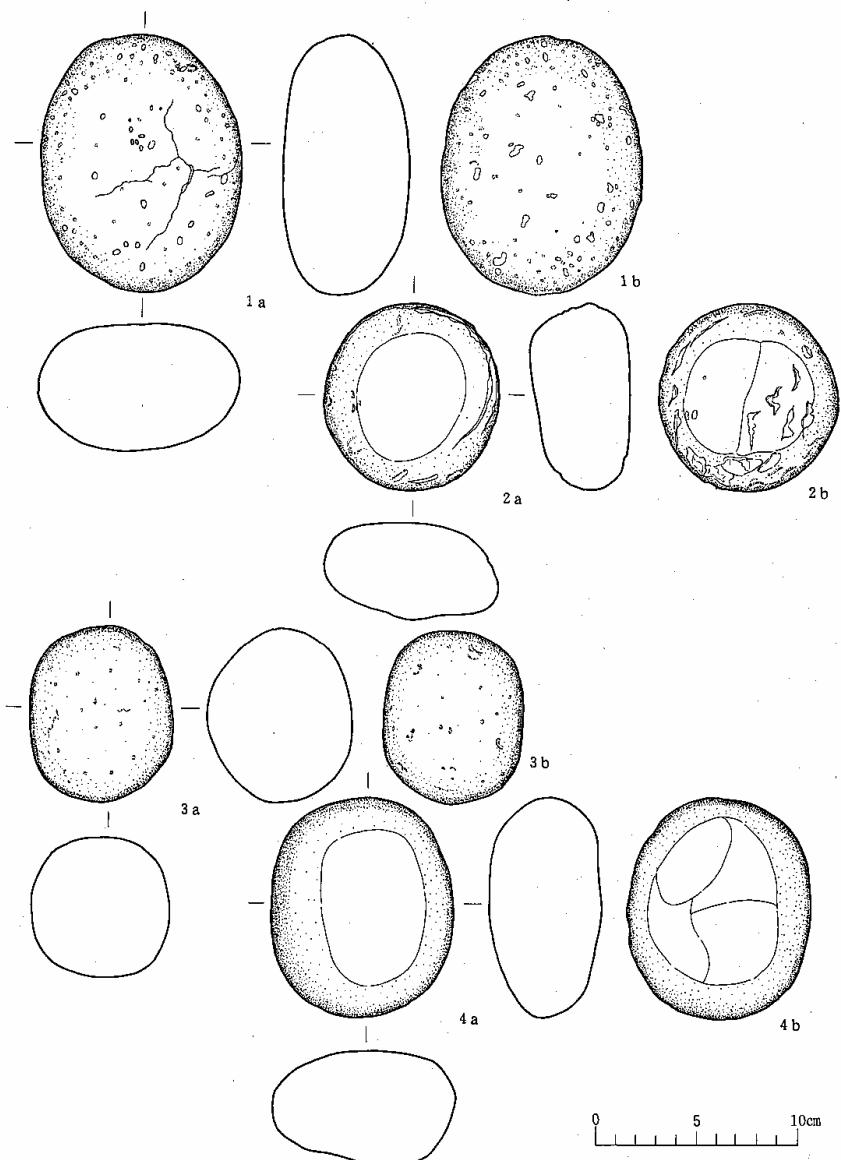
番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	登録No	図版	備考
1	B A--64-65-1層	81	69	66	530	743	57-9	片面に凹み、側縁に敲打痕
2	X — X	131	83	44	700	757	57-10	a・b両面に凹み、側縁上部に敲打痕
3	X — X	205	60	57	1160	1105	58-1	上・下両側縁に敲打痕
4	A Q-72-2 a; 斧	113	98	49	740	729	58-2	片面に凹み、側縁に敲打痕
5	17 住居 — 埋土	119	85	65	840	423	58-3	a・b両面に凹み、側縁に敲打痕

第130図 凹石(5)・敲石



番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	登録N	図版	備考
1	A T-73-75-2 a層	109	90	50	840	727	58-4	a面に凹みと磨痕、b面に磨痕、側縁に敲打痕
2	11 B 住居 - 3 層	105	81	53	650	431	58-5	a面に凹みと磨痕、b面に磨痕、側縁に敲打痕
3	第5住居-炉石組底面	119	88.5	48	700	5	58-7	a・b両面に凹みと磨痕
4	第10住居 - 1 層	(120)	(74)	(44)	(540)	421	58-6	a・b両面と側面に磨痕
5	X	85	(48)	(59)	(390)	751	58-8	全面に磨痕

第131図 凹石(6)・磨石



番号	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	登録No	図版	備考
1	第 8 a 住居 - 2 層	103	80	50	580	1153	58-9	焼け痕有り、a・b両面に磨痕
2	A K - 61 - 2 層	98	92	50	620	723	58-12	a・b両面に磨痕
3	A R - A T - 54 - 1 層	92	75	74	710	741	58-11	全面に磨痕
4	B A - 67 - 1 層	114	96	59	920	737	58-10	a・b両面に磨痕

第132図 磨石

前者の横断面形は橢円形に近いものが多い。後者の横断面形は円形に近いものである。大きさは長軸（直径）9.2～11.4cm、短軸7.5～9.6cm、最大厚5.0～7.4cm、重量580～920gである。平面形や横断面形、大きさは凹石と共通する部分が多い。第131図4・5は破損品であるが残存部分から他の磨石とほぼ同様の大きさであると思われる。

磨痕はほぼ全面に認められるもの（第132図3）、上・下両面に認められるもの（第132図1・2・4）とがある。第131図5はほぼ全面に認められる。第131図4は上・下両面と両側面に磨痕がある。

石器群の特徴とその年代

本遺跡から出土した石器には、各種の剥片石器・円盤状石器・磨製石斧・石棒・不明磨製石器・石皿・凹石・敲石・磨石等がある。本遺跡出土土器の大部分は、その所属時期が中期末葉（大木10式の第Ⅱ段階）から後期初頭（南境式の初期段階）のものである。縄文時代前期初頭及び弥生時代の土器も出土しているが極く少量である。したがって、このことから本遺跡出土石器の大部分は縄文時代中期末葉から後期初頭のものと考えられる。

次に、本遺跡出土石器群のなかでも比較的出土量が多い石器を中心としてその特徴について若干述べて見たい。

石鏃：合計113点出土しており定形石器の中では最も出土量が多い。基部形態と尖頭部側縁形態とから特徴をまとめてみる。

基部形態は大きく凹基・平基・丸基・不整形の4類に分けられた。不整形とした一群は、ここでは除いて考える。出土量では、凹基が多く全体の約60%を占める。平基・丸基のものは、いずれも10%未満である。後期以降に増加する凸基は見られなかった。

尖頭部側縁形態では、直線的なものが多数を占める。この他に、内弯するものや外弯するもの（側縁上部が直線的で下部が強く外弯するものや側縁上部が内弯し、下部が強く外弯するもの）も直線的なものよりは量的に少ないがまとまって出土している。また、僅かであるが側縁中央や側縁下部が僅かに外弯する形態のものも認められる。

次に、本遺跡の石鏃と、近接する時期で所属時期が明確になっている勝負沢遺跡（縄文時代中期中葉大木8b式期中心）と上深沢遺跡（縄文時代中葉後葉大木9式期中心）出土石鏃と比較し、時期的な特徴について考えて見たい。

勝負沢遺跡（丹羽・阿部・小野寺：1982・3）：基部形態が判明しているのは40点である。このうち、凹基のものが22点、平基のものが13点、丸基・凸基のものは少なくそれれ2点と3点である。凹基が約60%を占め、ついで平基が約32%と多い。

尖頭部側縁形態が判明しているものは26点（報告書では25点としたが、26点の誤りである）

である。このうち、側縁中央または下部が僅かに外弯するものが 12 点で全体の約 40%を占め、下部が強く外弯するもの（側縁上部はいずれも直線的であり本遺跡の 1 C₁類にあたる）も 10 点（約 38%）と多く、この 2 種類で全体の約 78%を占めている。側縁が直線的なものや上部が直線的で下部がやや外方に開く形態のものも見られるが、それぞれ 2 点ずつで少ない。

上深沢遺跡（宮教委：1978・3）：基部形態の判明しているのは 64 点である。このうち、凹基のものが 28 点で全体の約 44%を占め、ついで丸基のものが 21 点で約 33%であり、この 2 種類で全体の 77%を占めている。平基（6 点）・凸基（6 点）・棒状基（3 点）のものもみられるが出土量は僅かである。

尖頭部側縁形態の判明しているのは 72 点である。側縁形態には、側縁が直線的か下部が僅かに外弯しているもの（報告書では直線的なものと下部が僅かに外弯しているものを区別していない）と側縁下部が強く外弯しているもの（側縁上部はいずれも直線的であり、本遺跡の 1 C₁類にあたる）と側縁が内弯するものの 3 種類がある。報告書によると「量的な関係（報告書では具体的な数値を明示していない）は、側縁が直線か下部が僅かに外弯するものが非常に多く、下部が外弯するものが少量である。そして、側縁が内弯するものは極く僅かである。」となっている。

以上 2 遺跡のあり方と本遺跡出土の石鏃の特徴を基部形態と尖頭部側縁形態と比較し整理すると次のようになる。

1. 基部形態：中期中葉（大木 8 b 式）～後期初頭（南境式）では凹基が主体を占めて出土している。その他、中期中葉では平基が、中期後葉（大木 9 式）では丸基のものが全体の約 1/3 を占めるほど出土しているが、中期末葉（大木 10 式）～後期初頭では平基や丸基が全体の 10%以下であり少量しか出土していない。後期以降に非常に多くなる凸基は中期中葉や中期後葉では少量出土しているが中期末葉～後期初頭では 1 点も出土していなかった。このことについては、地域性なのか、それとも量的に少なかったために偶然欠落したものなのかは不明である。

2. 尖頭部側縁形態：中期中葉では直線的な側縁が少なかったのであるが、中期後葉～後期初頭にかけては出土量が多くなっている。側縁上部が直線的で下部が強く外弯するものは中期中葉～後期初頭にかけて量的にはさほど多くはないが一定量認められる。中期末葉～後期初頭にかけて特徴的な形態として、側縁上部が内弯し、下部が強く外弯するものや側縁が内弯するものがあげられる。前者は、中期中葉や中期後葉には認められないし、後者は中期後葉にわずかに認められるだけであり、中期末葉～後期初頭の出土量から比べるとかなり少ない。

石匙：合計 11 点出土しているもののうち、縦長の形態が 9 点を占め圧倒的に多く、横長の形態や縦長と横長の中間形態のものはそれぞれ 1 点ずつで極く僅かである。第 103 図 8 は松原遺跡（奏昭繁：1977・11）・勝負沢遺跡（丹羽・阿部・小野寺：1982・3）で認められた技法によっ

て製作されており、この種の技法は縄文時代中期末葉～後期初頭まで受けつがれている。

石皿：石皿は9点出土しており、いずれも有縁のものである。脚を有しているものが5点出土しており、このうち、2点の石皿は配置関係まで判明している。脚は、平面形が円形で低く、円柱状である。配置関係のわかるものはいずれも3個の脚が三角形になるように配置されている。

凹石・敲石・磨石：凹石・敲石・磨石の中には、凹痕・敲痕・磨痕のみが観察されるものもあるが同一の石器で凹痕と敲痕、凹痕と磨痕、凹痕と敲痕と磨痕が同時に観察されるもの多く、これらの石器はそのあり方から複数の機能を有していたものと考えられる。そして、これらの石器については『「する」・「すられる」と「たたく」・「たたかれる」という作業が一連の工程のなかで、同一の石器を用いて行なうことが多く、切り離すことが出来ないものであったということを示していると思われる。』(佐々木良幸：1979・3)と指摘されているように、石器の選択の際にはいくつかの作業に耐えられるような礫をあらかじめ選択していたものと考えられる。このことは、これらの石器に使用されている礫の石材・形態・大きさ（手に持てるような大きさ）・重量がほぼ共通していることからも推定できる。

なお、この他の石器については出土量が少なく、十分に検討することができなかった。

IV. 遺構の検討

住居跡の特徴

これまでの調査で、菅生田遺跡から発見された住居跡は 15 軒である。15 軒の住居跡の特徴を整理してまとめたのが第 2 表である。第 2 表を見て簡単にわかるように、これらの住居跡は竪穴住居としての壁を検出できたものは 5 軒（第 3・5・11B・16・17 号住居跡）で、そのうち平面形が明らかなもの、もしくは推定可能なものは僅か 3 軒（第 5・11B・16 号住居跡）に過ぎない。その理由は、遺跡が沖積段丘上に立地し、竪穴住居が礫層を覆っているシルト質砂層に掘り込まれており、このシルト質砂層が崩れやすいためと考えられる。また、柱穴が検出されたものは 6 軒（第 4・5・8・9・11A・16 号住居跡）あるが、その多くは柱穴が礫層に達していたもので、シルト質砂層中で検出できたのは 2 軒（第 4・16 号住居跡）にすぎない。このように、菅生田遺跡における竪穴住居の壁と柱穴の検出は、その有無ではなく、保存状態のあり方によることが多い。^{注 1)}

住居跡で確認された施設には壁・柱穴の他に炉・床面敷石・埋設土器がある。この中で、平面形・柱穴については上述の理由から不明な点が多い。したがって、ここでは炉・床面敷石・埋設土器を中心としてその相互の関係を検討したい。なお、炉の使用方法・構築方法については既に述べているので、ここでは再論しない（丹羽・三浦・加藤：1973・3 p. 69～70 丹羽茂：1974・3 p. 28～30）。

炉跡

炉は 15 軒の住居跡に 1 基ずつある。この他、第 8・16・17 号住居跡では重複した状態で、一段階古い炉跡がそれぞれ 1 基ずつ検出されている。新・旧二段階の炉は長軸方向がほぼ一致し、同じ線上で位置がずれているに過ぎない。また、竪穴住居の壁が検出された第 16 号住居跡では、炉の新・旧に対応するような壁の重複はみられず一定している。したがって、これらの同一方向で重複する炉については、同一住居内での炉のつくりかえの可能性がある。

15 軒の住居跡に設置されている炉を構造的な面から分類すると次のようになる。

第 1 類：土器埋設部・方形石組部からなるもの（第 11 号 A 住居跡）

第 2 類：土器埋設石囲部・敷石石組部からなるもの（第 8・13・15・17 号住居跡）

第 3 類：土器埋設石囲部・敷石石組部・開口石組部からなるもの（第 1・2・3・4・10 号住居跡）

第 4 類：土器埋設石囲部・敷石石組部・閉鎖石組部からなるもの（第 5・11B・16 号住居跡）

第2表 菅生田遺跡住居跡一覧

	平面形 不 明	床 面 房の前面に半円状の敷石	柱 面 土器埋設2石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（開口） 規模：239?×125cm	柱 穴 不 明	偏 考 予偏調査で発見。本調査せず。	時 期 大木10式期 第Ⅱ段階
第1号住居跡	不 明	炉土器埋設石組部を中心として半円状の 敷石	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（開口） 規模：164×106cm	埋設土器1基（炉長輪延基線上）		大木10式期 第Ⅱ段階
第2号住居跡	不 明	炉土器埋設石組部を中心として半円状の 敷石	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（開口） 規模：192×106cm	不 明	壘の一部は検出されたが、住居平面形を 推定するに至らず。	大木10式期 第Ⅱ段階
第3号住居跡	不 明	炉土器埋設石組部を中心として半円状の 敷石	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（開口） 規模：160×90cm	3個一组	埋設土器1基（炉長輪延基線上敷石下）	大木10式期 第Ⅱ段階
第4号住居跡	不 明	炉土器埋設石組部を中心として不整斜 状の敷石	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（開口） 規模：170×110cm	2個一组以上	壘位埋設土器1基（炉土器埋設石組部壘 敷石下）	大木10式期 第Ⅱ段階
第5号住居跡	円 or 楕円形 規模：3-4m×3-8m	炉土器埋設石組部を中心として不整斜 状の敷石	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（開口） 規模：130×60cm	3個一组 or 一组以上	壘位埋設土器1基（炉土器埋設石組部壘 敷石下）	大木10式期 第Ⅱ段階
第6号住居跡	不 明	不 明（擾乱）	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部 or 土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部 規模：110-120×70cm	3個一组 or 一组以上	壘位埋設土器1基（炉長輪延基線上）	大木10式期 第Ⅱ段階
第7号住居跡	不 明	不 明（擾乱）	長方形石組外土器埋設炉：土器埋設石面部・敷石石組部 規模：130×60cm	不 明	壘位埋設土器1基（炉長輪延基線上）	大木10式期 第Ⅱ段階
第8号住居跡	不 明	床面の広い範囲に敷石（隅丸方形状）	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 規模：25×40cm	3個一组 or 一组以上	壘位埋設土器1基（炉長輪延基線上）	大木10式期 第Ⅱ段階
第9号A住居跡	不 明	敷石の広がりは不明（擾乱）	石組外土器埋設式炉：土器埋設外・方形石組部 規模：130×84cm	不 明	壘位埋設土器1基（炉長輪延基線上、無敷石部分）	大木10式期 第Ⅱ段階
第10号B住居跡	陽丸台形に盛り出し 規模：3.6×5.4m	床面の広い範囲に敷石（方形状）	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（閉鎖） 規模：130×84cm	2個一组	石組ピット1個（炉土器埋設石組部壘）	大木10式期 第Ⅱ段階
第13号住居跡	不 明	床面の広い範囲に敷石（縦延のため形状 不明）	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 規模：132×96cm	不 明	壘位埋設土器1基（炉土器埋設石組部壘 敷石下）	大木10式期 第Ⅱ段階
第14号住居跡	不 明	床面の広い範囲に敷石（方形状）	土器埋設石組模式炉（？） 規模：104×84cm	不 明	壘位著しく不明な点多い。	大木10式期 第Ⅱ段階
第15号住居跡	不 明	敷石一部確認（広がりは不明）	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 規模：104×84cm	不 明		大木10式期 第Ⅱ段階
第16号住居跡	陽丸台形に盛り出し 規模：3.48×3.68m	炉土器埋設石組部を中心として半円状の 床面敷石、南壁直下に濠石	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 ・石組部（閉鎖） 規模：174×110cm 旧戸付明	2個一组		大木10式期 第Ⅱ段階
第17号住居跡	不 明	床面の広い範囲に敷石（二面あり）	土器埋設石組模式炉：土器埋設石面部・敷石石組部 規模：144×84cm 旧戸付不明	不 明		大木10式期 第Ⅱ段階

以上の分類で、第1類は石囲いのない土器埋設部と敷石のない方形石組部から構成されるのに対し、第2～4類はいずれも土器埋設石囲部と敷石石組部から構成される。^{注2)}この点、第1類と第2～4類には大きな違いがある。その中で、第2～4類の違いは、敷石石組部の後方に石組部（開口・閉鎖）が付設されるか否かの相違である。

これらの炉を使用のあり方という点からみると、第1・2類は燃焼部I・IIからなるのに対し、第3・4類は燃焼部I・IIの他に焚き口部が付設されたものとすることができる。^{注3)}また、炉の中で火を焚く場合、最も大きい役割を果す燃焼部IIを検討すると、容量（面積・深さなど）の点で、第1類が最も小さく、第3・4類が最も大きい。第2類は両者の中間的な大きさである。このことは、炉で火を焚く場合、第3・4類が最も強く大きい火力を保持し得るのに対し、第2・1類の順に保持できる火力が小さくなると解することができる。

したがって、第1～4類にみられる炉の構造、石組みによる堅固さの相違、付属施設（焚き口部）の有無は、火力の保持と密接な関連のあることを指摘できる。

なお、第1～4類に含めなかつたものに第9・14号住居跡の炉がある。この両者は攪乱による破壊のため、明確な分類ができないものである。残存状況から判断するなら、第9号住居跡炉は第2類か、第2類の埋設土器に石囲をもたないもの、第14号住居跡は第1～4類のいずれかと推定される。

床面敷石

15軒の住居跡で、床面に平坦な石が敷かれていた（床面敷石）ものは10軒あり、床面敷石のないものは第3号住居跡だけである。この他、4軒の住居跡は攪乱が著しく、床面敷石の有無はわからない。このように不明なものを除き11軒の住居跡をみると、何らかの形で床面敷石のなされているものが大部分を占めている。これらのこととは、菅生田遺跡では床面に敷石をすることが盛んに行なわれていたことを示している。

11軒の住居跡について床面敷石のあり方を分類すると次のようになる。

第1類：炉の周囲にだけ床面敷石のあるもの（第1・2・4・5・16号住居跡）

第2類：床面の広い範囲に床面敷石のあるもの（第10・11B・13・17号住居跡）

以上の分類で、第1類には炉土器埋設石囲部前面に小規模な床面敷石のあるもの（第4・5号住居跡）と、炉土器埋設石囲部を中心として半円状の小規模な床面敷石のあるもの（第1・2・16号住居跡）がみられる。しかし、両者の厳密な識別は難しいので、ここでは第1類として一括しておきたい。第2類には床面敷石の形状が判明するものとして第10・11B号住居跡があり、それぞれ方形・隅丸方形をしており、第13・17号住居跡は攪乱のためその形状が明確でない。

次に、第1・2類の床面敷石は、床面の一部なのかそれとも広い範囲なのかという点で異なるが、各々の形状と炉との関係を検討してみたい。第1類の場合、床面敷石は炉の土器埋設石囲部の前面かその周りに半円状にある。第2類の場合、保存の良い第10・11B号住居跡では床面敷石は方形状をしているが、敷石の密集している部分は炉の周囲と方形状・床面敷石の各辺ないしは各隅で、それらに囲まれた部分ではややまばらか、敷石のない空間を形成している。また、これら第1・2類の床面敷石の形状は、炉の長軸とその延長線を対称軸としている。このように、第1・2類の床面敷石は、そのおよぼされる範囲に差違はあっても、炉を中心もしくは基準として施設されているという点で共通している。

埋設土器

住居内埋設土器が検出されたのは5軒（第2・4・5・10・13号住居跡）で、発見された住居跡全体の $\frac{1}{3}$ である。したがって、すべての住居跡に共通する施設ではないが、それが全体の $\frac{1}{3}$ におよぶという点で一定の意味と役割を任したものと考えられる。

埋設土器を分類すると次のようになる。

第1類：正位埋設土器（第2・4・10号住居跡）

第2類：横位埋設土器（第5・13号住居跡）

第1類は正位の状態で埋設された土器で、住居の中で炉とは反対側に位置している。しかし、その位置は炉長軸の延長線上と一致している。第2・10号住居跡の埋設土器は床面敷石から僅かに外れているが、第4号住居跡の埋設土器は床面敷石下である。第2類の埋設土器は2例とも炉土器埋設石囲部の脇に横位の状態で埋設されている。この埋設土器は火熱を受け、その周囲の土も赤変している。しかし、その上にのっている床面敷石には火熱痕はみられない。以上のように、埋設土器は第1類と第2類では様相を異にしている。しかし、両者とも、床面敷石の施設以前に埋設されていること（第1類では床面敷石下にあるもの）、埋設位置が炉（脇もしくは長軸延長線上）と関連があるなど、共通する面もみられる。

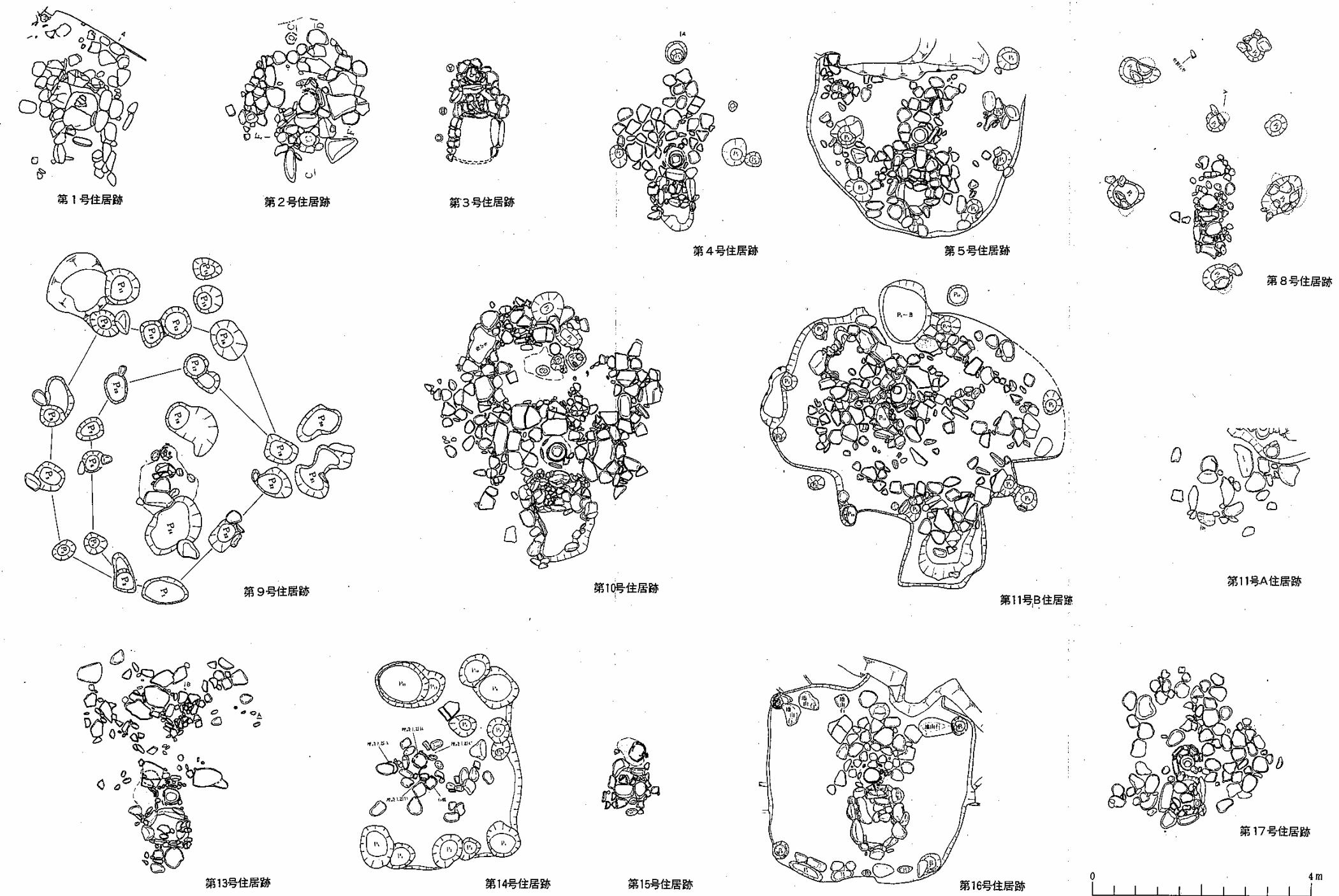
柱穴

柱穴の明らかな住居跡は6軒（第4・5・8・9・11b・16号住居跡）である。既に述べたような理由から、柱穴を検出できなかった住居跡も多い。したがって、ここでは一つの傾向を示すものとして取りあげたい。

6軒の住居跡で柱穴配置のあり方をみると次のようになる。

第1類：炉を基準として規則的配置関係がみられるもの（第4・5・8・9・16号住居跡）

第2類：住居平面形を基準として規則的配置関係がみられるもの（第11B号住居跡）



第133図 菅生田遺跡の住居跡

第1類は柱穴配置が炉長軸とその延長線を対称軸としているものである。この中で、第5・16号住居跡は住居平面形が判明し、柱穴配置の対称軸・住居平面形の対称軸・炉長軸が一致している。これに対し、第2類とした第11B号住居跡は炉よりも住居平面形に応じた配置関係を示している。

このように6軒の住居跡だけでは、柱穴配置が住居平面形を基準にしているのか、それとも炉を基準にしているのか明確ではないが、それぞれに強い対応関係がみられるることは、明らかである。

小竪穴遺構・埋設土器遺構

小竪穴遺構・埋設土器遺構が、埋葬施設としての可能性が高いことは既に述べた（丹羽・三浦・加藤：1973・3）。今回の整理作業において、これらの遺構から出土した土器を検討したところ、第7・10・11号小竪穴遺構に埋置されていた土器に明瞭な底部穿孔が観察されたことを併せて報告しておきたい。

注1)これらの点については、第10号住居跡を例として既に述べたところである（丹羽・三浦・加藤：1973・3）。

注2)この種の炉は上原型（土器埋設石組）複式炉として一括され、第2・3・4類はそれぞれa・b・c類に該当する（丹羽茂：1971・3・1974・3）。

注3)土器埋設石囲部・敷石石組部・石組部がそれぞれ燃焼部I・II、焚き口部であることは既に述べた（丹羽・三浦・加藤：1973・3）。

遺構の年代

発掘調査によって検出された遺構には住居跡(15軒)・小竪穴遺構(11基)・埋設土器遺構(10基)がある。これらの遺構の年代をその出土土器によって推定したい。

住居跡の年代

住居跡からは第I群土器と第II群土器が出土している。住居跡内における土器群の出土状況を整理すると次のようになる。

	第1住	第2住	第3住	第4住	第5住	第6住	第9住	第10住	第11A住	第11B住	第13住	第14住	第15住	第16住	第17住
床面・細部	—	IA	不明	IB	不明	IB	不明	IB	IB	IB	IB	—	IB	IB	IB
堆積土	—	—	不明	IB	IB・II	IB	IB	IB	IB・II	IB・II	IB・II	IB・II	不明	IB	IB・II

床面・細部としたものは、炉に埋設された土器・炉内から出土した土器・床面下に埋設され

た土器・床面から出土した土器である。これらの土器は住居構築時から住居廃絶後埋りはじめる前に残されたもので、住居の年代推定に最も有効なものである。各住居跡における床面・細部出土土器のあり方をみると次のようになる。

第ⅠA群土器：第2号住居跡

第ⅠB群土器：第4・8・10・11A・11B・13・15・16・17号住居

この他の第1・3・5・9・14号住居跡は、土器が残っていないか、残っていても時期的な特徴が不明瞭なものである。それでも、住居内堆積土の土器をみると、第ⅠB群土器（第9号住居跡）か第ⅠB・Ⅱ群土器（第5・14号住居跡）のものが多い。これらの住居跡は、第ⅠB群土器段階に埋りはじめたものとみることができる。住居跡群から出土している土器がいずれも第Ⅰ・Ⅱ群土器で、それ以前のものはみられないことから、この第5・9・14号住居跡は第ⅠB群土器段階か第ⅠA群土器段階の可能性が強い。また、第1・3号住居跡は、時期的な特徴の判明する土器はないが、上原型複式炉をもち、他の第ⅠA・B群土器段階の住居跡と共通する構造をしていることから、それらとほぼ同じ時期のものと考えられる。以上から住居跡群の年代は次のように推定される。

大木10式土器第 A段階（第ⅠA群土器段階）：第2号住居跡

大木10式土器第 B段階（第ⅠB群土器段階）：第4・8・10・11A・11B・13・15・16・17号住居跡

大木10式土器第 Aもしくは第 B段階（第ⅠAorⅠB群土器段階）：第1・3・5・9・14号住居跡

小堅穴遺構

小堅穴遺構の場合についても、住居跡と同様な方法をとることにする。小堅穴遺構に埋置された土器および内部から出土した土器を整理すると次のようになる。

第ⅠA群土器：第10小堅穴遺構

第Ⅰ群土器：第3・6小堅穴遺構

第Ⅱ群土器：第1・2・7・8・9小堅穴遺構

第ⅠorⅡ群土器：第5小堅穴遺構

不明のもの：第4・11小堅穴遺構

以上の中で、第3小堅穴遺構出土土器は第ⅠA群土器か第ⅠB群土器か識別困難なもの、第6小堅穴遺構出土土器は第ⅠB群土器より新しく大木10式土器第Ⅲ段階に属するものである。また、第11小堅穴遺構出土土器は不明なものとしたが、第Ⅰ・Ⅱ群土器の胴下・底部と類似しており、ほぼこの時期のものではないかと考えられる。以上から、小堅穴遺構の年代は次によ

うに推定される。

大木 10 式土器第 A段階：第 10 小竪穴遺構

大木 10 式土器第 段階：第 3 小竪穴遺構

大木 10 式土器第 段階：第 6 小竪穴遺構

大木 10 式土器第 段階～南境式土器初期段階：第 5・11 小竪穴遺構

南境式土器初期段階：第 1・2・7・8・9 小竪穴遺構

時期不明：第 4 小竪穴遺構

埋設土器遺構

埋設土器遺構で時期の判明するのは第 1 埋設土器遺構だけで、第 I B 群土器が出土している。この他の埋設土器遺構は、土器の口縁～胴上部が削平されているため所属時期が不明確である。ただ、胴下部の特徴は第 I・II 群土器と大きく異なることがないので、ほぼ同じ頃のものと考えられる。このようなことから、埋設土器遺構の年代は次のように推定される。

大木 10 式土器第 B段階：第 1 埋設土器遺構

大木 10 式～南境式土器初期段階頃：第 2～11 埋設土器遺構

遺跡の構成

菅生田遺跡は白石川左岸の沖積段丘上に立地している。第 1～3 次にわたる調査で、遺跡の西側半分はほぼ発掘したことになる。最も古い遺物は縄文時代前期初頭の土器である。しかし、出土量が少なく（本書では胴部資料 1 点を図示）遺構も検出されなかつたことから、集落を営むほどのものではなかったと考えられる。

集落が形成されたのは縄文時代中期末（大木 10 式土器第 II 段階）から後期初頭（南境式土器初期）である。沖積段丘の微高地状部分を中心として、住居跡・小竪穴遺構・埋設土器遺構・遺物包含層が発見されている。住居跡は大木 10 式土器の第 II A 段階のものが 1 軒、第 II B 段階のものが 9 軒、第 II A もしくは第 II B 段階のものが 4 軒である。したがって、大木 10 式土器第 II B 段階が主体の集落跡とみることができる。これらの住居跡は、いずれも微高地の縁辺に占地し、中央部にはみられない。小竪穴遺構と埋設土器遺構は大木 10 式土器第 II A 段階から後期初頭南境式土器初期のものである。小竪穴遺構は後期初頭のものの方が多い。小竪穴遺構と埋設土器遺構は、第 1～3・11 埋設土器遺構・第 10 小竪穴遺構を除くと、いずれも微高地上の住居跡のやや内側（中央部寄り）に占地している。遺物包含層は、後期初頭南境式土器初期のものが微高地の北側斜面にあり、一部中期末のものと重複している。ここで注意しなければならないのは、住居跡はいずれも中期末のものであるが、小竪穴遺構と遺物包含層の多くが、後期初

頭のものという点である。微高地の西側半分はほぼ発掘したが、後期初頭の住居跡は検出されなかつた。この時期の住居跡は微高地の東側部分、すなわち未調査部分に存在するのであろうか。それとも、住居の床が地表から浅い部分に作られたため、後世の削平で失なわれてしまったのであろうか。問題が残る。

しかし、このような時期的な違いを超えて、住居跡・小竪穴遺構・埋設土器遺構はいずれも微高地の周縁に配されており、中央部は広場の形として残されている。このことは特筆しておかなければならない。

縄文時代中期末から後期初頭以降、この沖積段丘の微高地は集落としてほとんど利用されていない。弥生時代の円田式土器が数点みられるだけで、住居跡などの遺構は残されていない。

このように、菅生田遺跡は、時期的に限られた縄文時代中期末から後期初頭の集落跡とみることができる。

住居跡の地域的特性

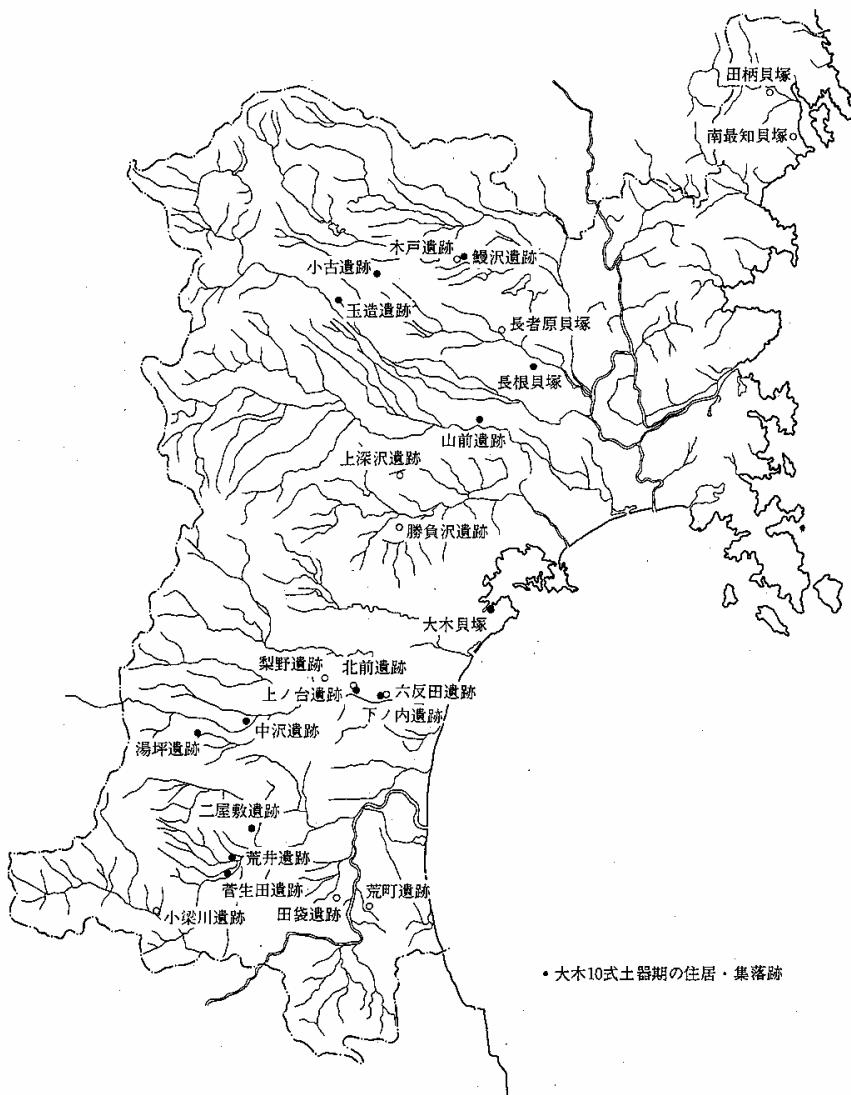
菅生田遺跡から発見された住居跡は、いずれも縄文時代中期大木 10 式期に属している。これらの住居跡の地域的特性について検討してみることにする。15 軒の住居跡の特徴を簡単にまとめると次のようになる。

1. 炉の大部分は上原型複式炉である。
2. 床面に敷石（炉を中心）をもつものが多い。
3. 埋設土器をもつものがある（炉脇もしくは炉長軸延長線上）。
4. 柱穴配置は炉・住居平面形と密接な対応関係にある。

以上、1～4 の中で、1. 上原型複式炉や、2. 床面敷石の存在は、集落内で特殊なものではなく、一般的なものであったことを示している。このことは、大木 10 式期を諸段階に細分した立場でみても同じである。ここでは 1.・2.を中心として、宮城県内で発見された住居跡との比較、上原型複式炉分布地域における位置、敷石住居跡分布地域における位置、地域的特性などについて検討を加えたい。

宮城県内の縄文時代中期の住居跡

これまで宮城県内で縄文時代中期の住居跡が発見された遺跡は 27 ある（第 3 表）。その多くは丘陵・段丘・台地上に立地し、一部自然堤防上にもみられる。時期的には大木 7 a 式土器期が 1 遺跡（南最知遺跡）、大木 8 a 式土器期が 1 遺跡（長者原遺跡）、大木 8 b 式土器期が 5 遺跡（木戸・長者原・勝負沢・六反田・小梁川遺跡）、大木 9 式土器期が 8 遺跡（田柄・長者原・山前・上深沢・北前・梨野・湯坪・荒町遺跡）、大木 10 式土器期が 13 遺跡（鰐沢・玉造・小古・長



第134図 宮城県内発見の縄文時代中期の住居・集落跡

根・山前・大木・山田上ノ台・下ノ内・中沢・湯坪・二屋敷・荒井・菅生田遺跡)で、細かな時期の不明なものが2遺跡(上野・田袋遺跡)ある。このように、住居跡の発見された遺跡の数は、中期前葉が少なく、以後増加し、末葉の大木10式土器期には13遺跡と、ほぼ全体の半分を占めている。

第3表 宮城県内発見の縄文時代中期住居・集落跡

遺跡名	位置	立地	遺構	備考
田柄貝塚 南最知貝塚	気仙沼市田柄 気仙沼市最知字南最知55の1	海岸段丘 海岸段丘	大木9式期の住居跡1軒 大木7a式期の住居跡1軒 大木9式期の住居跡1軒	宮城県教委(1979)調査 阿部・遊佐(1979・3)
木戸遺跡 鰐沢遺跡	栗原郡築館町萩沢字木戸 栗原郡築館町萩沢字木戸	丘陵 丘陵	大木8b式期の住居跡1軒 大木10式期の住居跡1軒調査 その他8軒確認	森貢喜(1980・3) 古川高郷研部(1974・11) 宮城県教委(1975・3)
玉造遺跡 長者原貝塚	玉造郡岩出山町一栗字玉造 登米郡南方町大字西郷上字長者原	段丘 段丘	大木10式期の住居跡4軒 大木8a式期の住居跡3軒 大木8b式期の住居跡1軒 大木9式期の住居跡1軒	千葉宗久(1988・3) 阿部・遊佐(1978・3)
長根貝塚 山前遺跡	遠田郡涌谷町小里字長根 遠田郡小牛田町北浦字山前	丘陵 段丘	大木10式期の住居跡2軒 大木9式期の住居跡3軒 大木10式期の住居跡1軒	伊東信雄他(1969・3) 宮教委文化財保護課編(1976・3)
上深沢遺跡 勝負沢遺跡	黒川郡大衡村駒場字上深沢 黒川郡大和町鶴巣北目大崎字勝負沢	段丘 段丘	大木9式期の住居跡21軒 大木8b式期の炉跡2基	宮教委文化財保護課編(1979・3) 丹羽・阿部・小野寺(1982・3)
大木貝塚 北前遺跡	宮城郡七ヶ浜町大字東宮浜字大木 仙台市山田字北前46-12	舌状丘陵 (段丘)	大木10式期の住居跡2軒 大木9式期の住居跡2軒	八卷正文他(1974・3)(1978・3) 佐藤・斎野(1982・3)
山田上ノ台遺跡 六反田遺跡	仙台市山田字上ノ台 仙台市大野田字五反田・六反田	台地 自然堤防	大木10式期の住居跡21軒 大木8b式期の住居跡1軒	渡部・主浜他(1981・3) 田中則和他(1981・12)
下ノ内遺跡	仙台市富沢字下ノ内	自然堤防	大木10式期の住居跡3軒	篠原信彦他(1982・3)
梨野遺跡 中沢遺跡	仙台市茂庭字大堤 柴田郡川崎町川内字中沢	段丘 台地	詳細不明 大木10式期の住居跡2軒 石組炉10基	仙台市教委(1982・7) 仙台市教委(1981)調査 後藤勝彦他(1972・9)
湯坪遺跡	柴田郡川崎町今宿字上の台	台地	大木9式期の住居跡1軒 大木10式期の住居跡2軒 大木9~10式期の住居跡1軒	一條孝夫(1978・3)
二屋敷遺跡 荒井遺跡	刈田郡蔵王町二屋敷 白石市福岡深谷荒井	段丘 台地	大木10式期の住居跡3軒 大木10式期の住居跡1軒	林・藤沼他(1971・3) 片倉・佐藤(1958・10)
菅生田遺跡 小梁川遺跡	白石市福岡 刈田郡七ヶ宿町	段丘	大木10式期の住居跡15軒 前葉の住居跡4軒 中葉の住居跡3軒	本書 新庄屋元晴(1982・3)
田袋遺跡 荒町遺跡	角田市角田田袋 角田市藤尾荒町	丘陵 台地	住居跡3軒 大木9式期の住居跡1軒	角田市教委・宮教委(1972)調査 志間泰治(1958・1)
小古遺跡 上野遺跡	栗原郡一迫町大川口小古 仙台市富田上野中1	丘陵斜面 段丘	大木10式期の住居跡 大木8~10式期の住居跡数軒	藤沼邦彦氏の教示 仙台市教委(1976)調査

炉跡について

以上の住居跡について、炉跡をみると、中期前葉（大木7式土器期）では簡単な地床炉で、中葉（大木8a・b式土器期）に至ると地床炉の他に石組炉もみられるようになる。後葉（大木9・10式土器期）では石組をもつものや土器を埋設した複式炉が非常に多くなってくる。ここでは大木10式土器期の住居跡に焦点をあてて炉跡の地域性について検討してみたい。

大木10式期に属する住居跡の炉の概要を整理して示すと次のようになる。

鰻沢遺跡：掘り込み複式炉（1軒）

玉造遺跡：楕円形石組内土器埋設炉（1軒）

石組複式炉（2軒）

土器埋設石組複式炉（1軒）

上原型複式炉（1軒）

長根貝塚：石組複式炉（2軒）

山前遺跡：掘り込み複式炉→掘り込み単式炉（1軒の中での変遷）

大木貝塚：上原型複式炉（1軒）保存不良・他の1軒は詳細不明）

山田上ノ台遺跡：上原型複式炉が近似するもの

（21軒）

下ノ内遺跡：上原型複式炉（3軒）

中沢遺跡：上原型複式炉が近似するもの（12軒？）

湯坪遺跡：上原型複式炉（2軒）

二屋敷遺跡：上原型複式炉（3軒）

荒井遺跡：上原型複式炉（1軒）

菅生田遺跡：上原型複式炉（14軒）

方形石組外土器埋設炉（1軒）

このように、宮城県内の大木10式土器期の炉をみると、一部に単式炉もあるが、何らかの形で複式炉であるものが多い。さらに、これらの炉は分布の上で大きな相違を示している。すなわち、宮城県東北部の鰻沢遺跡・長根貝塚・山前遺跡では、複数の掘り込みからなるか、石組みはあっても一部だけに限られるという簡素なものである。それに対し、宮城県南部の山田上ノ台遺跡・下ノ内遺跡・中沢遺跡・湯坪遺跡・荒井遺跡・菅生田遺跡では、土器を埋設し石を多量に使用して堅固に築いた上原型複式炉が大部分を占めている。このように、炉の構造をみると、宮城県内は東北部と南部で明瞭な地域差がみられる。この点、宮城県西北部に位置する玉造遺跡では、上原型複式炉は1基だけで、その他は楕円形石組内土器埋設炉1基、石組複式炉（石組部+掘り込み部）1基、石組複式炉（石組部+開口石組部）1基、詳細不明の土器埋設石組複式炉1基となっており、両者の中間的様相を示している。大木貝塚でも上原型複式炉は発見されているが、1基だけなので、どのような地域性をもつものなのかは未だはっきりしない。

上原型複式炉分布地域における位置

菅生田遺跡の上原型複式炉は以上の検討によって、宮城県内では南部の地域的特色を示すことを指摘した。ここでは、上原型複式炉分布地域の中で、宮城県南部はどのような位置にある

か検討したい。

上原型複式炉は1974年に集成された段階で、28遺跡が確認され、阿武隈川中流域を中心として新潟県・栃木県・福島県・宮城県・山形県などにみられた(丹羽茂:1974・3)。それらの時期は新潟県沖ノ原遺跡が大木8b式土器期終末から大木9式土器期初頭である他は、すべて大木9・10式土器期で、大部分は大木10式土器期に属するものであった。その後、さらに発見が相いつぎ、福島県では1978年段階で35遺跡と増加している(日下部善己:1978・3)。分布範囲については大きな変化はないが、最近岩手県五十瀬神社遺跡(菅原弘太郎:1979・3)、秋田県内村遺跡(畠山憲司他:1981・3)などでも発見され、従来知られていた分布範囲がさらに北側に拡大することが明らかとなってきた。ただし、岩手・秋田県の例は宮城県北西部の状況と同様に、在地的な簡素な炉や上原型複式炉が簡略化もしくは変形した炉と共に存する傾向にある。したがって、上原型複式炉が主体となる集落は宮城県南部・山形県・福島県にほぼ限られ、これらの地域が分布の中心であったことを示している。その点、菅生田遺跡など宮城県南部は複式炉の中心的分布地域の北東部分にあたることになる。

床面敷石について

東北地方において床面に敷石が施設された住居跡は、菅生田遺跡の他に山田上ノ台遺跡(2軒)、下ノ内遺跡(2軒)、二屋敷遺跡(1軒)、荒井遺跡(1軒)でも発見されている。いずれも、炉を中心とした敷石住居跡である。この種の敷石住居跡は宮城県以外では福島県上柄塙遺跡(相高郷研クラブ:1967・8)^{注1)}、八幡林西遺跡、月崎遺跡(柴田俊彰:1977・3)、庚申森遺跡(福島県:1964・3)などで発見されている。

このように、大木10式土器期の敷石住居跡は宮城県南部から福島県北東部に分布している。また、これらを大木10式土器の変遷を諸段階に細分した立場でみると、庚申森遺跡・上柄塙遺跡・菅生田遺跡第2号住居跡・荒井遺跡が大木10式土器期第II A段階、月崎遺跡第5号住居跡・菅生田遺跡の大部分、下ノ内遺跡は大木10式土器期第II B段階である。山田上ノ台遺跡・二屋敷遺跡は遺物整理が済んでいないので未だ不明である。^{注2)}

以上の例からみると、東北地方における縄文時代中期の敷石住居跡は、宮城県南部から福島県北東部に分布し、大木10式土器期第II段階に盛行したことがうかがえる。また、大木10式土器期第II A段階では炉の周囲に限られた敷石であるのに対し、第II B段階では、それに加えて菅生田遺跡第10・11号住居跡のように、床面の広い範囲におよぶものも出現てくる。

次に、中部・関東地方の敷石住居跡のあり方と簡単に比較したい。山本暉久氏によれば(山本暉久:1976・2・3)、敷石住居跡は加曽利E(曾利)式期に長野県八ヶ岳西南麓、天竜川水系伊那地域を中心として、奥壁部と入口部埋甕に伴う祭祀的な敷石施設として出現したという。

それが加曾利E（曾利末・称名寺）式期に中部・関東地方に分布が拡大し、奥壁部・入口部への「偏在的敷石の伝統を受け継ぎながら面的拡大を示し、全面ないしほば全面の敷石例が増加する」としている。また、この時期の敷石には偏在するものとして、奥壁部敷石タイプ・出入口部敷石タイプ・炉辺部敷石タイプ・縁石タイプがあるが、主体は全面敷石であるという。

このような中部・関東地方における状況に対して、東北地方における初期の敷石住居は既に述べてきたように、偏在するものと広い面積におよぶものとがあるが、両者とも炉を中心とした敷石である。この点、中部・関東地方とは異なる地域性を示している。その理由としては、この時期における炉の果す役割が中部・関東地方と東北地方では大きな差があったためではないかと考えられる。すなわち、大規模で堅固な上原型複式炉の分布する東北地方は、単純な炉の分布する中部・関東地方とでは、おのずとそこに差違が生じたものと思われる。また、東北地方の敷石住居が、宮城県南部から福島県東北部で自立的に発生したのか、それとも中部・関東地方の敷石住居を変形（質）させて受容したのかは未だ明らかにし得ない。^{注3)} 今後の課題としたい。

注 1) 八幡林西遺跡は鈴木啓（1975・3）・日下部善己（1978・3）によった。

注 2) 仙台市教育委員会主浜光朗氏の教示によると、山田上ノ台遺跡で発見された敷石住居跡の1軒は大木10式土器期第Ⅲ段階の可能性が強いという。詳細は報告書を待ちたい。

注 3) これまで福島県中・南部で発見された大木10式土器期の住居・集落跡は・第Ⅰ・ⅡA段階のもので大部分が占められている。それに対して、宮城県南部から福島県東北部の住居・集落跡は、菅生田遺跡にみられるように第ⅡB段階のものが多い。このため、比較・検討の上で未だ資料的に充分でない。また、現在の時点で第ⅡA段階の敷石住居跡は菅生田遺跡第2号住居跡・荒井遺跡住居跡・上柄窪遺跡住居跡・庚申森遺跡住居跡など、宮城県南部から福島県東北部に限られているが、これが分布上の正しい姿を示しているのか否か決め難い。東北地方における敷石住居跡成立の問題は、これらの資料が満たされた段階で再検討することにしたい。

V. まとめ

1. 菅生田遺跡は白石川左岸の沖積段丘上に立地している。
2. 縄文時代前期初頭・中期末・後期初頭、弥生時代の遺物が出土しており、その大部分は縄文時代中期末から後期初頭のものである。
3. 縄文時代中期末大木 10 式土器は第Ⅱ段階のものが、さらに A・B 段階に細分されることが明らかになった。
4. 縄文時代後期初頭の南境式土器は、宮城県北部と南部で顕著な地域差のみられることが明らかになった。
5. 縄文時代中期末から後期初頭の土製品として蓋・袖珍土器・土偶・滑車状耳飾・円板状土製品、石製品として石鏃・石匙・石錐・石籠・不定形石器・磨製石斧・石皿・凹石・磨石・石棒などが出土している。
6. 遺構としては住居跡・小竪穴遺構・埋設土器遺構が微高地を中心として発見され、遺物包含層とともに縄文時代中期末から後期初頭の集落を形成している。
7. 住居跡は中期末大木 10 式土器期のものであるが、小竪穴遺構は中期末大木 10 式土器期と後期初頭南境式土器期のものがあり、後者の方が多い。
8. 住居の炉は上原型複式炉が大部分で、一部に方形石組外土器埋設炉もある。上原型複式炉の設置される住居・集落は宮城県南部・山形県・福島県を中心に分布するもので、菅生田遺跡はその北東部分にあたる。
9. 住居床面に敷石のみられるものも多い。これらは炉を中心として施設されている。縄文時代中期の敷石住居は、東北地方では宮城県南部から福島県北東部に分布している。東北地方の敷石住居は炉との関連から生じたことが指摘できる。
10. 縄文時代後期初頭を過ぎると遺構はみられなくなり、集落は維持されなくなる。その後の生活の跡としては弥生土器が少量みられるだけである。

引用・参考文献

- 阿部・遊佐(1978・3) :「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』P. 1~78
- 阿部・遊佐(1979・3) :「南最知遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第57集 P. 132~135
- 一条 孝夫(1978・3) :「湯坪遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第54集 P. 1~33
- 伊東 信雄(1957・3) :「古代史—縄文式文化の変遷」『宮城県史』P. 31~51
- 伊東信雄他(1969・3) :「埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第19集 P. 1~86
- 伊東信雄他(1981・9) :「縄文時代—縄文土器」「解説—はじめに」『宮城県史』34 P. 67~73
P. 379~381
- 梅宮 茂他(1971・1) :「壇ノ岡遺跡資料集」『しのぶ考古』第2号 P. 1~16 しのぶ考古学会
- 及川 旬他(1974・10) :『門前貝塚』P. 1~57
- 小野寺 祥一郎(1980・3) :「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第10集 P. 1~49 図版1~9
- 片倉・佐藤(1958・10) :「白石荒井縄文住居遺跡」『仙台郷土研究』第18巻第4号 P. 15~21
- 加藤 道男(1982・3) :「青木畠遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集 P. 1~84
- 金子・和田(1968・5) :「綱取C地点貝塚の発掘」『小名浜』P. 79~126 いわき市教委磐城出張所
- 日下部 善己(1978・3) :「夏窪遺跡」『梁川町文化財調査報告書』第4集 P. 1~44
- 草間俊一他(1974・2) :『崎山弁天遺跡』P. 77~85
- 黒川 利司(1981・9) :「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集 P. 185~280
- 小岩 末治(1966) :「古代・中世」『岩手県史』I
- 後藤 勝彦(1957) :「陸前宮戸島里浜台廻貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教委教育論文』
第二集 P. 1~6
- 後藤 勝彦(1962・6) :「陸前宮戸島里浜台廻貝塚出土土器について—陸前地方後期縄文式文化の編
年的研究—」考古学雑誌48—1 P. 37~48
- 後藤 勝彦他(1967・3) :「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第13集 P. 1
~33
- 後藤 勝彦他(1968・3) :「埋蔵文化財第4次緊急発掘調査概報—南境貝塚」『宮城県文化財調査報告
書』第15集
- 後藤 勝彦他(1972・9) :「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』P. 681~810
- 後藤 勝彦(1974・11) :「縄文後期宮戸I b式周辺の吟味」『東北の考古・歴史論集』P. 79~110
- 後藤 勝彦(1981・10) :「縄文後期の土器—東北—」『縄文土器大成』第3巻 P. 139~143
- 佐藤・斎野(1982・3) :「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集 P. 1~196
- 七戸 貞子(1972・3) :「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集 P. 11~25
- 篠原 信彦(1982・8) :「下ノ内遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第40集 P. 5~25
- 柴田 俊彰(1977・3) :「月崎遺跡発掘調査概報」『福島市埋蔵文化財報告書』第2集 P. 1~67
- 志間 泰治(1958・1) :「角田町荒町遺跡」『仙台郷土研究』第18巻第1号 P. 30~33
- 志間・芳賀(1974・3) :「向畠遺跡」『柴田町の文化財』第5集 P. 31~36

- 新庄屋 元晴 (1982・3) : 「小梁川遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第90集 P. 1~16
- 菅原 弘太郎 (1979・3) : 「五十瀬神社前遺跡」『岩手県文化財調査報告書』第33集 P. 195~241
図版1~10
- 鈴木 啓 (1975・3) : 『堂平』P. 1~69
- 仙台市教委 (1982・7) : 「下ノ内遺跡」現地説明会資料 P. 1~17
- 相高郷土研究クラブ (1967・8) : 『福島県相馬郡鹿島町上柄窪敷石住居跡発掘調査報告書』P. 1~13
- 高橋 富雄他 (1975・11) : 『大和田町史』上巻 P. 56
- 田中則和他 (1981・12) : 『六反田遺跡発掘調査報告書』P. 1~624
- 千葉 宗久 (1980・3) : 「玉造遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第68集 P. 1~67
- 丹羽 茂 (1971・3) : 「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』第12号 P. 1~21
- 丹羽・三浦・加藤 (1973・3) : 「菅生田遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第29集 P. 1~92
- 丹羽 茂 (1974・3) : 「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』第15号 P. 24~36, 42~47
- 丹羽 茂 (1981・11) : 「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻 P. 54~58
- 丹羽・阿部・小野寺 (1982・3) : 「勝負沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第83集 P. 43~306
- 芳賀 寿幸 (1974・4) : 「向畠遺跡調査概報」『柴田町郷土研究会報』第7号 P. 8~20
- 芳賀 良光 (1968・12) : 「宮城県宮戸島貝塚梨木団遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』P. 45~53
- 畠山憲司他 (1981・3) : 「内村遺跡発掘調査報告書」『秋田県文化財調査報告書』第82集 P. 1~122
図版1~31
- 林 謙作 (1967・7) : 「縄文文化の発展と地域性—東北—」『日本の考古学』II P. 64~96
- 林・藤沼他 (1971・3) : 「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集 P. 29~42
- 福島県 (1964・3) : 「庚申森遺跡」『福島県史』第6巻
- 古川工業高校郷土研究部 (1974・11) : 「うなぎ沢遺跡」「古工創立90周年記念・古工展」資料
- 古川工高郷土研究部 (1974・11) : 「うなぎ沢遺跡」現地説明会資料
- 辺見 鞠高 (1976・12) : 「天雄寺貝塚」P. 1~37 第1~32図
- 松島町教委 (1976・3) : 「西ノ浜貝塚」『史跡保存管理計画策定事業報告書』P. 41~42
- 馬目 順一 (1970・3) : 「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について」『考古』第16号 P. 1~6
- 馬目順一他 (1975・3) : 『大畑貝塚調査報告』P. 1~549 図版1~81
- 馬目 順一 (1977・3) : 「いわゆる『綱取貝塚C地区』の土器について」『考古』第19号 P. 35~46
付図1~2
- 三ツ塚・阿部・佐藤 (1976・3) : 「沼津貝塚の考古学的調査」『沼津貝塚保存管理策定事業報告書』P. 8~60 石巻市教育委員会
- 宮城県文化財保護課編 (1975・3) : 「鰐沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第40集 P. 129~132
- 宮城県文化財保護課編 (1976・3) : 「山前遺跡」小牛田町教育委員会 P. 1~59
- 宮城県文化財保護課編 (1978・3) : 「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集 P. 1~516

- 目黒吉明他(1969) :『上原遺跡概報』
- 目黒・丹羽他(1970・7) :『本宮町上原遺跡概報』P. 1~50
- 森 貢喜(1974・3) :「縄文時代における敷石遺構について」『福島考古』第15号 P. 14~23
- 森 貢喜(1980・3) :「木戸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第69集 P. 423~460
- 八巻正文他(1974・3) :「史跡『大木囲貝塚』環境整備調査報告書」II『七ヶ浜町文化財調査報告書』第2集 P. 1~37
- 八巻正文他(1978・3) :「大木囲貝塚」『七ヶ浜町文化財調査報告書』第3集 P. 1~43
- 山本暉久(1976・2・3) :「敷石住居出現のもつ意味(上)・(下)」『古代文化』第28卷第2・3号 P. 1~37. P. 1~29
- 吉田義昭(1957) :『門前貝塚』P. 1~31
- 渡部・主浜他(1981・3) :「山田上ノ台発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第30集 P. 1~66